以下については、公開対象から除いています。

七四～七六頁
Ⅵ　自然科学的分析
一　花粉分析
二　珪藻分析

図版三〇

埼玉古墳群発掘調査報告書　第五集

二子山古墳

埼玉県教育委員会

序

埼玉県名の発祥の地である行田市埼玉には、九基の大形古墳が集中する埼玉古墳群があります。古墳の旧状を良く伝える全国有数の古墳群として国の史跡にも指定され、埼玉県民の誇りとする貴重な文化財でもあります。

埼玉県では、昭和四十二年以来、この地域を「さきたま風土記の丘」として環境整備を進め、埼玉古墳群の保存と活用をはかってまいりました。また一方では古墳の規模等について、実態を把握するための発掘調査を継続的に実施し、その成果を公表するとともに、古墳整備の基礎資料としてまいりました。本書に報告する二子山古墳は全長一三五メートルの前方後円墳であります。墳丘の長さでは埼玉古墳群中最長の古墳であるとともに、古墳時代後期のものとしては全国屈指の規模をもつ古墳でもあります。

発掘調査は昭和四十二・四十九・五十五・五十九年に墳丘周囲の堀の部分について実施しました。その結果、長方形に巡る二重の堀が確認され、円筒埴輪や人物・盾・馬・水鳥などの形象埴輪及び須恵器の破片が出土しました。また内堀と外堀を区画する中堤には、方形に突出する「造出し」が確認され、隣接する稲荷山古墳と類似した形態であることも判明しました。

本書はこれらの成果をまとめ、『埼玉古墳群発掘調査報告書 第五集 二子山古墳』として公表するものであります。本書が、埼玉古墳群の保護並びに教育、学術資料として、広く御活用いただければ幸いに存じます。終わりに発掘調査から本書の刊行に至るまで御指導、御協力をいただきました文化庁をはじめとする関係各機関並びに関係者各位に対し深く感謝申し上げます。

昭和六十二年三月

埼玉県教育委員会教育長

荒　井　修　二

目次

序
例言
調査の組織
Ⅰ 調査に至る経過……1
Ⅱ 調査の経過……2
一 昭和四二年度……2
二 昭和四九年度……3
三 昭和五五年度……4
四 昭和五九年度……5
Ⅲ 遺跡の概観及び立地と環境……7
Ⅳ 調査の成果……10
一 遺構……10
(一) 内堀……10
(二) 外堀……10
(三) くびれ部造出し……12
(四) 中堤及び中堤造出し……12
(五) その他の遺構……12
二 遺物……32
(一) 埴輪……32
(二) 土師器及び須恵器……59
(三) その他の遺物……59
Ⅴ 結語……71
Ⅵ 自然科学的分析……74
一 花粉分析……74
二 珪藻分析……75

挿図目次

第1図　二子山古墳測量図（昭和一二年）……8
第2図　二子山古墳の位置とその周辺の遺跡……9
第3図　二子山古墳各年度毎発掘調査位置……13
第4図　各トレンチ及び調査区の位置1……14
第5図　〃　2……15
第6図　〃　3……16
第7図　〃　4……17
第8図　昭和四二年度第1、第2トレンチ土層断面図……18
第9図　〃　第3、第4トレンチ土層断面図……19
第10図　〃　第5、第8トレンチ土層断面図……20
第11図　〃　第9、第10トレンチ土層断面図……21
第12図　〃　第10、第12トレンチ土層断面図……22
第13図　〃　第13、第37、第39トレンチ土層断面図……23
第14図　昭和五五年度調査区全測図……24
第15図　和和五五年度調査区土層断面図……25
第16図　昭和五九年度調査区全測図……26
第17図　昭和五九年度主調査区土層断面図……27
第18図　昭和五九年度主調査区及び東調査区土層断面図……28
第19図　昭和五九年度第4トレンチ土層断面図……29
第20図　昭和五九年度主調査区土層断面図及び、第1、第2トレンチ実測図、土層断面図……30
第21図　昭和五五年度調査区土壙及び溝土層断面図……31
第22図　昭和四二年度調査出土埴輪実測図（1）……33
第23図　〃（2、3）……34
第24図　〃（4～8）……35
第25図　〃（9～17）……36
第26図　〃（18～26、31）……37
第27図　〃（27～30、32～37）……38
第28図　〃（38～49）……39
第29図　〃（50～63）……40
第30図　〃（64～68）……41
第31図　〃（69～81）……42
第32図　〃（82～87）……43
第33図　昭和四二年度調査出土埴輪及び土師器須恵器実測図（88～115）……44
第34図　昭和四二年度調査出土須恵器実測図及び昭和四九年度調査出土埴輪実測図（116～127）……45
第35図　昭和四九年度調査出土埴輪実測図（128～138）……46
第36図　〃（139～145）……47
第37図　〃（146～157）……48
第38図　〃（158～174）……49
第39図　〃（175～184）……50

第40図　昭和四九年度調査出土埴輪及び須恵器実測図（185～201）……51
第41図　昭和五五年度調査出土埴輪実測図（203～216）……52
第42図　〃（217～230）……53
第43図　〃（231～248）……54
第44図　〃（249～258）……55
第45図　昭和五五年度調査出土埴輪、土師器、須恵器実測図及び昭和五九年度調査出土埴輪実測図（259～278）……56
第46図　昭和五九年度調査出土埴輪実測図（279～296）……57
第47図　昭和五九年度調査出土埴輪及び須恵器実測図（297～315）……58
第48図　各年度調査出土古墳関係外遺物実測図（316～326）……59
第49図　主要花粉、胞子化石及び珪藻化石ダイヤグラム……76
付　図　二子山古墳測量図

図版目次

図版一　1　二子山古墳航空写真
　　2　二子山古墳近景
図版二　1　前方部西方中堤遠景
　　2　昭和四二年度第12トレンチと後円部
図版三　1　昭和四二年度第10トレンチ南拡張区
　　2　昭和四二年度第27トレンチ拡張区及び第34トレンチ
図版四　1　昭和四二年度第41トレンチ埴輪出土状況
　　2　昭和四二年度第4トレンチ埴輪出土状況
図版五　1　昭和四九年度造出し部調査区近景
　　2　昭和四九年度造出部調査区ブリッジ
図版六　1　〃
　　2　〃
図版七　1　昭和五五年度西A、B調査区近景
　　2　昭和五五年度西B調査区全景
図版八　1　昭和五五年度西A調査区全景
　　2　昭和五五年度東調査区全景
図版九　1　〃
　　2　昭和五五年度東調査区北半部分
図版一〇　1　昭和五五年度西A調査区溝
　　2　昭和五五年度西B調査区土壙及び溝
図版一一　1　昭和五九年度主調査区近景

図版一二　1　昭和五九年度主調査区溝　(185～202)
　　2　〃
図版一三　1　昭和五九年度主調査区遺物出土状況　(203～216)
　　2　昭和四二年度調査出土埴輪（1）　(217～230)
図版一四　〃　(2)
図版一五　〃　(3、4)
図版一六　1　〃　(5～17)
　　2　〃　(18～26、31)
図版一七　1　〃　(27～30、32～37)
　　2　〃　(38～49)
図版一八　1　〃　(50～63)
　　2　〃　(64～68)
図版一九　1　〃　(69～81)
　　2　〃　(82～87)
図版二〇　1　〃　(88～103)
　　2　昭和四二年度調査出土土師器及び須恵器　(104～123)
図版二一　1　昭和四九年度調査出土埴輪　(124～138)
　　2　〃　(139～145)
図版二二　1　〃　(146～155、170～171)
　　2　〃　(156～169、172～174)
図版二三　1　〃　(175～184)
　　2　昭和四九年度調査出土埴輪及び須恵器　(185～202)
図版二四　1　昭和五五年度調査出土埴輪　(203～216)
　　2　〃　(217～230)
図版二五　1　〃　(231～240、242～248)
　　2　〃　(249～258)
図版二六　1　昭和五五年度調査出土埴輪　(259～262)
　　2　昭和五五年度調査出土土師器及び須恵器　(263～269)
　　3　昭和五九年度調査出土埴輪　(270～280)
図版二七　1　〃　(281～296)
　　2　昭和五九年度調査出土埴輪及び須恵器　(297～315)
図版二八　各年度調査古墳関係以外の出土遺物　(316～326)
図版二九　〃
図版三〇　1　花粉及び胞子化石顕微鏡写真
　　2　珪藻化石顕微鏡写真

調査の組織

主体者　埼玉県教育委員会

教育長　峯岸政之助（昭和四二年度）
同　豊田重穂（昭和四九年度）
同　関根秋夫（昭和五五年度）
同　長井五郎（昭和五九年度）
同　荒井修二（昭和六一年度）
指導部長　五十嵐孝仁（昭和六一年度）
教育次長　中谷幸次郎（昭和四二年度）
同　石田正利（昭和四九年度）
同　本郷春治（昭和五五年度）
同　宮島秀夫（昭和五五年度）
同　沼尻和也（昭和五九年度）
同　岩上進（昭和五九年度）
同　荒井修二（昭和五九年度）
同　橋本昭（昭和六一年度）
同　岩田敏（昭和六一年度）

事務局（企画・調整）

埼玉県教育局社会教育課

課長　江袋文男（昭和四二年度）
社会教育主事課長補佐　萩原康宏（昭和四二年度）
庶務係長　伊藤三蔵（昭和四二年度）
庶務係　成野芳三（昭和四二年度）
同　堀江清（昭和四二年度）
同　渡辺国子（昭和四二年度）
社会教育主事文化財係長　柳田敏司（昭和四二年度）
文化財係　持田まり子（昭和四二年度）
同　木部良樹（昭和四二年度）
同　早川智明（昭和四二年度）
同　吉川國男（昭和四二年度）
同　栗原文蔵（昭和四二年度）

埼玉県教育局文化財保護課

課長　柳田敏司（昭和四九年度）
同　杉山泰之（昭和五五年度）
同　金井塚良一（昭和五九年度）
同　岩田明（昭和六一年度）
課長補佐兼庶務係長　野村鍋一（昭和四九年度）
同　奥泉信（昭和五五年度）
同　町田勝義（昭和五九年度）
課長補佐　木戸一恵（昭和五五年度）
同　早川智明（昭和五九、六一年度）
同　森田嘉一（昭和六一年度）
庶務係長　持田紀男（昭和六一年度）
主査　持田まり子（昭和五五年度）

例　言

一　本書は、埼玉県行田市埼玉五、一五八他に所在する埼玉古墳群二子山古墳に関する発掘調査報告書である。

二　発掘調査は、埼玉県教育委員会が主体となり、埼玉県遺跡調査会（昭和四二年度）及び、県立さきたま資料館（昭和四九、五五、五九年度）が実施した。整理事業は、埼玉県教育委員会が主体となり、県立さきたま資料館が昭和六一年度に実施した。

昭和四二年度発掘期間　昭和四三年三月七日～三月二六日、（担当者、栗原文蔵）

昭和四九年度発掘期間　昭和四九年一二月一七日～昭和五〇年一月二四日、（担当者、栗原文蔵、田部井功）

昭和五五年度発掘期間　昭和五六年二月二日～三月三一日、（担当者　小川良祐、金子真土、今泉泰之）

昭和五九年度発掘期間　昭和五九年一〇月一五日～一二月一〇日、（担当者　小久保徹、中島宏、杉崎茂樹）

三　昭和五五、五九、六一年度事業については文化庁国庫補助事業として実施した。

四　各事業の組織は別表に掲げるとおりである。

五　出土品の整理及び本書の作成は県立さきたま資料館が行い、杉崎茂樹が当ったが、小久保徹、若松良一、田中正夫の協力を得た。

また、全体について横川好富が加除筆を行い、金井塚良一が監修した。

六　写真撮影は、各遺構については各調査担当者が、また、遺物については杉崎茂樹が行った。

七　微化石分析は（株）パリノ・サーベイに、また、空中写真測量図の作成及び調査区の基準点、水準点測量は（株）中央航業に委託した。

八　発掘調査から整理報告に至るまで左記の方々及び各機関から御指導、御協力を賜った。

市毛　勲　伊藤　和彦　井上　裕一　今井　宏　岩崎　卓也
大塚　初重　金子　正之　亀井　正道　車崎　正彦　斉藤　国夫
多宇　邦雄　田中　一郎　谷川　章雄　寺社下　博　永沼　律朗
中島　利治　橋本　博文　堀口　萬吉　山崎　武
文化庁　行田市教育委員会　熊谷市教育委員会　鴻巣市教育委員会

同　小林文江（昭和六一年度）
庶務係　持田まり子（昭和四九年度）
同　太田和夫（昭和四九年度）
同　桂　正澄（昭和四九年度）
同　千村修平（昭和四九年度）
同　畔上敦志（昭和五五年度）
同　太田和夫（昭和五五年度）
同　亀田　孝（昭和五九年度）
同　柚木　博（昭和五九年度）
同　井田秀夫（昭和六一年度）
文化財第二係長　吉川國夫（昭和四九年度）
同　栗原文蔵（昭和五五年度）
埋蔵文化財係長　梅沢太久夫（昭和五九、六一年度）
文化財係　塩野　博（昭和四九年度）
同　宮崎朝雄（昭和四九年度）
同　柿沼幹夫（昭和五五年度）
同　駒宮史朗（昭和五五年度）
同　井上尚明（昭和五五年度）
同　宮崎朝雄（昭和五九年度）
同　鈴木秀雄（昭和五九、六一年度）
同　井上　肇（昭和六一年度）
事務局（発掘調査・整理）
埼玉県立さきたま資料館

館長　山口英和（昭和四九年度）
同　野村鍋一（昭和五五年度）
同　坂巻正一（昭和五九年度）
参事兼館長　金井塚良一（昭和六一年度）
副館長兼庶務課長　野口光雄（昭和四九年度）
同　八木原　巌（昭和五五年度）
副館長　横川好富（昭和五九、六一年度）
庶務課長　風間俊克（昭和五九年度）
同　鈴木二三男（昭和六一年度）
庶務係　横山正三（昭和四九年度）
同　島村昌子（昭和四九年度）
同　川崎栄一（昭和四九、五五、五九、六一年度）
同　橋本克己（昭和五五年度）
同　鈴木春美（昭和五五年度）
同　鈴木廣子（昭和五九年度）
同　木村なを子（昭和六一年度）
同　田中由夫（昭和六一年度）
学芸課長　栗原文蔵（昭和四九年度）
同　小川良祐（昭和五五年度）
同　小久保　徹（昭和五九、六一年度）
学芸員　大舘勝治（昭和四九年度）
同　大友　務（昭和四九年度）

同　田部井　功（昭和四九年度）
同　今泉泰之（昭和五五年度）
同　金子真土（昭和五五年度）
同　岡本一雄（昭和五五、五九、六一年度）
同　中島　宏（昭和五九年度）
同　杉崎茂樹（昭和五九、六一年度）
同　若松良一（昭和六一年度）
同　田中正夫（昭和六一年度）
嘱　託　大熊達夫（昭和五九年度）
同　金子芳一（昭和六一年度）

埼玉県遺跡調査会
事務局長　松村清兵衛（昭和四二年度）
増田逸朗（昭和四二年度）
丸山勝男（昭和四二年度）

Ⅰ　調査に至る経過

埼玉古墳群は、県下最大の二子山古墳や、金錯銘鉄剣を出土したことで著名な稲荷山古墳など全長一〇〇㍍を超える四基を含む八基の前方後円墳と、あるいは、わが国最大の円墳といわれている丸墓山古墳を中核として構成されている。古墳時代後期の大形古墳が群集する全国的にも有数の古墳群ある。

このため、埼玉古墳群は、昭和一三年八月八日付けの文部省告示により国指定の史跡となっているが、稲荷山古墳以外で、埋葬施設が判明しているのは将軍山古墳だけであり、各古墳の実態は不明な点も多い。

昭和四〇年に、文化庁が重点項目とした、「史跡等買上げ」、「史跡等環境整備」、「埋蔵文化財の発掘調査」などのうち、「史跡等環境整備」の第二の柱は「風土記の丘建設」である。この事業の主旨は、考古資料、古文書等の文化財を各地方の特色ある風土と一体化して保存し、また、その活用を図るため、収集、保管、展示のための資料館を、古墳、住居跡等の遺跡を包蔵する地区に建設、整備するというものであった。

当時、埼玉県でも、県名発祥の地に所在する埼玉古墳群の整備計画があり、昭和四二年には、これが、「さきたま風土記の丘」建設計画として、国庫補助を得て開始された。これに伴ない古墳整備の基礎資料収集のため、県教育委員会が主体となり、各古墳の発掘調査が、同年以降実施されているが、前述の稲荷山古墳の埋葬施設の調査は、昭和四三年度の実施である。この他の古墳についても周堀の調査が部分的ではあるが実施され、その形態が徐々に明らかになりつつあるが、出土した埴輪などの資料から、ある程度、築造時期も知られるようになってきた。

各古墳の調査成果は、昭和五五年に稲荷山古墳について、また、昭和五九年度には、鉄砲山古墳及び愛宕山古墳について、さらに昭和六〇年度には瓦塚古墳の発掘調査報告書が刊行されている。

二子山古墳は、昭和四二年度から五九年度に四回調査が実施されている。

昭和四二年度は、風土記の丘建設にあたり計画された周堀復原のためのトレンチ調査であり、昭和四三年三月七日から二六日まで実施した。この結果、二重の周堀を有することが判明したほか、西側くびれ部の造出し及び西側中堤外堀側に方形の造出しが所在することが確認されている。

昭和四九年度は、昭和四三年に撮影された航空写真に写っていた、丸墓山、稲荷山、二子山古墳間の古墳跡の調査と同時に、用地買収の関係で未調査であった後円部北側と中堤造出し外方の外堀部分の状況を確認するため、昭和四九年一二月一七日から翌昭和五〇年一月二四日まで実施したものである。これもトレンチ調査で、中堤造出し部の調査区で造出しと外方を結ぶブリッジを検出するなどの成果があり、周堀の形態が方形の可能性も指摘された。

昭和五五年度は、四九年の調査と一部重復するが、北部外堀部分を面的に調査したもので、昭和五六年二月二日から調査を開始、同三月三一日に終了した。後世の遺構破損が著しく、外堀の遺存状況はあまり良好でなく、方形と推定された周堀の北部外堀コーナーは、明瞭な形では検出できなかった。

昭和五九年度の調査は、前方部南の外堀部分を対象とし、昭和五九年一〇月一五日から同一二月一〇日まで実施し、これも面的な調査であったが、必要により四本のトレンチを加えた。ローム層が削平を受けている部分が多く、遺構の遺存状況が悪く、外堀の範囲を推定する資料を得るにとどまった。

Ⅱ 調査の経過

一 昭和四二年度

昭和四二年度は、それまで明らかでなかった周堀の形態を明らかにし、復原の資料を得る目的で調査が実施された。長短四〇余本のトレンチによる調査で、昭和四三年三月七日に調査を開始、同三月二六日に終了した。

三月七日

墳丘の東側に主軸と直交する三本のトレンチ（第3、4、5トレンチ、西側にも同様に三本のトレンチ（第2、9、10トレンチ）、後円部後方及び前方部前面の、ほぼ主軸上に近い位置に各一本のトレンチ（第8及び第1トレンチ）計八本を設定し調査を開始。各トレンチは、幅二㍍を基本とした。

三月八日

各トレンチ掘り下げ。第2トレンチ外方で堀状の遺構を確認、外堀と判断された。各トレンチで、ローム層を確認、第1トレンチ、第2トレンチ内では耕作土上面から堀底まで約六〇㌢である。

三月九日

第4トレンチ墳裾部分から東八・五㍍～一八・八㍍の部分で瓦を含む攪乱土層を検出。廃寺跡のものでないかと推定された。

三月一一日

第10トレンチ内墳裾部分で、ローム土の高まりを検出。くびれ部に付設された造出しと判断された。

三月一二日

第10トレンチ南に拡張区を設定し掘り下げる。ゆるく弧を描くような造出しのプランを確認する。造出しは黄褐色ソフトローム、黄茶褐色のハードローム面で確認。縁辺から埴輪片が出土し、須恵器片も他のトレンチより出土量が多いが、原位置を保つものはない。後円部北方に第12、13トレンチ等を設定、掘り下げを開始。

三月一三日

第9トレンチ内で外堀が予想位置で検出できず、ローム土が高いレベルで存在しており、中堤に付属する施設が存在する可能性が生じた。このため、その確認用に第9トレンチ周囲にトレンチを設定、これを掘り下げる。

第10トレンチ北拡張区から埴輪、須恵器片の出土多し、前方部南方の周堀、中堤のコーナー検出のため第29トレンチを設定。

三月一四日

第29トレンチ東方に第37、38トレンチ設定。

三月一五日

前方部西方の周堀、中堤のコーナー検出のため第40、41トレンチ等を掘り下げる。第41トレンチ内で内堀外方コーナーを検出、同東拡張区では内堀底部分から潰れた状況で埴輪片が多量に出土した。

三月一六日

第9トレンチ周囲に設定した各トレンチ内で、中堤に付設された造出しの状況がほぼ明らかとなった。平面はおおよそ台形で、島状に外堀側に張出している。第18、28トレンチ内の断面からすると、造出し部分は地山であるロームの上に約一〇㌢前後の厚さで、粘土層が堆積しており、さらにその上

に茶褐色土のブロック土を積上げている状況が部分的であるが観察できる。

三月一七日

第27トレンチ拡張区及び第30トレンチで中堤造出しの北部及び西部コーナーの確認を行う。第27トレンチ内の外堀底には青灰色粘土層が堆積している。

三月一八日

測量（実測）を開始。

第40トレンチ内では前方部西コーナーは明瞭に確認できない。また第44トレンチ内でも外堀の外方立上りは明瞭に確認できない。

三月二〇日

各トレンチの土層断面図を作成。

三月二六日

実測作業を終了し、調査を終了する。

二　昭和四九年度

昭和四二年度未買収地の、後円部北方の外堀部分、及び中堤造出し部を調査した。調査期間は、昭和四九年一二月一七日から翌昭和五〇年一月二四日までである。

一二月一七日

幅一、五㍍で、各トレンチを開始。

一二月一九日

各トレンチで堀底を確認する。

一月八日

造出し部に古墳の主軸と平行する長さ二〇㍍のトレンチを二本設定し、掘り下げる。覆土中から埴輪片の出土が多い。表土（耕作土）上面から六〇～七〇㌢で堀底にいたり、堀底には灰白色の粘土が堆積するようである。

一月一二日

造出し部の第1トレンチ（墳丘側のトレンチ）の、表土下約三〇㌢でローム面を検出した。約三㍍の幅を有し、外堀底より約三〇㌢程高い。

一月一四日

一昨日の造出し部第1トレンチで検出されたローム面の高まりは第2トレンチ内でも検出され、中堤造出しと外方を結ぶブリッジと判断された。ブリッジ両側の外堀内から埴輪片が多数出土。

一月一八日

造出し部の各トレンチの覆土除去作業を継続。堀底の灰白色粘土の上に堆積する黒色粘質土は約二〇㌢の厚さを有し、埴輪片を多く含む。

一月一九日

造出し部各トレンチを東側に拡張、二〇㍍×九㍍の一つの調査区とする。

一月二一日

造出し部調査区内の覆土除去をほぼ終える。造出し部立上りは、ブリッジ両側面で比較的良好に遺存するが、他は遺存状況が悪い。造出し縁辺の外堀部分から、埴輪の出土が依然多い。後円部北方の各トレンチでは外堀の各立上り部分を検出するなどの成果があり、埋戻しを開始。

一月二四日

二二日の降雪のため調査を二日中断したが、本日から再開。造出し調査区の実測及び写真撮影等を実施し、埋戻しを行い、調査を終了する。

三　昭和五五年度

四九年度と一部重複するが、後円部北方の外堀コーナー部分の確認を目的に実施。約一、一〇〇平方メートルと比較的広い調査面積を確保しての面的な調査で、調査期間は昭和五六年二月二日から同三月三一日までであった。

二月二日

重機を利用して調査区内の客土を除去、基準点を設定。

二月三日

調査区を道路の東西に分け、西をさらに東半のA区、西半のB区に分け、西B区から掘下げを開始する。

二月七日

西B区北半はローム面が高いレベルで遺存し、南に向かい緩く傾斜する。このローム面は外堀外方部分と考えられ、この部分の覆土中から比較的大形の埴輪片が出土するが、中世陶器も混在するので、原位置のものではない。

二月一〇日

西B調査区内北半で検出したローム面で外堀プランの検出に努めたが、その予想部分は相当の攪乱があり、明瞭でない。

二月一六日

西B調査区、ローム面での遺構確認を行う。北東部で溝SD001、002を掘下げる。SD001は複数の溝からなり、断面は、基本的には箱薬研状である。SD002は舟底状。

調査区東南は外堀覆土部分に相当の溝や土壙が存在するようである。

二月一八日

昨日降雪のため作業を中止したが、本日より再開。西B区が、冠水したため、西A区を一部掘下げる。

二月二〇日

西B調査区内、SE001、SE002等、プラン確認後掘下げ開始。SD003から中世陶器等出土。

二月二六日

西B調査区SD003、SD006A等掘下げを開始。SD001は四本の溝で構成されることが判明、SD001AはSD001Bを切っている。SE002から円筒埴輪片、鳥形埴輪破片（首の部分）、加工痕のある角閃石安山岩、陶器片など出土。

二月二七日

西B調査区SD005はSE001より古いことが判明。

調査区南端のSD006は相当の深さを有し、人物埴輪の腕等が出土。

三月二日

西B調査区SD003、005はある程度埋まった段階で人為的に埋められている部分がある。

三月三日

西B調査区SE001は井戸、また、SE002北東部の円形の落込みはごく新しい時期のものと判明。

三月五日

西B調査区の掘下げを終了し、西A調査区の掘り下げを開始する。

三月七日

西A調査区、ローム面まで掘下げる。西B調査区、平面図作成開始。

三月一一日

西A調査区内各遺構のプランを確認、掘下げを開始。外堀の外方立上りは西B調査区内と同様、明瞭でない。SD009、SD010間に柵列を発見したが、これは水路に係る堰の可能性がある。

三月一六日

東調査区を掘下げ、遺構確認作業を開始する。

北東の部分でローム面が高いレベルで検出されるが、細かな凹凸がある。

三月一九日

西A調査区各遺構精査、実測。

三月二三日

東調査区内でSD014、015、016を確認。SD015は、やや幅広の溝に切られ、西A調査区から連続するSD001A′と、考えられる。

また、調査区南の溝もSD003と連続すると考えられる。

三月二七日

東調査区内SE004はSD001A′の覆土を切っており、SD001A′より新しい。東調査区堀下げを終了。外堀外方立上りはやはり明瞭でないが、SD001A′南にわずかに検出されたローム傾斜面から、おおよそSD001A′付近になるのでないかと考えられる。

三月二八日

西調査区土層断面図、東調査区平面図等作成。

埋戻しを開始する。

三月三一日

埋戻しを終え、調査を終了する。

四　昭和五九年度

昭和五九年度は前方部前面の外堀部分を対象に調査を実施した。南の県道の歩道整備の関係もあり、これに隣接する部分もトレンチ（第3、4トレンチ）を設定して同時に調査した。調査対象面積は約八〇〇平方メートル。調査期間は昭和五九年一〇月一五日から同一二月一〇日までであった。

一〇月一五日

調査区を設定、器材等搬入。

一〇月一六日

重機を利用、客土、耕作土を除去（第3、第4トレンチも同時に実施）。

一〇月二二日

第3、4、トレンチ内で溝を検出。耕作土上方から掘込まれ、時期は新しい。

一〇月二四日

主調査区で外堀のプラン確認作業を行うが、プランは明瞭でなく、覆土の一部と考えられる。暗褐色土系の土がその推定部分に散在している。表土（水田耕作土）は二〇～三〇センチメートルの厚さであり、その下にソフトローム層が存在するが、あまり良好な遺存状況ではない。基準点及び水準点測量を実施。

一〇月二五日

外堀内側立上り部分の確認作業を行う。SD001を検出。

一〇月二六日

ＳＤ００１は耕作土直下から掘込まれており、新しい。青灰色粘土及び暗茶褐色土を覆土としており、外堀底に達し、混入した埴輪片を出土する。

外堀中堤側立上りを確認のため、三ケ所にサブトレンチを入れたが、堀底は最深部でハードローム上面に達しているようである。また、各サブトレンチ内で溝（ＳＤ００５）を検出したが、覆土の状況から、外堀と同時に埋没している状況が認められた。

一一月六日

溝を三基（ＳＤ００２、００３、００４）を確認し掘下げる。ＳＤ００３はテラス状に段を有する部分があり、南に細い溝（ＳＤ００３Ｂ、Ｃ）を伴うようである。

ＳＤ００４はごく浅く、人間の足跡と思われる痕跡が底面に一面に見られる。堀込面はＳＤ００３より下で、ＳＤ００３より古い時期が考えられる。

一一月八日

ＳＤ００２は断面が箱薬研状で、調査区中央でほぼ直角に中堤側に折り曲り、ＳＤ００１と連結する状況が明らかとなった（ＳＤ００２Ａ）。

ＳＤ００１、ＳＤ００２間の耕作土下には青灰色粘土がひろがっており、この部分に滞水していた時期があったことが推定された。

一一月九日

外堀中堤立上り部分を精査。ＳＤ００５は明瞭となり、埴輪片の出土がその付近を中心に目立っている。

一一月一六日

主調査区をほぼ掘り終え、東調査区の掘り下げにかかる。

一一月二二日

二〇日の降雨のため本日まで作業を中止する。

一一月二六日

主調査区遺物出土状況写真撮影。終了後出土位置を記録、取上げる。

一一月二七日

東調査区内で溝（ＳＤ００８、００９）を検出したが、ＳＤ００５と同様の覆土を有しており、時期もほぼ同様と考えられる。

一一月二九日

主調査区土層断面図作成

一一月三〇日

午前中航空写真撮影。外堀の西方延長部分を確認するため、第1、第2トレンチを設定し掘り下げる。

第2トレンチ内で外堀中堤側立上りと思われる部分を検出。

一二月三日

主調査区の平面図作成。第1、第2トレンチ平面図、土層断面図等作成。

一二月七日

主調査区土層断面図作成終了後、花粉及び珪藻分析資料を採取。

主調査区平面図終了。

一二月八日

遺構保護用の砂をまき、主調査区の埋戻しを開始する。

一二月一〇日

重機を利用した埋戻しを終了。器材等を撤収し調査を終了する。

Ⅲ　遺跡の概観及び立地と環境

秩父山地から東流してきた荒川は、平地部に達し、扇状地を形成するが、埼玉古墳群が所在する行田市周辺は、その東方にあたっている。

また、北方には利根川が東流しており、関東造盆地運動と呼ばれる地盤沈降現象のある地域とされ、両河川が氾濫を起し、土砂を堆積させてきた地域である。

大宮市を中心とするローム台地である北足立台地は、北の方にも伸びているが、鴻巣市付近から北では、こうした河川の堆積土により、現水田面とは一㍍前後の比高差しかなく、なかには、水田下に埋没してしまっている部分もある。

埼玉古墳群はこのような、ローム低台地上に所在することが確認されており、付近の標高は一八㍍前後であり、自然堤防的な微高地となっている。

埼玉古墳群は、群中の前方後円墳のうち最古とされる稲荷山古墳以下、八基の前方後円墳が現存しているが、かつては、さらに二基の前方後円墳の所在が推定されている。

二子山古墳は、これらの前方後円墳中最大のもので、県内はもとより、旧武蔵国内でも最大の前方後円墳である。現状では、主軸長一三五㍍、後円部径六四・五㍍、高さは付近の水田面からでは、一二・八㍍、前方部幅八五・五㍍、高さ一四・七㍍である。

主軸長については発掘による内堀の立上がり上面での計測では、一三九㍍となる。また、高さの比較では、後円部最高所が、標高三〇・一㍍、前方部が三二・〇と、前方部が後円部より約二㍍程卓越している。

測量図から、後円部北及び前方部前面の墳丘斜面の標高、二二～二三㍍を中心とする部分のコンターが、やや広めとなっていることが看取でき、二段築成になるものと思われる。また、後円部頂には、直径約六㍍の擂鉢状のくぼみが認められる。古老の話では、かつてここで賭博が行なわれていたということであるが、盗掘孔を利用したものか、賭博のために掘られたものであるかなど明確にし得ない。

主軸方位については、N―三八・五度―Eであり、稲荷山古墳や、鉄砲山古墳との近似性が指摘されている。

内部主体については、墳丘部分が発掘調査されておらず不明であり、出土遺物等についての伝承も知られていない。

二子山古墳が最初に文献に現われるのは、旧忍村（現行田市）在住の郷土史家清水雪翁が、明治四〇年に著わした『北武八志』(註1)である。その第四巻「墳墓志上」には「両子山」と記載され「同村（埼玉村、現行田市埼玉）にあり、又觀音寺山とも云ふ、高さ五丈周圍七八町、是は唯に本村の巳ならぜ(ず)殆んど本國中の大塚にして之を望むに天然の丘陵の如く車塚の制にして前方後圓壇三成儼然として其形を存せり」とある。当時すでに、旧武蔵国最大の古墳として、また、墳丘の構築が三段築成であると認識されている。

次に、昭和一一年に刊行された埼玉村教育會による『史蹟埼玉』(註2)の記載では、「丸墓山の南方約三百九米の處に在って、本村に於ける前方後圓墳の最大なるものである。周湟ありしも今は田となる。湟外西部に壘址を有することは、この古墳に於てのみ見る特徴とする。東麓に畑地あり、昔時觀音寺ありし址なりといふ、觀音寺山の稱ある所以である。」とある。規模の大きな古墳であるというほか、墳丘西方の「壘址」の記述があり、注意を引いてい

たことがわかるが、これは前方部西方に遺存する中堤の低い高まりである。

名称については、「史蹟埼玉」では、現在と同じ「二子山」となっているが、別称である「観音寺山」の由来が記されている。東麓の畑地に観音寺という寺院があったためということだが、地籍図を見ると、墳丘東側のくびれ部から後円部東にかけての内堀部分が畑地であったことがわかる。また、墳丘東側くびれ部は、測量図のコンターがやや密になっており、人為的とも思える若干の変形が認められる。これらの部分に、観音寺が所在していたことを推定できる。昭和四二年度第4トレンチ内での瓦片の出土は、これを裏付けるものであろう。

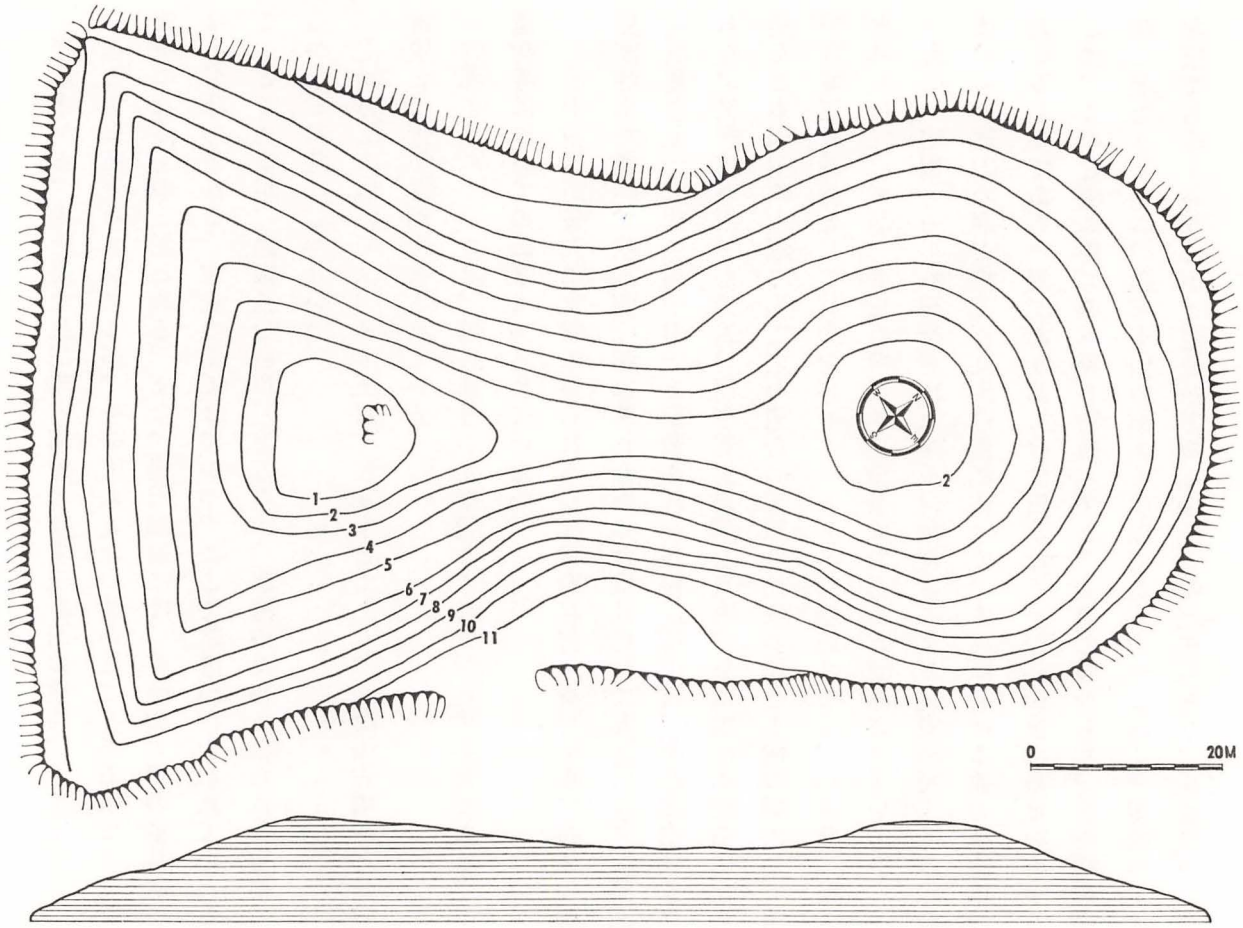
二子山古墳の測量図が最初に作成されたのは、昭和一〇年頃、後藤守一、三木文雄氏によるもので、(註3) 同古墳にとって、初めての学術的な調査であったとも言える。この測量図は、史跡指定の際にその申請書にも添付されたものであり、この時点では、主軸長が一二八㍍など、現在とは若干数値が異なっている。その後は、「さきたま風土記の丘」の整備に伴う調査により、周堀の状況が、ある程度明らかになり、現存に至っている。

以上、二子山古墳の概観を述べたが、周辺の各時代の遺跡等については、既に刊行した第一集（『埼玉稲荷山古墳』）～第四集（『瓦塚古墳』）で触れているので、それらを参照されたい。

註1　清水雪翁『北武八志』　川島書店　明治四〇年八月　（昭和五四年十月、歴史図書社　復刻）

註2　高木豊三郎　『史蹟埼玉』　埼玉村教育會　昭和一一年一〇月

註3　掲載した図は、『古墳調査報告書 第六編』（埼玉県教育委員会、昭和三八年三月）による



第1図　二子山古墳測量図（1/800　昭和12年　後藤守一、三木文雄氏原図、『古墳調査報告書 第6編』埼玉県教育委員会 昭和39年、より転載）

1 埼玉古墳群	11 若王子古墳	21 毘沙門山古墳	31 長野神明遺跡
2 若王子古墳群	12 八幡山古墳	22 真名板高山古墳	32 長野中学校々庭遺跡
3 若小玉古墳群	13 愛宕山塚古墳	23 小針鎧塚古墳	33 星宮皿尾遺跡
4 小見古墳群	14 荒神山塚古墳	24 大日塚古墳	34 池守中里地区遺跡
5 斉条古墳群	15 地蔵塚古墳	25 袋・台遺跡、古墳	
6 酒巻古墳群	16 小見真観寺古墳	26 小針遺跡	
7 新郷古墳群	17 虚空蔵山古墳	27 陣場遺跡	
8 羽生古墳群	18 とやま古墳	28 鴻池遺跡	
9 佐間古墳群	19 酒巻1号墳	29 武良内遺跡	
10 二子山古墳	20 大稲荷1号墳	30 高畑遺跡	

第2図　二子山古墳の位置とその周辺の遺跡（1/60,000）

Ⅳ 調査の成果

一 遺構

(一) 内堀

内堀については、昭和四二年度の第1～5トレンチ、第7～10トレンチ等で確認を行った。

第1トレンチ（第8図）内では表土（耕作土面）から約六〇㌢、ローム確認面からは約四〇㌢強で堀底となり、墳丘側部分は除々に浅くなる。中堤寄りの立上りは検出できていない。

第2-aトレンチ（第8図）内では表土から約六五㌢前後で堀底となる。墳丘に近い箇所に耕作土下面から掘り込まれる溝があるが、地山であるローム土が高まりを見せており、立上りはこの付近と考えられる。

第3トレンチ（第9図）では表土から約六〇～七〇㌢で堀底となるが、堀底に白色の粘土層が見られた。堀底にはなだらかだが凹凸があり、中堤側は除々に浅くなり、立上りは明確でない。

第4-bトレンチ（第9図）では堀底までは約七五㌢であるが、墳丘、中堤寄りの両立上りは検出できなかった。

また、寺院に関係すると思われる攪乱が確認され、瓦片等が出土した。

第5-bトレンチ（第10図）では表土上面から五〇～六〇㌢で堀底に至るが、なだらかな凹凸があり、立上りはあまり明瞭でない。後円部と中堤との間隔が最も狭くなる付近だが、堀底での幅はおおよそ一〇・五㍍前後であろう。

第8トレンチ（第10図）でも表土から堀底まで五〇～六〇㌢、両立上り部分はゆるやかな状況である。主軸からやや北にずれる位置にあるが、堀底での幅は約九・五㍍である。

第9-bトレンチ（第11図）では堀底まで約七〇㌢、ローム確認面からは四〇～五〇㌢である。堀の中央にトレンチに直交する溝が検出されたが、これは堀覆土の下層の堆積後掘り込まれている。

第10-bトレンチ（第12図）内では、くびれ部造出し寄りと堀の中程に溝が一基あるが、掘り込まれる位置から、古墳と直接関連はない。表土から堀底までは約七〇㌢である。

第12-bトレンチ（第12図）では表土から堀底まではやはり約七〇㌢である。堀底の中程に第9トレンチから連続すると思われる溝がある。

また、中堤側の立上りがトレンチ墳丘側の起点（セクションポイントD）から約一九㍍付近で確認され、後円部カーブに相似する周堀なら、やや外方すぎる位置である。このことは、本古墳が台形周堀であるとする根拠の一つである。

第40トレンチは、前方部西方コーナーを検出する目的で設定されたものであるが、ロームの高いレベルの面が検出されたものの、後世の溝等の攪乱等により、明確にし得なかった。

第41トレンチでは、内堀の西コーナー部分を検出することができた。耕作土の下に黒褐色土があり、さらに下に青白色の粘土層があり、堀底となる。この黒褐色土中から埴輪片がまとまって出土している。

(二) 外堀

昭和四二年度では第2-b、3、4-a、5-a、12、9-a、10-a、13、29、37～39トレン

チ等で確認を行った。

以下、昭和四二年度について述べる。

第2-bトレンチ（第8図）では四箇所で後世の溝が検出され、外方の立上り部分はあまり明瞭でなく、堀底には若干の起伏が認められる。表土上面から約六〇～七〇㌢で堀底となり、内堀と略同様である。また、中堤が土堤状に遺存する部分に近いトレンチではあったが、中堤側の立上りは、検出できていない。

第3トレンチ（第9図）内では、中堤側立上りが検出されたが、あまり明瞭でなく、外方部分に大規模な攪乱がある。表土上面から三〇～四〇㌢で堀底に達し、内堀と比べ、二〇㌢前後浅い。堀の中程に後世の溝が認められる。外方の立上りはが検出されていない。

第4-aトレンチ（第9図）では、表土面から内堀が約七〇㌢であるのに対し、約六〇㌢とやや浅目である。立上りは、中堤側が、後世の溝があり、あまり明瞭とは言えないが、なだらかな立上りであり、外側はトレンチ端においてやや浅くなっているが、立上りと判断しきれない。

第5-aトレンチ（第10図）内では、中堤側立上りは比較的明瞭に検出できたが、この部分の比高差は約二〇㌢である。後世の溝が三箇所に認められる。表土面から堀底までは、約六〇～七〇㌢と内堀と同様であり、堀底はやや起伏がある。外方の立下りは検出されていない。堀底には青白色の粘土層の薄い堆積が認められる。

第10-aトレンチ（第11図）では、堀底まで五〇～六〇㌢と、内堀より一〇㌢前後浅くなり、堀底は比較的平坦である。堀底には青灰色の粘土層の薄い堆積が認められる。外方はなだらかに立上っており、中堤側は立上りの上部と思われる部分が検出された。溝が五基検出されたが、いずれも後世のものである。

第12-a、12-b両トレンチ（第12図）内では、表土面から堀底まで五〇～七〇㌢と、二〇㌢前後の高低差があるが、比較的平坦と言える。

堀底には青灰色粘土層の薄い堆積が認められる。中堤側立上りはやや角度をもって立上るが、その下の部分は、後世の溝で破壊されている。

第13トレンチ（第13図）では、トレンチ外方から約七㍍付近に、ローム層のなだらかな高まりが認められ、この部分が外方の立上りと考えられる。内側については検出されていない。堀底までは、耕作土から約八〇㌢で、若干の起伏が認められる。

第37トレンチ（第13図）では、堀底までは約三〇㌢と浅い。中堤側立上りは約一五㌢の比高差しかない。一部堀底に灰色粘土層の堆積が認められる。外方の立上りについては、検出されていない。

第39トレンチでは、二箇所に後世の大規模な溝が発見されている。表土から堀底まで三〇～六〇㌢と、やや浅深があり、中堤側の立上りと思われる部分がわずかに検出されているが、これが確実ならばその位置からして、方形の周堀とする根拠の一つとなろう。

以上が、昭和四二年度調査のトレンチ、外堀部分の概況である。次に昭和四九年度の調査は、後円部北方部分で、これもトレンチ調査である。

第1～4、6、8、10トレンチ等で外堀のものと思われるロームの段差を検出している。表土（耕作土）上面から堀底までの深さは第2-a、14トレンチで約七五㌢、第2-b、3トレンチで約六五㌢、第9トレンチで約七〇㌢、第13トレンチで約八〇㌢、第6、15トレンチで約九五㌢程であった。

昭和五五年度は、外堀北のコーナーを確認する目的で実施したが、後世の溝等による破壊攪乱が著しく、これを明確に握むことはできなかった。しかし、東調査区内では、SD001A′の南に、幅一・五㍍で一五～二〇㌢の斜面が確認され、この付近が外堀外方の立上りと考えられる状況であった。遺構確認面（ローム検出面）から堀底までの深さは約四〇㌢、堀底の標高は約一六・五㍍で、底部には青灰色粘土の堆積が認められる。

東区のローム検出面と堀底とのレベルからすると、西A区ではSD003及びSD006付近、西B区では、SD003及びSD005付近に、外堀外方立上りが想定された。

昭和59年度調査区では、水田の耕作によると思われるロームの削平が進んでおり、外堀の遺存状況は決して良好とは言えない状況であった。しかし、中堤側立上りが、SD005付近でごくわずかに遺存し、外方立上りについても、堀底に薄く堆積する青灰色粘土の広がりにより、SD004の南約二㍍付近かと推定された。こうした状況から、外堀の幅は約二四㍍、深さは遺存するローム上面かな堀底までは深いところで約一〇㌢であった。また、第1トレンチ内でも中堤側立上りと考えられる箇所を検出している。

(三) くびれ部造出し

昭和四二年度の第10-bトレンチ（第12図）及び10トレンチ（第5図）南拡張区内で、確認されたローム面の高まりは、墳丘くびれ部に付設された造出しと判断された。一部の調査であり、全容は不明だが、楕円状の平面プランで、幅は約二〇㍍、弧状に九㍍前後突出するものと考えられる。

周辺の内堀から埴輪片、須恵器片の出土がやや多いが、造出し上で原位置を保つものはなかった。

(四) 中堤及び中堤造出し

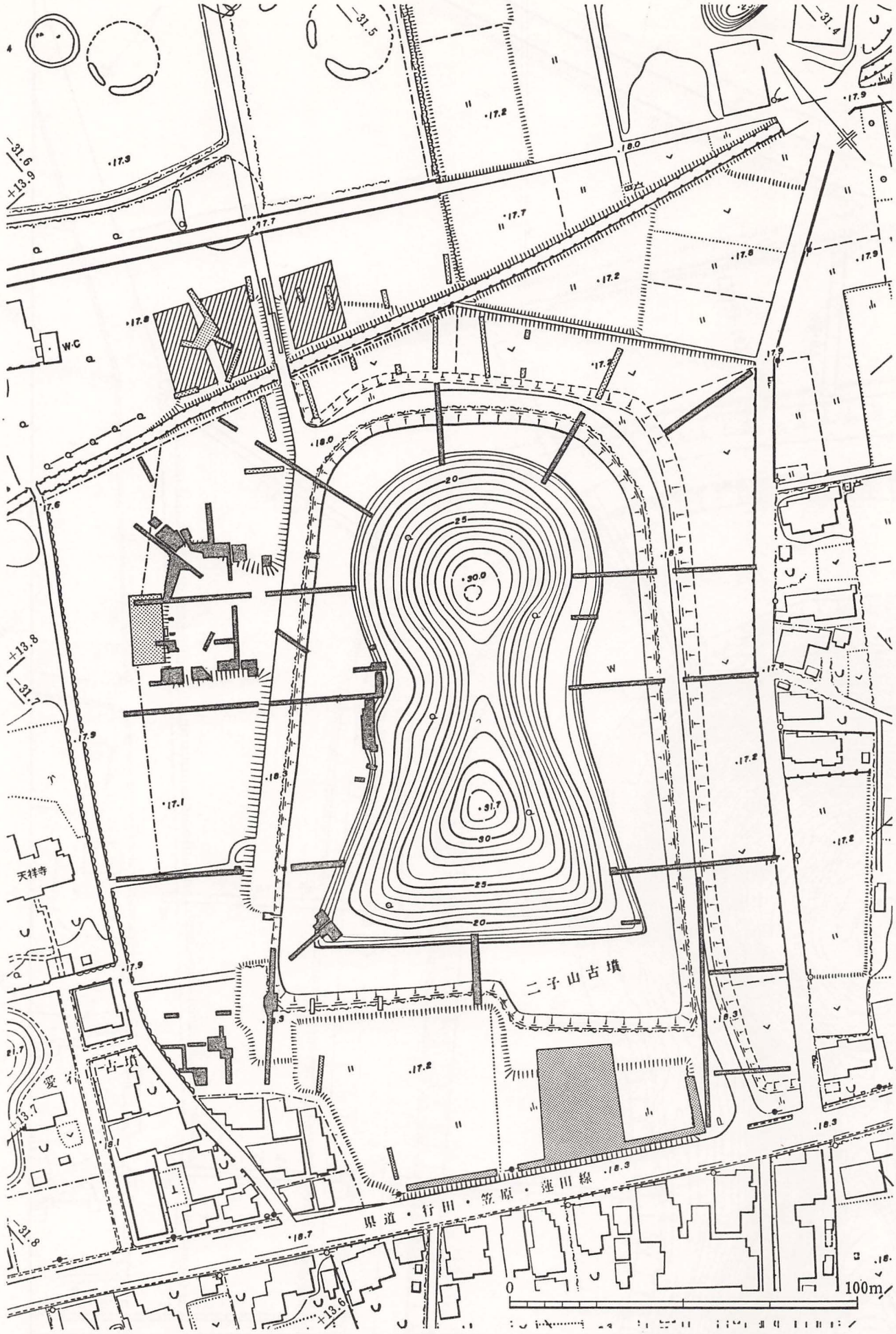
中堤は内、外堀の基部での計測では昭和四二年度第3トレンチ（第9図）で約一一㍍、第5トレンチでは約一五㍍、第10トレンチ（第11、12図）で約一二㍍、第12トレンチ（第12図）では約一四㍍の幅であった。

後円部西方の中堤に付設された造出しは、昭和四二年度第9トレンチ（第11図）等でその存在が明らかとなり、昭和四九年度の外方部分の調査で、造出しと外方とを結ぶブリッジの存在が明らかとなった。基部幅は、約三一㍍、端部幅は、約四三㍍、長さ約二八㍍で平面形は撥形を程している。

ブリッジはこの造出し先端の中央より、南西に片寄った位置にロームを掘り残して作られており、基部の幅は三・一㍍、堀底からは約三〇㌢の比高差があるが、遺存はあまり良くない。

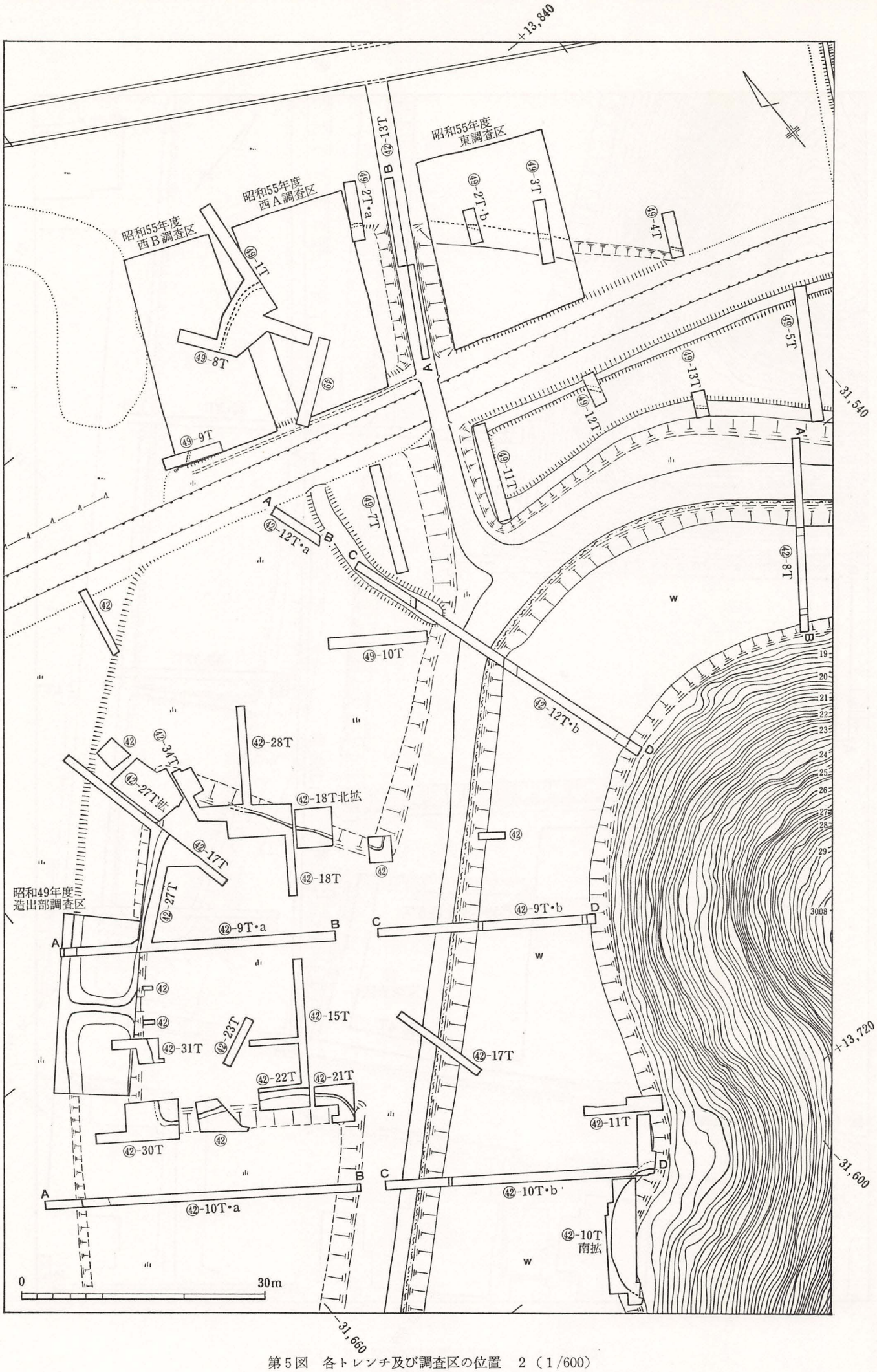
(五) その他の遺構

昭和四二年度の各トレンチで発見された構のうち、確実に古墳に伴うものはなかった。また、昭和五五年度調査区でも、確実に古墳に伴う土壙、溝等の遺構はなく、遡っても中世前後であろう。昭和五九年度ではSD005が、その覆土の状況から外堀に極めて近い時期のものと判断されたほかは、いずれも後世のものである。

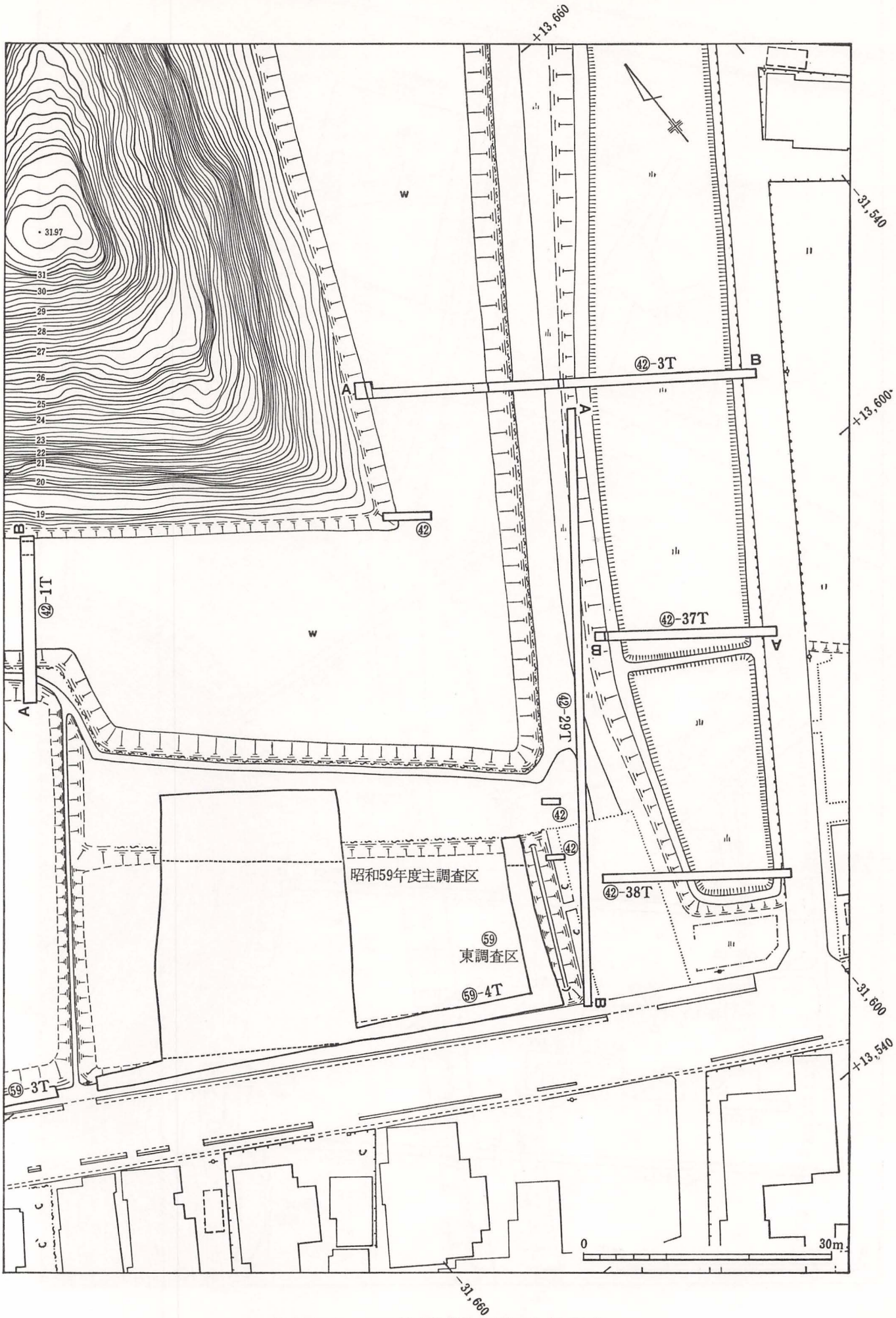


第3図　二子山古墳各年度毎発掘調査位置（1/1,500）

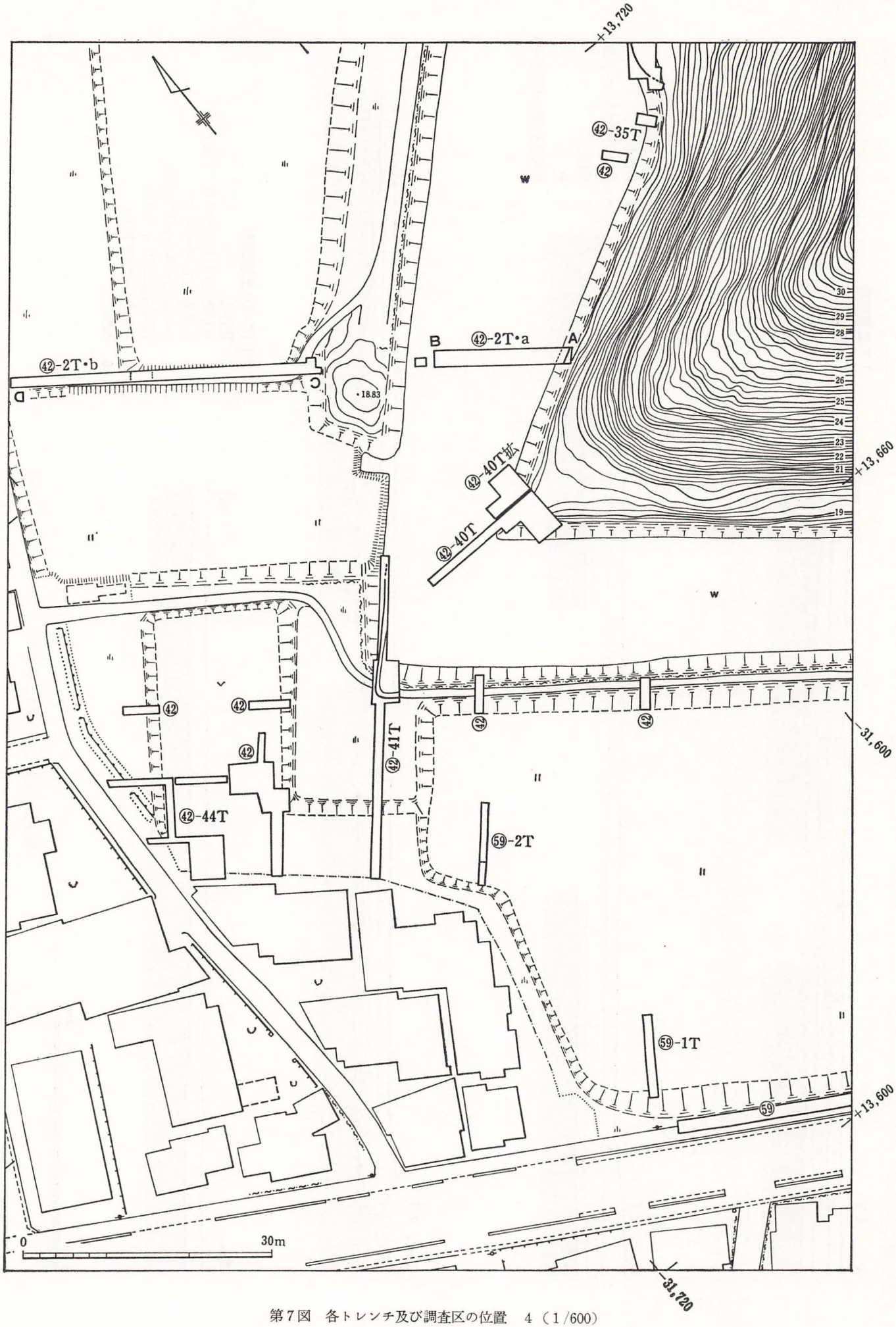
第４図　各トレンチ及び調査区の位置　１（１/600、トレンチについては略称、例：42-10南拡→昭和42年度第10トレンチ南拡張区）



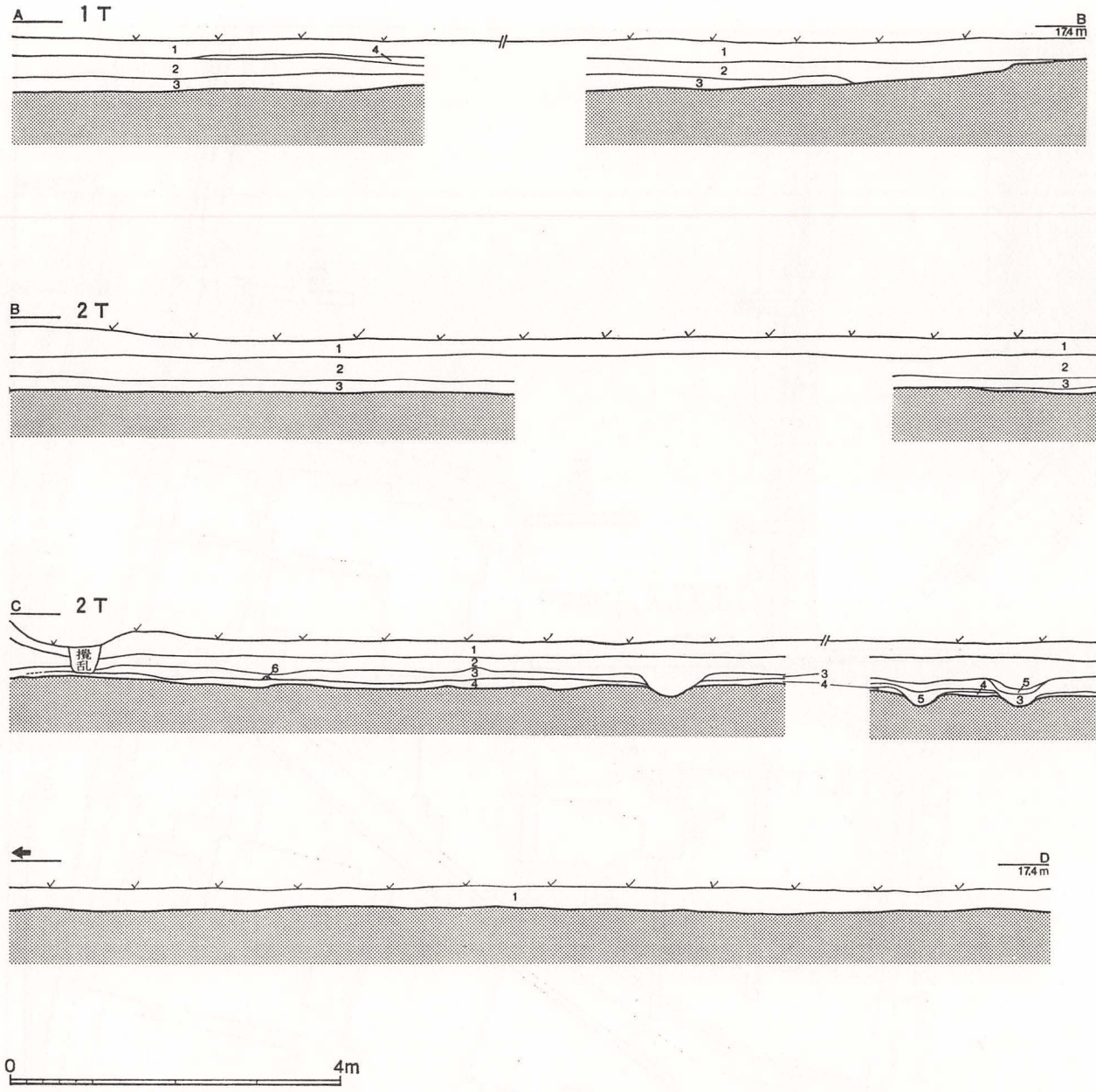
第5図　各トレンチ及び調査区の位置　2（1/600）



第6図　各トレンチ及び調査区の位置　3（1/600）



第7図　各トレンチ及び調査区の位置　4（1/600）



1T土層説明

1　耕作土
2　暗褐色土(鉄分及びローム粒含む)
3　粘土質灰褐色土
4　青灰色粘土

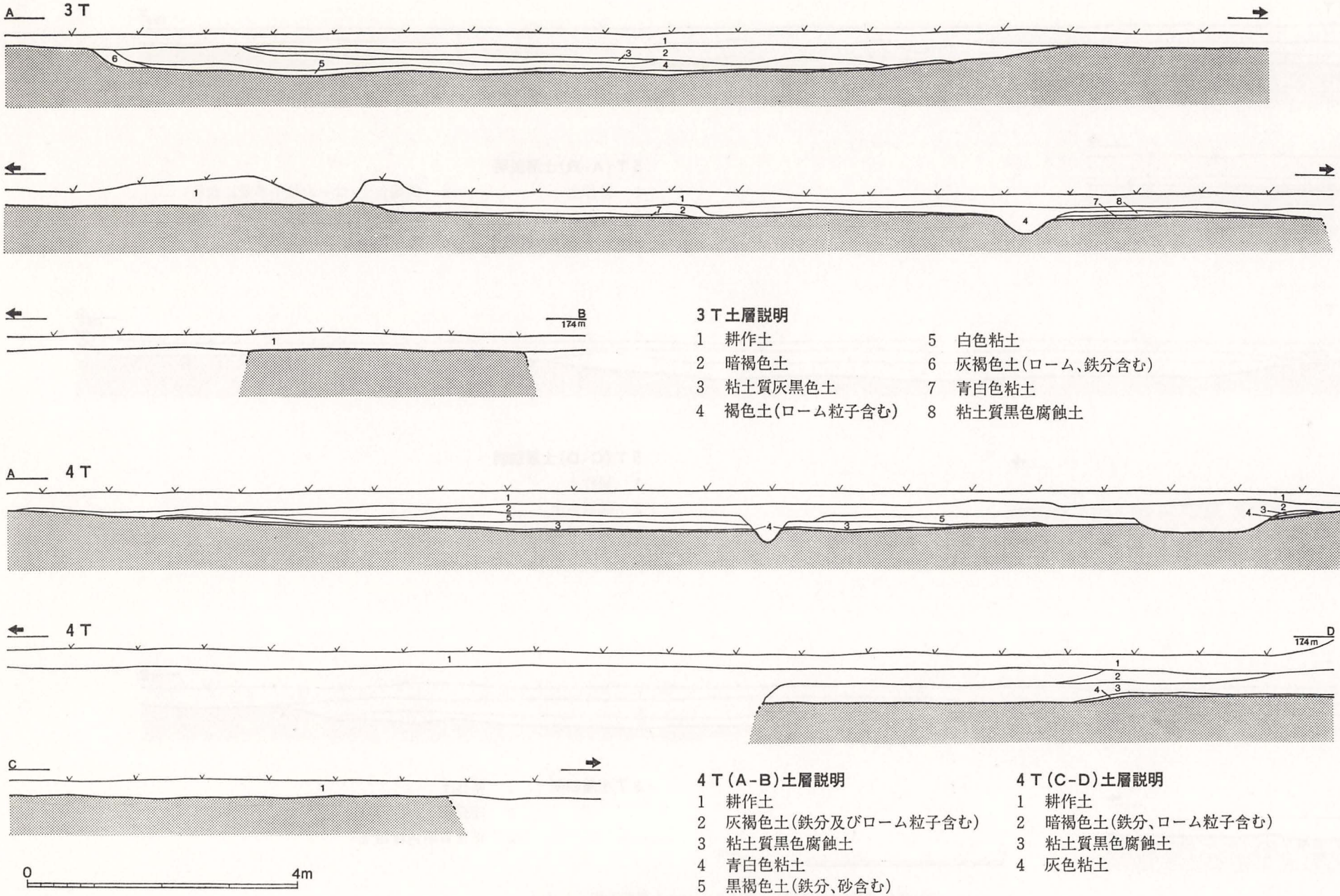
2T(A-B)土層説明

1　耕作土
2　黄褐色土(鉄分、ローム含む)
3　黒色土
4　粘　土
5　灰褐色土(鉄分粒子含む)
6　〃

2T(C-D)土層説明

1　耕作土
2　灰褐色土(1と非常に良く似る)
3　灰黒褐色土(粘性有す)
4　いくぶん青味をおびた粘土
　(部分的にブロック状)
5　灰褐色土(粘性有す)
6　暗褐色土

第8図　昭和42年度第1、第2トレンチ土層断面図(1/80)



3T土層説明

1 耕作土
2 暗褐色土
3 粘土質灰黒色土
4 褐色土(ローム粒子含む)
5 白色粘土
6 灰褐色土(ローム、鉄分含む)
7 青白色粘土
8 粘土質黒色腐蝕土

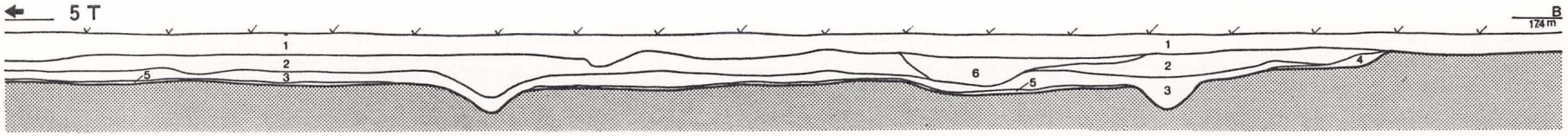
4T(A-B)土層説明

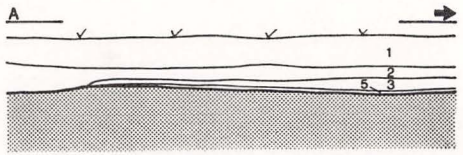
1 耕作土
2 灰褐色土(鉄分及びローム粒子含む)
3 粘土質黒色腐蝕土
4 青白色粘土
5 黒褐色土(鉄分、砂含む)

4T(C-D)土層説明

1 耕作土
2 暗褐色土(鉄分、ローム粒子含む)
3 粘土質黒色腐蝕土
4 灰色粘土

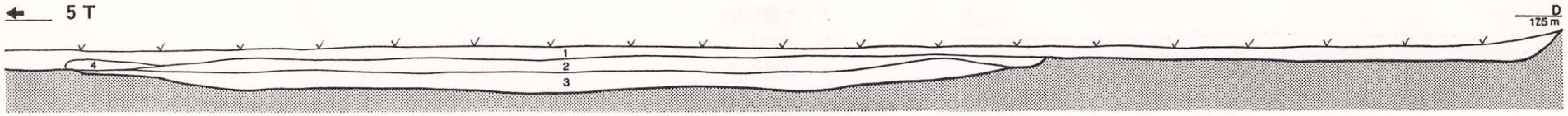
第9図　昭和42年度第3、第4トレンチ土層断面図（1/80）

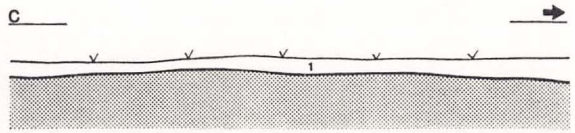




5 T (A-B) 土層説明

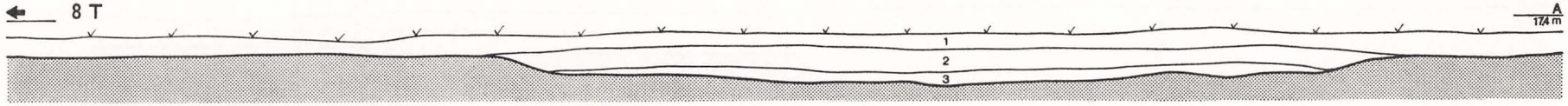
1　耕作土
2　暗褐色土
3　粘土質黒色腐蝕土
4　黄褐色土(ローム粒子多量に含む)
5　青白色粘土
6　青灰色粘土

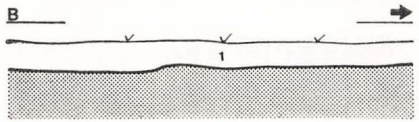




5 T (C-D) 土層説明

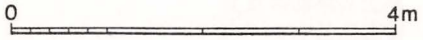
1　耕作土
2　暗褐色土
3　粘土質黒色腐蝕土
4　青灰色粘土



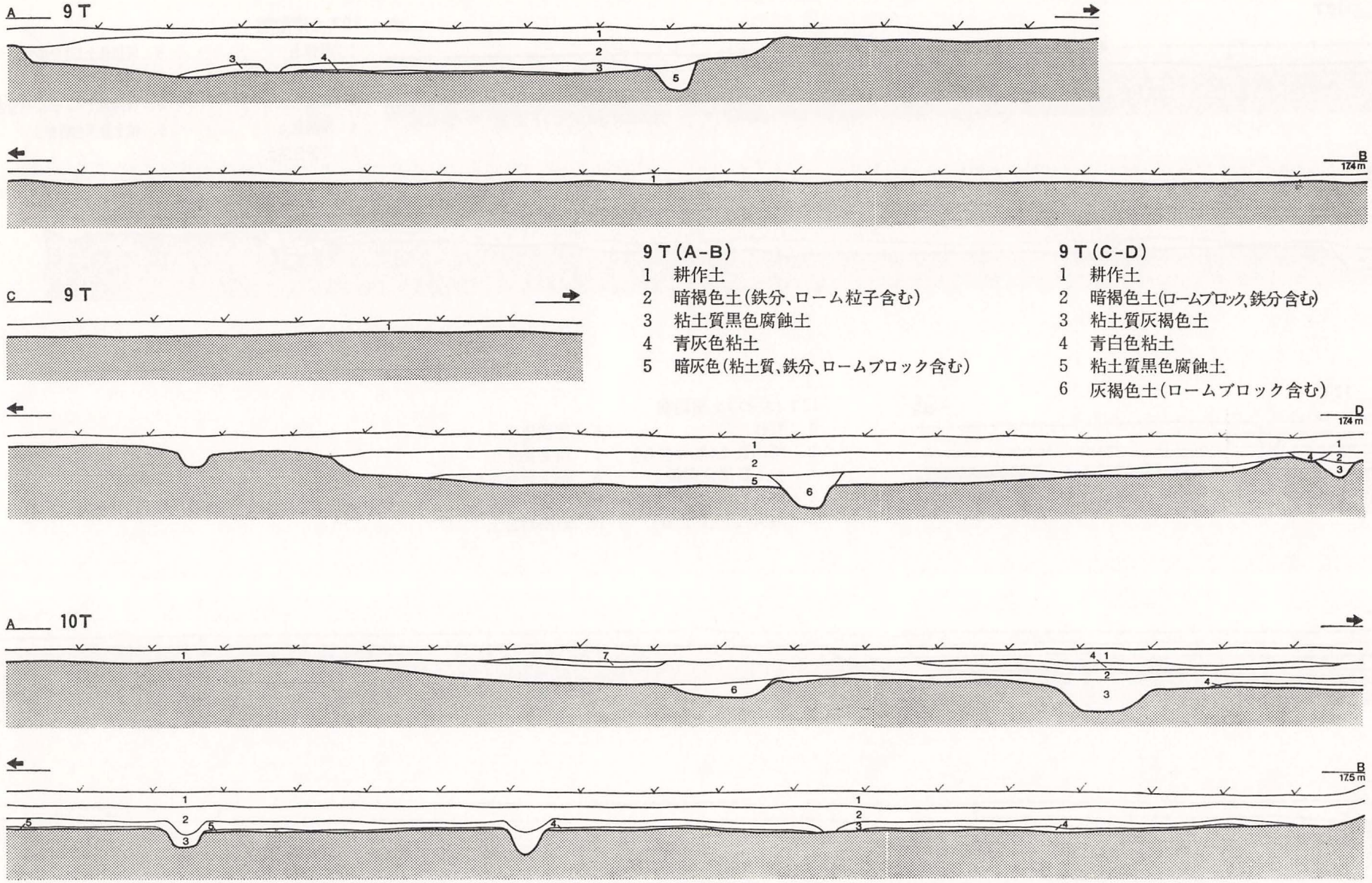


8 T 土層説明

1　耕作土
2　暗褐色土(鉄分含む)
3　粘土質黒色腐蝕土



第10図　昭和42年度第5、第8トレンチ土層断面図（1/80）



9T(A-B)

1 耕作土
2 暗褐色土(鉄分、ローム粒子含む)
3 粘土質黒色腐蝕土
4 青灰色粘土
5 暗灰色(粘土質、鉄分、ロームブロック含む)

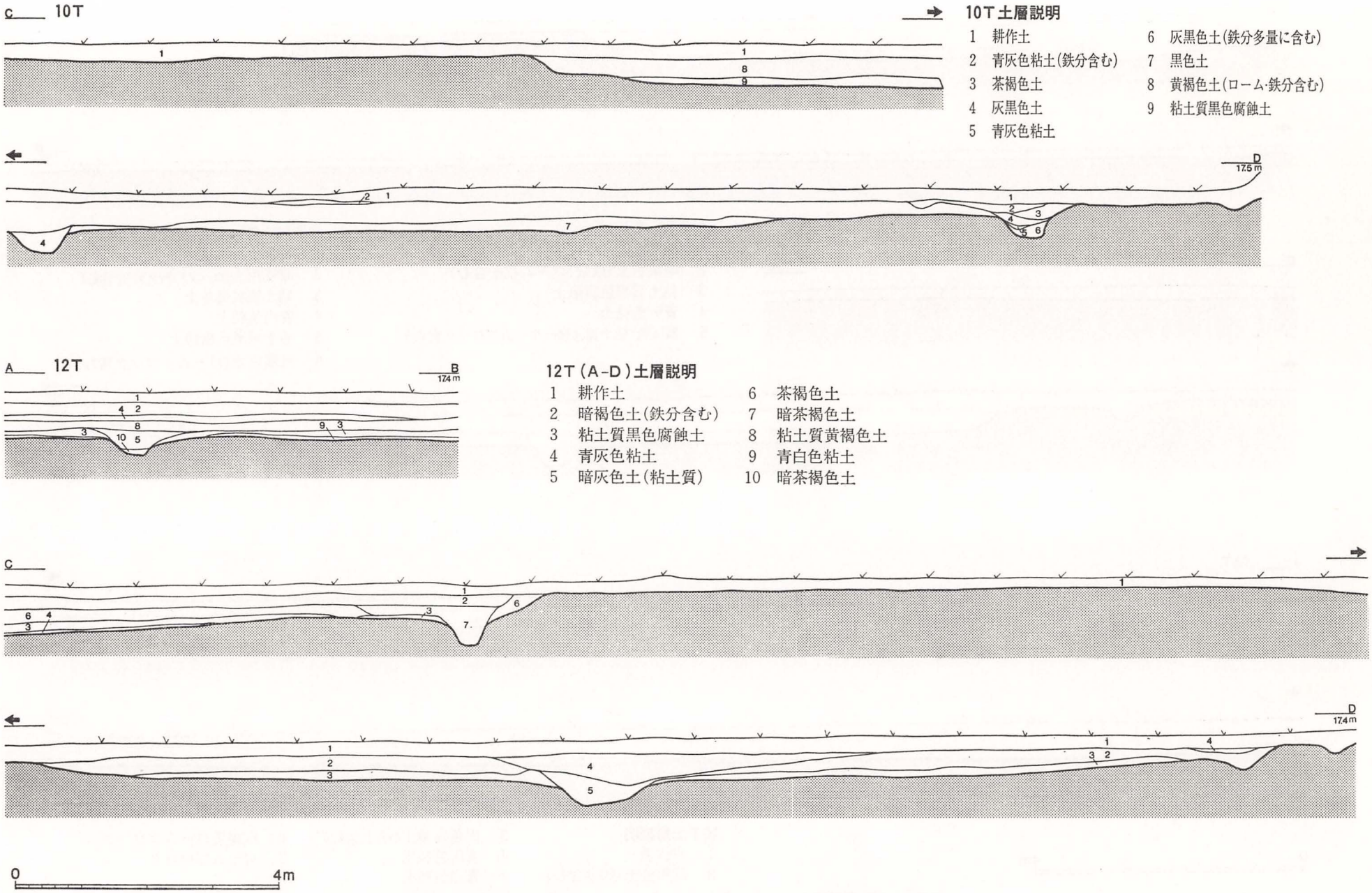
9T(C-D)

1 耕作土
2 暗褐色土(ロームブロック、鉄分含む)
3 粘土質灰褐色土
4 青白色粘土
5 粘土質黒色腐蝕土
6 灰褐色土(ロームブロック含む)

10T土層説明

1 耕作土
2 暗褐色土(鉄分含む)
3 黒色腐蝕土(粘土含む)
4 青灰色粘土
5 青白色粘土
6 灰褐色ロームブロック
7 ロームブロック

第11図　昭和42年度第9、第10トレンチ（A—B）土層断面図（1/80）



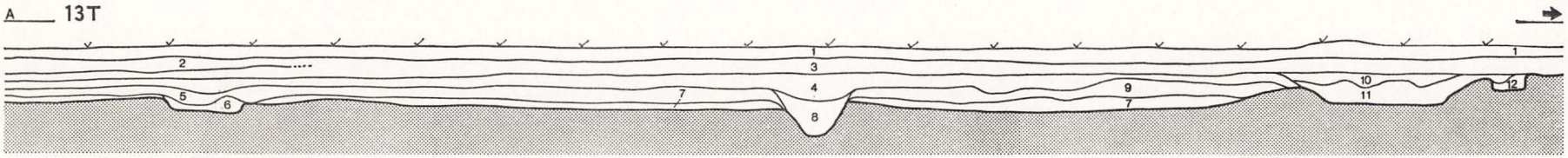
10T土層説明

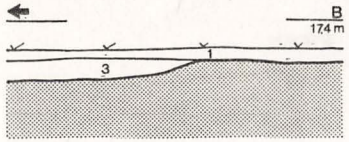
1 耕作土
2 青灰色粘土(鉄分含む)
3 茶褐色土
4 灰黒色土
5 青灰色粘土
6 灰黒色土(鉄分多量に含む)
7 黒色土
8 黄褐色土(ローム·鉄分含む)
9 粘土質黒色腐蝕土

12T(A-D)土層説明

1 耕作土
2 暗褐色土(鉄分含む)
3 粘土質黒色腐蝕土
4 青灰色粘土
5 暗灰色土(粘土質)
6 茶褐色土
7 暗茶褐色土
8 粘土質黄褐色土
9 青白色粘土
10 暗茶褐色土

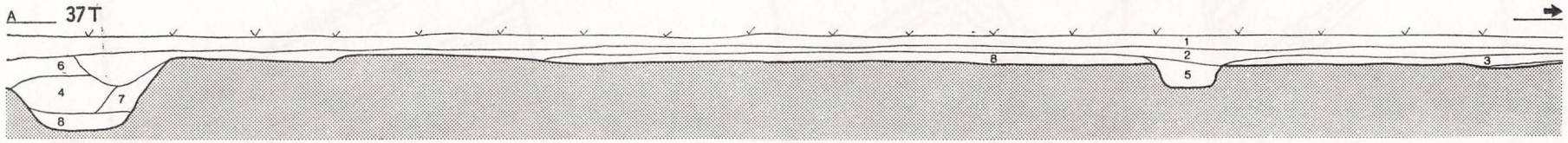
第12図　昭和42年度第10トレンチ（C—D)、第12トレンチ土層断面図（1/80）

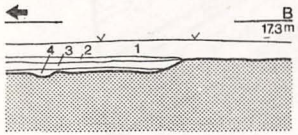




13T土層説明

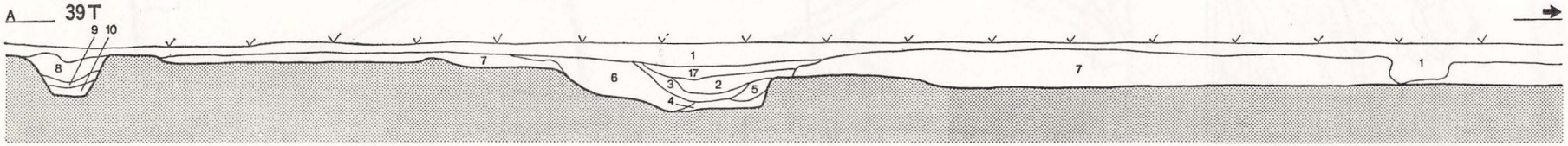
1　耕作土
2　青灰色土
3　灰色土
4　灰褐色土
5　灰色粘質土（少量の黄褐色土含む）
6　青灰褐色粘土
7　灰色粘土
8　青灰色粘土（明度低い、非常に粒子細かい　粘性強い）
9　青黒色土（部分的砂粒含む）
10　下層にくらべローム粒の含有量やや多い
11　ローム粒を少量含み、明度やや低い　灰色粒子非常に細く粘性有す
12　灰色土（ローム粒多量に含む　明度やや低い）

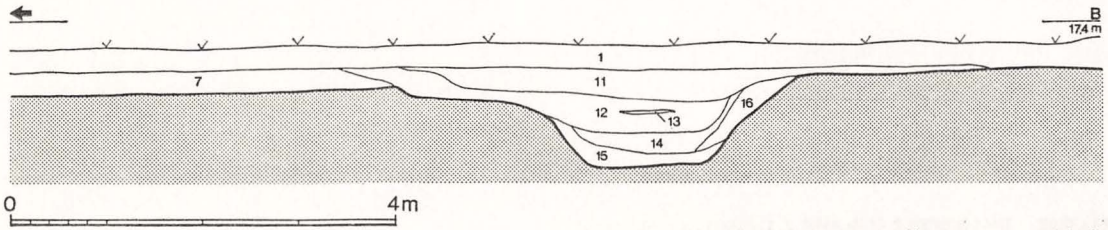




37T土層説明

1　耕作土
2　暗褐色土
3　粘土質黒色腐蝕土
4　灰色粘土
5　灰褐色土（鉄分の粒子含む）
6　粘土質黄褐色土
7　砂質土（ローム及び鉄分の粒子多量に含む）
8　粘土質黒褐色土

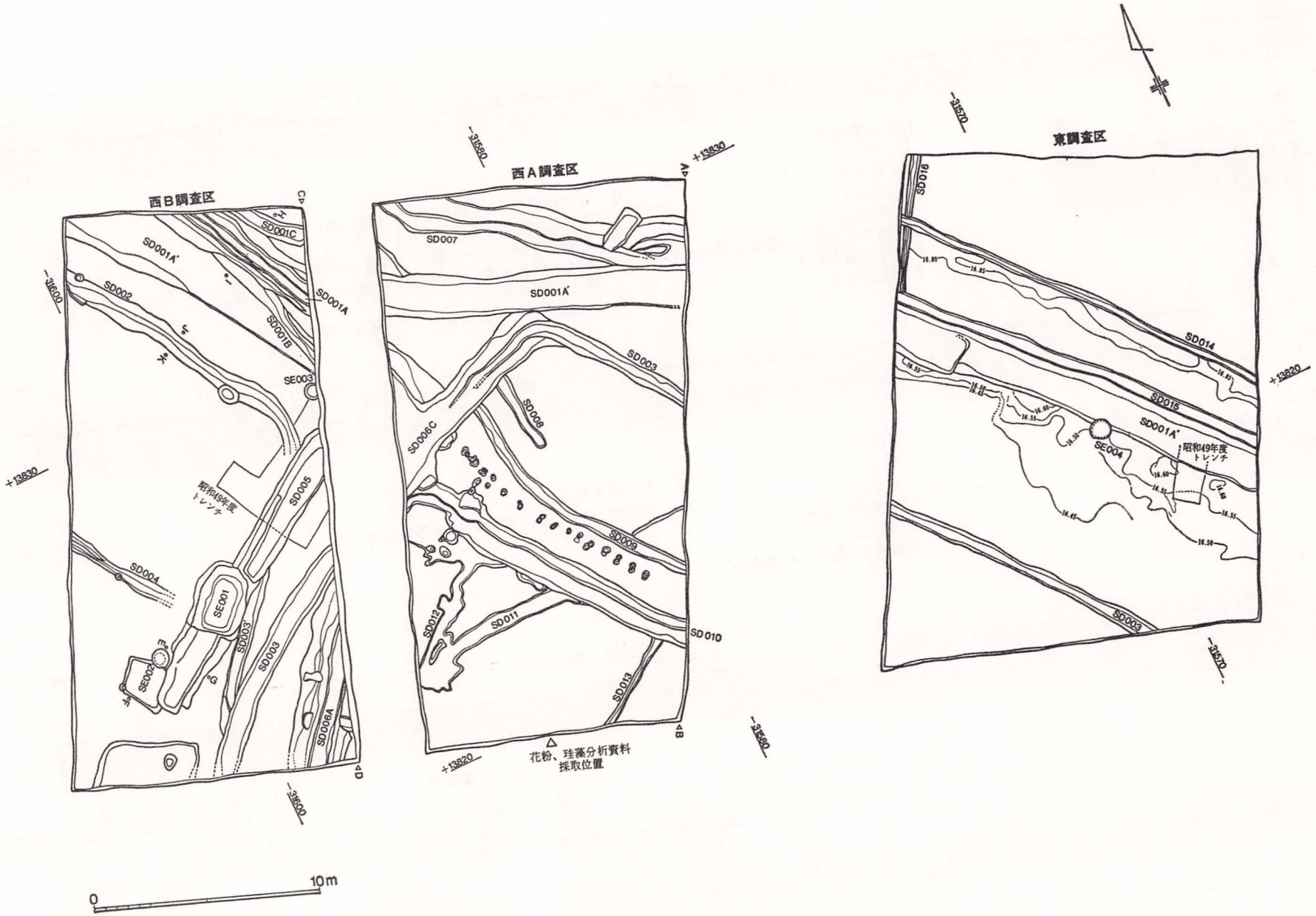




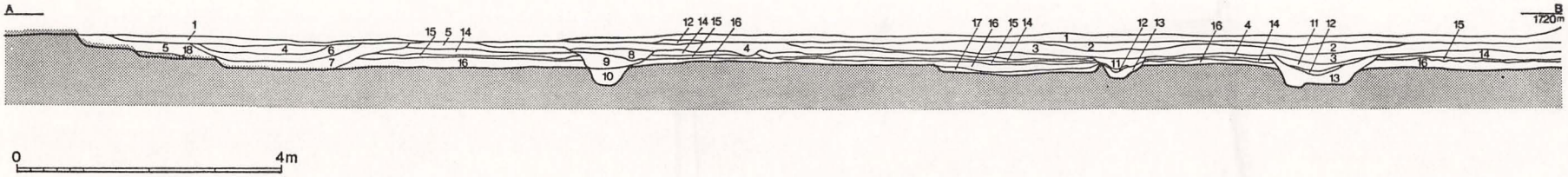
39T土層説明

1　耕作土
2　青灰褐色粘土
3　褐色土（粘性少ない）
4　軟質褐色土（ローム ブロック混入）
5　褐色土（ローム粒子混入）
6　〃　（鉄分少量含む）
7　青褐色土（鉄分含み粘性あり）
8　茶褐色土（小量粘土含む）
9　ソフトローム混入土
10　褐色土（ローム ブロック混入）
11　青茶褐色土（上部少量鉄分混入　下部粘性あり）
12　灰黒色粘土
13　青灰色粘土
14　灰黒色粘土（ポロポロの粒子）
15　〃　（粘性少なく、小量砂含む）
16　灰褐色土（ローム含む）
17　青灰褐色粘土（2の硬いもの）

第13図　昭和42年度第13、第37、第39トレンチ土層断面図（1/80）

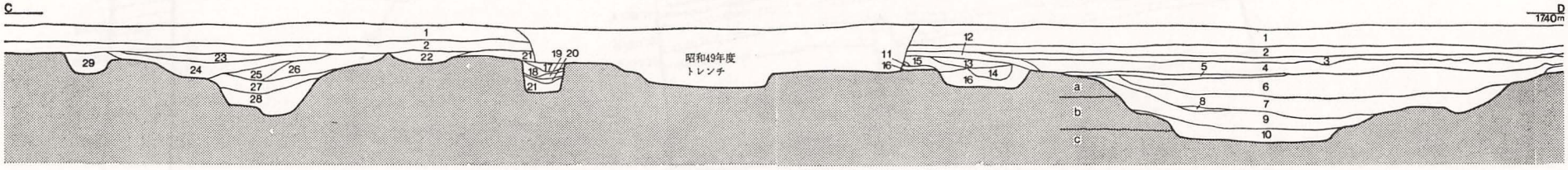


第14図昭　和55年度調査区全測図（1/250）



A-B土層説明

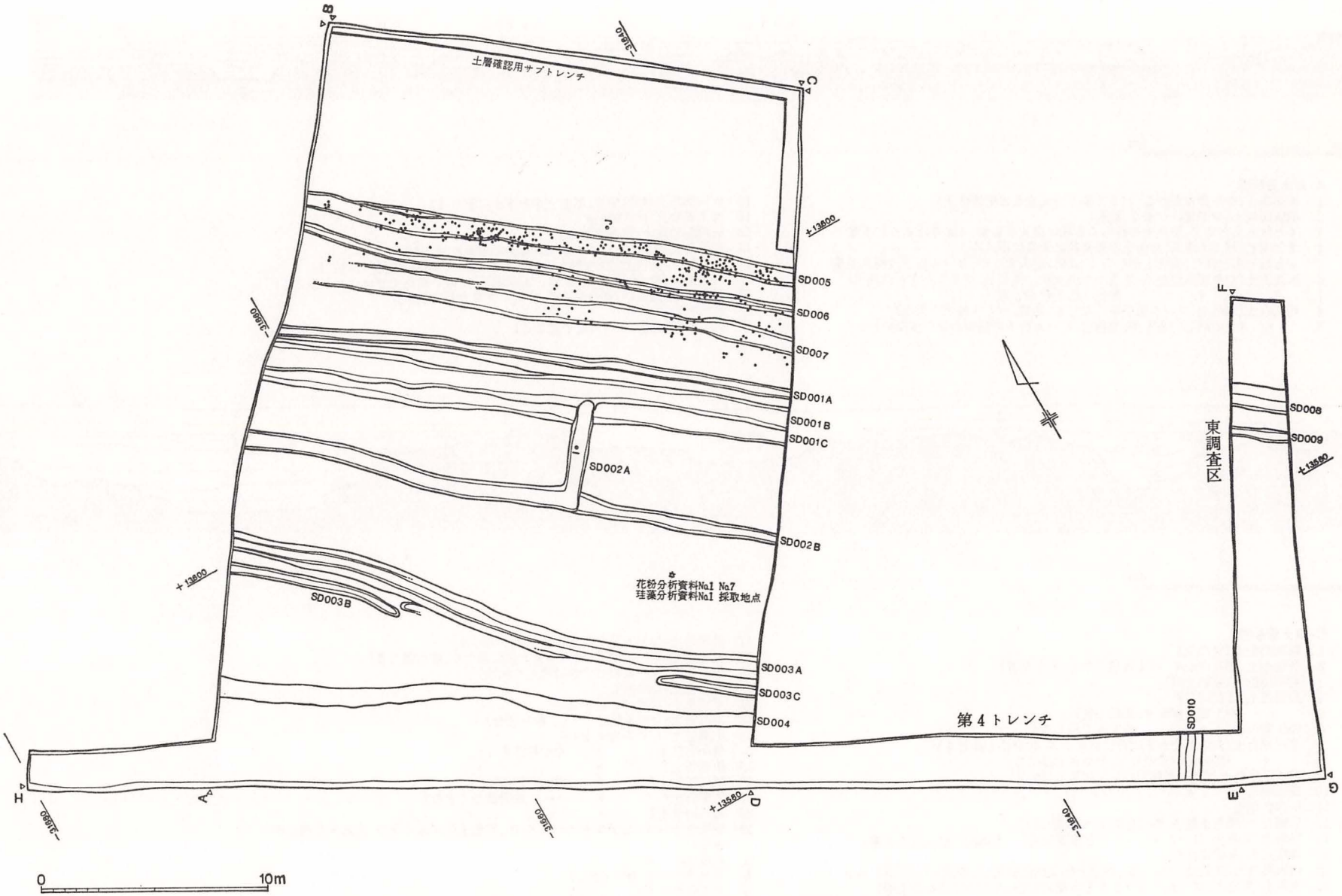
1　灰褐色土(やや青みがかる、パミス多く混入する水田耕作土)
2　明灰褐色土(やや青みがかり、粘質)
3　4とほとんど同じ、黒色土がむらくも状に混入するが、4よりはるかに少量
4　2と同じ パミス混入、黒色土が斑文状に大量に混じる
5　4とほとんど同じ、黒色土がむらくも状に混入するが、ローム粒子の混入多量
6　灰褐色土(やや青みがかる、黒色土が斑文状に混じる、パミスわずかに混入)
7　〃　(　〃　黒色土粒子が混じる)
8　暗灰色土(黒色土、ローム粒子多く混じる 粘質、パミスわずか含む)
9　〃　(8と同じであるが、黒色土、ローム粒子の量がかなり少ない)
10　青灰褐色土(粘性強く、黒色土がわずかに混じる)
11　青灰褐色土(粘性強い)
12　灰白色粘質土(青みがある)
13　青灰色土(粘性強い ロームブロックわずかに混じる)
14　黒褐色土(黒色土ブロックやローム粒子が多量に混じる、粘性強くパミス混じる)
15　白色粘土(やや灰色がかる ローム粒混じり、硬い黒色土ブロックが混じる)
16　褐色土(粘性強い ローム粒子、ブロックを大量に混入)
17　黄褐色土
18　褐色土(黒色土、ローム粒子混じる)



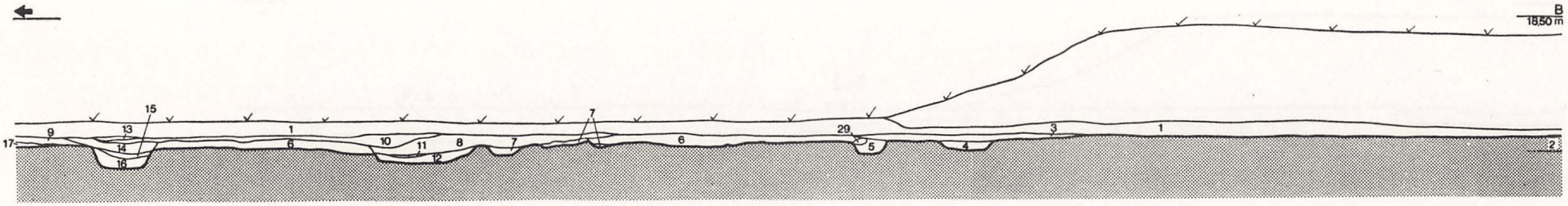
C-D土層説明

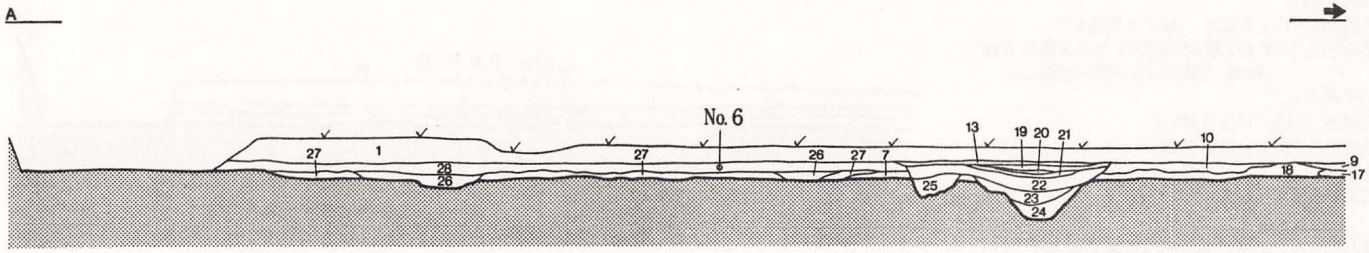
1　暗灰褐色土(耕作土)
2　灰褐色土(青みがかる パミス混入多く、やや粘質)
3　明灰褐色土(強粘土質)
4　灰褐色土(3に同じ)
5　〃　(やや青みがかり、強粘土質)
6　暗灰褐色土(　〃　砂が多く混じる)
7　青灰褐色土(白色粘土がまばらに散在する 砂が多く混じる)
8　〃　(黒色土粒子混じり、やや砂が混じる)
9　暗青灰褐色土(粘質 漸移的に下方程黒っぽい)
10　暗灰褐色土(　〃　〃　)
11　灰白色粘土
12　灰褐色土(黒色土粒子、砂混じり、パミス混じる)
13　褐色土(黒色土、ロームブロックなど多量に含む 人為的に盛られた土層)
14　黒褐色土(有機質含む)
15　暗灰褐色土(黒色土、ブロック、粒子を斑文状に混入し、砂混、パミス混じる)
16　褐色土(黒色土、ロームブロックなど多量に含む、人為的に埋めた土層)
17　黒褐色土(ローム粒とともに多量の砂混じる)
18　黄褐色土(ローム粒子、ブロック大量に混じり、砂も混じる)
19　黒褐色土(ローム粒わずかに混じり粘性)
20　黄褐色土(18に同じ)
21　黒褐色土(非常に粘性が強い)
22　黒褐色土(ローム粒子、パミス砂を含む)
23　明褐色土(パミス含まない)
24　明灰褐色土(　〃　やや粘性あり)
25　灰褐色土(　〃　〃　)
26　明灰褐色土(　〃　非常に粘性強い)
27　灰褐色土(　〃　〃　有機質多く含む)
28　暗灰褐色土(　〃　〃　〃　)
29　明褐色土(ロームブロック、パミス、砂、黒色土粒子多く含む、人為的な埋土がある)
a　黄褐色ローム
b　暗褐色ローム(硬くしまる)
c　黄灰色ローム(　〃　)

第15図　昭和55年度調査区土層断面図（1/100、A—B：西A調査区、C—D：西B調査区）



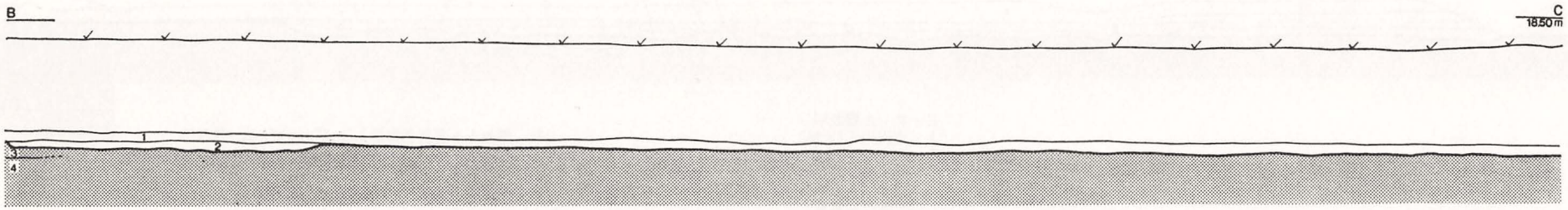
第16図　昭和59年度調査区（主調査区、東調査区）全測図（1/250）





A－B　土層説明

1　耕作土(水田床土)　　2　暗茶褐色土(ソフトローム)
3　暗灰褐色土(鉄分多く含む)
4　灰黒色土(埴輪片多く含む)
5　4と同じ　　6　暗灰色土
7　黒色土＋灰青色粘土
8　灰黒色土(7のブロックを多く含む)
9　暗茶褐色土　　10　暗灰色粘土
11　灰黒色土 ｝(粘性強し、11、12間に厚さ1cm位の灰青色
12　〃　　｝粘土層あり)
13　灰褐色土　　14　暗灰色土
15　黒色土　　16　暗灰色土(14より暗い)
17　7に同じ
18　6に同じであるが7のブロック含む
19　灰色粘土　　20　暗灰色粘土
21　灰色粘土　　22　暗灰色土
23　灰黒色土　　24　暗灰色土
25　灰黒色土　　26　暗灰色土
27　灰黒色土(7を主体とする)
28　暗灰色土(テフラ粒子含む)
29　ロームブロック

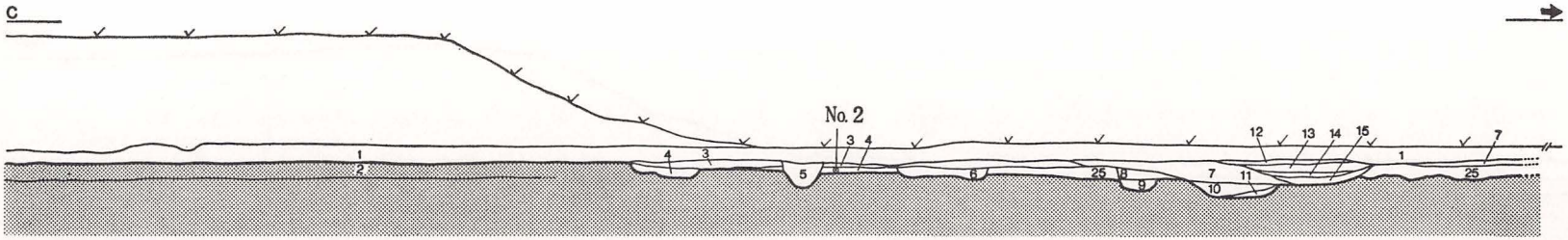


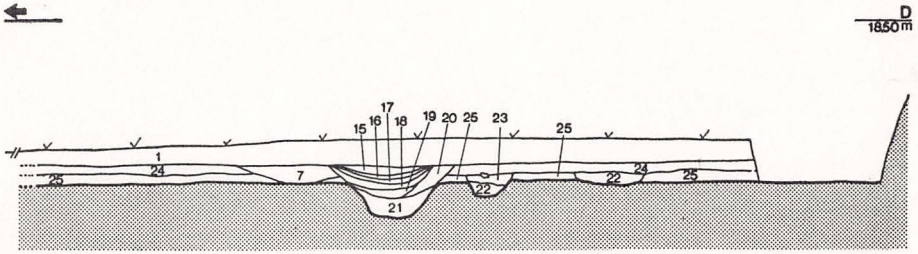
B－C　土層説明

1　耕作土（水田床土）
2　暗灰色土（鉄分沈澱、白色テフラ粒子含む）
3　暗茶褐色土（ソフトローム）
4　黄褐色ローム

0　　4m

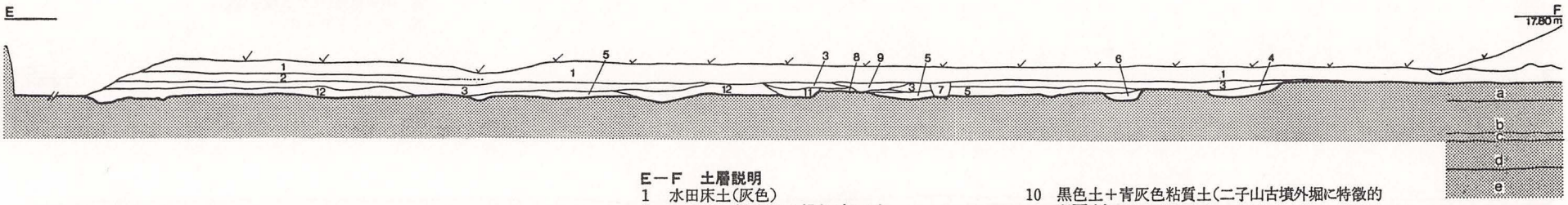
第17図　昭和59年度主調査区土層断面図（A－B、B－C、1/80、No.は花粉及び珪藻分析資料採取位置）





C－D　土層説明

1　耕作土(水田床土)
2　暗茶褐色土(ソフトローム)
3　暗灰色土(多量の鉄分粒子含む)
4　〃　(外堀のメイン覆土、埴輪片含む)
5　灰黒色土
6　〃　(ロームブロック含む、5とほぼ等質)
7　暗茶褐色土(多量のロームブロック、粒子含む)
8　〃　(7より若干色調暗く、ロームブロックが大きい)
9　灰黒色土(ロームブロックと25に含まれる青灰色粘土ブロック含む)
10　灰黒色土
11　黒色土
12　暗灰褐色土
13　灰色粘土
14　暗灰色粘土
15　灰黒色土(10、11にちかい)
16　暗灰色粘土
17　灰色粘土(15より暗く、16より明るい)
18　暗灰色土 } (この2層間に暗いクリーム色の5㎜厚の粘土層があり分層粘性強し)
19　〃 }
20　暗茶褐色土
21　暗灰色土(18、19より暗い)
22　暗灰色土(24より暗い色調、ロームブロック含む)
23　暗黒色土
24　暗灰色土(ロームブロック粒子、25のブロック少量混合)
25　暗灰色土(二子山古墳外堀に特徴的な土層で、灰青色粘土ブロック含む)



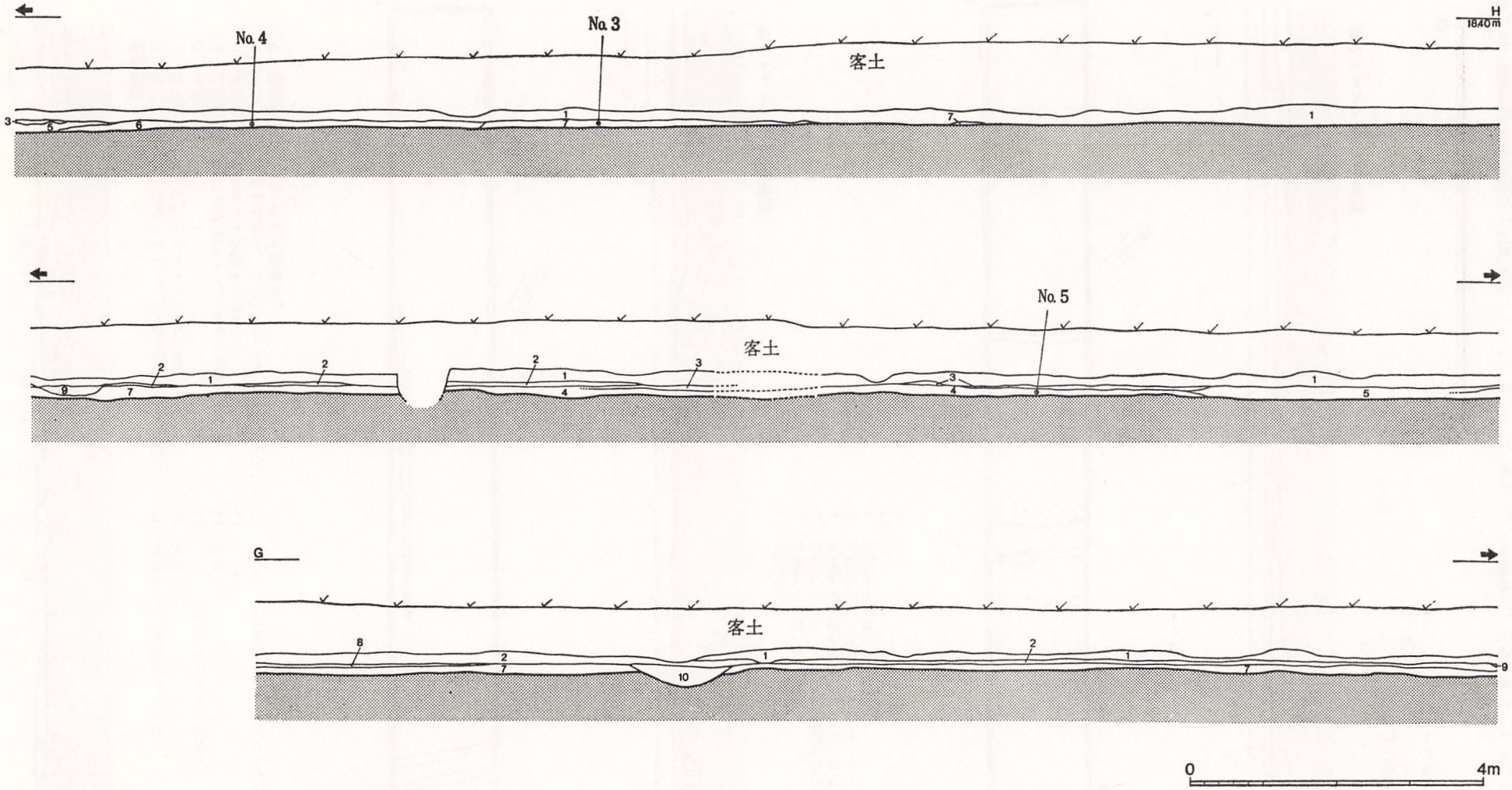
E－F　土層説明

1　水田床土(灰色)
2　〃　(1にやや褐色がかる)
3　暗灰色、暗黒褐色土(5㎜大の鉄分ブロックが目立つ　ローム粒子、テフラをわずかに含む　部分的には焦茶)
4　灰黒色土
5　暗灰色土(色調は3より暗く、4より明るい)
6　灰黒色土(4に酷似　4より粘性強い)
7　灰黒色土
8　黄褐色土(ロームブロックを主体とする)
9　暗茶褐色(ロームブロックを多く含む)
10　黒色土＋青灰色粘質土(二子山古墳外堀に特徴的な覆土)
11　暗灰色土
12　灰黒色土(ロームブロック、粒子顕著)

a　暗茶褐色土(焦茶で軟質)
b　黄褐色土(軟質)
c　黄褐色土(硬質)
d　暗黄褐色土(硬質)
e　暗いクリーム色土(粘質、軟質)

0　4m

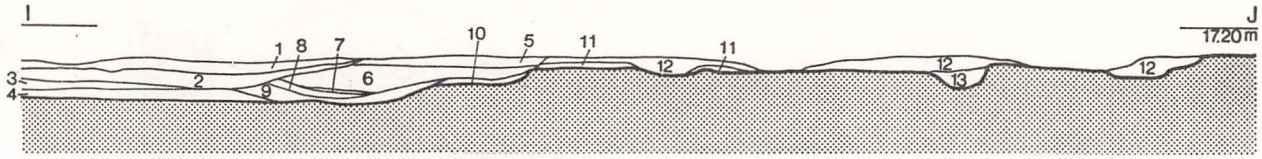
第18図　昭和59年度主調査区土層断面図（C－D）及び東調査区土層断面図（1/80、No.は花粉及び珪藻分析資料採取位置）



H-G 土層説明

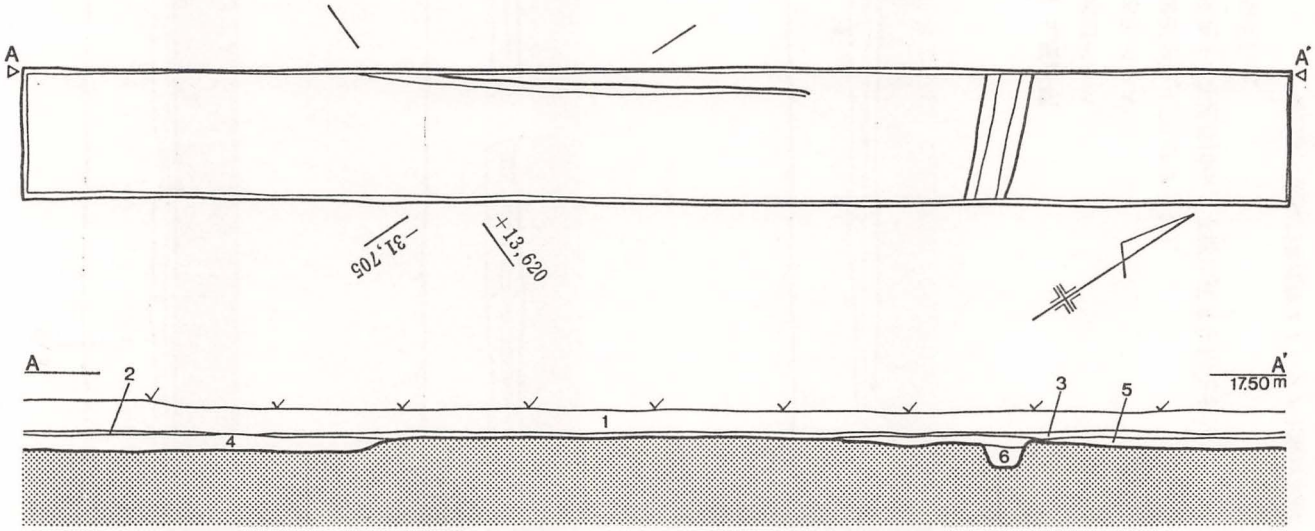
1　水田ベース
2　水田ベース
3　暗灰褐色土(テフラ含む)
4　黒色土(最層厚10cm、下部に灰青色粘土含む)
5　暗灰色土
6　暗灰色土(4のブロックを多く含む)
7　〃　(ローム粒子含む)
8　暗茶褐色土(鉄分多く含む)
9　暗灰色(灰青色粘土ブロックを多くまだらに含む)
10　〃　(粘性強し)

第19図　昭和59年度第4トレンチ土層断面図(1/80、No.は花粉、珪藻分析資料採取位置)



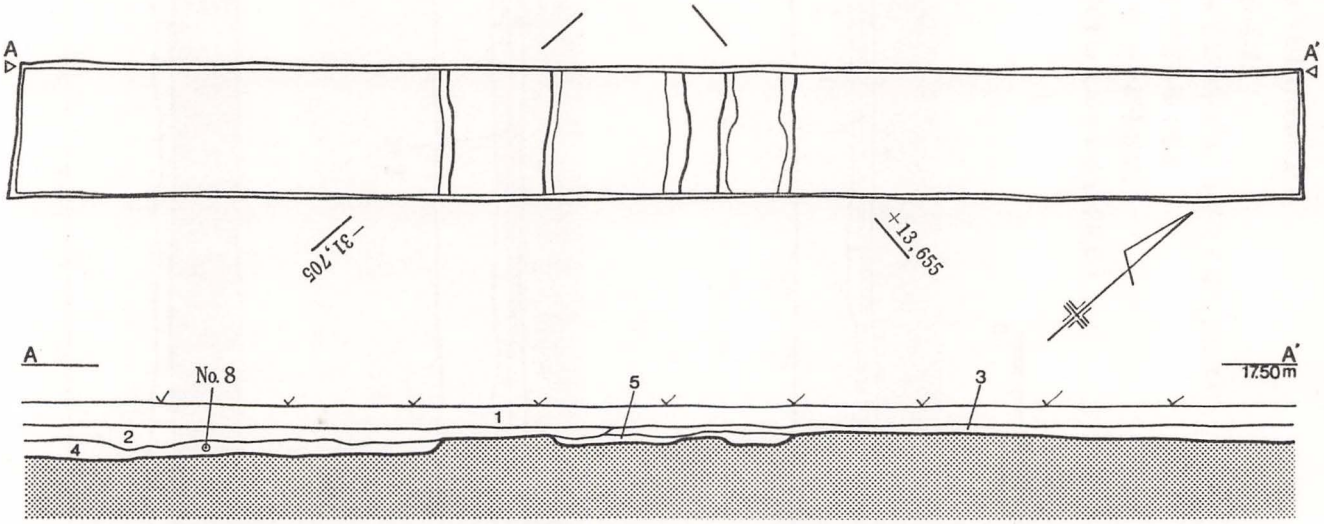
主調査区土層断面(I-J)

1　青灰色粘土(2との接面上1cmに2～3mmの薄い炭化物層あり)
2　暗灰色粘土(黄灰色粘土ブロックをわずかに含む)
3　灰黒色粘土
4　灰黒色土(0.5～1cm大のロームブロック多量に含む)
5　灰褐色土(多量のローム微粒子を含む)
6　〃　(5よりも大きい、1cm大のロームブロックを含む)
7　暗灰色土(うすい灰色粘土層あり)
8　黄褐色土(二次堆積ローム層)
9　灰黒色土
10　〃　(12のブロックを含む)
11　暗灰色土
12　〃
13　〃　(暗黄褐色、ソフトロームブロックを多く含む)



第1トレンチ及び土層断面

1　水田耕作土
2　黄褐色土(鉄分沈澱層)
3　暗灰色土(ローム粒子、白色テフラ含む)
4　灰黒色土(層上半に多量のテフラ含む)
5　灰褐色土(ローム粒子、チョコレート色のブロック含む)
6　暗灰色土(粘性あり)
7　〃

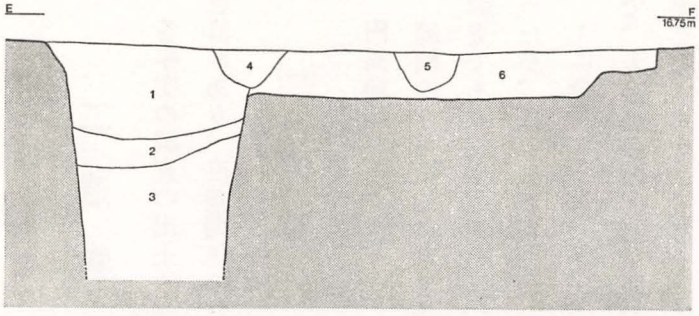


第2トレンチ及び土層断面

1　水田耕作土
2　灰褐色土(鉄分を多量に含む)
3　暗灰色土(　〃　2と同質)
4　〃　(ロームブロックを含む)
5　〃

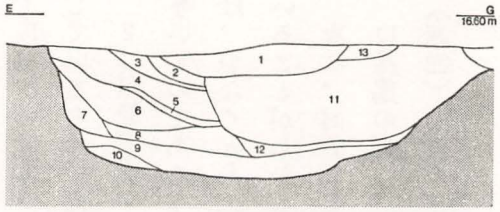
0　4m

第20図　昭和59年度主調査区土層断面図(I－J)及び第1、第2トレンチ実測図、土層断面図(1/60、No.は花粉分析資料採取位置)



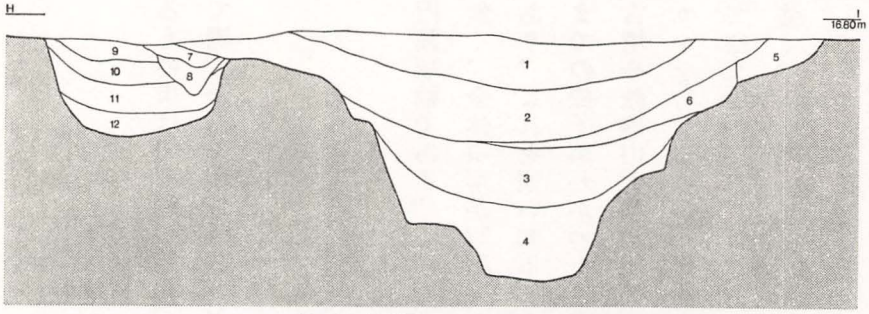
E—F　土層説明

1　褐色粘質土(少量のローム粒子を含む)
2　暗褐色粘質土(ローム粒子を多く含み、鉄分の含有が多い)
3　暗青黒褐色粘土(有機質を多く含む)
4　褐色粘質土(1よりやや大粒のローム粒子を含む)
5　暗褐色粘質土(4に類似)
6　褐色粘質土(大形のロームブロックが散在する　5の左右でブロックの含有はやや異なる)



E—G　土層説明

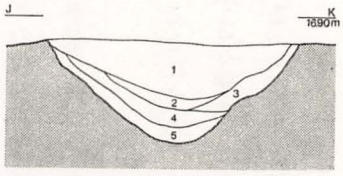
1　黒褐色土（ローム粒子を微量に含む）
2　〃　（1よりローム粒子の含有が多い、ローム土も含みやや黄色味を帯びる）
3　黒色土（有機質の炭化物を主とし、若干の暗褐色土が混入）
4　暗褐色土（ロームブロックを少量含む）
5　〃　（有機質の炭化物を多量に含み、部分的に黒色）
6　黄褐色粘質土（多量の大形ローム粒子を含む）
7　黄褐色土（ロームブロックに若干の暗褐色土が混じる）
8　暗青灰色粘土（混入物の少ない比較的良質の粘土）
9　〃　（ロームブロックを散在させ、やや褐色を帯びる）
10　黄褐色土（ロームブロックを主体に暗褐色土を含む）
11　〃　（大形のロームブロック中に少量の白色、暗青灰色粘土ブロックが混在　人為的埋め立てと考えられる）
12　黒色土（炭化物）
13　黒褐色土（2よりややローム粒子が多い）



H—I　土層説明

1　灰色粘質土(暗褐色粒子を多く含む)
2　灰色粘土(鉄分が多い)
3　暗灰色粘土
4　黒灰色粘土(有機質を含有する)
5　黄斑暗褐色土(暗褐色粒子とローム粒子を多く含む)
6　灰色粘土(2より鉄分が少ない)
7　褐色土(1に類似し、ローム土を少量含む)
8　明褐色土(ローム土のブロックをむら雲状に含む)
9　暗褐色土(1に類似する)
10　褐色土(1の土にやや大粒のロームが混入)
11　暗褐色土(1に含まれる褐色粒子を多量に含む)
12　褐色土(10に類似し、ローム土の含有が多い)

0　1m



J—K　土層説明

1　暗灰褐色土（ハードロームのやや不揃いな粒子を含む）
2　暗灰褐色粘質土（1より粘性が強く、ローム粒子は細かい）
3　灰褐色粘質土（1、2よりローム粒子の含有が多い）
4　暗灰褐色粘質土（大形のロームブロックを含む粘性の強い土）
5　〃　（ローム粒子の粒が大きく、含有量も多い）

第21図　昭和55年度調査区土壙及び溝土層断面図（1/30）

図版30説明

	花粉・胞子化石名	試料番号
1a	*Abies*	1
1b	*Abies*	1
2	*Tsuga*	5
3	*Cryptomeria*	3
4	*Carpinus-Ostrya*	1
5	*Alnus*	5
6	*Fagus*	5
7a	*Qvercus* subgen. *Lepidobalamus*	5
7b	*Qvercus* subgen. *Lepidobalamus*	5
8	*Qvercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	5
9	*Zelkova*	2
10	*Zelkova*	4
11	*Typha*	5
12	*Gramineae*	4
13	*Cyperaceae*	5
14	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	4
15	Chenopodiceae	1
16	*Thalictrum*	2
17	Monolete spore	5

	珪藻化石種名	試料番号
1	*Cymbella ventricosa* Kützing	2
2	C. *ventricosa* Kützing	1
3	*Eunotia praerupta* var *inflata* Grunow	2
4	*E. fallax* A. Cleve	2
5	*E. lvnaris* (Ehr.) Grunow	1
6	*E.* sp. a	1
7	*E.* cf. *mondon* var *asiatica* Skvortzow	1
8	*E.* cf. *mondon* var. *asiatica* Skvortzow	1
9	*Gomphonema acuminatum* var. *turris* (Ehr.) Cleve	2
10	*G. acuminatum* Ehrenberg	2
11	*Tabellaria fenestrata* (Lyngbye.) Kützing	1
12	*Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow	2
13	*Pinnularia gibba* Ehrenberg	1
14	*Rhopalodia gibberula* (Ehr.) O. Muller	2
15	*R. gibberula* (Ehr.) O. Muller	2
16	*Nitzschia palea* (Kütz.) W. Smith	1
17	*N. parvula* Levis	2

二　遺物

各年度の調査の出土遺物で古墳に係るものでは、各種の埴輪、土師器、須恵器があり、直接関係のない遺物として縄文土器や中世陶器などがあった。

(一)　埴輪

円筒埴輪

埴輪のうち量的に最も多かったのが円筒埴輪である。各年度とも周堀内の調査であり、原位置を保つものは全く無く、全体の形が判明したものもなかったが、ある程度形態のわかるものがあり、これを窺い知ることはできる。

1は全周はしないが、上から6段目までの様子がわかった。埼玉古墳群内で、大形の多段円筒埴輪を持つ稲荷山古墳や鉄砲山古墳の円筒埴輪は、底部側二段にスカシがなく、第三段目にスカシを有するのが一般的と考えられる。二子山古墳の埴輪にも、このことがあてはまるのであれば、この1の埴輪は七段構成の六本タガを有する可能性が強く、4についても、1と直径が近似しているので、同様の形態となろう。

2は口縁部径が五〇㌢と、1、4と比べ更に大形であり、段、タガとも多いものであろう。このほか49、68などの朝顔形円筒埴輪もあり、円筒埴輪は、少なくとも二種類以上の大きさの普通円筒と、朝顔形円筒で構成されていることがわかる。

次に、円筒の各部についてみていくことにする。

口縁部の形態、外方に湾曲、又は小さく屈曲して開き、その先端には面（端面）を作り出すのを原則としている。この端面は、平坦なもの、やや凹むもの、その両端の角が取れ丸味を持つものとあるが、この部分を仕上げるときの拇指、中指によるヨコナデのバリエーションであろう。（このヨコナデの仕上げに例外はないので観察表では記述を省いた。）

底部は自重を支えるため、やや肥厚気味に作られるが、その底面には、禾本科植物の茎と思われる棒状の圧痕が残されのが一般的である。

また、内外にオサエ、ケズリ等、二次調整を施すものはない。なお、底部の比較的低い位置にタガの付けられるもの（84、87等）がある。

タガの形状は、やや偏平なM字、もしくは台形を基本とするが、その中間的なもの、あるいはごく偏平なものもある。粘土紐を貼り、拇指、人差指、中指でヨコナデして仕上げるものと考えられるが、総じてやや粗雑な作りのものが目立つ。（各実測図のセクション細線間がヨコナデの範囲。）

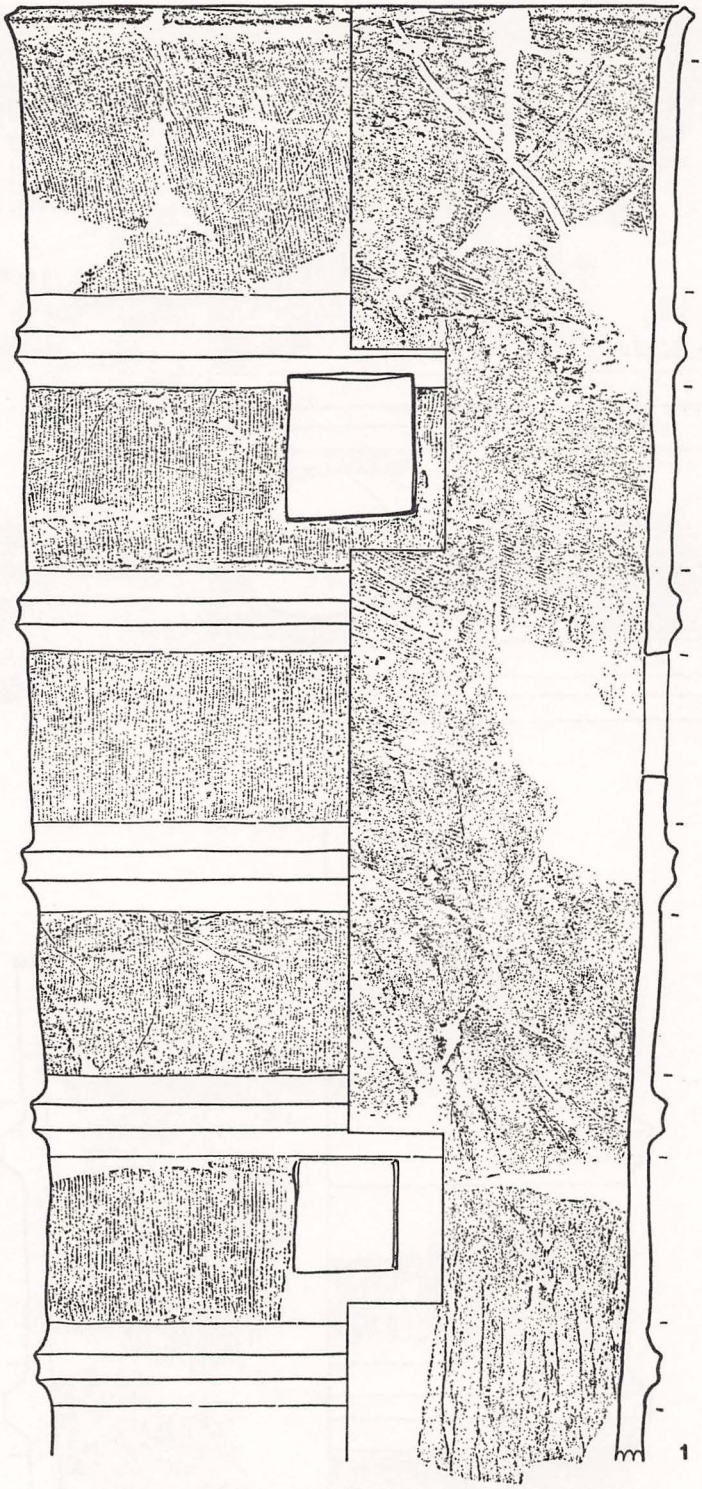
スカシについては、円形を主体とするが、方形及び半円形のものも客体的だが、かなり確認できる。方形のスカシを有するのは1のように橙色を呈するものに多く認められる。

製作技法としては、まず外面の調整が、タテハケメのみにより仕上げられており、ヨコハケメの認められるものはなかった。内面はナデ及びハケメによるが、各個体により、その用いられ方に差がある。

円筒埴輪の一部にはいわゆる「窯印」の認められるものがあった。いずれも口縁部段であり、その内外いずれの場合もある。焼成前にヘラ先で陰刻されており、「メ」（1など）、「ᗡ」（213）、「ᗰ」（2）が確認できたが、数量的には「メ」が最も多いものと思われる。

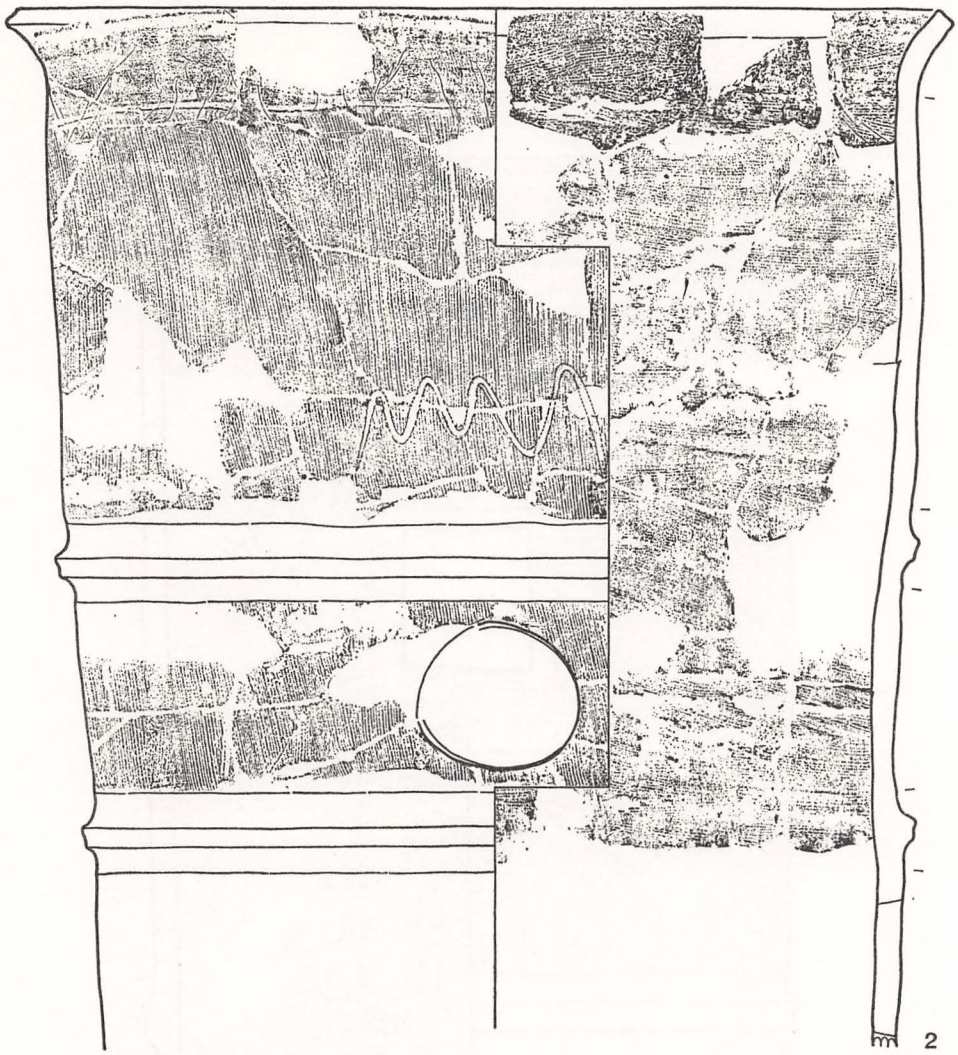
形象埴輪

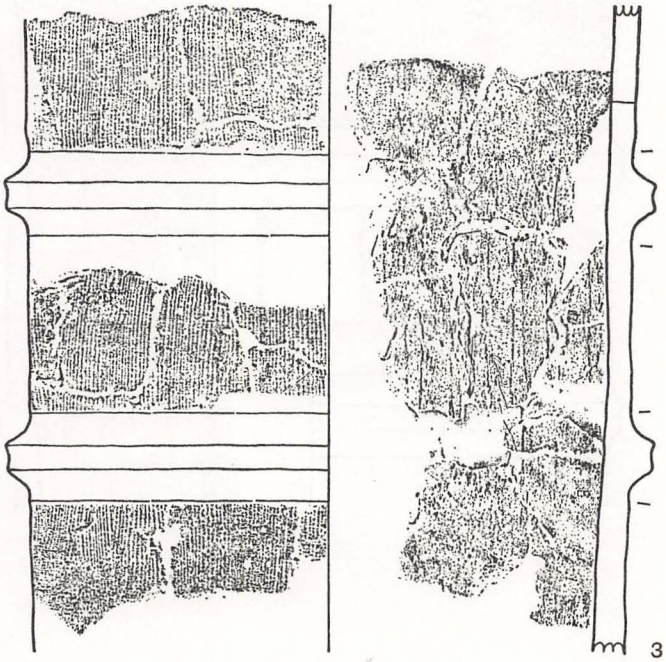
数量的には少ない。器材埴輪は、蓋（88、188）、盾（90、187、189）、靫（185）



0 20cm

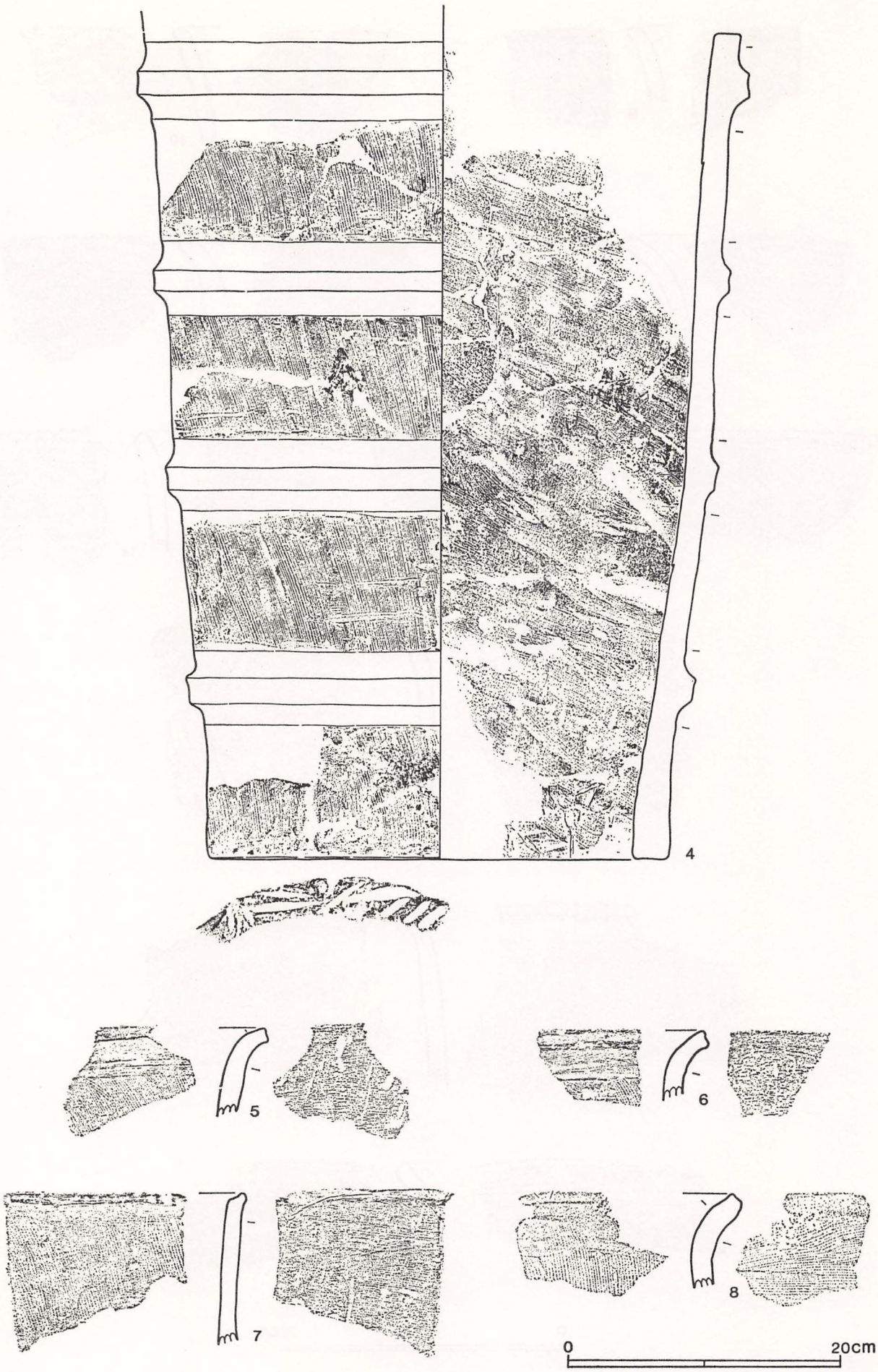
第22図　昭和42年度調査出土埴輪実測図　(1)



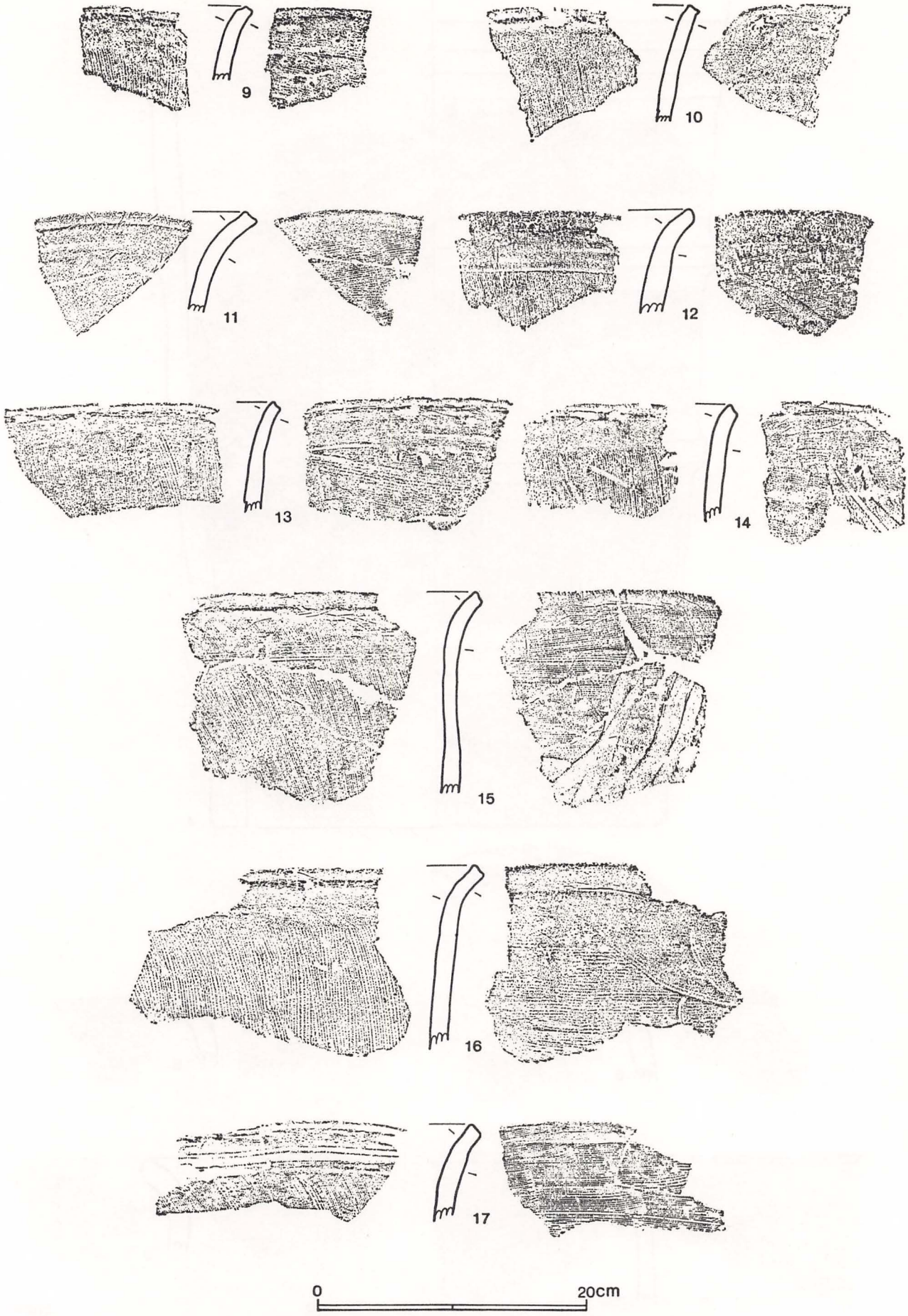


0　　20cm

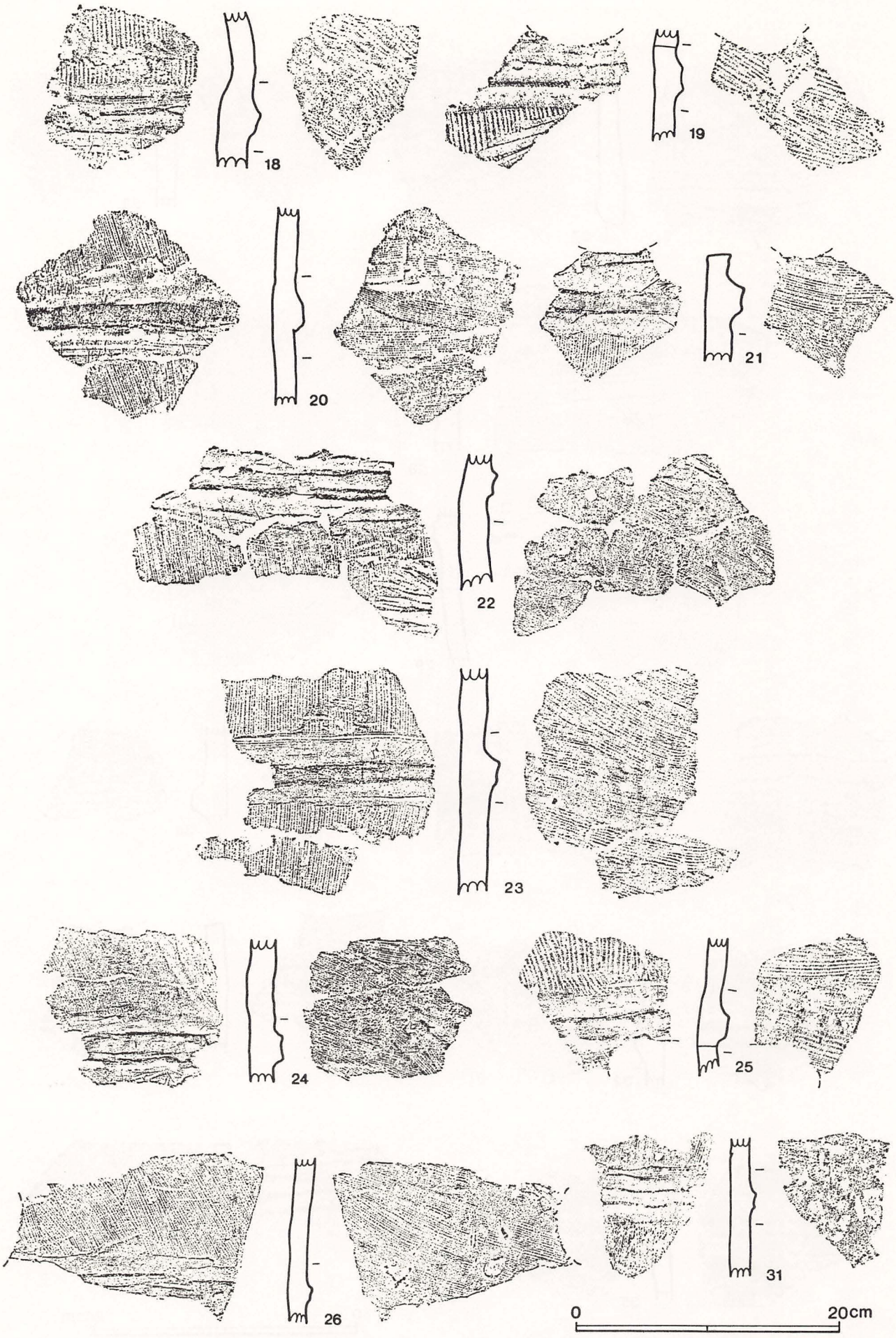
第23図　昭和42年度調査出土埴輪実測図　（2、3）



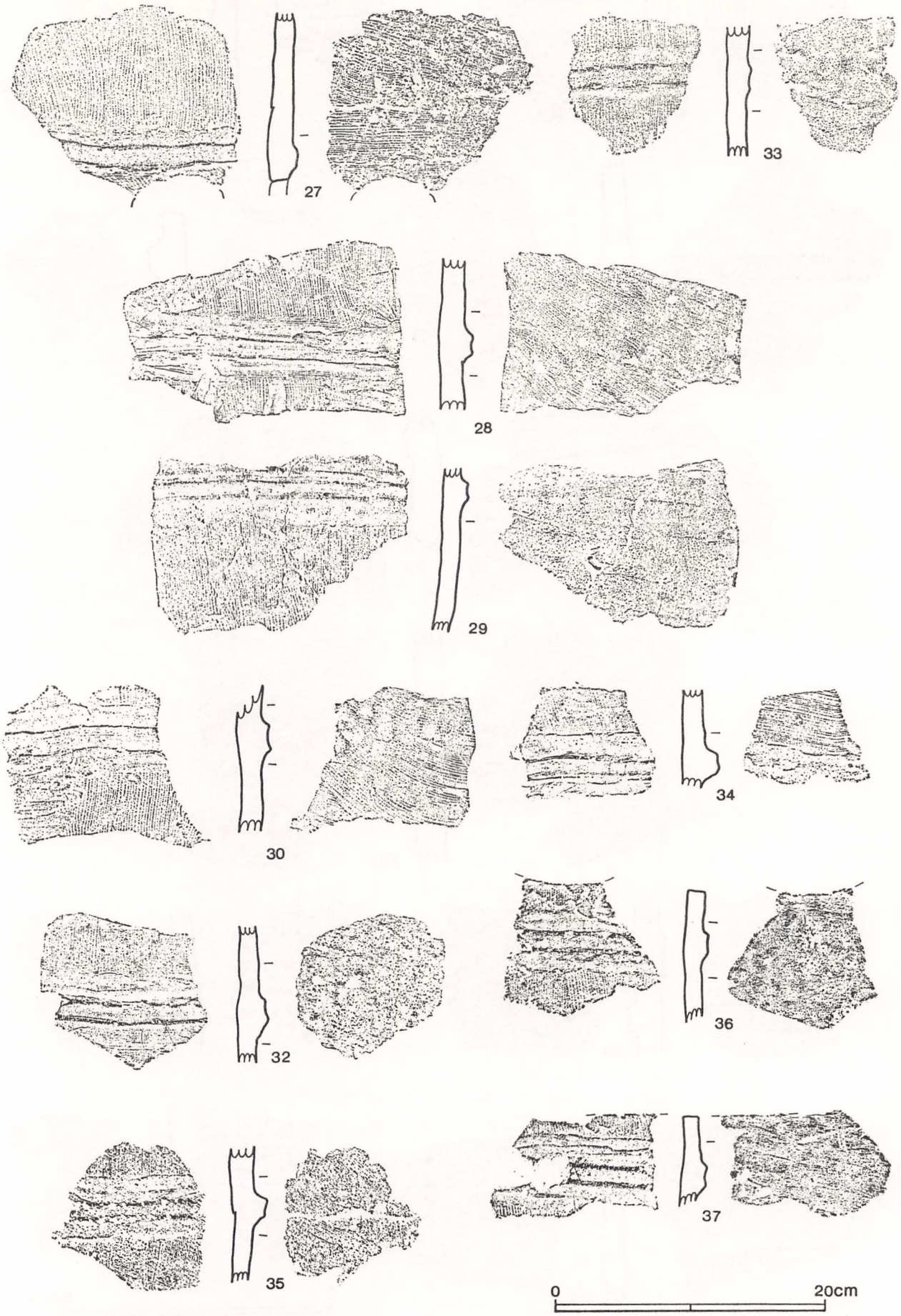
第24図　昭和42年度調査出土埴輪実測図　（4～8）



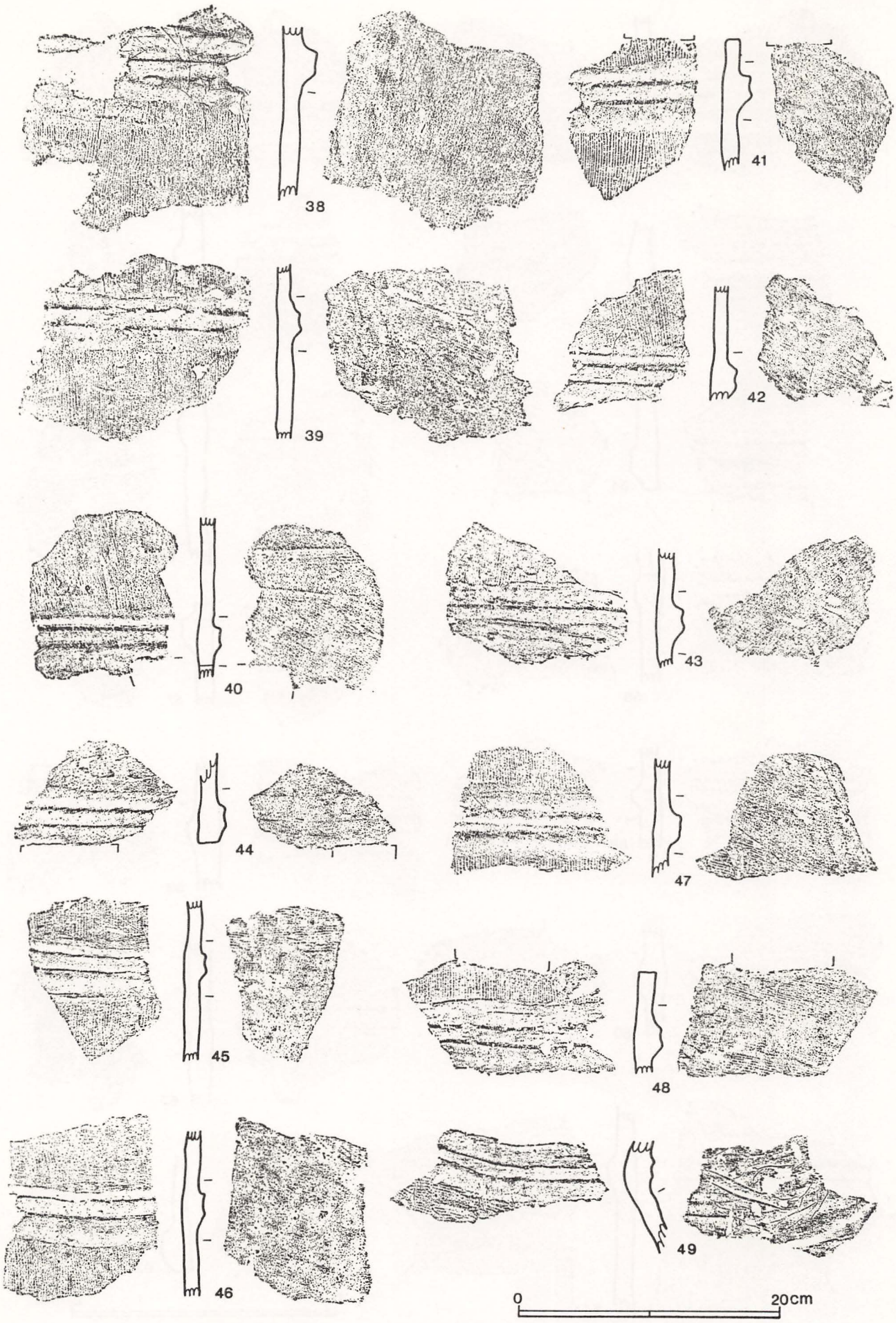
第25図　昭和42年度調査出土埴輪実測図　(9～17)



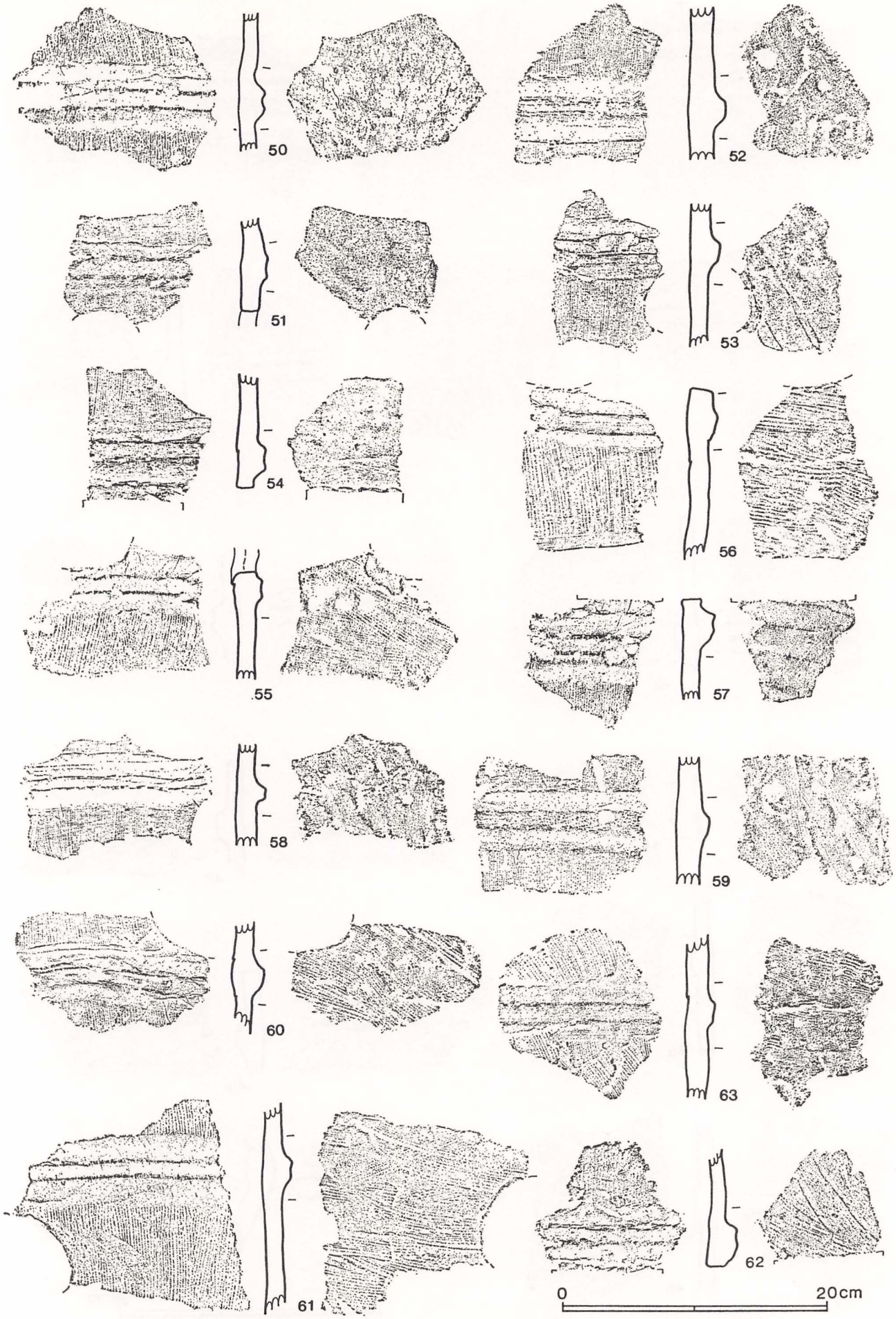
第26図　昭和42年度調査出土埴輪実測図　（18～26、31）



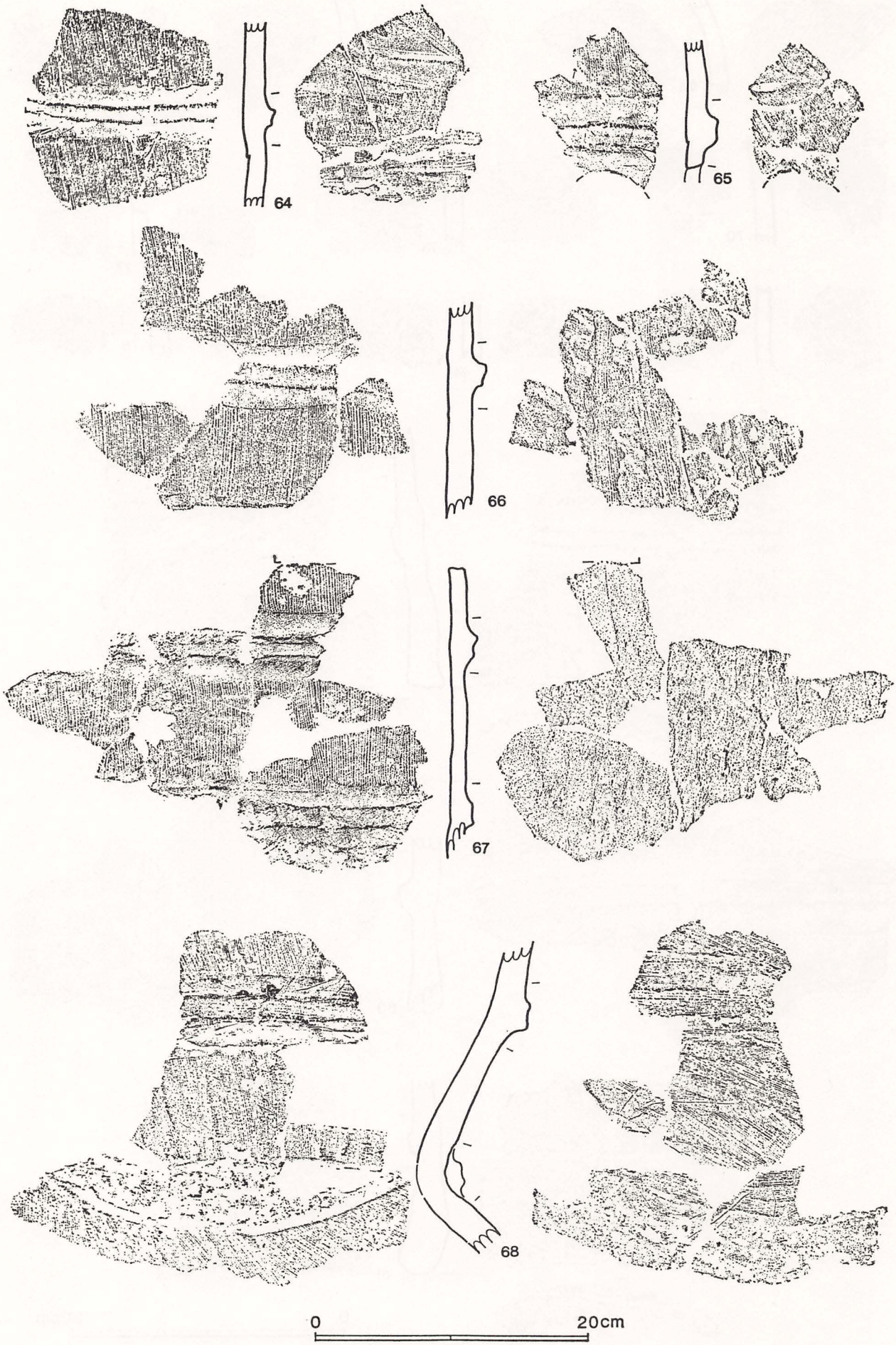
第27図　昭和42年度調査出土埴輪実測図　（27～30、32～37）



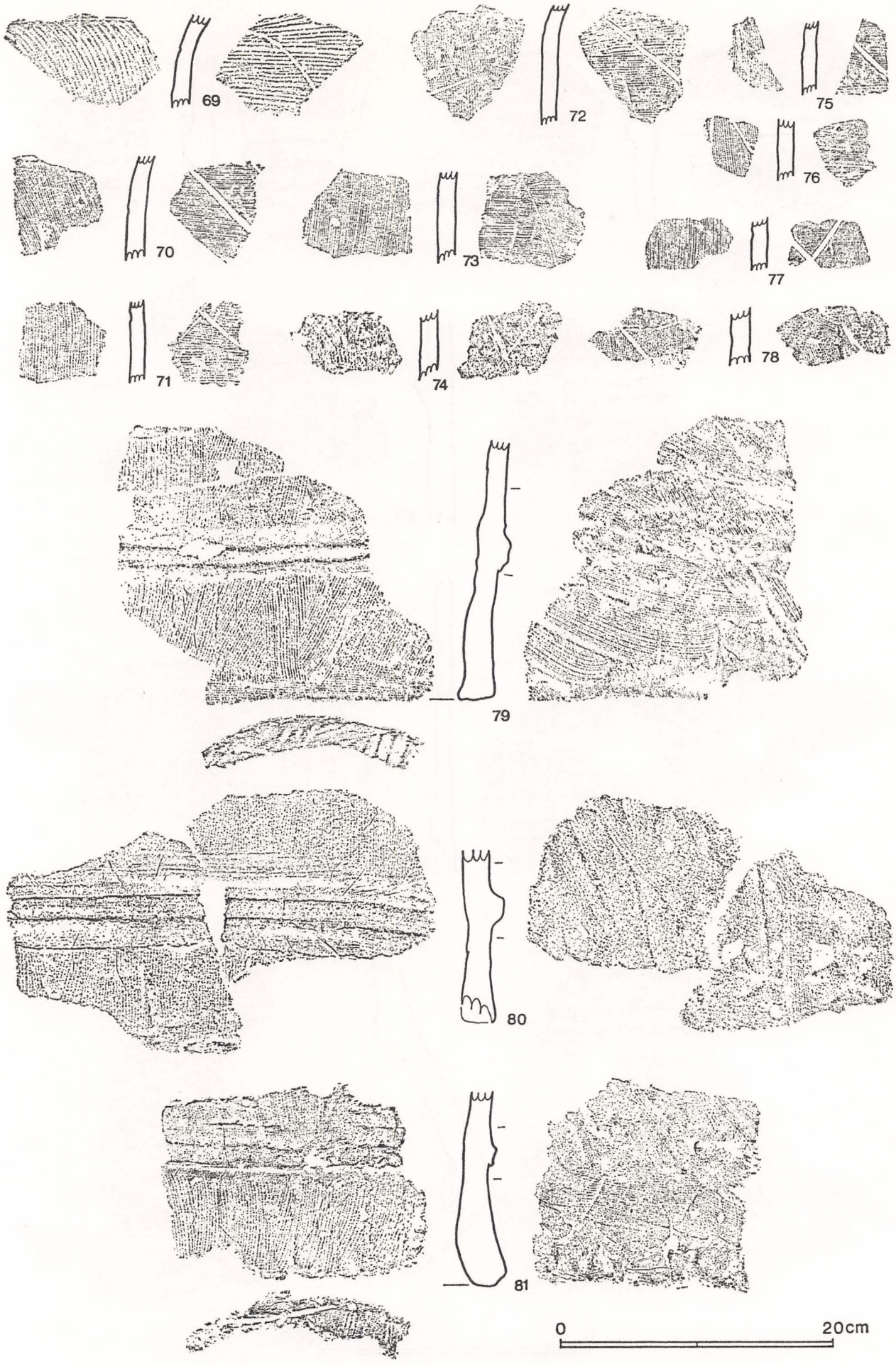
第28図　昭和42年度調査出土埴輪実測図　(38～49)



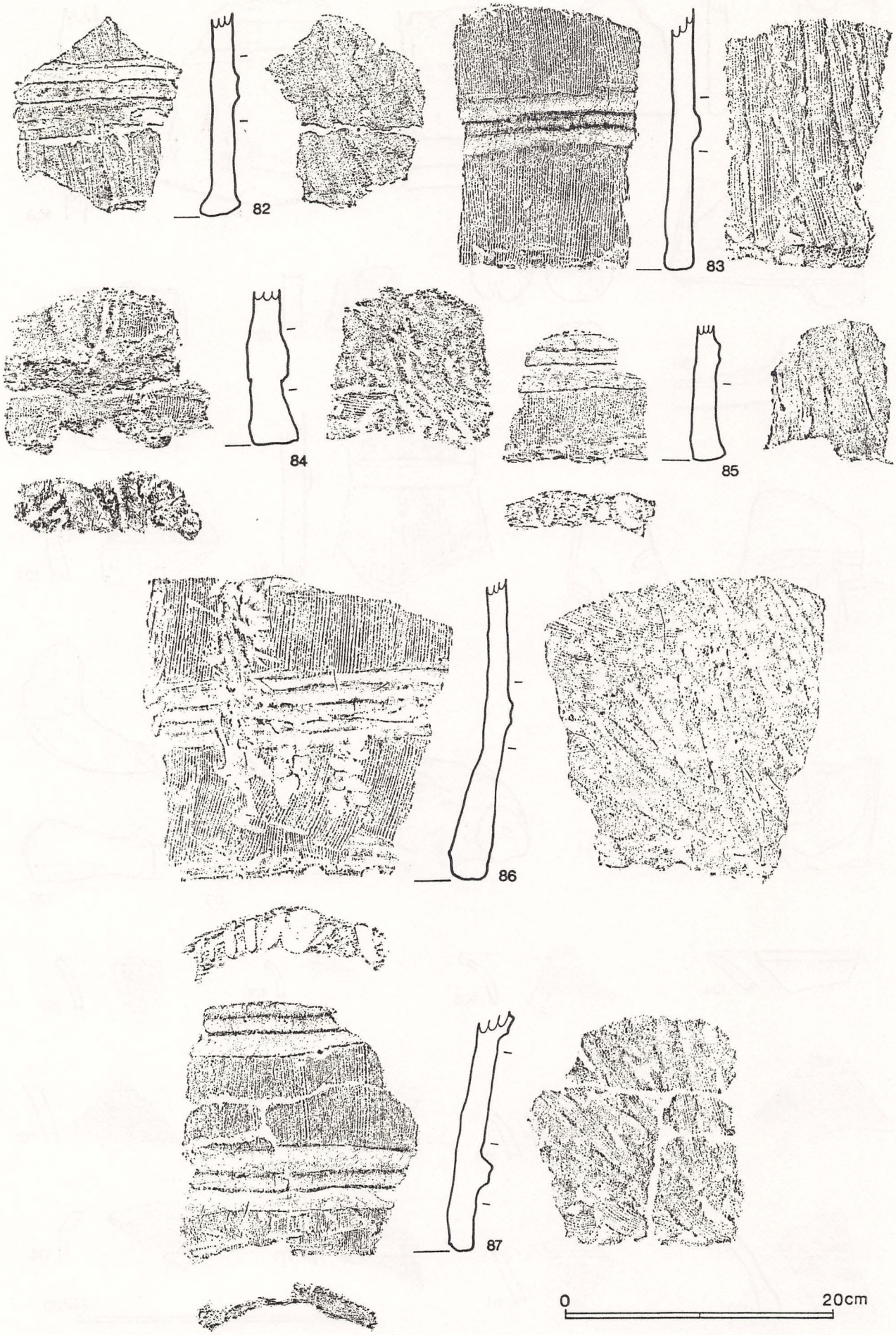
第29図　昭和42年度調査出土埴輪実測図　（50～63）



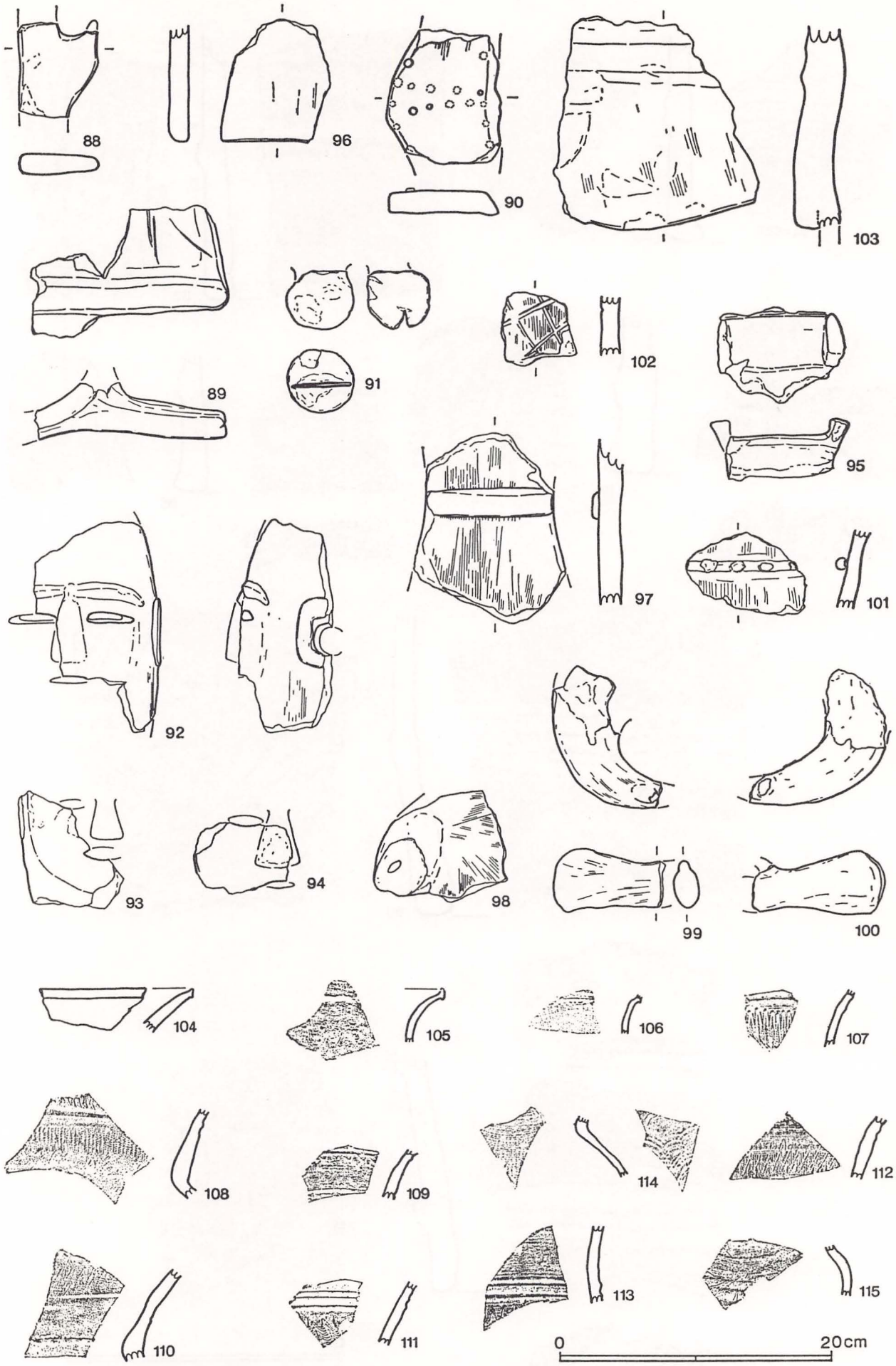
第30図　昭和42年度調査出土埴輪実測図　（64～68）



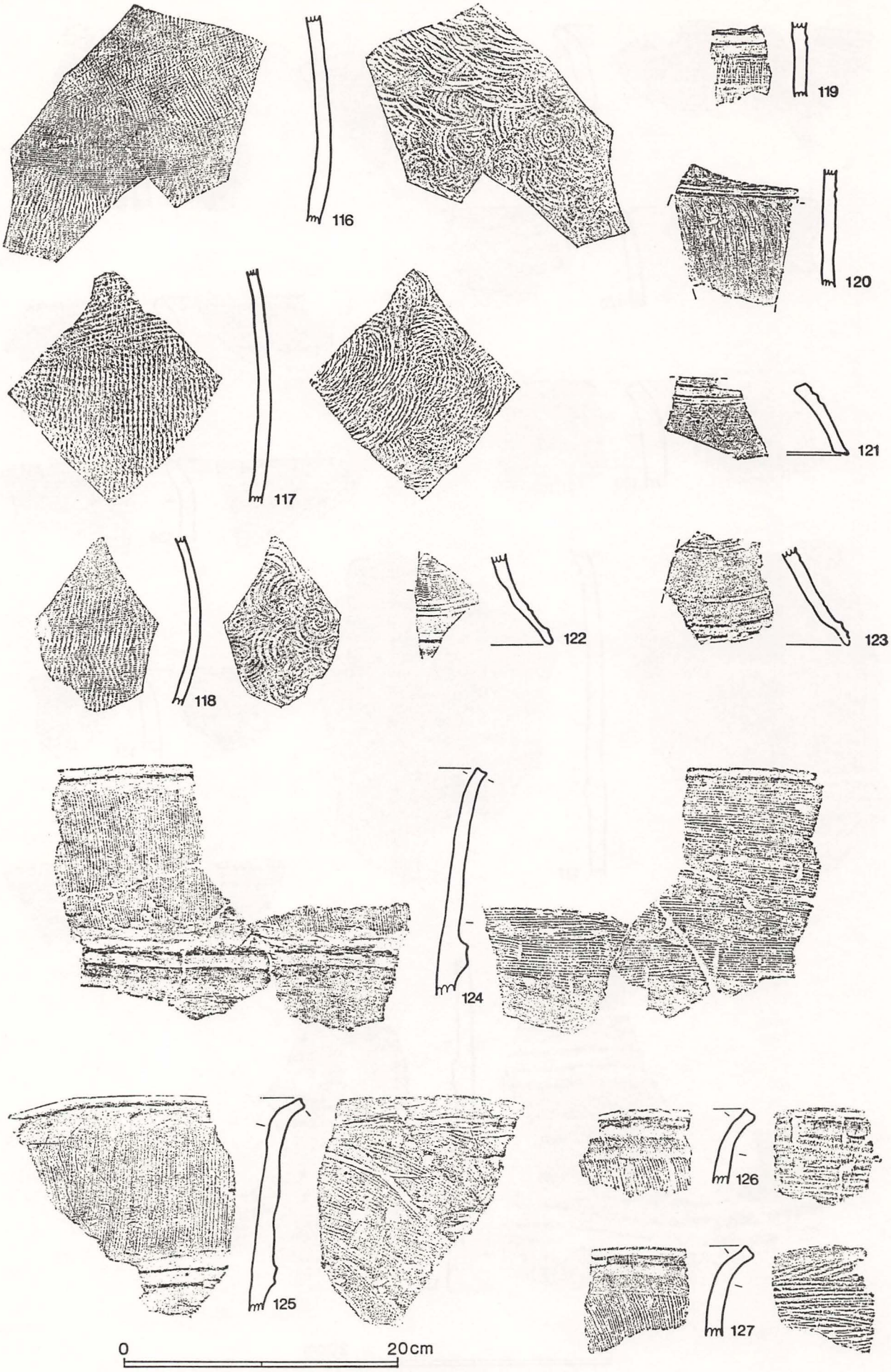
第31図　昭和42年度調査出土埴輪実測図　（69～81）



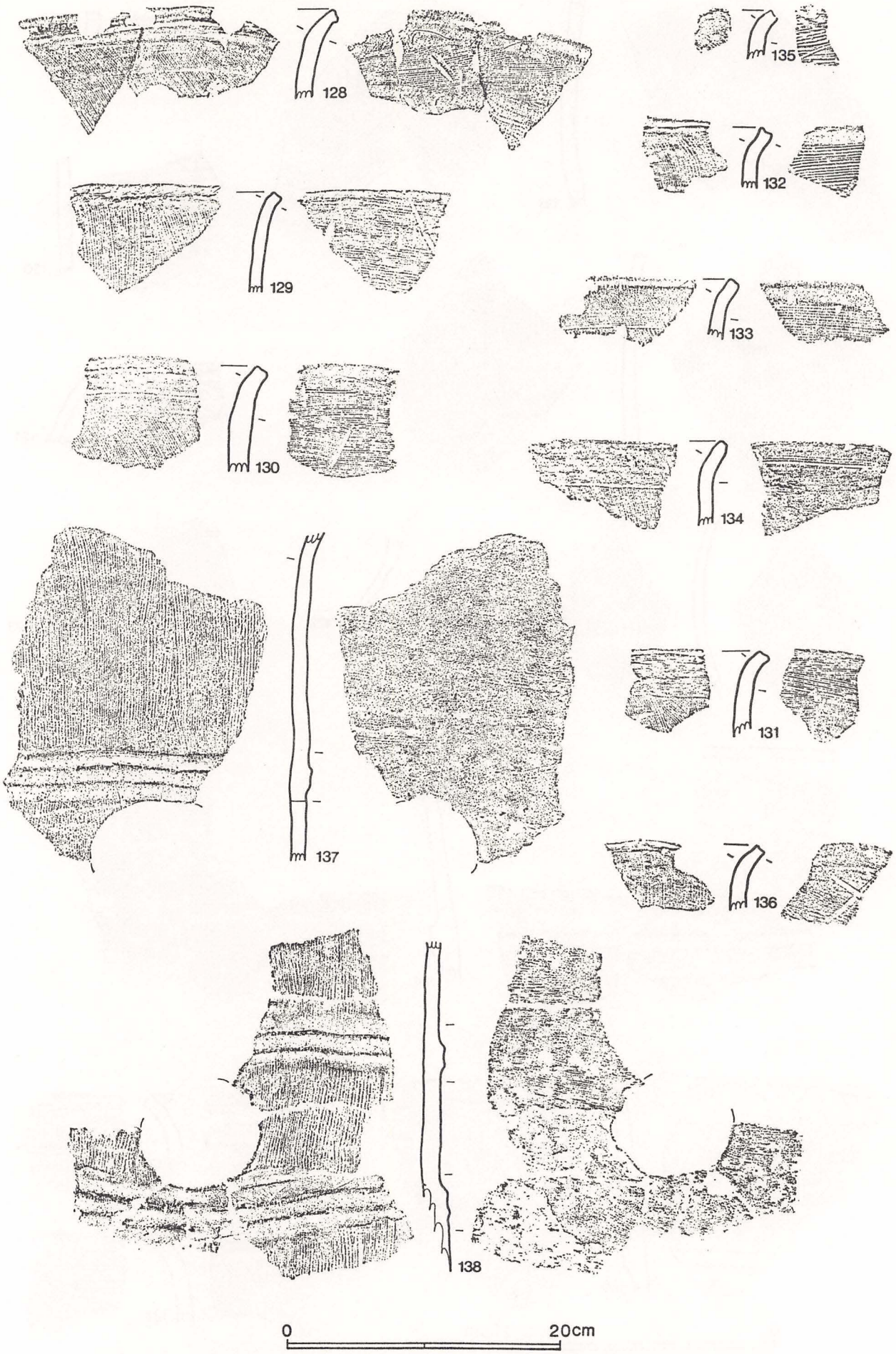
第32図　昭和42年度調査出土埴輪実測図　（82～87）



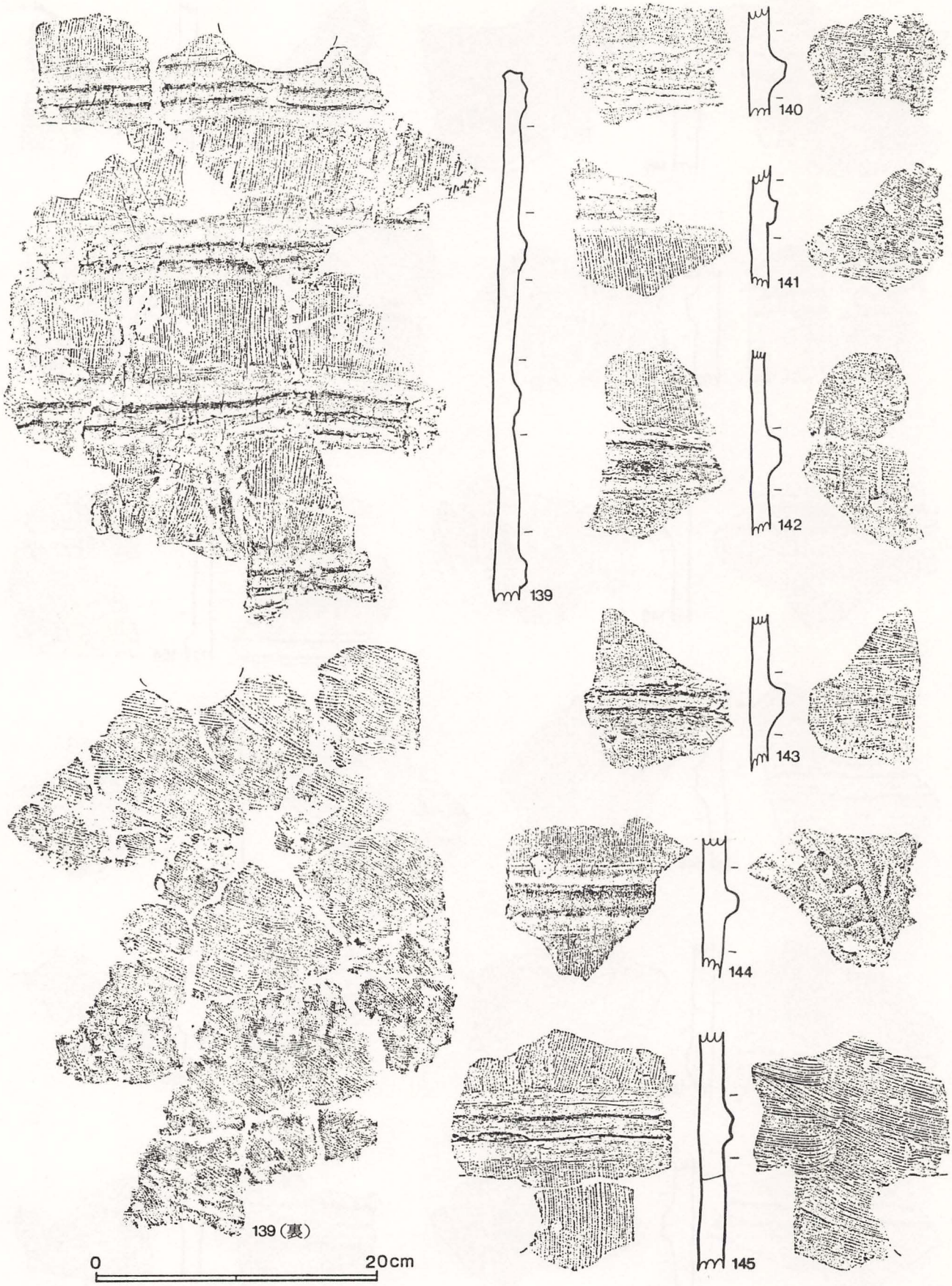
第33図　昭和42年度調査出土埴輪及び土師器、須恵器実測図　(88～115)



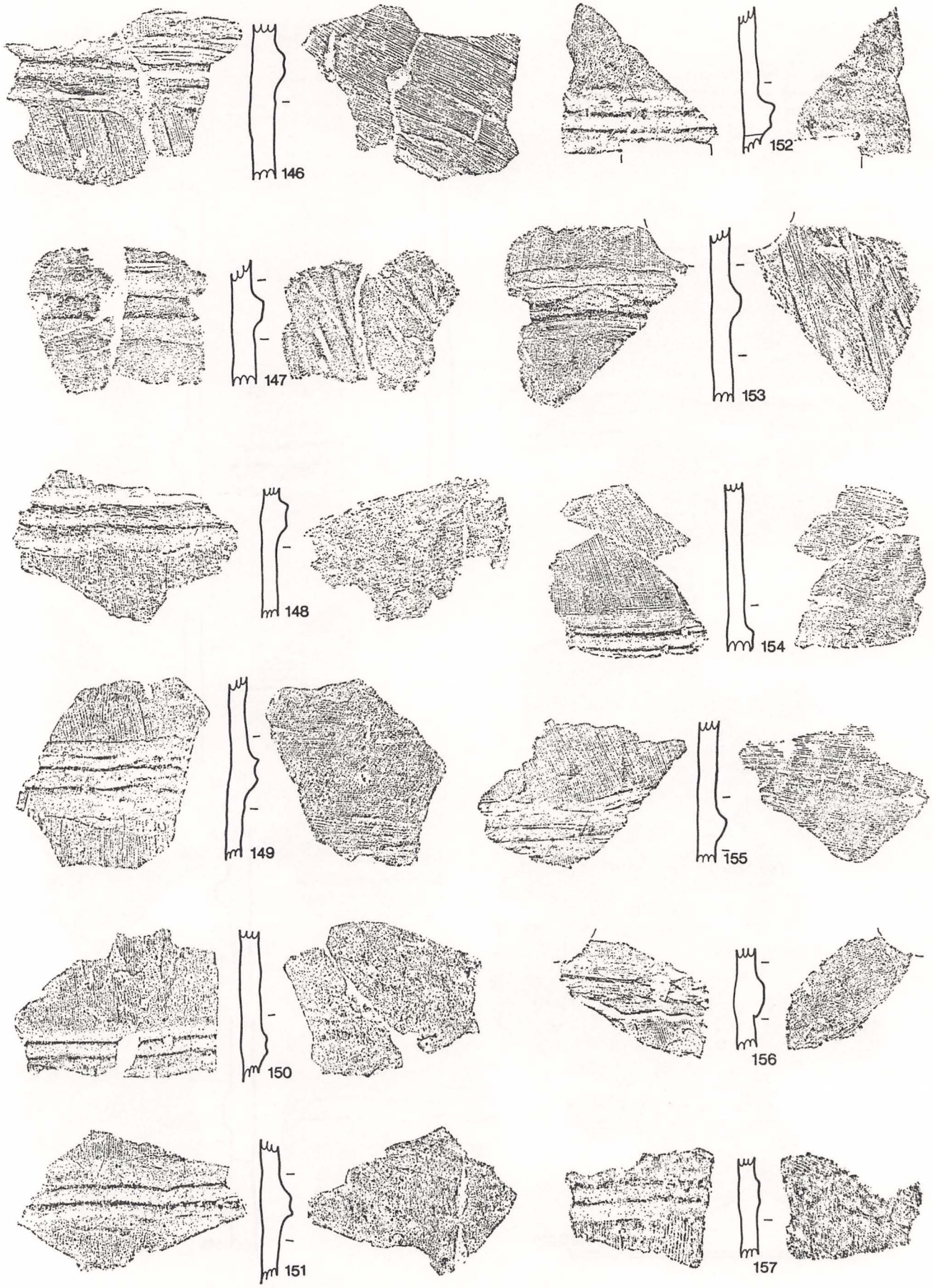
第34図　昭和42年度調査出土須恵器実測図及び昭和49年度調査出土埴輪実測図　（116～127）



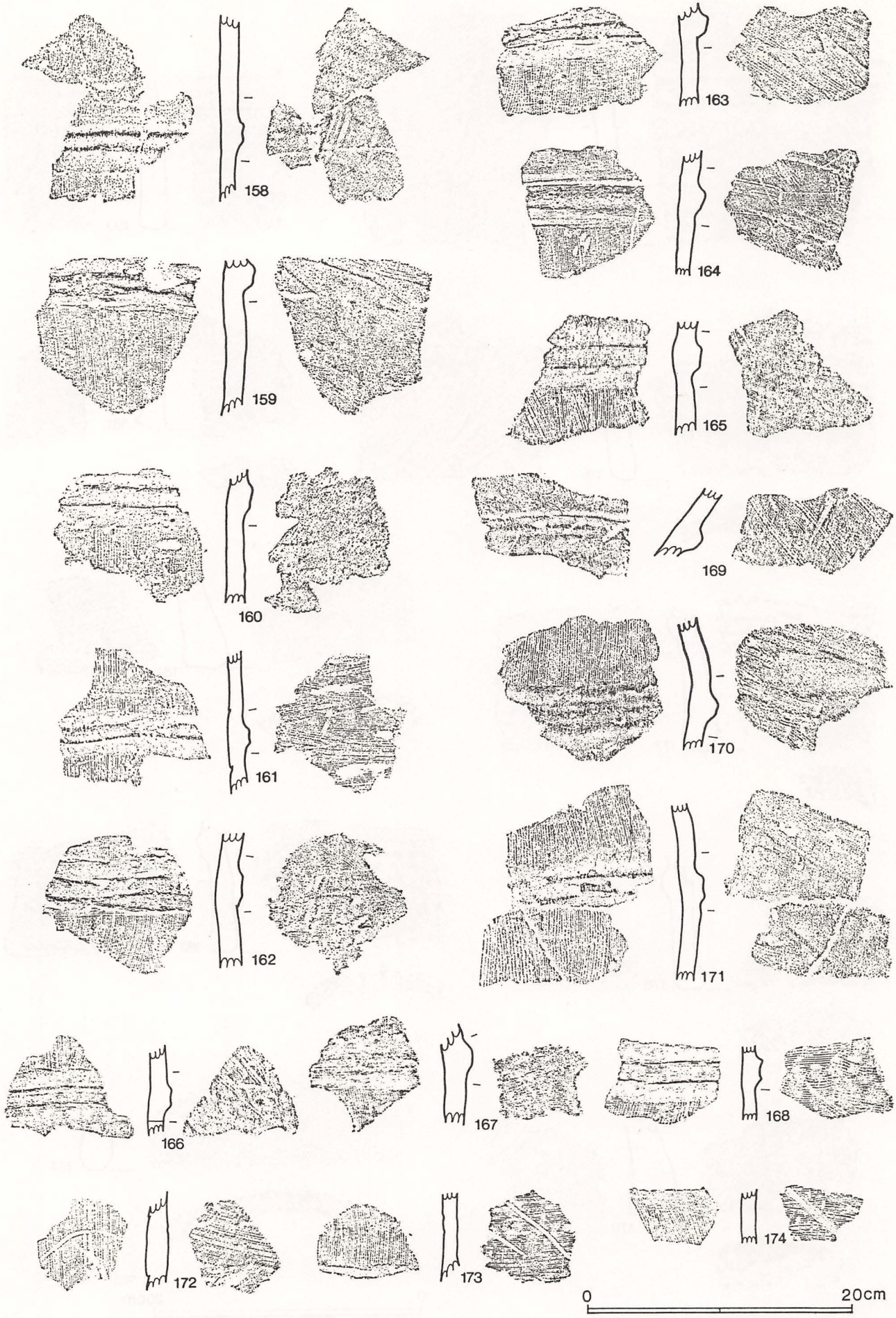
第35図　昭和49年度調査出土埴輪実測図　（128～138）



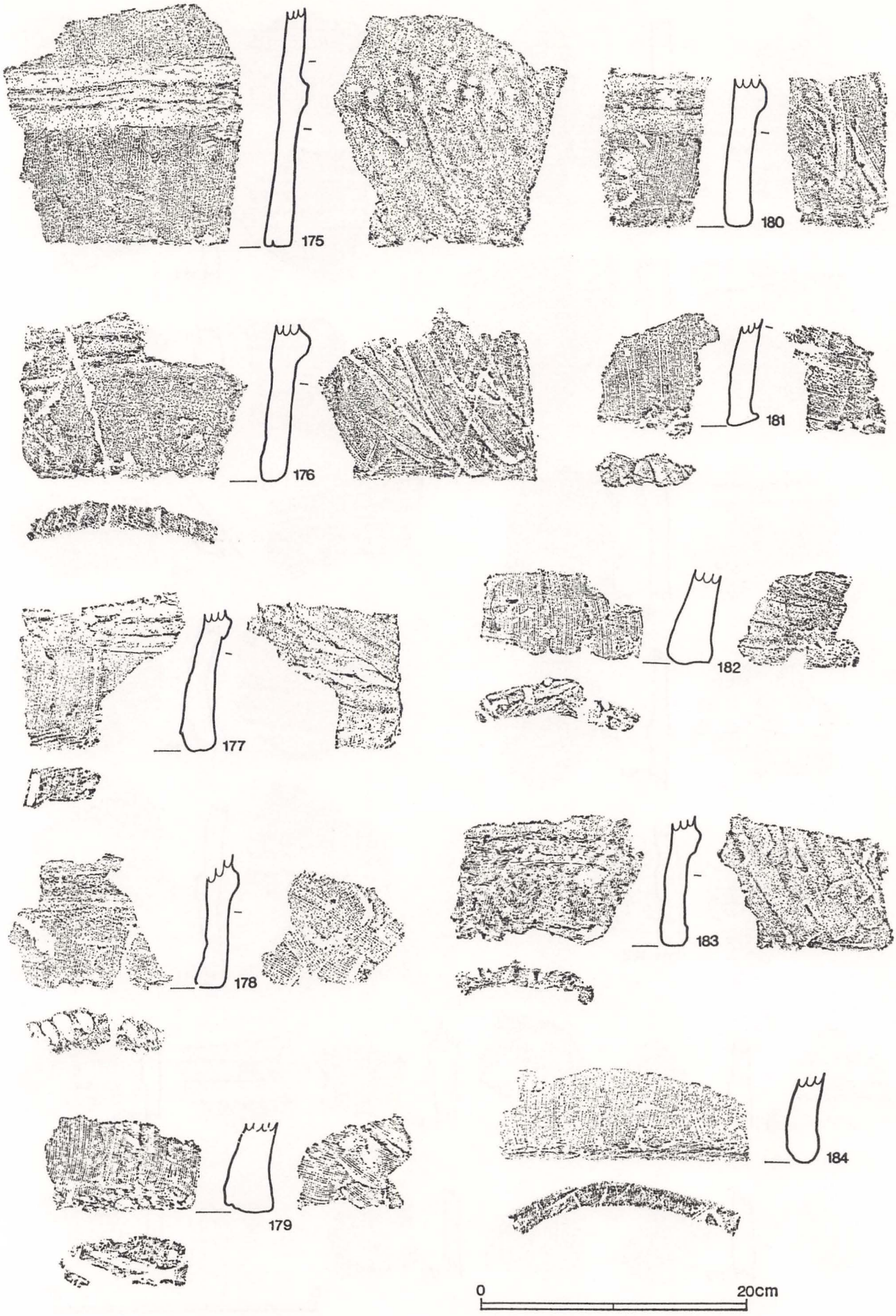
第36図　昭和49年度調査出土埴輪実測図　（139～145）



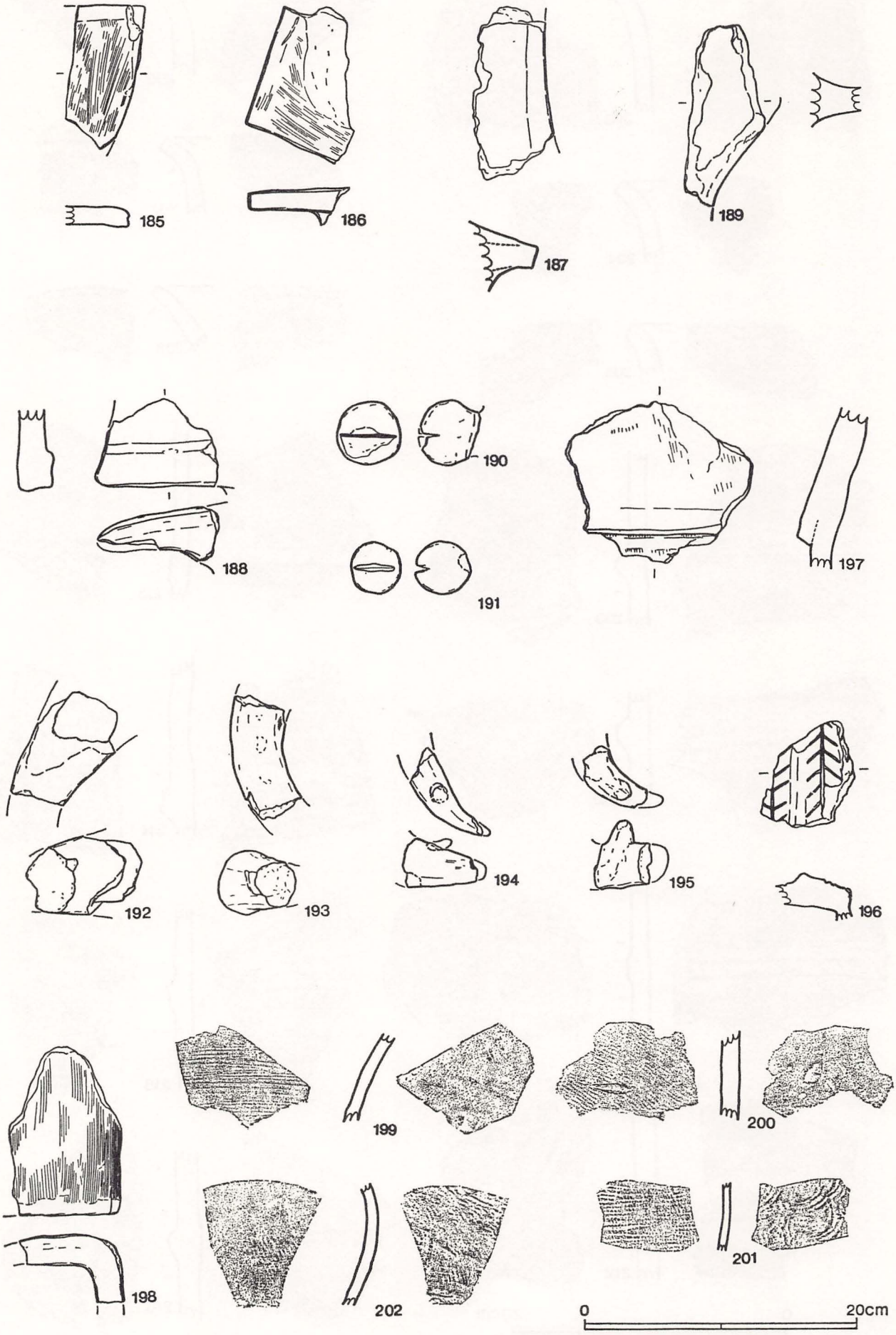
第37図　昭和49年度調査区出土埴輪実測図　（146～157）



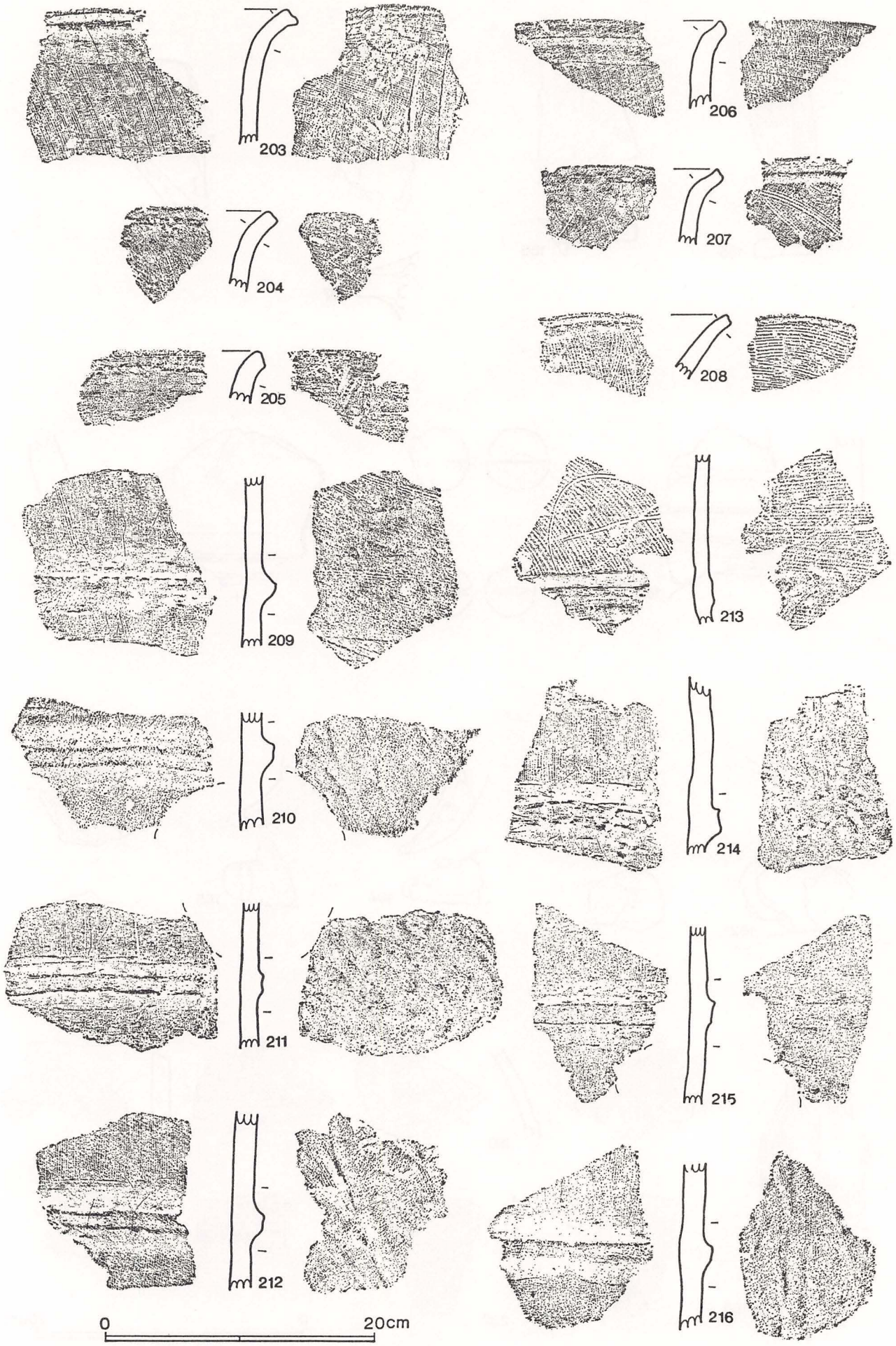
第38図　昭和49年度調査出土埴輪実測図　（158～174）



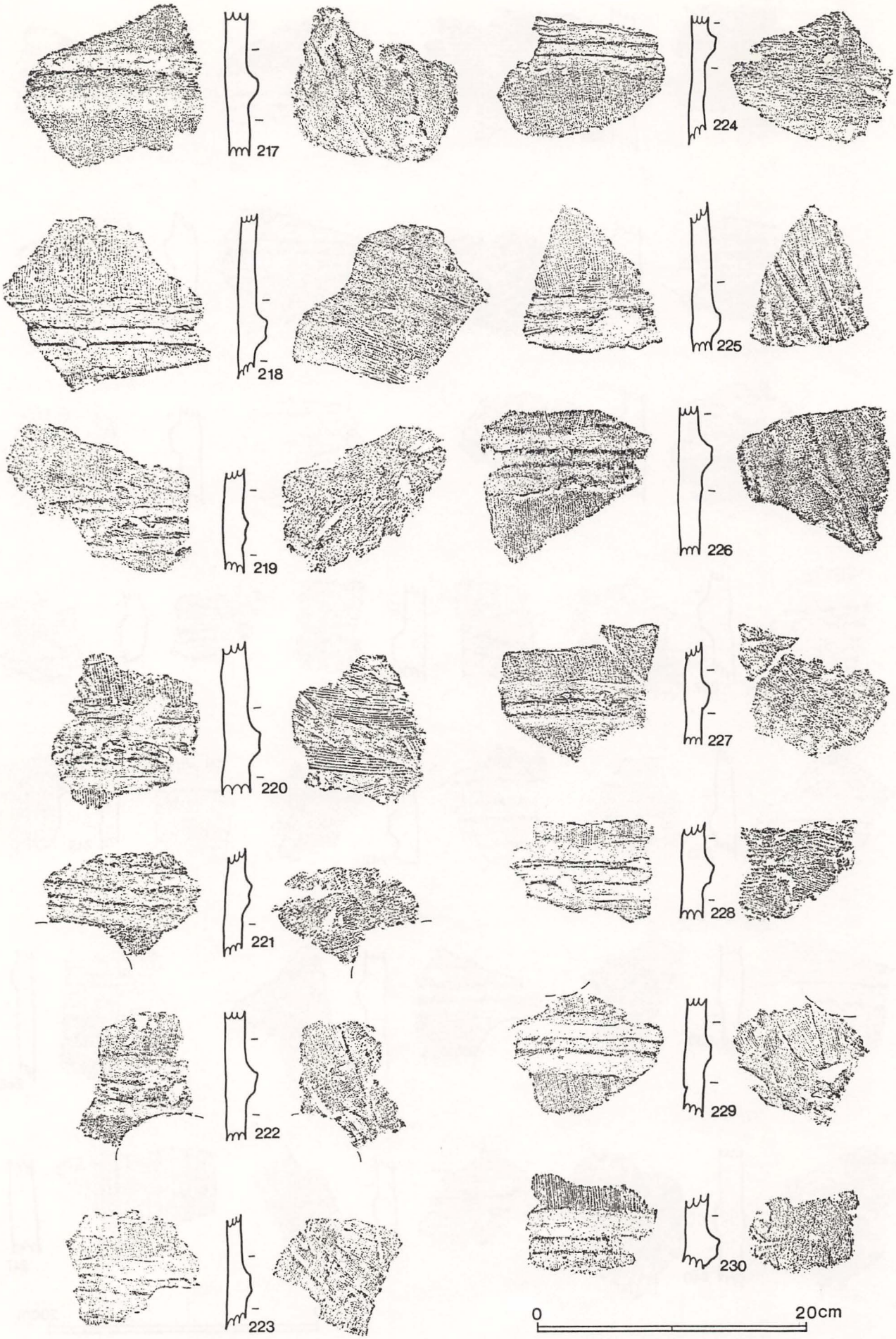
第39図　昭和49年度調査出土埴輪実測図　（175～184）



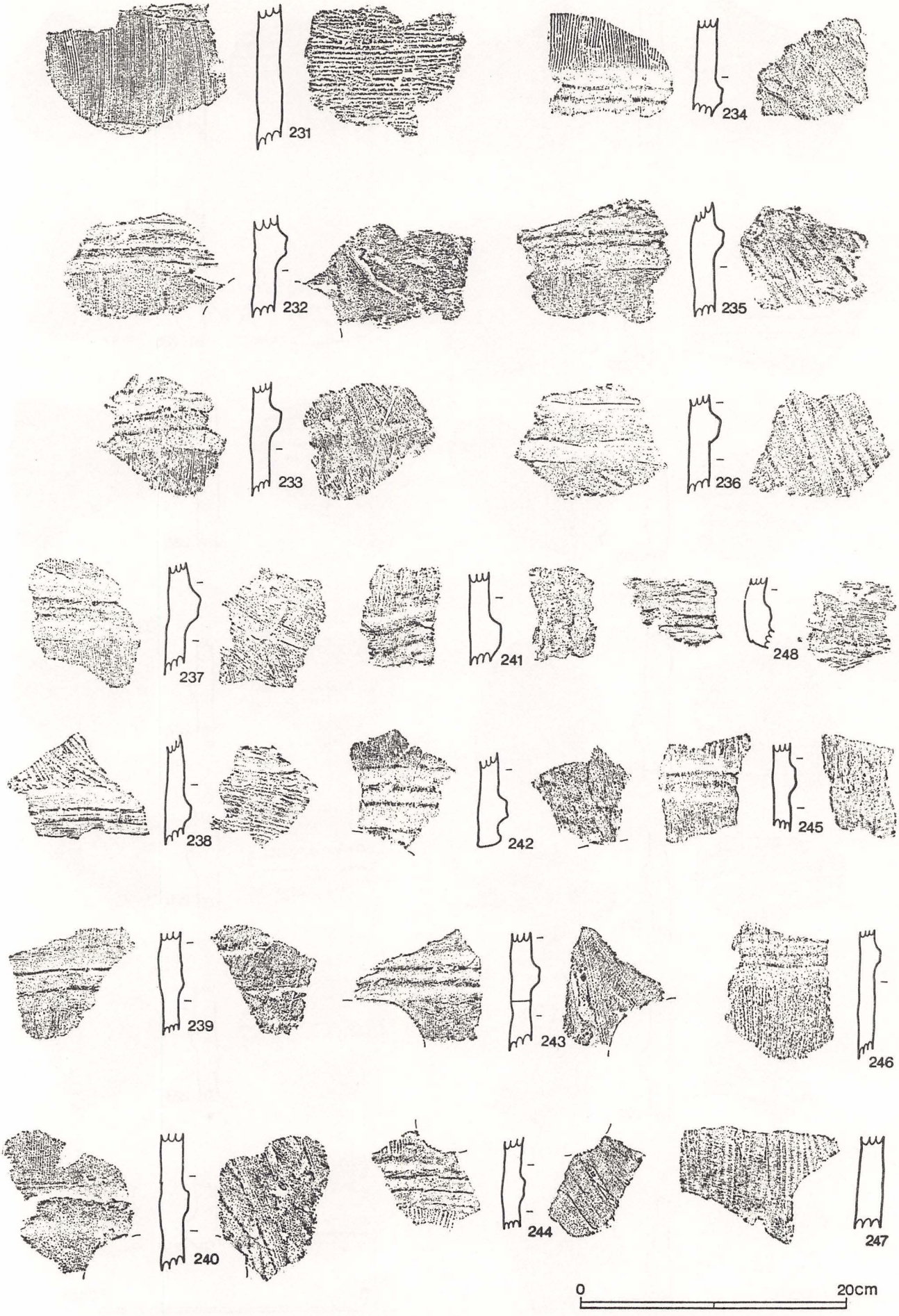
第40図　昭和49年度調査出土埴輪及び須恵器実測図　（185～201）



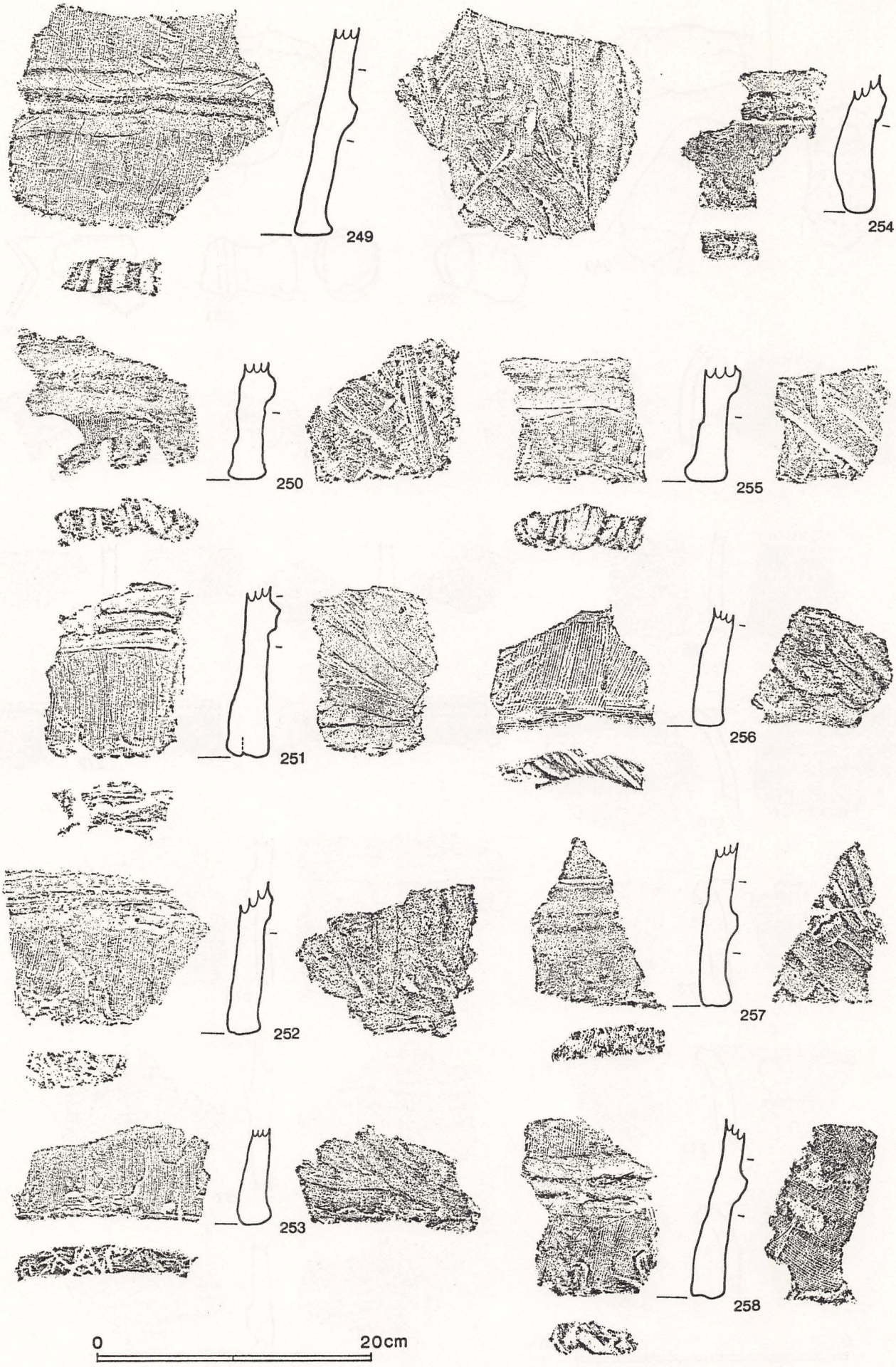
第41図　昭和55年度調査出土埴輪実測図　（203～216）



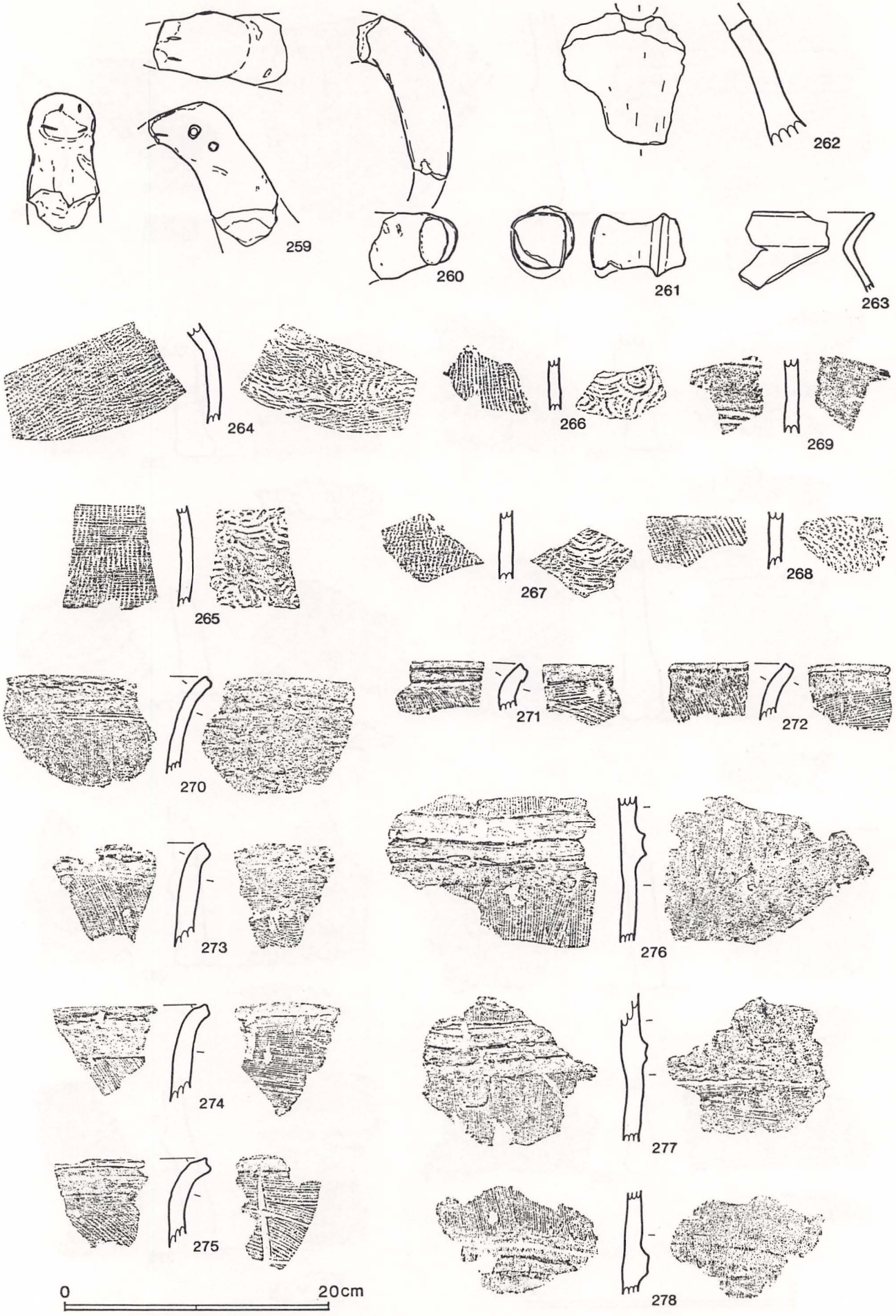
第42図　昭和55年度調査出土埴輪実測図　（217～230）



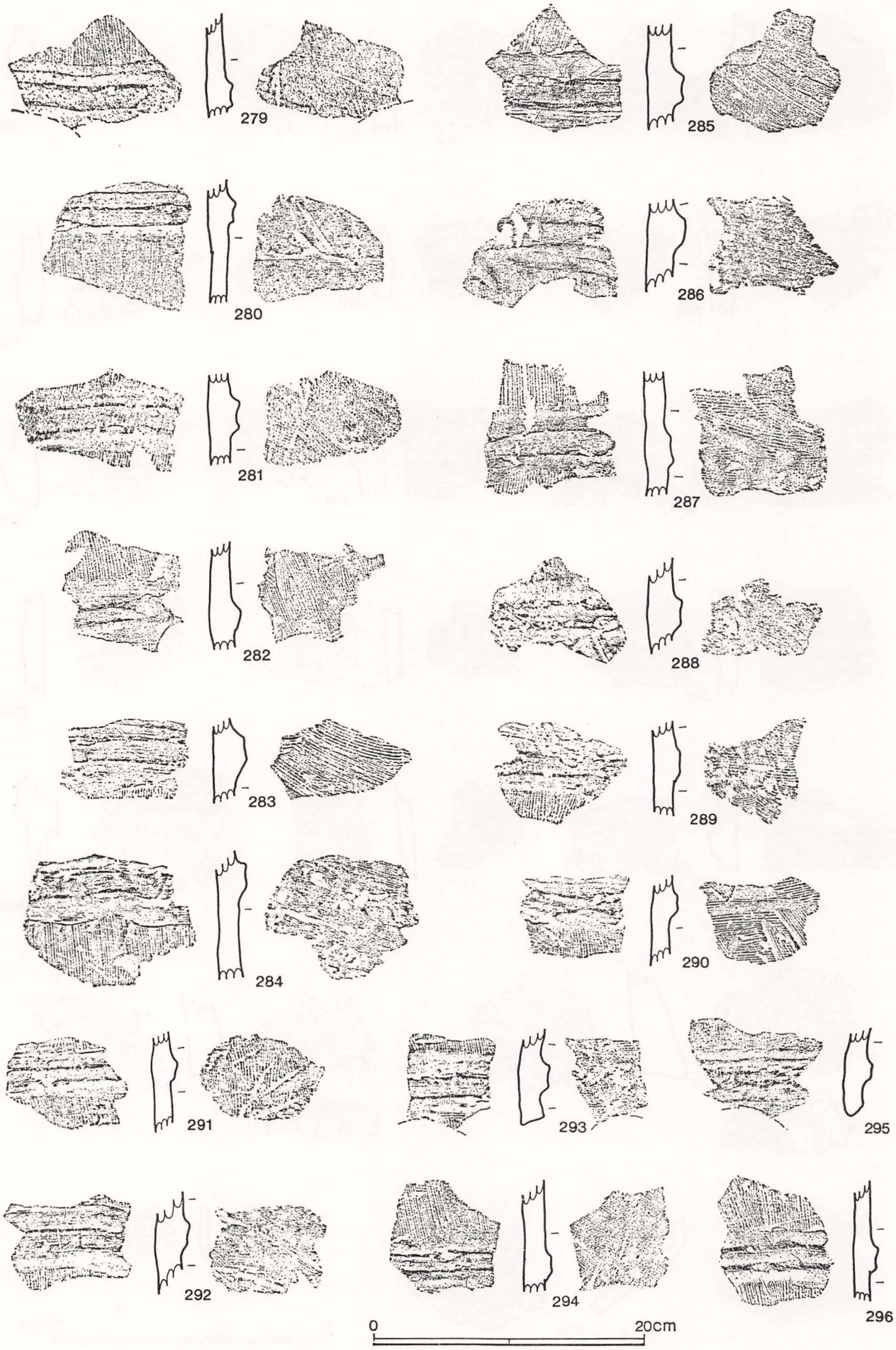
第43図　昭和55年度調査区出土埴輪実測図　（231～248）



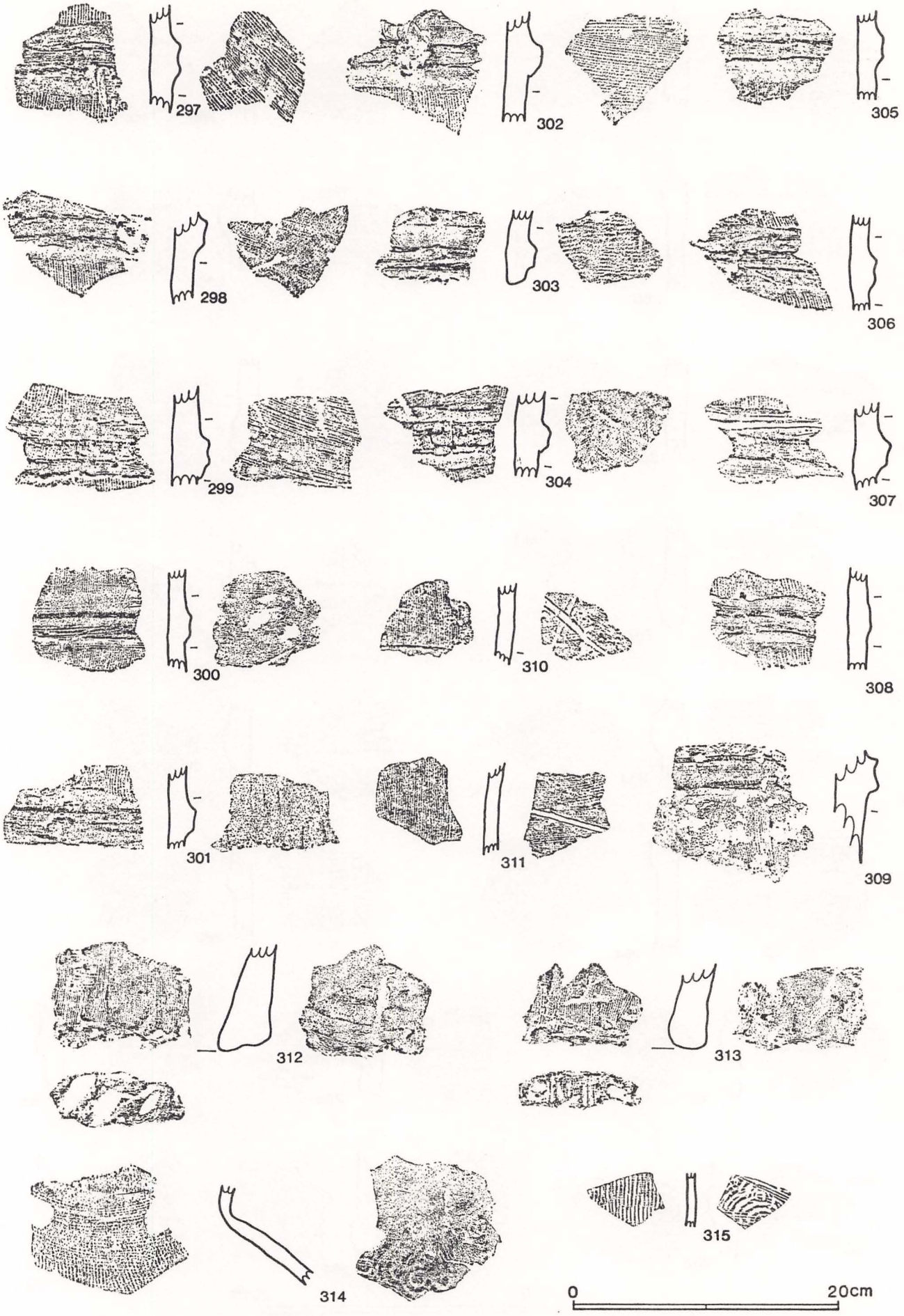
第44図　昭和55年度調査出土埴輪実測図　（249～258）



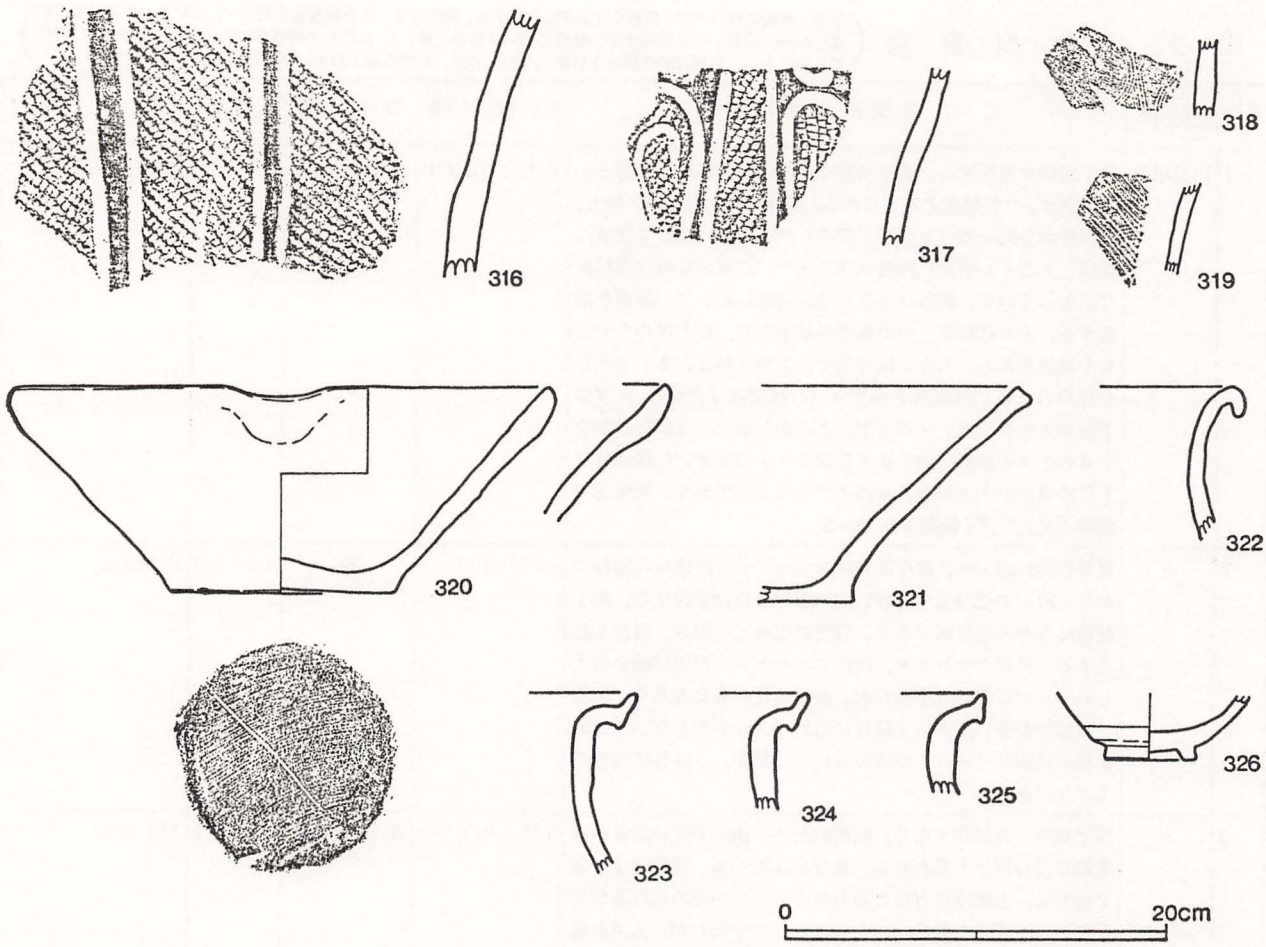
第45図　昭和55年度調査出土埴輪、土師器、須恵器実測図及び昭和59年度調査出土埴輪実測図（259～278）



第46図　昭和59年度調査出土埴輪実測図　（279～296）



第47図　昭和59年度調査出土埴輪及び須恵器実測図　（297～315）



第48図　各年度調査出土、古墳関係外遺物実測図（316～326）

と考えられる破片があった。

動物埴輪は、f字形鏡板（90）や鈴（91、190、191）の破片が認められるので飾馬があるのは誤りがないであろう。また、鳥形の頭の部分（259）があるが、鶏冠がなく、偏平な嘴を持つと考えられるので、水鳥の頭部と考えられる。

人物埴輪は、顔面（92～94）や腕（99、100、192～195）のほか島田髷（95～97）、あるいは佩刀の柄頭（261）や天冠の一部と考えられる破片（196）があり、男女各々の存在は誤りない。

(二)　土師器及び須恵器

土師器は、出土点数が少なく、図示し得たのは104、263の二点である。

須恵器は比較的出土破片が多く、甕（110、116等）、壺（108等）や瓿（106）、器台（120、121）、高杯（122、125）と思われる器種が、確認できた。

甕・壺は、頸部文様帯を有し、鈍い沈線と櫛描波状文を有するものが多い。また、甕の体部は、タタキメの後、部分的にカキメを施すものがあるのも特徴的である。

高杯は、おそらく大形のものの脚部と思われる破片である。

(三)　その他の遺物

古墳に直接係りない遺物として、縄文土器や、中～近世の陶磁器類があった。第48図に一部を図示したが、316は縄文土器加曽利EⅡ式、317は同EⅢ式、318、319は堀ノ内式、320は、須恵質陶器の片口鉢、326は瀬戸又は美濃の天目茶碗である。321以下は常滑の甕等の断面である。

この他、青磁碗等の破片も出土している。

出土遺物観察表

（胎土、焼成については、荒砂をℓ、中粒砂粒をm、細砂をf、小石粒をSと略（ ）内はその多寡で5（多量）⟷（少量）の5段階表示、焼成についてはHと略、（ ）内はその硬軟で5（硬緻）⟷1（軟弱）の5段階表示、色調は新版標準土色帖（小山、竹原、日本色研、昭和45年）による。）

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	ハケメ (cm/10本)	備考
1	円筒埴輪	約半周程が遺存する。遺存部分で高さ77cm、口縁部径37cm。6条タガ、7段構成と考えられる。直接接合しないが、胎土、色調等から同一個体と判断、復原した（拓影について合成）。各段ともごくわずかに内湾気味であり、口縁部はほぼ直線的に立上っていて、端部は小さく屈曲気味に開いて、端面を形成する。タガは幅広、やや編平のM字形で、仕上げのナデはやや粗雑である。スカシは方形で、上から第2、3、5段目に認められる。外面タテハケメ（口縁部はは左傾）、内面は下方がタテ及びナナメのナデ、上方から第2～3段部分がナナメハケメの後部分的にタテ及びナナメのナデ、口縁部は左上りのヨコハケメに同方向のナデで仕上げており、焼成前の窯印「×」が浅く陰刻されている。	ℓ(2)、S(1)、H(4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	2.1	以下昭和42年度
2	〃	復原口縁径約50cm、遺存部分高約56cm。多くの破片に割れており、約⅕の部分を欠くが、図示部分はほぼ全周する。第1段目はやや内湾気味であり、外方に屈曲して開き、端面を形成する。外面タテハケメ、内面ヨコハケメ、内面は接合痕著しい。タガは弱いM字形だが、台形に近い部分もあり、剝落する部分が多い。2、3段目に円形のスカシがあり、外面第1段には窯印「〰」が認められる。第2、3段目に円形のスカシがある。	m(3)、H(3)	橙 (5YR 7/6)	1.4～1.5	11T出土。
3	〃	図示部分⅓周部程を欠く。破損状況や、焼成が悪いことから底部に近い部分と思われる。遺存高は約33cm、復原径は下方で約31cm。上部段に方形と思われるスカシが認められるが遺存悪い。タガは比較的しっかりとしたM字形だが、大半が脱落する。	ℓ(2)、H(2)	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	1.7	10T出土。
4	〃	約半周を欠く。遺存高約63cm、上部直径約43cm、底径約34cm、遺存最上段に円形と思われるスカシがある。タガは幅広のM字形で、やや粗雑な作り。外面は左傾するタテハケメ、内面はナナメないしヨコハケメで、接合痕が残る。外面底部に近い部分器表のヒビ割が目立つ。	m(5)、H(3)	赤褐 (2.5YR 4/8)	1.1～1.3	4T出土。
5	円筒口縁	端部は外反して開き、わずかに凹む端面を形成する。	ℓ(3)、H(3)	赤 (10R 5/6)	1.5	2T出土。
6	〃	〃	m(3)、H(3)	〃	1.5	2T出土。
7	〃	直線的かつやや開き気味。端部内面はヨコナデで凹む。	ℓ(3)、H(2)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	2.5	4T出土。
8	〃	外反して開き、端面が形成される。	f(3)	赤橙 (10R 6/6)	2.1	〃 。
9	〃	ゆるく外反して開く。端面を形成し内面直下はヨコナデで凹む。	m(3)、H(4)	にぶい橙 (5YR 7/3)	外 1.8 内 1.0	10T出土。
10	〃	わずかに外湾気味に開き、端面を形成する。	m(3)、H(3)	浅橙 (5YR 8/4)	外 1.6 内 2.2	〃 。
11	〃	外湾気味に開き、端面を形成する。	m(2)	灰白 (2.5Y 8/2)	1.6	〃 。
12	〃	ゆるく屈曲気味に開き、端部は丸味を持つ。	m(3)、H(2)	明赤褐 (2.5YR 5/8)	1.2	〃 。
13	〃	ゆるく外反気味に開き、端面を形成。	m(2)、S(2)、H(2)	浅黄燈 (2.5YR 8/3)	1.4	11T出土。
14	〃	小さく屈曲気味に開き、端面を形成。内面にヘラナデ。	ℓ(2)、S(2)、H(4)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	1.6	24T出土。
15	〃	外湾気味に開き、端面を形成。内面に幅広のヘラナデ。口縁径約40cm。	ℓ(5)、H(3)	明赤褐 (2.5YR 5/8)	1.5	31T出土。
16	〃	小さく屈曲気味に開き、端面を形成。口縁径約32cm。	f(5)、H(3)	明赤褐 (2.5YR 5/6)	1.9	38T出土。
17	〃	外反気味に開き端面を形成。外面赤彩の可能性あり。	f(2)、H(2)	浅黄橙 (10YR 8/3)	1.3	41T出土。

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	ハケメ (cm/10本)	備考
18	朝顔	朝顔形肩部。タガはやや幅広、偏平で雑な作り。	m(3)、H(4)	橙 (2.5YR 6/8)	2.8	2T出土。
19	円筒体部	タガは幅広。偏平なM字形。円形と思われるスカシあり。	f(2)、H(4) 暗赤褐色の粒子含む。	橙 (2.5YR 6/8)	外 4.1 内3.5、2.6	2T出土。
20	〃	タガはやや偏平で粗雑。直径約30cm。	f(3)、H(3)	赤 (10R 5/8)	1.6	〃 。
21	〃	やや厚手の作りで、タガはやや幅広。	m(3)、H(3)	橙 (2.5YR 6/6)	外 1.0 内 1.9	3T出土。
22	〃	外面一部に横位のヘラナデあり。直径約25cm。	m(3)、H(3)	明赤褐 (2.5YR 5/6	1.6	〃 。
23	〃	やや厚手の作りで、タガはM字形。直径約36cm。内面に指絞残る。	m(3)、H(4)	明赤褐 (2.5YR 5/6)	1.6	〃 。
24	〃	タガは偏平なM字形で、外面一部に布目が残る。	m(3)、H(5)	赤 (10R 4/8)	1.9	〃 。
25	〃	タガは偏平な台形。スカシは変形した半円形と思われる。	m(3)、H(4)	橙 (2.5YR 6/8)	外 3.2 内 2.0	4T出土。
26	〃	タガは粗雑な作り。直径約33cm。	m(3)、H(3)	明赤褐 (2.5YR 5/6)	2.0	〃 。
27	〃	タガは偏平で上面が丸味を持つ。円形のスカシあり。直形約28cm。	白色の石粒目立つ H(5)	褐灰 (5YR 5/1)	2.0	〃 。
28	〃	タガは幅広だが粗雑な作り。内面にオサエ痕	f(3)、H(5)	赤 (10R 4/6)	1.9	〃 。
29	〃	ごくわずかに内湾気味。タガは偏平なM字形。長方形スカシあり。	f(3)、S(2)、H(3)	橙 (7.5YR 7/6)	1.8	〃 。
30	〃	タガは偏平なM字形。内面にオサエ痕あり。直径約34cm。	m(3)、H(5)	明赤褐 (2.5YR 5/8)	外 2.1 内1.8~2.3	〃 。
31	〃	〃 。 〃 。	m(3)、H(3)	橙 (2.5YR 6/6)	2.6	5T出土。
32	〃	タガはくずれたM字形。内面にオサエ残る。	ℓ(3)、S(2)、H(4)	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	1.7	〃 。
33	〃	タガはごく偏平。内面にオサエ痕残る。	m(5)、H(2)	橙 (2.5YR 6/6)	1.4	6T出土。
34	〃	タガは突出度が高いが、くずれる。	m(3)、H(4)	橙 (2.5YR 6/8)	1.3~1.5	9T出土。
35	〃	タガは突出度高い。内面に接合痕。内外大部分が還元色。	白色の荒砂目立つ。	灰 (5Y 1/4)	1.2~1.7	10T出土。
36	〃	タガはごく偏平。円形と思われるスカシあり。	ℓ(3)、H(4)	浅黄橙 (7.5YR 8/3)	1.8	〃 。
37	〃	タガは偏平なM字形。方形のスカシあり。	ℓ(3)、H(3)	浅黄橙 (10YR 8/3)	1.8	〃 。
38	〃	タガは突出度が高い。器表に細かなヒビ割れ。直径約30cm。	m(3)、S(2)、H(2)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	1.5	〃 。
39	〃	タガはくずれたM字形。やや薄手の作り。直径約28cm。	ℓ(2)、S(2)、H(3)	〃	1.5~1.8	〃 。
40	〃	タガは偏平。スカシは半円形と思われる。	ℓ(3)、H(2)	浅黄橙 (7.5YR 8/3)	1.8~2.0	〃 。
41	〃	タガはやや突出度が高い。方形のスカシあり。	ℓ(3)、H(3)	浅黄橙 (10YR 8/4)	2.0	〃 。
42	〃	タガは偏平なM字形。方形と思われるスカシあり。	ℓ(3)、H(3)	浅橙 (5YR 8/4)	1.9	〃 。
43	〃	タガはやや偏平なM字形。	ℓ(3)、H(3)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1.8	〃 。
44	〃	タガは偏平なM字。方形と思われるスカシあり。	ℓ(3)、S(2)、H(2)	灰白 (10YR 8/2)	1.8	11T出土。
45	〃	〃 。内面にオサエ痕残る。	m(3)、H(3)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1.6~2.0	〃 。
46	〃	〃 。内外磨滅。	ℓ(3)、S(2)、H(2)	浅黄橙 (10YR 8/3)	1.8	〃 。

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	ハケメ (cm/10本)	備考
47	円筒体部	タガはくずれた台形で中央がやや突出気味。	m(3)、H(3)	橙 (2.5YR 6/6)	1.8	11T出土。
48	〃	タガは偏平なM字。内面にオサエ痕残る。方形と思われるスカシあり。	ℓ(3)、H(3)	橙 (5YR 6/6)	1.6～1.9	〃 。
49	朝顔	朝顔形円筒の破片。外面肩部ヨコハケメ。タガはごく低く鈍い。	ℓ(3)、S(2)、H(2)	浅黄橙 (7.5YR 8/3)	1.7	〃 。
50	円筒体部	タガはやや偏平のM字形。	ℓ(3)、H(2)	にぶい橙 (5YR 6/6)	1.8	〃 。
51	〃	タガはごく偏平。円形のスカシあり。	ℓ(2)、H(2)	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	1.3	12T出土。
52	〃	タガは鈍い台形。	ℓ(3)、H(3)	橙 (5YR 7/6)	1.8	〃 。
53	〃	〃 。円形のスカシあり。全体に還元色。	白色の荒砂含む。H(3)	灰褐 (5YR 6/2)	1.0～1.3	20T出土。
54	〃	タガは台形とM字の中間的形態。方形のスカシあり。	ℓ(3)、H(3)	浅黄橙 (10YR 8/4)	1.8	24T出土。
55	〃	タガは偏平なM字形で、円形と思われるスカシあり。	m(3)、H(2)	橙 (5YR 7/8)	1.8～2.3	25T出土。
56	〃	タガは偏平に潰れている。	m(2)、H(3)	赤 (10R 5/6)	2.8	〃 。
57	〃	タガはやや突出度高い。方形のスカシあり。	ℓ(3)、H(3)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	1.8	27T出土。
58	〃	タガは狭く、やや突出度のある台形。	f(5)、H(3)	橙 (2.5YR 6/8)	1.2	〃 。
59	〃	タガは低く鈍い。内外磨滅。	ℓ(4)、H(2)	橙 (5YR 7/6)	1.8	〃 。
60	〃	タガは雑な作りで、やや上下する。円形と思われるスカシあり。	m(3)、H(2)	赤 (10R 5/8)	1.8～2.4	35T出土。
61	〃	タガは偏平で、M字と台形の中間的形態。16と同一個体と考えられる。	f(4)、H(3)	橙 (7.5YR 6/6)	1.8～1.9	38T出土。
62	〃	方形又は半円形のスカシあり。	m(3)、H(3)	淡橙 (5YR 8/4)	2.3	〃 。
63	〃	タガはこく偏平な鈍い台形で、直下にヨコナデの不十分な部分あり。	f(3)、H(2)	橙 (5YR 6/8)	1.5～1.8	〃 。
64	〃	タガはやや狭く、M字と台形の中間的形態。直径約36cm	f(3)、H(3)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	1.1～1.3	41T出土。
65	〃	タガはM字と台形との中間的形態。円形のスカシあり。	f(3)、H(2)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	1.4	〃 。
66	〃	タガはくずれた台形。比較的底部に近い部位。直径的26cm。	m(4)、H(2)	橙 (2.5YR 6/6)	1.4～1.6	
67	〃	偏平なM字形のタガ、方形のスカシを有する。直径的28cm。	ℓ(3)、H(3)	橙 (7.5YR 7/6)	1.9	
68	朝顔	朝顔形円筒の頸で厚手の作り。頸部のタガは剝落している。肩部外面はナナメハケメ、内面はナデ。頸部径約30cm。	m(3)、H(2)	橙 (2.5YR 6/6)	外 1.8 内 1.1	
69～78	円筒破片	窯印のある破片を一括した。77は「×」と思われるが、その他全体のわかるものはない。いずれも焼成前ヘラ状工具により陰刻されてお、厚さからいずれも口縁に近い部分であろう。				69—7T、70—42T、71—47T、72、76—41T、73—24T、74—9T、75、78—10T、77—5T
79	円筒底部	タガは潰れたM字形。底面には禾本科植物の圧痕あり。底径約32cm。	m(3)、S(1)、H(2)	橙 (2.5YR 6/8)	外 1.8 内 2.2	2T出土。
80	〃	タガはやや低い台形。内面はナデ及びナナメハケメだが、タガの対応部分にオサエ痕が残る。底径約30cm。	f(3)、H(3)	赤 (10Y 4/8)	2.0	4T出土。
81	〃	底部はやや肥厚しており、タガは偏平でくずれたM字形。底径約27cm。	ℓ(3)、S(2)、H(2)	橙 (5YR 7/8)	2.4	〃 。
82	〃	底面部分は内外に突出し、タガはごく偏平。底径約28cm。	ℓ(4)、H(5)	にぶい赤褐 (2.5YR 5/4)	1.3	〃 。

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	ハケメ (cm/10本)	備考
83	円筒底部	底面内側に部分的にオサエ痕がある。タガは偏平で鈍い台形。底部は約20cmと小さく形象の台の可能性が大きい。	ℓ(4)、H(2)	橙 (2.5YR 6/8)	1.6	10T出土。
84	〃	底部から低い位置に、偏平で全く粗雑なタガを有する。底部外面がやや外方へ突出気味。底径約31cm。	ℓ(3)、H(2)	橙 (5 YR 7/8)	1.9～2.2	12T出土。
85	〃	底面がやや外方へ突出気味。やや薄手である。	ℓ(3)、H(3)	橙 (5 YR 7/6)	1.8	33T出土。
86	〃	底部はやや肥厚し、上方はやや内湾気味。タガは偏平で粗雑。外面にはユビオサエのような痕が多数あり、最下部にはタテハケメの下に荒いヨコハケメ状の条痕が残る。底径約25cm。	m(3)、H(3)	明赤褐 (2.5YR 5/8)	外 2.2 内 1.7	
87		タガはM字形で、底部から低い位置にある。底径約24cm。	m(4)、H(2)	橙 (2.5YR 6/6)	外 1.4 内1.01.7	
88	蓋	笠飾りの一部と考えられる。比較的丁寧にナデて仕上げる。	m(3)、H(4)	橙(5 YR 7/6)	——	37T出土。
89	盾	下端部分の破片の可能性が高い。背面は円筒状となろう。下端部分は偏平な粘土を粘付け、ヨコナデする。表面に浅い沈線が認められる。	m(4)、S(1)、H(3)	橙 (5 YR 6/6)	——	30T出土。
90	鏡板	f字形鏡板の破片と思われる。粘土粒は鋲の表現であろう。形状からは左側面のものか。器表の荒れが目立つ。	ℓ(4)	橙(5 YR 6/8)	——	28T出土。
91	鈴	馬形の鈴飾りかと思われる。やや破損が目立つ。	S(1)、H(3)	橙 (5 YR 6/8)	——	27T出土。
92	人物	顔面破片。眉は粘土紐を薄く貼り、また、耳は粘土紐の貼付と円形の穿孔で表現する。鼻が脱落。丁寧にナデて仕上る。	m(3)、H(3)	橙 (5 YR 7/6)	——	27T出土。
93	〃	右下部顔面の破片。耳の部分に環状の脱落痕がある。厚手の作りでナデにより仕上げる。	m(3)、H(2)	橙 (5 YR 6/8)	——	28T出土。
94	〃	顔面破片。鼻の部分は脱落する。2.5cmと厚い作り。	m(3)、H(2)、	橙 (5 YR 6/8)	——	23T出土。
95	〃	女子人物の島田髷のモモドリ部分。頭部との接合部分にはハケメが残る。	m(3)、H(2)	橙 (2.5YR 6/8)	——	30T出土。
96	〃	女子人物の島田髷の一部と思われる。	m(4)、H(2)	橙 (5 YR 6/6)	——	27T出土。
97	〃	〃 。偏平な粘土紐はモモドの表現と思われる。表面はハケメの後軽いナデ。器表やや荒れる。	m(4)、H(2)	橙 (2.5YR 6/8)	——	24T出土。
98	〃	右肩部分の破片。腕は1～2cm厚の粘土筒を肩部に挿入して接合する。表面にハケメを残す。	ℓ(3)、H(3)	黄橙 (7.5YR 7/8)	——	14T出土。
99	〃	右腕破片で指の部分を欠く。棒状の粘土を整形するが、肩に近い部分はオサエてしめている。表面にうすくハケメが残る。	m(4)、H(2)	明赤褐 (2.5YR 5/8)	——	20T出土。
100	〃	左腕破片で、指先を欠損する。肩側破損面の中心に棒状の芯による中空部分あり。	m(3)、H(3)	明赤褐 (2.5YR 5/8)	——	30T出土。
101	〃	粘土の粒状の部分は玉の表現と思われ、人物の頸部破片かと思われる。粘土粒は細い粘土紐上に乗り、周囲はヨコナデ。	m(3)、H(2)	明赤褐色 (2.5YR 5/8)	——	27T出土。
102	形象	器種不明。器表に格子状の沈線がある。	ℓ(4)	橙 (2.5YR 6/8)	——	
103	〃	器種不明。断面はわずかに内方に湾曲し、遺存部器表上部にごく偏平な断面三角形の凸帯がある。器表にわずかにハケメが残る。	m(3)	明赤褐 (2.5YR 5/8)	——	23T出土。
104	土師器	甕口縁部破片。須恵器を模倣したのか、口縁端部を上下に小さく突出させる。外面ヨコナデ、内面ナデ、内外赤彩。丁寧な作り。	ℓ(1)、H(4)	赤 (10R 4/8)	——	内堀出土。
105	須恵器	小形の甕口縁部破片。外面は無文。内外ヨコナデ。端部欠損。	m(1)、H(3)	暗青灰 (5 PB 3/1)	——	
106	〃	甕口縁部破片と思われる。屈曲して口縁部に至ると思われるが、頸部及び口縁直下に櫛描波状文が施される。	m(2)、H(3)	明青灰 (10 BG 7/1)	——	10T出土。
107	〃	甕口縁部破片。破片上部に鈍い沈線文帯があり、その下方にカキメの後に櫛描波状文を施す文様帯がある。内面ヨコナデ。	H(5)	青灰 (5 B 5/1)	——	

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	ハケメ (cm/10本)	備考
108	須恵器	広口壺の口縁部破片と思われる。破片外面上方に鈍い2本の沈線があり、その上には櫛描波状文、下方に10個1単位の刺突文がある。内面はヨコナデ。	H(4)	青灰 (5B 6/1)	——	
109	〃	広口壺口縁部破片と思われる。破片上下部に鈍い沈線が認められ、その中間にはカキメの後櫛描波状文を施す文様帯がある。	f(1)、H(3)	灰 (N 5/0)	——	
110	〃	大形甕口縁部破片。外面にカキメの後の櫛描波状文あり。	H(5)	灰白色 (N 7/0)	——	
111	〃	小形甕口縁部破片。外面に鈍い沈線文と櫛描波状文あり。	H(5)	暗青灰 (5B 3/1)	——	
112	〃	甕口縁部破片。外面に鈍い沈線とカキメの後の櫛描波状文あり。	H(5)	青灰色 (5B 5/1)	——	
113	〃	壺口縁部破片。 〃 。	ℓ(1)、H(3)	青灰色 (5B 5/1)	——	
114	〃	小形甕体部上位破片。外面はタタキの後のカキメ、内面には同心円タタキあり。	H(3)	青灰色 (5B 6/1)	——	
115	〃	小形壺の体部。外面ヨコナデの後の一部カキメ、内面ヨコナデ。	f(1)、H(3)	明青灰 (5B 7/1)	——	
116 ∫ 118	〃	須恵器甕体部破片。外面平行タタキ、内面は同心円タタキ。116、118はタタキの後、部分的にカキメを施す。	116 H(3) 117 ℓ(2)、H(3) 118 黒色の微粒子含む。H(3)	暗青灰 (5B 3/1) 明青灰 (5B 7/1) 青灰 (5B 5/1)	——	
119	〃	器台の脚破片と思われる。横走する鈍い沈線の下にカキメの上に施される櫛描波状文が認められ、スカシがあけられる。	m(1)、H(3)	灰 (N 6/0)	——	
120	〃	器台脚破片。鈍い沈線と櫛描波状文が施され、スカシを有する。	m(1)、H(3)	灰白 (N 7/0)	——	
121	〃	器台脚端部破片。端部内側に端面を有する。上方にはスカシあり。横走する沈線下にカキメを施した後、櫛描波状文を施す。	f(1)、H(3)	青灰 (5BG 6/1)	——	35T出土。
122	〃	高杯脚部破片。内外ヨコナデだが、外面はカキメを施した後に櫛描波状文を施す文様帯があり、この部分にスカシがあ。	H(4)	明オリーブ (2.5YG 7/1)	——	
123	〃	高杯脚部破片、端部欠損。内外ヨコナデ。スカシがあるが形態不明胎土悪く、作りもやや粗雑。	m(2)、H(2)	灰 (N 5/10)	——	30T出土。
124	円筒口縁	直線的にわずかに開き、口縁部は外方にわずかに屈曲する。口縁径約36cm。	ℓ(2)、S(2)、H(4)	にぶい橙 (5YR 7/4)	1.4～1.6	造出部調査区出土。以下昭和44年度
125	〃	端部は外方に屈曲して開く。タガは偏平なM字。	ℓ(3)、S(2)、H(3)	明褐色 (5YR 5/8)	2.0	〃 。
126	〃	外反して開き、やや凹む端面を有する。	f(3)、H(2)	橙 (5YR 6/8)	2.1	〃 。
127	〃	〃 。126と同一個体か。	f(3)、H(2)	橙 (5YR 6/6)	1.9～2.2	〃 。
128	〃	外反して開き。端面下部は小さく突出する。	m(2)、H(3)	橙 (2.5YR 6/8)	1.4	〃 。
129	〃	端部は小さく外方に屈曲して開く。内面に窯印あり。	ℓ(2)、S(1)、H(3)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	2.1	〃 。
130	〃	やや厚手の作り。ゆるく外反して開く。	m(3)、H(2)	赤 (10R 5/6)	1.5	5T出土。
131	〃	小さく屈曲気味に開く。	m(2)、H(3)	明赤褐 (2.5YR 5/8)	1.3～1.5	造出部調査区出土。
132	〃	〃 。端面はやや凹んでいる。	m(3)、H(3)	明赤褐 (2.5YR 5/6)	外 2.5 内 2.1	〃 。
133	〃	端部はやや丸味を持つ。	m(3)、H(3)	橙 (2.5YR 6/6)	1.9～2.1	〃 。
134	〃	端部はヨコナデが弱いためか、丸味を持っている。	f(2)、H(3)	浅黄橙 (10YR 8/3)	1.5	1T。8T出土。
135 ∫ 136	〃	窯印のある破片。136は「×」であろう。両方とも口縁直下部内面に付される。	135、m(2)、H(3) 136、ℓ(3)、H(2)	明赤褐 (2.5YR 5/8) 〃 (2.5YR 5/6)	0.8～1.4 2.0～2.3	造出部調査区出土。

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	ハケメ (cm/10本)	備考
137	円筒口縁	口縁直下～第２段上部の破片。タガ付近の直径約38cm。	ℓ(3)、S(1)、H(2)	にぶい赤褐 (5 YR 5/3)	1.8～2.0	〃 。
138	円筒体部	タガはごく偏平なM字形。スカシ付近で直径約38cm。	m(3)、H(2)	橙 (5 YR 6/8)	2.3	〃 。
139	〃	遺存するタガの下が最下段かと思われる。タガは偏平にくずて、台形とM字の中間的形態である。上方破面部分に円形のスカシあり。内面はハケメ、タガと対応する部分にオサエ痕。下方のタガの間で直径約32cm。	m(3)、H(3)	明赤褐 (2.5YR 5/6)	1.6～1.7	造出部調査区出土。
140	〃	タガはやや突出度が大きいが、やや鈍い。下方にスカシあり。	ℓ(3)、H(2)	橙 (2.5YR 6/6)	外 1.0 内 1.3	８Ｔ出土。
141	〃	タガは潰れた台形。	m(3)、H(3)	明赤褐 (2.5YR 5/6)	2.2～2.4	〃 。
142	〃	タガは鈍い台形。器厚やや薄目。	ℓ(3)、H(3)	にぶい橙 (5 YR 7/4)	外 1.7 内 2.2	造出部調査区出土。
143	〃	〃 。	ℓ(1)、H(3)	淡橙 (5 YR 8/3)	外 2.0 内 1.5	〃 。
144	〃	タガはやや突出度の大きな台形だが、角がとれて丸くなる。	ℓ(3)、H(2)	橙 (5 YR 6/6)	1.7	〃 。
145	〃	タガは偏平なM字形で、スカシは半円形と思われる。	m(2)、H(4)	赤 (10Y 5/8)	2.0～2.3	１Ｔ・８Ｔ出土。
146	〃	タガは偏平で鈍いM字形で、円形のスカシあり。直径約36cm。	m(3)、H(3)	赤橙 (10R 6/6)	1.3～1.5	〃 。
147	〃	タガは潰れた台形。内面ハケメの後ナデ。	ℓ(3)、H(2)	橙 (5 YR 6/6)	1.1	造出部調査区出土。
148	〃	タガは潰れてくずれた台形。内面ナデ。	f(2)、S(1)、H(3)	にぶい橙 (5 YR 7/4)	1.6	８Ｔ出土。
149	〃	タガは偏平なM字形。タガの位置に対応し内面にユビオサエ痕。	ℓ(1)、H(3)	淡橙 (5 YR 8/3)	外 2.0 内 1.6	造出部調査区出土。
150	〃	タガはごく偏平なM字。	ℓ(3)、S(1)、H(3)	にぶい橙 (5 YR 7/4)	1.8	〃 。
151	〃	タガはくずれたM字形。内面はナデ。	ℓ(2)、S(1)、H(3)	浅黄橙 (10YR 8/3)	1.6	〃 。
152	〃	タガはくずれたM字。方形のスカシを有する。内面ナデ。	ℓ(3)、S(1)、H(3)	にぶい橙 (5YR 7/4)	2.0	造出部調査区出土。
153	〃	タガはくずれた鈍い台形。円形のスカシあり。	ℓ(3)、H(2)	橙 (5 YR 7/6)	外 1.0 内 1.4	１Ｔ・８Ｔ出土。
154	〃	外面左傾するタテハケメ。口縁に近い部分と思われる。	f(3)、H(3)	橙 (2.5YR 6/8)	1.2	造出部調査区出土。
155	〃	タガは偏平で三角形に近い。	m(3)、H(3)	明赤褐 (2.5YR 5/8)	1.5	〃 。
156	〃	タガは相当粗雑な作り。円形のスカシあり。	m(3)、H(3)	明赤褐 (2.5YR 5/8)	外 1.2 内 1.5	１Ｔ・２Ｔ出土。
157	〃	タガはごく偏平。内面はナナメのナデ及びハケメ。	ℓ(4)、H(2)	橙 (2.5YR 6/8)	1.9	造出部調査区出土。
158	〃	タガは偏平なM字。内面ナナメナデ。	ℓ(1)、H(2)	にぶい橙 (5 YR 7/4)	2.0	〃 。
159	〃	タガはくずれたM字と台形の中間。	ℓ(3)、H(2)	にぶい橙 (2.5YR 6/4)	1.5	１Ｔ・８Ｔ出土。
160	〃	タガは偏平で、くずれた台形。内面ナナメナデ。	ℓ(3)、H(3)	にぶい橙 (5 YR 7/4)	2.2	１Ｔ・２Ｔ出土。
161	〃	タガはごく偏平で、くずれた台形。内面接合痕あり。	f(2)、H(3)	灰白 (2.5YR 8/2)	1.3～1.4	１Ｔ出土。
162	〃	タガはごく偏平で粗雑な作り。タガ位置に対応し内面にオサエ痕。	f(3)、S(1)、H(2)	橙 (2.5YR 6/6)	1.4	造出部調査区出土。
163	〃	タガはくずれた台形。	ℓ(2)、H(3)	橙 (2.5YR 6/6)	1.7	〃 。
164	〃	タガは偏平で、くずれており、三角形に近い。	f(1)、H(2)	淡黄 (2.5Y 8/3)	1.5	３Ｔ出土。

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	ハケメ (cm/10本)	備考
165	円筒体部	タガは偏平な台形。タガ部分は肥厚する。	m(2)、H(2)	橙 (2.5YR 6/8)	1.2～1.4	造出部調査区出土。
166	〃	タガは偏平なM字。円形のスカシあり。	m(4)、S(1)、H(2)	橙 (2.5YR 6/8)	外 1.4 内 1.8	
167	〃	タガは偏平で丸味を持つ。円形のスカシあり。	ℓ(3)、H(2)	橙 (5YR 6/6)	1.6	造出部調査区出土。
168	〃	タガは偏平なM字。	f(1)、H(5)	赤橙 (10R 6/6)	2.0～2.3	〃 。
169	朝顔	口縁部破片。タガは台形に近いが、くずれて丸味を持つ。	f(1)、H(2)	淡黄 (2.5Y 8/3)	1.7	1T・8T出土。
170	〃	朝顔形円筒肩部。タガはくずれて丸味を持つ。	ℓ(3)、H(2)	橙 (5YR 6/6)	外 1.4 内 0.7	〃 。
171	〃	〃 。タガは偏平でくずれたM字。	m(4)、H(2)	橙 (5YR 6/8)	外 2.1 内 1.8	〃 。
172 ～ 174	円筒体部	いずれも窯印のある砂片である。172は外面で、「∩」(?)、173は平行に2条の陰刻がある。	172、f(1)、H(3) 173、m(1)、H(3) 174、m(3)、H(3)	灰白 (2.5Y 8/2) 橙 (2.5YR 6/6) 明赤褐 (2.5YR 5/6)	1.0～1.3 外 1.6 内 1.0 1.5～1.6	8T出土。 造出部調査出土。 〃 。
175	円筒底部	タガは偏平で台形とM字の中間的形態。底径は約26cmで、底面に基部粘土板の接合痕が残る。タガ部分の内面にオサエ痕。	f(4)、S(1)、H(2)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	1.7	
176	〃	タガは丸味のある台形。底径は約31cm。	ℓ(3)、H(2)	橙 (7.5YR 7/6)	1.3	造出部調査区出土。
177	〃	下部はやや肥厚し、やや外湾気味。	m(3)、H(4)	橙 (2.5YR 6/8)	1.5	〃 。
178	〃	タガはくずれた、低い台形で、最下部がやや内側に肥厚する。	ℓ(1)、H(4)	灰白 (7.5YR 7/1)	1.5～1.7	8T出土。
179	〃	かなり肥厚しており、底面に基部粘土の接合痕を残す。	f(1)、H(4)	橙 (5YR 6/8)	1.4～1.7	造出部調査区出土。
180	〃	タガは低く丸味のある台形。	m(3)、H(2)	橙 (7.5YR 7/6)	1.3～1.7	〃 。
181	〃	底面は外方に小さく突出している。	f(1)、H(2)	淡黄 (2.5YR 8/3)	1.2	1T・8T出土。
182	〃	底面部分が肥厚する。内面はナデ。	m(3)、H(2)	橙 (2.5YR 6/6)	1.2～1.4	造出部調査区出土。
183	〃	タガは相当くずれたM字形。器表外面剝落が目立つ。	ℓ(4)、H(2)	橙 (2.5YR 6/8)	1.4	〃 。
184	〃	やや外湾気味で、断面はやや丸味を帯びる。底径約34cm。	f(2)、H(2)	灰白 (2.5Y 8/2)	外 1.0 内 1.5	9T出土。
185	靫	翼状部分の破片(?)。ハケメを残し、上辺部をヨコナデする。	ℓ(1)、H(3)	橙 (2.5YR 6/8)	——	造出部調査区出土。
186	盾	下端部の破片(?)。右側に本体部分からの脱落痕あり。前面にハケメ、軽くヨコナデする。	ℓ(2)、H(4)	橙 (2.5YR 6/6)	——	〃 。
187	盾	左側に本体部分からの脱落痕あり。表面ナデ。	m(3)、H(3)	橙 (2.5YR 6/8)	——	〃 。
188	〃	左下端部の破片と思われる。ヨコにナデ。	m(3)、H(2)	橙 (5YR 7/6)	——	〃 。
189	蓋	笠飾りの一部と思われる。	ℓ(3)、S(1)、H(2)	橙 (2.5YR 6/8)	——	〃 。
190	鈴	馬形の装飾鈴と思われる。同形同大の鈴が他に2個あり。	ℓ(3)、H(2)	浅黄橙 (7.5YR 8/6)	——	〃 。
191	〃	〃 。表面の磨滅目立つ。	ℓ(1)、S(1)、H(2)	橙 (5YR 6/8)	——	〃 。
192	人物	腕の付根付近である。棒状に作り本体に挿入して接合する。	ℓ(4)、H(1)	橙 (5YR 7/8)	——	〃 。
193	〃	腕破片。全面をナデ、一部にハケメ残る。	f(1)、H(4)	明赤褐 (2.5YR 5/8)	——	〃 。
194	〃	右手破片。指は欠損する。ナデて仕上り、一部にハケメ残る。	m(4)、H(3)	明赤褐 (2.5YR 5/8)	——	〃 。

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	ハケメ (cm/10本)	備考
195	人物	右手破片。母指以外は欠損。	f(1)、H(2)	明赤褐 (2.5YR 5/8)	——	造出部調査区出土。
196	〃	天冠の一部か(?)。綾杉状の陰刻がある。	S(1)、H(3)	橙 (5YR 6/8)	——	〃 。
197	不明	種別、部位不明。外面ヨコナデ（ハケメ残る)。内面はナナメハケメ。	m(3)、H(3)	橙 (2.5YR 6/8)	——	〃 。
198	〃	種別不明。台部の底部。横断面は方形となろう。	m(3)、H(3)	橙 (2.5YR 6/6)	——	〃 。
199	須恵器	甕口縁部破片。内外ヨコナデ。	S(1)、H(4)	灰 (7.5Y 6/1)	——	1T・2T出土。
200 ∫ 202	〃	甕体部破片。外面は平行タタキメ（201は格子風に近い)。内面は同心円タタキ（201、202）及びナデ（200)。	200 ℓ(1)、H(3) 201 H(5) 202 f(1)、H(4)	明青灰 (5BG 6/1) 緑 (N 6/1) 灰白 (10Y 7/1)		1T・8T出土。 8T出土。 造出部調査区出土。
203	円筒口縁	外湾して開き、端面は外方に突出気味。	m(3)、H(3)	橙 (2.5YR 6/6)	1.4 ～ 1.7	西調査区(以下西区と略)出土。以下昭和55年度調査区
204	〃	外湾して開き、端面は平坦。	f(1)、H(1)	にぶい橙 (5YR 7/4)	外 1.2 内 1.6	東区出土。
205	〃	端面が下方に傾斜している。	ℓ(4)、H(2)	にぶい橙 (5YR 6/4)	1.5	〃 。
206	〃	小さく湾曲気味に開く。端部内面直下はやや凹む。	ℓ(3)、H(2)	にぶい橙 (5YR 7/4)	1.3	西区出土。
207	〃	小さく屈曲気味に開く。 〃 。	f(1)、H(2)	浅黄橙 (10YR 8/3)	外 1.2 内 2.0	〃 。
208	朝顔	口縁部破片。直線的に開き、端部はごくわずかに屈曲する。	f(3)、H(2)	赤褐 (5YR 4/6)	2.4～2.6	
209	円筒体部	タガはやや突出度が高く、断面は三角形に近い。直径も約26cmであり、形象の台部の可能性が高い。	m(4)、H(2)	にぶい橙 (7.5YR 1/3)	外 1.2 内 1.8	西区出土。
210	〃	タガはややくずれた台部。円形のスカシあり。直径約38cm。	ℓ(3)、H(2)	にぶい橙 (7.5YR 6/3)	1.8	〃 。
211	〃	タガは偏平でくずれたM字形。直径約36cm。	m(3)、S(1)、H(4)	明赤褐 (2.5YR 5/6)	1.2	西区出土。
212	〃	タガはくずれて丸味のある台形。直径約36cm。	ℓ(3)、H(4)	明赤褐 (2.5YR 5/8)	1.8	〃 。
213	〃	口縁部に近い破片と思われる。外面に窯印「∩」が陰刻される。	ℓ(3)、H(4)	明赤褐 (5YR 5/8)	1.4	
214	〃	タガはくずれたM字形で一部に布目がある。	m(3)、H(4)	橙 (2.5YR 7/6)	1.8	西区出土。
215	〃	タガは偏平なM字。スカシが認められる。	ℓ(3)、H(2)	橙 (2.5YR 6/6)	1.7	SD003出土。
216	〃	タガは偏平で、くずれた台形。	ℓ(3)、H(2)	橙 (2.5YR 6/8)	1.7	西区出土。
217	〃	〃 。	ℓ(3)、H(2)	橙 (2.5YR 6/8)	1.4～1.6	〃 。
218	〃	タガは台形とM字の中間的形態。直径約38cm。	m(4)、H(5)	にぶい橙 (10YR 7/3)	外 2.3 内 1.8	SD001A出土。
219	〃	タガはくずれて、ごく偏平。直径約36cm。	ℓ(3)、S(1)、H(2)	にぶい橙 (5YR 7/3)	1.6	〃 。
220	〃	タガは台形とM字の中間的形態。底部に近い部分であろう。	m(3)、H(4)	明赤褐 (2.5YR 5/6)	外 2.2 内 1.6	西区出土。
221	〃	タガは偏平なM字形。円形のスカシあり。	m(2)、S(1)、H(2)	にぶい橙 (7.5YR 6/4)	1.6～1.8	〃 。
222	〃	タガはややくずれた台形。 〃 。	m(3)、H(4)	橙 (5YR 6/6)	外 0.9 内 1.3	東区出土。
223	〃	タガは偏平でくずれた台形。	m(2)、H(2)	灰白 (5Y 8/2)	1.3～1.6	SD001A出土。
224	〃	タガはややくずれた台形。	f(3)、H(4)	灰白 (5Y 8/2)	1.2	〃 。
225	〃	タガは偏平で丸味のある台形。	ℓ(3)、H(3)	にぶい橙 (5YR 7/4)	1.9	

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	ハケメ (cm/10本)	備考
226	円筒体部	タガはやや丸味のある台形。	ℓ(4)、H(2)	橙 (5 YR 6/8)	1.9～2.1	西区出土。
227	〃	タガは偏平で丸味をもつ。	m(3)、H(1)	にぶい橙 (5 YR 7/4)	2.2	東区出土。
228	〃	タガは偏平でくずれた台形。	m(3)、H(2)	赤褐 (2.5 YR 4/8)	1.4～1.7	
229	〃	タガはやや幅の狭い偏平な台形。	ℓ(3)、H(2)	明赤褐 (2.5 YR 5/6)	1.5	
230	〃	タガはやや突出度が高い台形。	ℓ(3)、H(4)	明赤褐 (2.5 YR 5/6)	1.3	
231	〃	内面のハケメは荒い。直径約32cm。	ℓ(3)、H(2)	明赤褐 (2.5 YR 5/8)	外 1.3 内 3.7	西区出土。
232	〃	タガは台形とM字の中間的形態。	ℓ(4)、H(2)	橙 (5 YR 6/8)	1.8	〃 。
233	〃	タガはくずれて丸味のある台形。内面の陰刻は窯印か。	ℓ(3)、H(4)	にぶい橙 (5 YR 7/4)	1.4	〃 。
234	〃	タガは台形とM字の中間的形態。	m(3)、H(4)	橙 (5 YR 6/8)	2.2	西区出土。
235	〃	タガはくずれて丸味のある台形。	ℓ(3)、H(2)	橙 (5 YR 6/8)	1.1	〃 。
236	〃	〃 。	ℓ(4)、H(2)	橙(5 YR 6/8)	0.8～1.4	
237	〃	タガはくずれた台形。	ℓ(4)、H(4)	橙 (5 YR 6/6)	1.5～1.7	西区出土。
238	〃	体部の屈曲及びハケメの様子から、朝顔形の肩部と思われる。	m(2)、H(4)	明赤褐 (2.5 YR 5/8)	外 3.0 内 3.6	〃 。
239	〃	タガはごく偏平。	m(3)、H(4)	にぶい橙 (5 YR 6/8)	1.1	ＳＤ００３出土。
240	〃	タガはごく偏平な台形。円形のスカシあり。	ℓ(4)、H(2)	橙 (2.5 YR 6/6)	1.6～1.8	西区出土。
241	〃	タガはくずれた台形。	ℓ(1)、H(3)	明赤褐 (2.5 YR 5/6)	2.3	東区出土。
242	〃	タガは台形とM字形の中間的形態。	ℓ(4)、H(2)	橙 (5 YR 6/6)	1.4	西区出土。
243	〃	タガはやや偏平な台形。円形のスカシあり。	ℓ(3)、H(4)	赤 (10 R 5/8)	1.5～1.8	〃 。
244	〃	タガは偏平で、円形のスカシが認められる。	m(3)、H 2	にぶい橙 (5 YR 7/4)	2.6	
245	〃	タガは偏平で鈍い台形。	m(4)、S(1)、H(4)	明赤褐 (2.5 YR 5/6)	1.0	
246	〃	タガはやや幅が狭く、偏平な台形。	ℓ(4)、H(2)	橙 (5 YR 6/6)	2.2	西区出土。
247	〃	外面にごく浅く荒いタテハケメが施される。	f(4)、H(2)	にぶい黄橙 (10 YR 7/3)	5.2	〃 。
248	朝顔	頸部破片。タガは偏平で鈍い台形。内面ナナメハケメ。	f(3)、H(4)	橙 (7.5 YR 7/6)	外 1.2 内 1.6	東区出土。
249	円筒底部	やや外方に開いて立上り、基底部が外方に小さく突出する。	ℓ(4)、H(4)	にぶい橙 (7.5 YR 7/4)	1.3～1.5	〃 。
250	〃	タガは低く丸味を持つ台形。	ℓ(4)、H(2)	にぶい橙 (5 YR 7/4)	外 1.8 内 1.3	ＳＤ００１Ａ出土。
251	〃	底面に基部粘土板の接合痕あり。下方内面やや肥厚する。	m(3)、H(4)	赤 (10 R 4/8)	外 1.5 内1.0～3.6	西区出土。
252	〃	基部外面わずかに突出。タガは低くくずれたM字形。底径約28cm。	ℓ(1)、S(1)、H(3)	にぶい橙 (7.5 YR 7/4)	1.7	〃 。
253	〃	基部はやや外方に肥厚し、丸味を持つ。底径約44cm。	f(3)、H(2)	にぶい黄橙 (10 YR 7/3)	1.4	ＳＤ００３出土。
254	〃	基部上方内面が肥厚する。基部内面にユビオサエ痕残る。	f(3)、H(2)	赤 (10 R 4/8)	外 1.0 内 3.8	〃 。
255	〃	基部内面やや突出。内面は強いハケメ。	ℓ(4)、H(4)	橙 (5 YR 6/6)	外 1.5 内 2.6	Ｓ００１Ａ出土。

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	ハケメ (cm/10本)	備考
256	円筒底部	基部外面にヨコ方向の荒いハケメあり。	ℓ(1)、H(4)	明赤褐 (2.5YR 5/8)	2.0	西区出土。
257	〃	わずかに外湾気味に立上り、タガはやや幅狭で低く鈍い台形。	ℓ(4)、H(2)	橙 (2.5YR 6/6)	1.8	ＳＤ００１Ａ出土。
258	〃	直径がやや小さく、形象の台部と思われる。	m(4)、H(2)	明赤褐 (2.5YR 5/8)	1.4～1.8	〃 。
259	動物	鶏冠がなく、平たい嘴となる状況から水鳥の頭部である。棒状の粘土に肉付けして成形され、目は棒状の工具であけられ深さは約１cm（両眼とも）、耳も同様にあけるがこちらは４～6mmと浅い。表面やや磨滅する。	ℓ(4)、H(3)	淡橙 (5YR 8/3)	——	
260	人物	母指と思われ脱落痕があり、左腕かと思われる。表面は橙色を残す部分が多く赤彩の可能性がある。粘土を棒状にして用いている。	m(3)、S(2)、H(5)	橙 (5YR 1/6)	——	
261	人物佩刀	柄頭部分の破片と考えられる。やや粗雑な作り。仕上げはナデ。	m(3)、H(3)	明赤褐 (2.5YR 5/8)	——	東区出土。
262	形象	動物等の脚の一部であろうか。上方にスカシが認められる。	ℓ(3)、S(2)、H(1)	橙 (7.5YR 7/6)	——	西区出土。
263	土師器	甕口縁部破片。「く」の字状の断面で、口縁内外はヨコナデ。二次的に被熱している。内外やや磨滅。	f(3)、H(3)	浅黄橙 (10YR 8/3)	——	〃 。
264 ～ 268	須恵器	甕体部破片。外面は平行タタキ、内面は同心円タタキだが、264、265にはタタキの後に一部カキメを施す。	264 f(1)、H(5) 265 〃 266 f(1)、H(4) 268 〃	264 灰白 (5Y 8/1) 265 暗灰 (4N 3/6) 266・268 明青灰 (5BG 7/1) 267 青灰 (5BG 6/1)		266 東区出土。 567 西区出土。 268 〃 。
269	〃	器台の脚破片と思われ、内外相当磨滅する。沈線の間に波状文が認められる。	ℓ(1)、H(2)	明青灰 (5BG 7/1)	——	
270	円筒口縁	外反して開き、端面が形成される。	ℓ(4)、S(1)、H(1)	明赤褐 (5YR 5/6)	0.9～1.0	ＳＤ００１出土。以下昭和59年度
271	〃	端部外面に粘土が余分となり付着する。	m(2)、H(2)	明赤褐 (2.5YR 5/8)	1.7	主調査区外堀出土。
272	〃	端部はごくわずかに内湾気味。	ℓ(3)、H(2)	橙 (2.5YR 6/8)	1.9～2.0	〃 。
273	〃	端部は小さく屈曲気味に開く。	m(2)、H(4)	橙 (2.5YR 6/8)	1.8～2.0	ＳＤ００１出土。
274	〃	端部は小さく屈曲気味に開き、内面はヨコナデで凹む。	f(2)、H(4)	橙 (2.5YR 6/8)	外 1.8 内 1.4	〃 。
275	〃	端面の上方の稜はややシャープ。内面に印窯「×」あり。	m(1)、H(5)	明赤褐 (2.5YR 5/6)	2.1～2.2	主調査区外堀出土。
276	円筒体部	タガは比較的シャープなＭ字形で、一部に布目が残る。直径約26cm。	ℓ(2)、S(1)、H(5)	橙 (5YR 6/6)	2.2	〃 。
277	〃	タガはやや低くくずれたＭ字形。	ℓ(2)、S(1)、H(5)	にぶい橙 (5YR 7/4)	1.2	ＳＤ００１出土。
278	〃	タガはやや低い台形。	m(4)、H(2)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	1.6	主調査区外堀出土。
279	〃	タガは偏平なＭ字形。スカシが認められる。	ℓ(3)、S(1)、H(3)	にぶい橙 (5YR 7/4)	1.6～1.8	〃 。
280	〃	〃 。内面に接合痕残る。	ℓ(1)、S(1)、H(5)	淡赤橙 (2.5YR 7/4)	外 1.1 内 1.4	ＳＤ００３出土。
281	〃	タガは幅広で偏平なＭ字形。	m(3)、H(2)	にぶい橙 (10YR 7/4)	2.1	主調査区外堀出土。
282	〃	タガは鈍い台形で、下方が潰れて三角形に近い。	ℓ(1)、H(3)	明赤褐 (2.5YR 5/6)	外 2.3 内 1.6	〃 。
283	〃	タガは鈍い台形。	ℓ(3)、H(2)	橙 (2.5YR 6/8)	2.0	〃 。
284	〃	タガは突出度のやや低い台形。	m(2)、H(2)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	外 1.7 内 1.1	主調査区外堀出土。
285	〃	タガは幅広でやや偏平なＭ字形。	m(1)、H(2)	にぶい橙 (2.5YR 5/4)	1.5	〃 。

番号	種別	形態、調整技法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色調	ハケメ (cm/10本)	備考
286	円筒体部	タガはくずれて丸味のあ台形。	ℓ(3)、H(2)	橙 (2.5YR 6/8)	1.5	〃 。
287	〃	タガはごく偏平でくずれたM字形。	ℓ(1)、H(2)	明赤褐 (2.5YR 5/6)	1.6～2.2	〃 。
288	〃	タガは偏平で、台形とM字の中間的形態。	m(1)、H(4)	橙 (2.5YR 6/6)	外 1.3 内 1.8	ＳＤ００１出土。
289	〃	タガはくずれてごく偏平。色調は還元色を程する。	m(3)、H(3)	灰黄褐 (10YR 5/2)	2.0	主調査区外堀出土。
290	〃	タガはくずれて丸味のある台形だが、上方が潰れる。	f(4)、H(2)	浅黄橙 (10YR 8/3)	外 2.1 内 1.8	〃 。
291	〃	タガはくずれたM字形で、下方が潰れる。	ℓ(1)、H(3)	橙 (2.5YR 6/8)	2.1	〃 。
292	〃	タガはくずれて偏平のM字形。	ℓ(1)、H(4)	橙 (2.5YR 6/8)	1.1	〃 。
293	〃	タガはくずれたM字形。	m(1)、H(4)	橙 (2.5YR 6/8)	1.8	〃 。
294	〃	〃 。	m(2)、H(3)	橙 (2.5YR 6/6)	外 2.0 内 2.4	〃 。
295	〃	タガは偏平な台形。円形のスカシあり。	ℓ(1)、S(1)、H(2)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	外 2.0 内 2.4	〃 。
296	〃	タガはくずれたM字形。	m(1)、H(4)	橙 (2.5YR 6/6)	外 2.0 内 2.4	〃 。
297	〃	タガは幅広で偏平なM字形。	m(3)、H(2)	橙 (2.5YR 6/8)	2.2～2.3	〃 。
298	〃	タガはやや低く、台形とM字の中間的形態。	m(2)、H(4)	にぶい橙 (5YR 7/4)	外 1.7 内 2.0	〃 。
299	〃	厚手の作り。タガは偏平でくずれたM字形。	m(3)、H(2)	橙 (2.5YR 6/6)	1.7～2.0	主調査区外堀出土。
300	〃	タガは偏平でくずれた台形。	ℓ(1)、H(2)	橙 (2.5YR 6/6)	1.4～1.5	〃 。
301	〃	タガはやや下方が潰れた、偏平な台形。	ℓ(1)、H(2)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	2.1	〃 。
302	〃	タガはやや変形した台形。	m(4)、H(2)	明赤褐 (2.5YR 5/6)	2.1～2.3	〃 。
303	〃	スカシがあるが、半円形の可能性大きい。	m(1)、H(4)	明赤褐 (2.5YR 5/6)	外 1.4 内 3.6	〃 。
304	〃	タガはやや低く、くずれた台形。	ℓ(2)、H(4)	赤 (10R 5/6)	1.4	〃 。
305	〃	タガは偏平で、M字と台形の中間的形態。	ℓ(4)、H(4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	1.4	
306	〃	タガは偏平で鈍いM字形。	m(3)、H(2)	橙 (2.5YR 6/6)	外 2.1 内 2.5	主調査区外堀出土。
307	〃	タガは下方がやや潰れた台形。	m(3)、H(4)	橙 (2.5YR 6/6)	外 2.2 内 1.8	〃 。
308	〃	タガは全く偏平に潰れている。	ℓ(3)、H(2)	橙 (2.5YR 6/8)	外 2.4 内 2.0	〃 。
309	〃	タガは偏平でくずれたM字形。全体に損傷激しい。	f(3)、S(1)、H(1)	明赤褐 (2.5YR 5/6)	外 1.5 内 1.1	
310	〃	内面に窯印「×」あり。外面下部にヨコナデあり。	ℓ(3)、H(2)	にぶい橙 (5YR 7/4)	外 1.6 内 2.2	主調査区外堀出土。
311	〃	内面に窯印あり。	ℓ(1)、S(1)、H(4)	橙 (5YR 6/6)	1.8～2.1	
312	円筒底部	内側が基底面に下るにしたがい肥厚する。	ℓ(1)、H(1)	橙 (2.5YR 6/6)	1.5	主調査区外堀出土。
313	〃	基底部内面がやや肥厚する。	m(3)、H(1)	赤 (10R 5/6)	1.5	〃 。
314	須恵器	甕頸部破片。外面は平行タタキメでカキメを施す。内面は下方が同心円タタキ、上方はヨコナデ。	ℓ(1)、H(4)	灰オリーブ (5Y 6/2)	——	
315	〃	甕体部破片。外面平行タタキメ、内面同心円タタキメ。	H(5)	灰 (N 5/0)	——	

V 結語

四回にわたる二子山古墳の調査により、その墳丘や周堀について明らかになった部分も多く、また、出土した埴輪など、古墳の築造時期を考えるうえで有効な遺物が得られた。それらについて若干のまとめ及び考察を行なうとともに、今後の課題を提示しておきたい。

墳丘

墳丘規模については、復原されている内堀の肩、すなわち、墳丘第一段目をのせる基底部は、その上端部での計測で全長一三五㍍、後円部径六四・五㍍、前方部幅八五・五㍍である。

周堀確認面であるローム層上面での計測では主軸長一三九㍍という数値となるが、旧表土の存在を考慮すれば基底部主軸長はほぼ一三五㍍という現状に近い数値となろう。

また、測量図の前方部前面等の状況から基底部には墳丘第一段との間に若干の平坦部分の存在が予想される。

墳丘の高さについては、近年の丸墓山や瓦塚古墳の調査[註1]で、旧表土面の標高が約一八㍍前後と考えられる状況となったので、その面からでは、後円部約一二㍍、前方部約一四㍍である。

墳丘の平面形態については、前述のいずれの数値を取るにせよ、全長に対する後円部径の比率は約二対一となる。これは、上田宏範氏の「B′（6対3対3）型式」[註2]、宮川徙氏の「八区画型」[註3]椚国男氏の「Ⅶ型」[註4]となり、仁徳陵古墳型の平面形とすることができよう。

墳丘には前方部右西側のくびれ部寄りに造出しが付設される。プランは円弧を描くが、風水による変形が十分考えられる。堺市土師古墳、清寧陵古墳を典型とする、上田宏範氏の「BⅡ群」[註3]であり、埼玉古墳群内では瓦塚古墳が同様の位置に造出しを持つことが確認されている[註5]。

周堀

良好な検出状況とは言い難いが、方形の二重周堀であることは、昭和四二年度第19、39トレンチでの状況から確実と思われる。

方形の二重周堀は古墳群内では稲荷山、瓦塚古墳等四例が知られているが、二子山古墳の場合、後円部背後の外堀の外方のラインは、昭和五五年度の調査成果などから主軸と直交していないことが予想される。その理由としては、地籍図上[註6]に、将軍山古墳西方に円墳と推定される南北に並ぶ二基の古墳が見えているが、そのうちの南の一基が、二子山古墳築造時にすでに所在しており、これを避けたためとも考えられる。昭和四九年度第6トレンチの、農業用水路をはさんだ北側付近に所在すると考えられるが、具体的位置については現在未確認である。

平面規模は、内堀主軸部分で、長さ約一六五㍍、前方部前面側辺長約一二〇㍍、後円部背後側辺長約八七㍍、外堀は主軸部分で長さ約二四三㍍、前方部前面側長辺長約一八八㍍後円部背後側辺長約一七三㍍前後である。

中堤造出し部分の外堀の形態については、現在、徐々に外方に膨れるように復原されているが、今後の調査で確定する必要がある。

周堀の深さについては、後円部北方の外堀（昭和五五年度調査区）内底面

で標高一六・五㍍、前方部前面外堀（昭和五九年度調査区）内底面で一六・八㍍であり、旧表土面の標高が一八㍍前後とすると、築造時には少くとも地表下一・二～一・五㍍前後の深さがあったことになる。珪藻化石の分析結果では、沼沢地的環境が予想されている。

中堤及び中堤造出し

中堤部の復原整備の盛土により、わかりにくくなっているが、前方部西方に、中堤の一部が土堤状に遺存している。昭和四二年の調査時では、前方部北西コーナーの北方から中堤造出しの南二〇㍍付近まで、長さ約四六㍍北側で幅は約八・四㍍、標高一八・五㍍、南側で幅約一二・八㍍、標高一八・九㍍の土堤状を呈していた（図版二―1）。旧表土面の標高が一八㍍前後とすると、少なくとも一㍍前後の盛土があったことになろう。

中堤の幅については、昭和四二年度各トレンチでの内堀、外堀各立上り下部（堀底部分）での計測では、中堤造出し南の第10トレンチで約一二㍍、後円部北の第12トレンチ付近で約一三㍍、墳丘東側の第3トレンチで一一・五㍍と予想され、第5トレンチで約一五㍍である。数値のばらつきはトレンチ調査のみの成果であり、立上りが緩やかなためもあろう。

中堤造出しは、地籍図では周囲の水田より一段高く、畑地となっていた。(註6) 平面形は台形というより撥形で、外堀外方とを連絡するブリッジが付設され面積は約一、〇四〇平方メートルあり、昭和四二年度第28トレンチでは盛土の存在が確認された。古墳群内では、稲荷山古墳(註7)に同様な中堤造出しが確認されているが、方形であり、二子山古墳のものとはやや趣を異にしている。なお、古墳群内の中規模前方後円墳である瓦塚古墳(註8)では、同位置に造出しが存在しないことが判明している。

前方後円墳の中堤造出しについては他に類例を見出せないが、墳丘外部の方形の施設として考えると、福岡県八女市岩戸山古墳の「別区」が想起されよう。これは後円部北東の外堤に接して付設され、近年の調査で、一辺約四三㍍の方形の規模を有することが判明している。(註9)『筑後国風土記』（逸文）はこれを「衙頭」と呼び「政所」(註10)（役所）と伝えるが、埴輪や石人の出土により祭祀の場であったことが窺える。二子山古墳の中堤造出しは、その規模では及ばないものの、性格的には、同じような墳丘外部での大規模な祭祀の場であったことが考えられる。

今後、前方後円墳の調査では、こうした付属施設にも十分な配慮がなされねばならないであろう。

出土遺物と古墳の築造時期

各年度の出土遺物で、古墳の築造時期を考察するうえで有効なのは、埴輪及び須恵器である。いずれも完形品がなく詳細な考察には不十分な内容である。

埴輪は円筒及び形象があるが、円筒は外面がタテハケメのみで、B種ヨコハケメ等による二次調整の認められるものは見出せない。タガはややくずれを見せるM字形や台形を基本としており、川西宏幸氏はこれを、同氏の編年体系の中では、第V期(註11)に比定している。ただ、同氏は同時期の畿内の円筒埴輪に認められないことから「異例」と表現した、方形や半円形のスカシを有する破片が、客体的ではあるがやや目についた。

二子山古墳の円筒埴輪を内容が比較的明らかな、古墳群内の大形の前方後円墳である稲荷山古墳や鉄砲山古墳の埴輪と比較した場合、タテハケメで調整され、スカシは円形のみでなく、方形・半円形のものも含む稲荷山古墳(註7)のそれとおおむね近似した特徴を有する。しかし、稲荷山古墳の埴輪は相対的

にタガのくずれが小さく、また、量的には少ないが、B種ヨコハケメを使用する破片が見出せる点など、同じV期でも二子山古墳の埴輪より先行する要素を指摘し得る。

また、鉄砲山古墳[註12]のものは、タテハケメ調整のみであるが、タガのくずれが一層著しく、スカシも円形のものしか認められない。二子山古墳の埴輪より後出するとみて誤りがないが、やや時間的隔りを感じさせる。

時間的な先後関係は、稲荷山古墳は、その出土と伝えられる須恵器[註7]がTK23型式ないしTK47型式であり、田辺昭三氏の年代観に従えば、五世紀末～六世紀初頭[註13]頃の築造である。また、鉄砲山古墳は出土した須恵器の内容[註12]が貧弱だが、立上りの退化した有蓋杯（又は高杯）の破片があり、おおよそ六世紀後半代、早くても中葉を遡らないと思われる。

以上、埴輪の特徴から推定される、二子山古墳の築造時期は六世紀前半代しかも、その埴輪は鉄砲山古墳より稲荷山古墳の埴輪により近い特徴を有する点に時間的な近接性を認めるならば、その中ば前後の時期に考えておくのが最も妥当ではなかろうか。

また、須恵器も破片のみの出土なので型式の帰属を決定するには不十分であるが、大形化、長脚化を示すものと思われる高杯脚破片があるなど、Ⅱ期[註13]でもその早い時期の所産である可能性が大きく埴輪の年代観と矛盾しない。

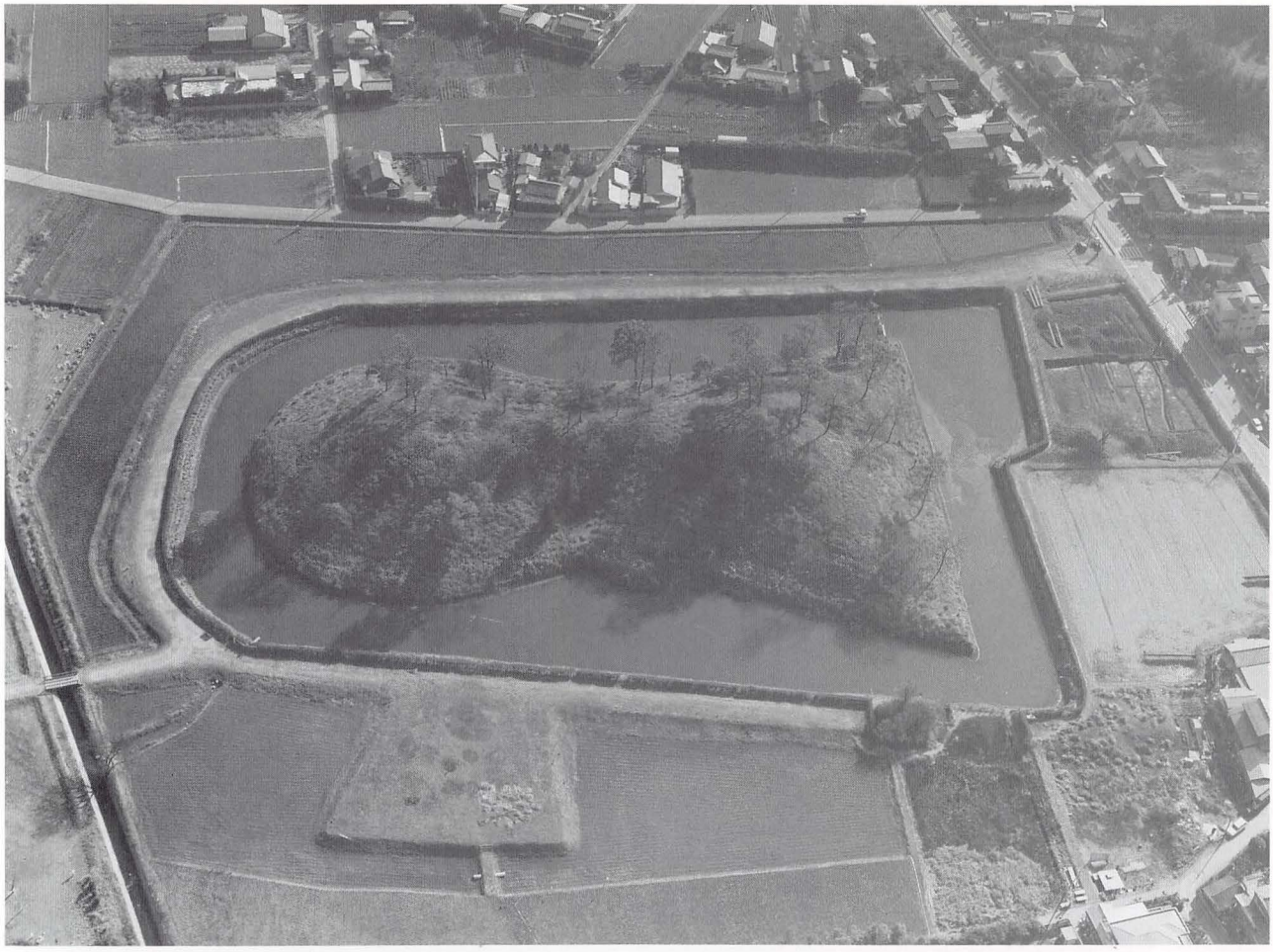
古墳群内の八基の前方後円墳のうち一〇〇㍍以上の主軸長を持つ、稲荷山、二子山、鉄砲山、将軍山の各古墳は、全長七九㍍の、中の山古墳や他の四古墳とは、その規模において一線を画し、古墳群造営集団内の最高首長権の推移を示すものであろう。[註14]

二子山古墳についても今回報告の調査で、その規模、範囲や築造時期がある程度明らかになったが、これをさらに明確にするために、細部の確認調査は今後とも必要である。

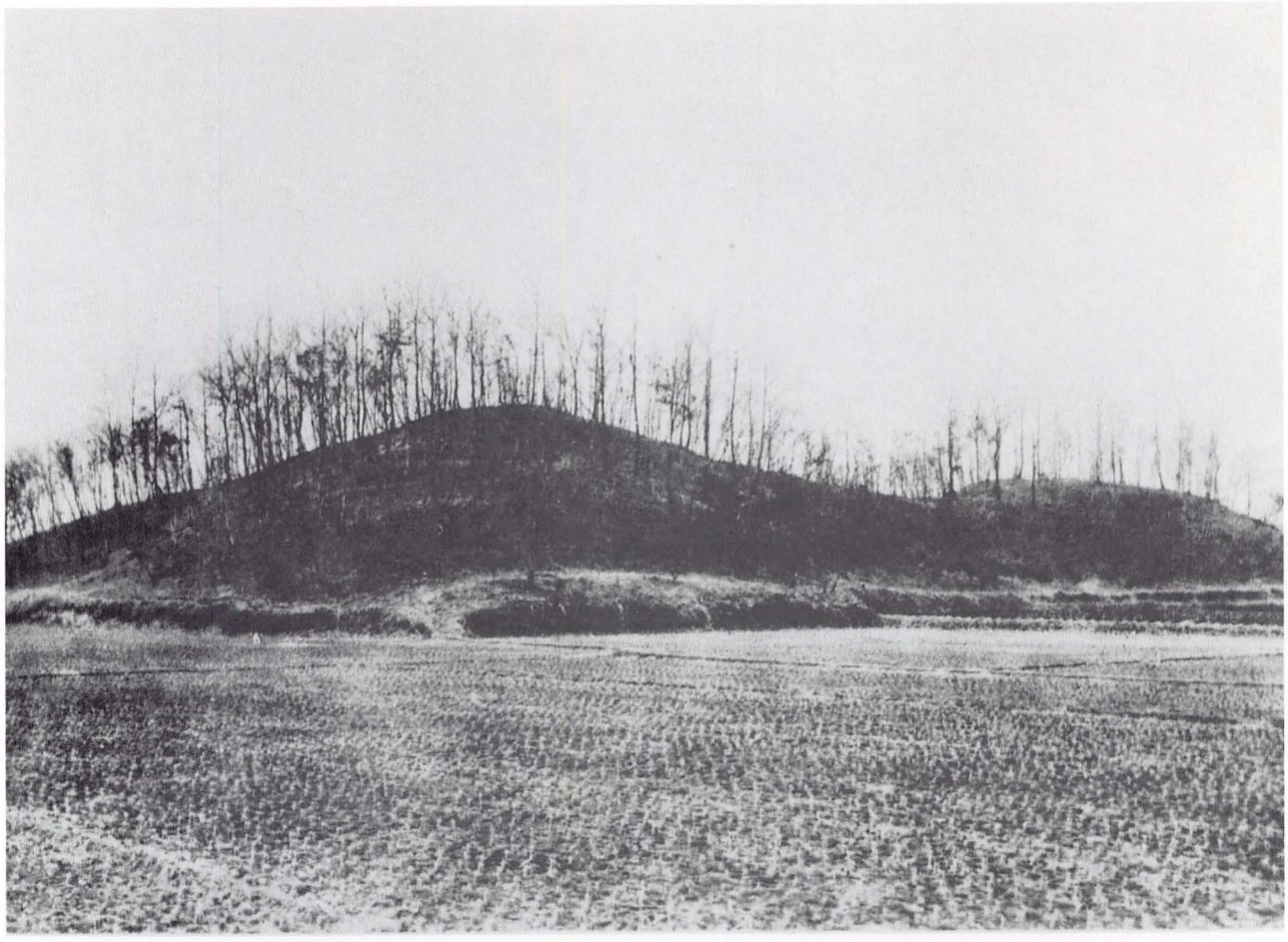
註1　若松良一　「丸墓山古墳周堀範囲確認調査及び整理概要報告」『資料館報No.17』県立さきたま資料館　昭和六一年七月
瓦塚古墳については県立さきたま資料館実施の昭和六一年度の調査による。
註2　上田宏範　『前方後円墳』　学生社　昭和四四年一〇月
註3　宮川徙、他「10　メスリ山古墳の墳丘築造企画の復原について」『メスリ山古墳』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第35冊）　奈良県教育委員会　昭和五二年一二月
註4　椚国男　『古墳の設計』　築地書館　昭和五〇年四月
註5　昭和五七年度の調査で前方部西（右）側面に造出しを確認したが、昭和六一年度の調査ではその反対位置に造出しが存在しないことが判明した。昭和五七年度の調査については左記文献を参照。
『瓦塚古墳』　埼玉県教育委員会　昭和六一年三月
註6　左記文献P21の図を参照。
『埼玉稲荷山古墳』　埼玉県教育委員会　昭和五五年一一月
註7　註6の文献に同じ。
註8　註5の文献参照。
註9　佐田茂、他　『岩戸山古墳』　八女市教育委員会　昭和四七年三月
註10　『風土記』（日本古典文学大系2）　岩波書店　昭和三三年四月
註11　川西宏幸　「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号　日本考古学会　昭和五三年九月
註12　『鉄砲山古墳』　埼玉県教育委員会　昭和六〇年三月
註13　田辺昭三　『須恵器大成』　角川書店　昭和五六年七月
同氏は稲荷山古墳の須恵器をTK47型式に比定されているが、その時期の根拠は、稲荷山古墳出土の金錯銘鉄剣の「辛亥年」を西暦四七一年とする考え方による。
註14　この他、大円墳である丸墓山古墳については、出土した埴輪から六世紀前半の可能性が強い。円筒埴輪片に方形や半円形のスカシが見出せないが、出土点数も少ないので、二子山古墳や稲荷山古墳の埴輪より確実に新しいと断言できない。
註1の文献参照。

図

版



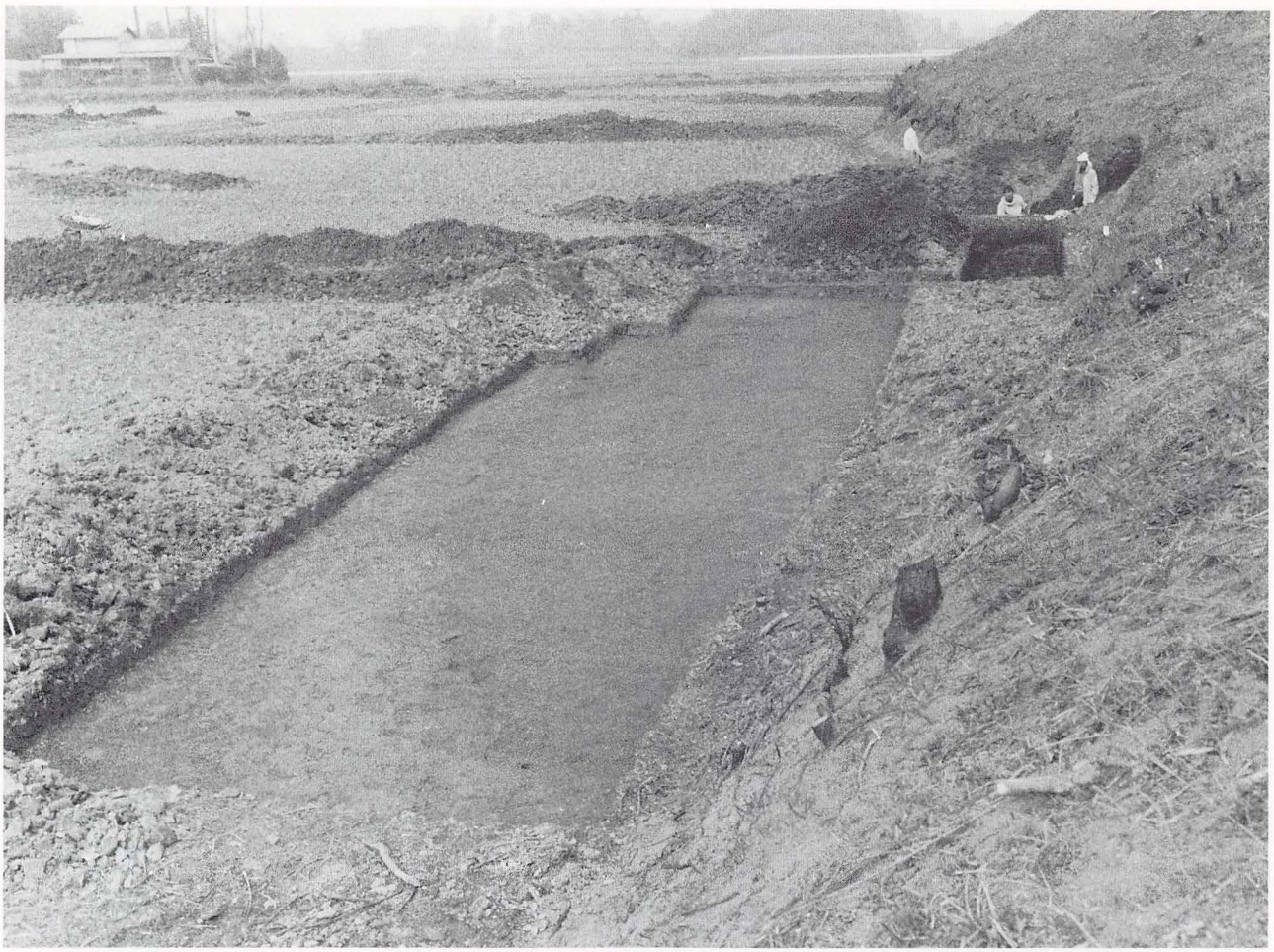
1　二子山古墳航空写真（昭和59年12月撮影）



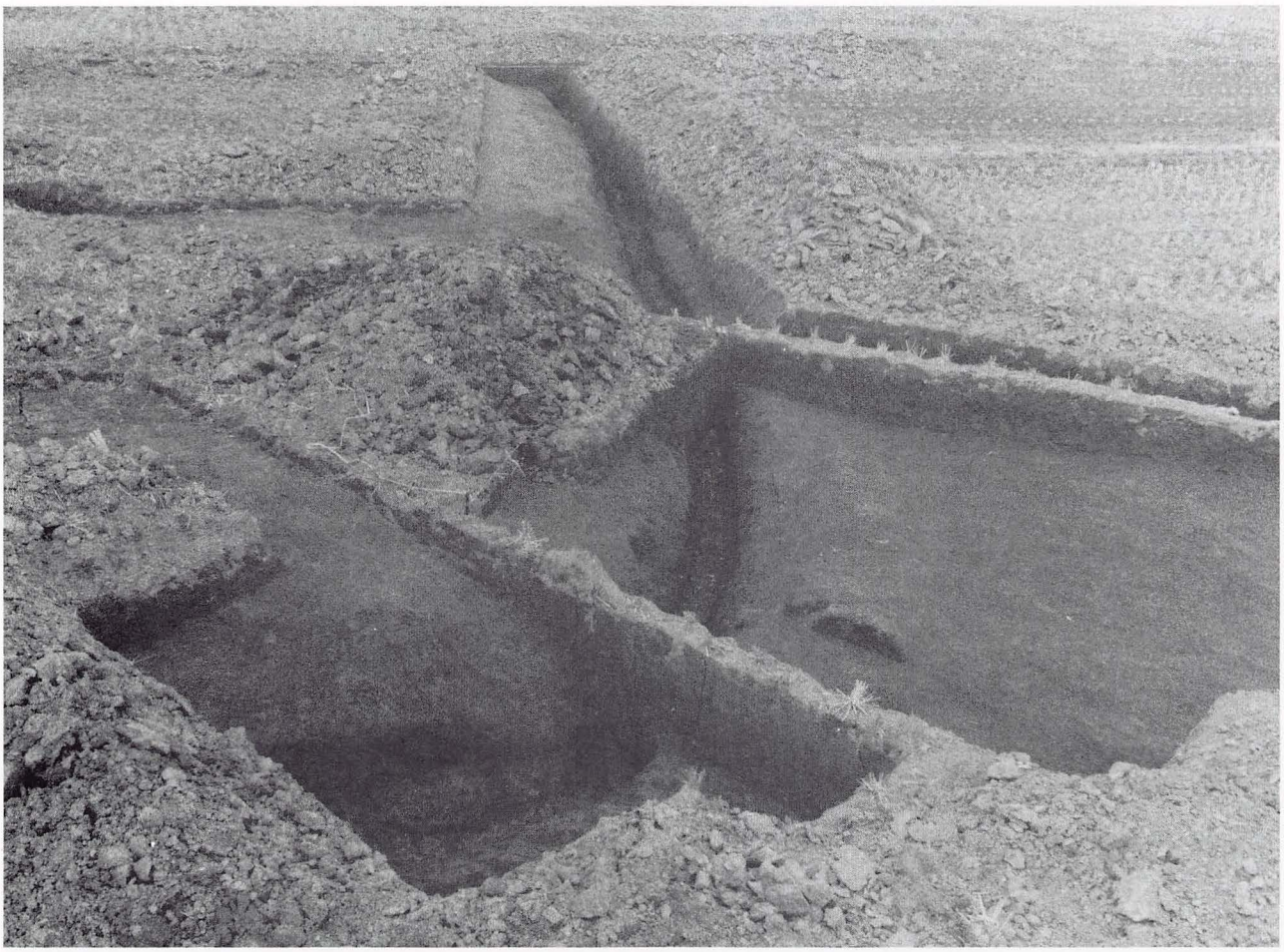
2　二子山古墳近景（『埼玉縣史』より転載）

1　前方部西方中堤遠景（昭和42年度調査時）

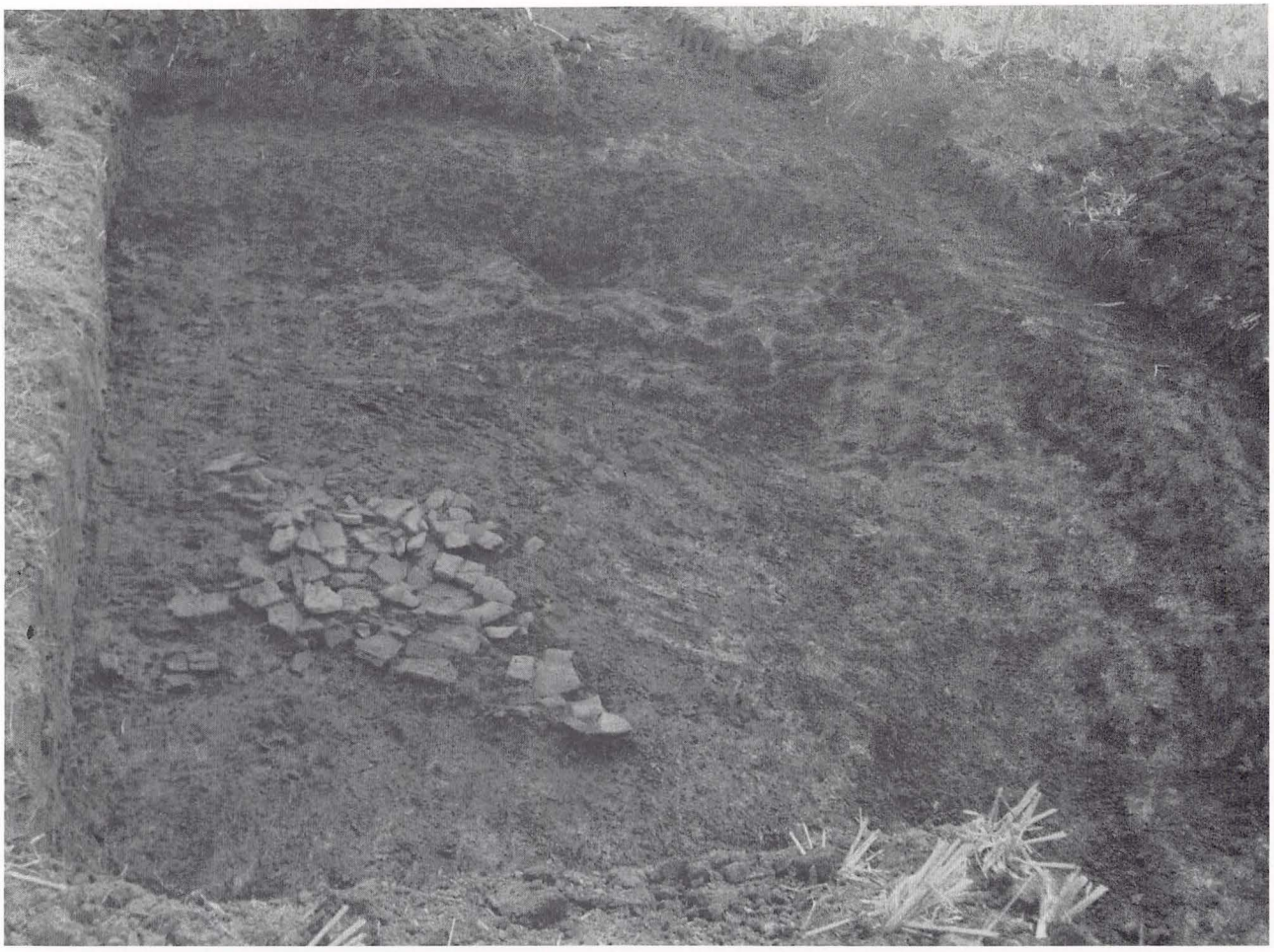
2　昭和42年度第12トレンチと後円部



1　昭和42年度第10トレンチ南拡張区



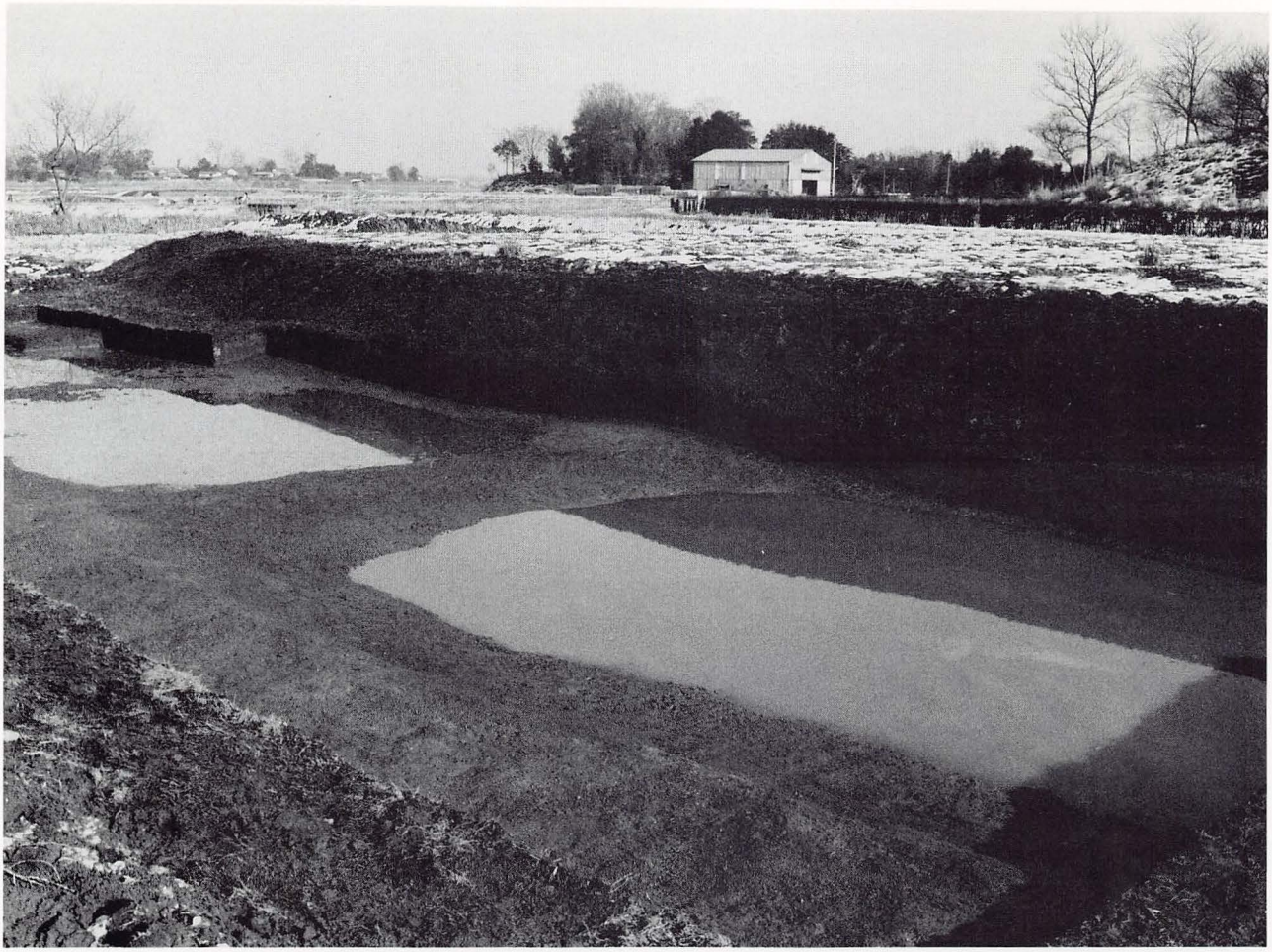
2　昭和42年度第27トレンチ拡張区及び第34トレンチ



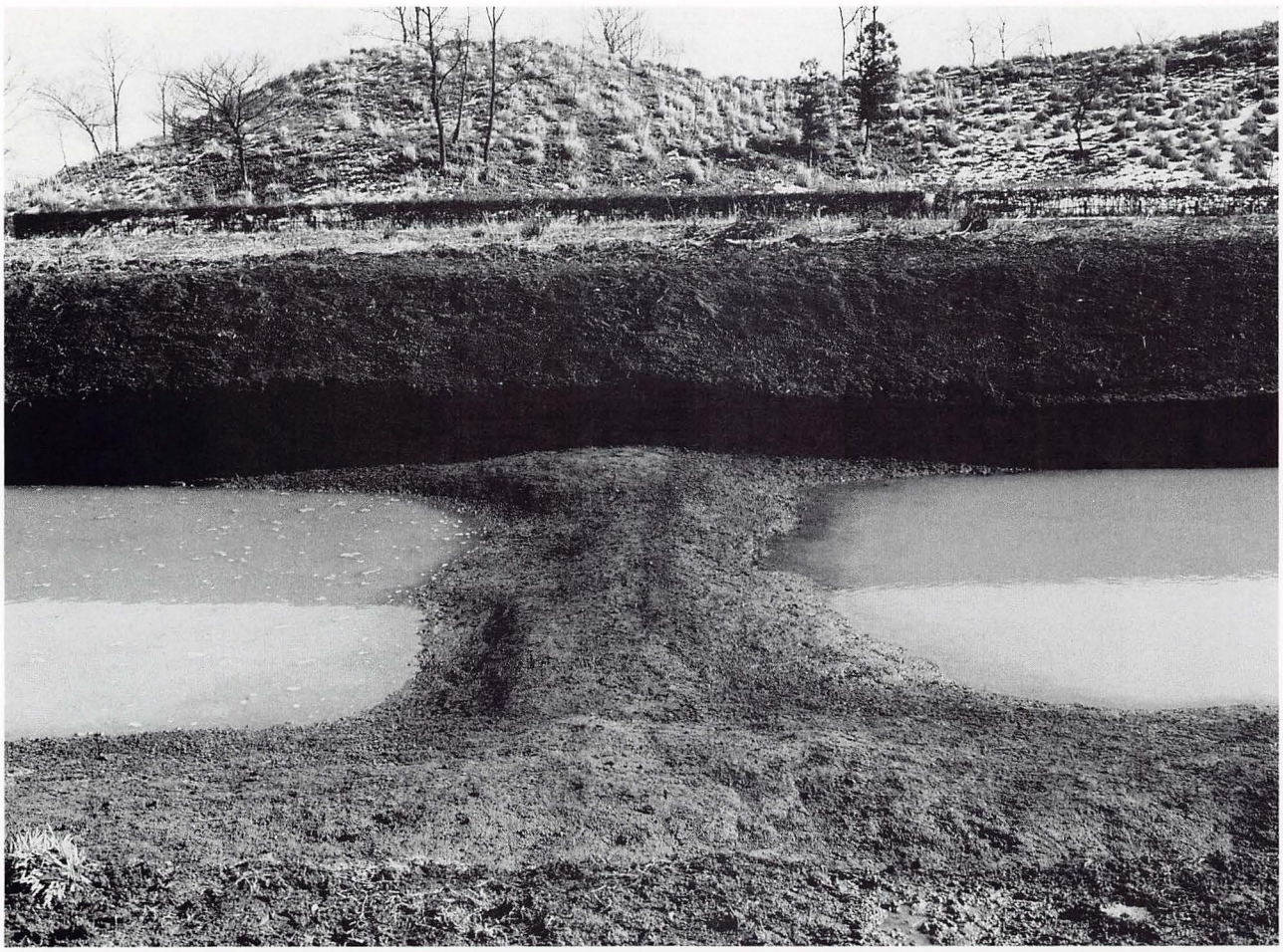
1　昭和42年度第41トレンチ埴輪出土状況

2　昭和42年度第４トレンチ埴輪出土状況

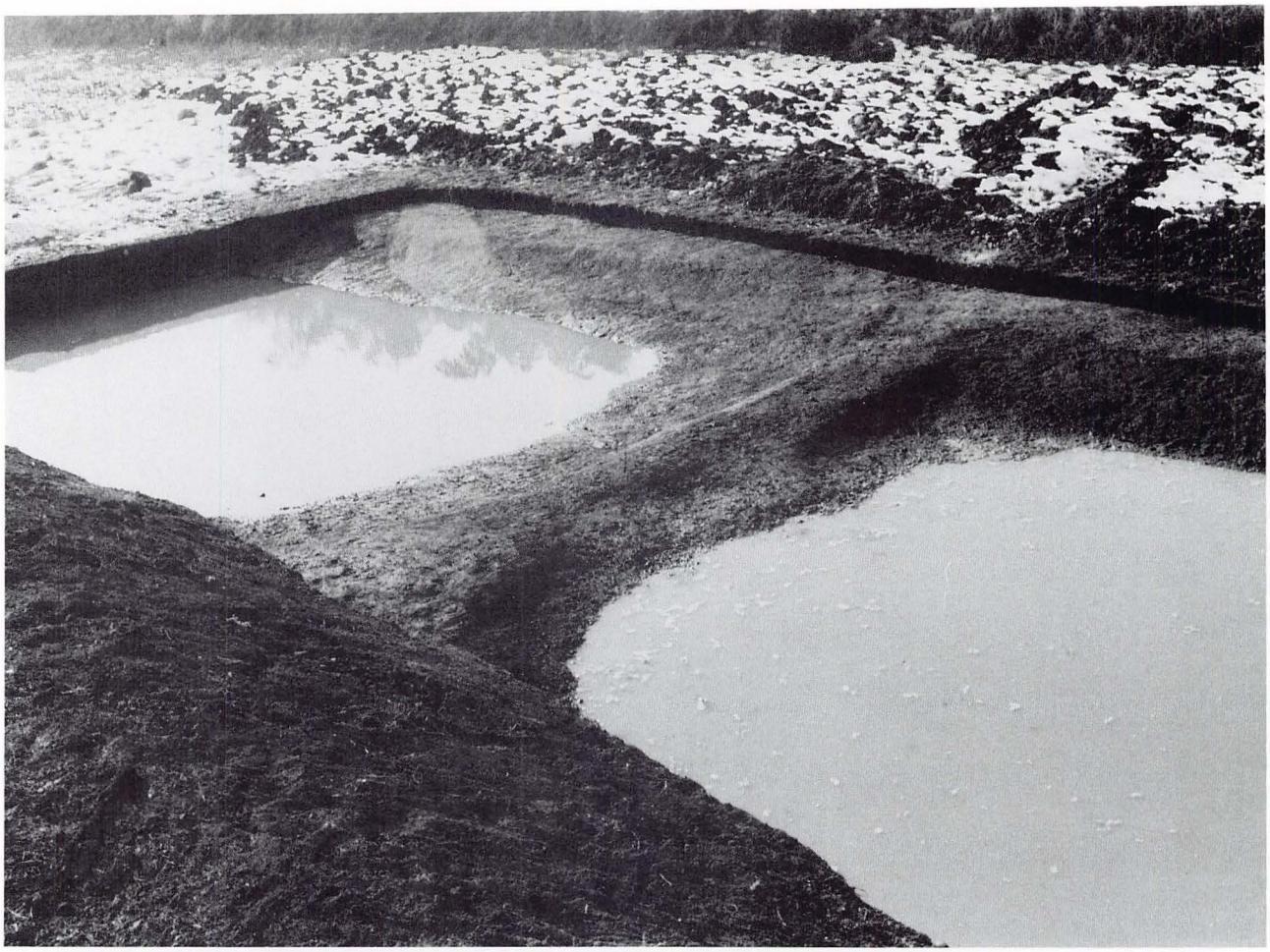
図版五



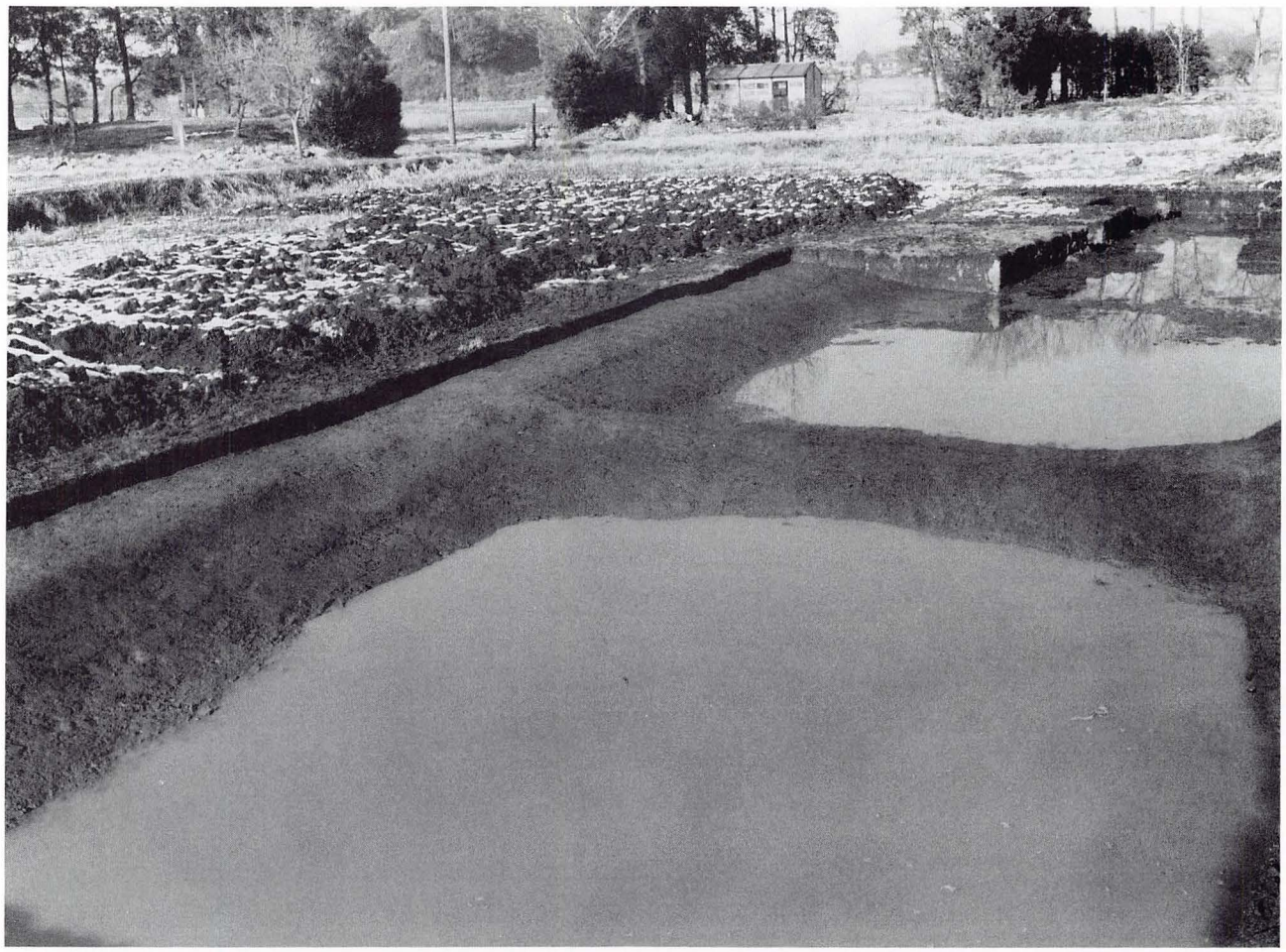
1　昭和49年度造出し部調査区近景（西から）



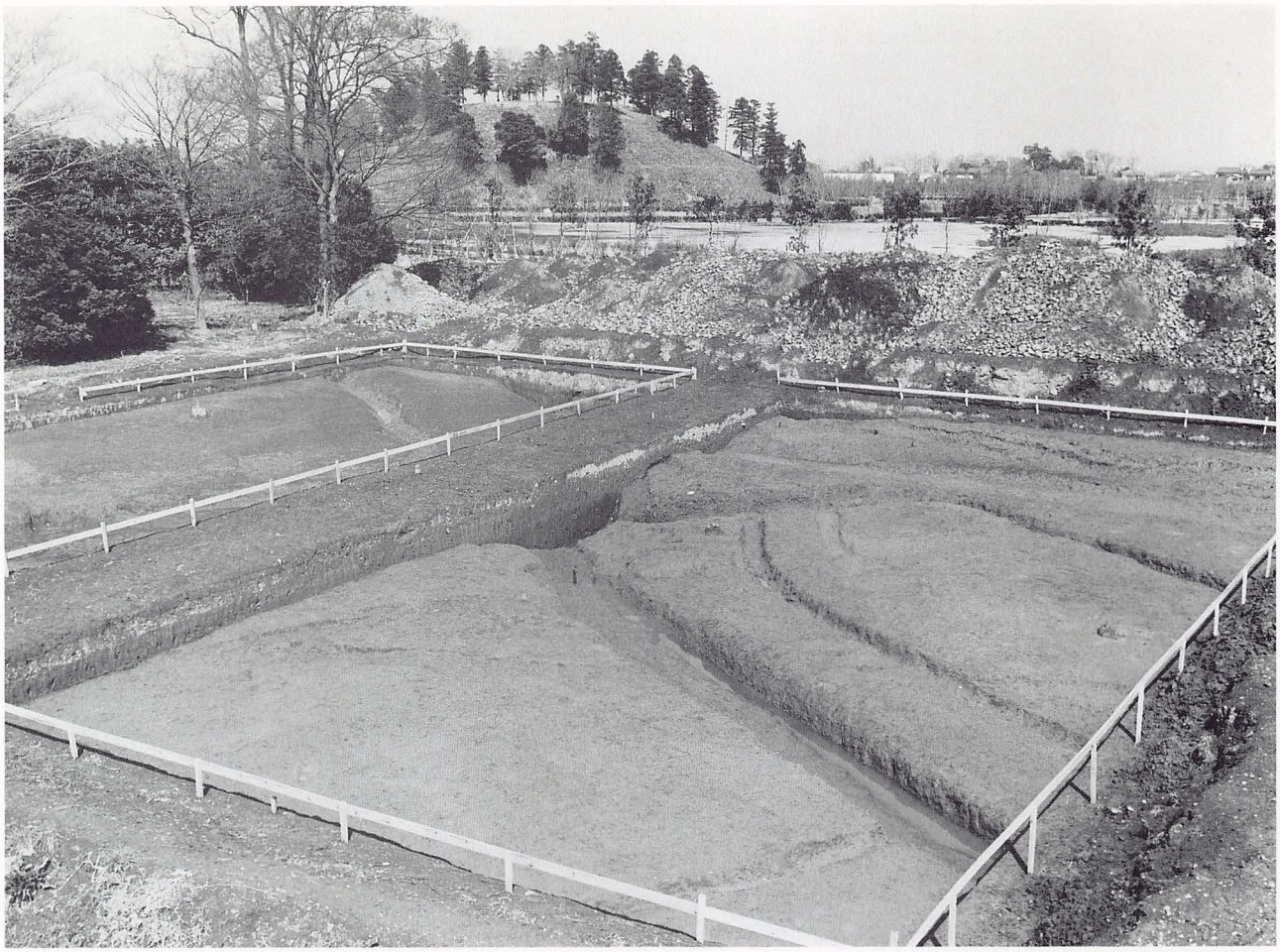
2　昭和49年度造出し部調査区ブリッジ



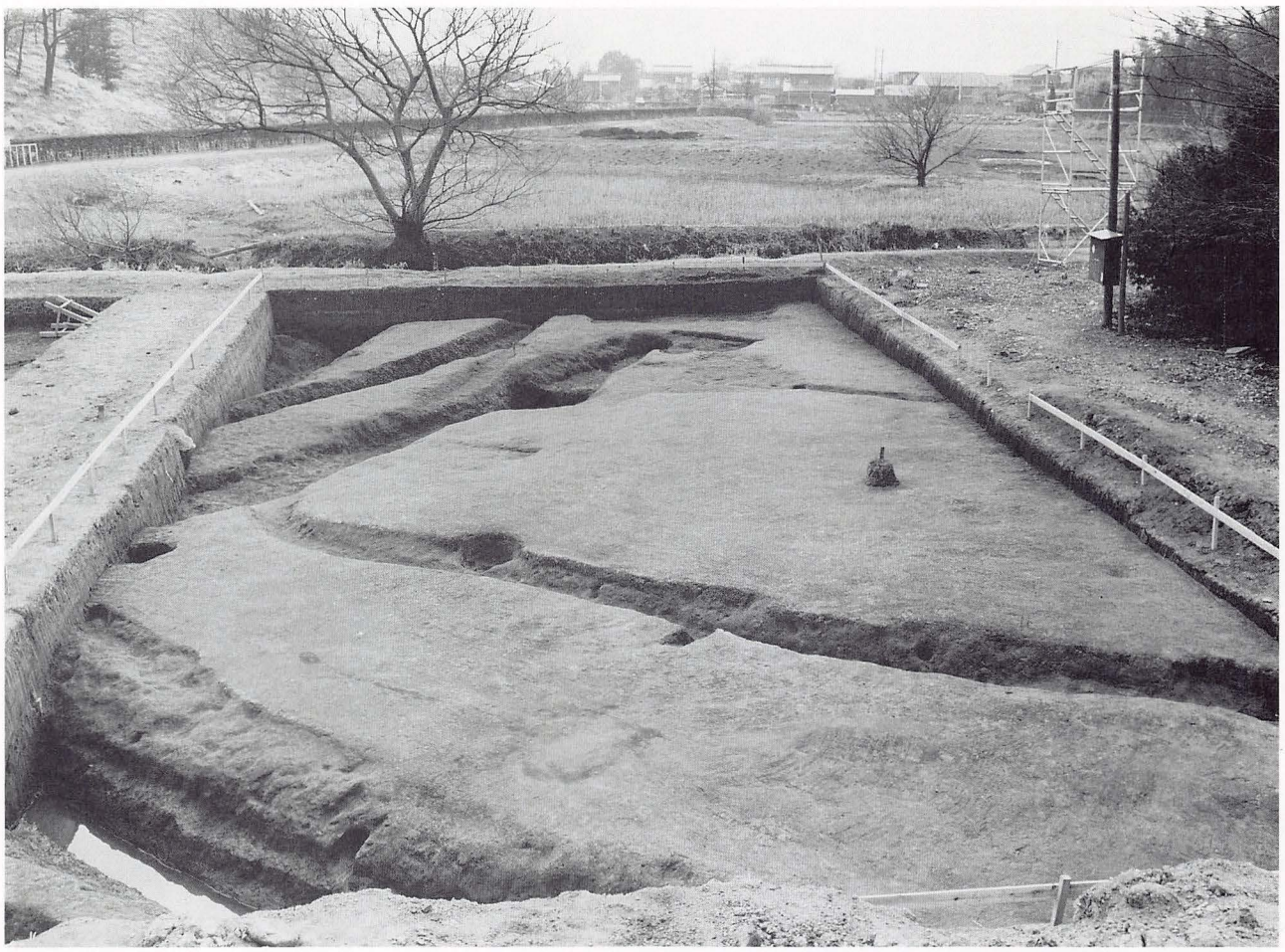
1　昭和49年度調査区造出し部調査区ブリッジ（西から）



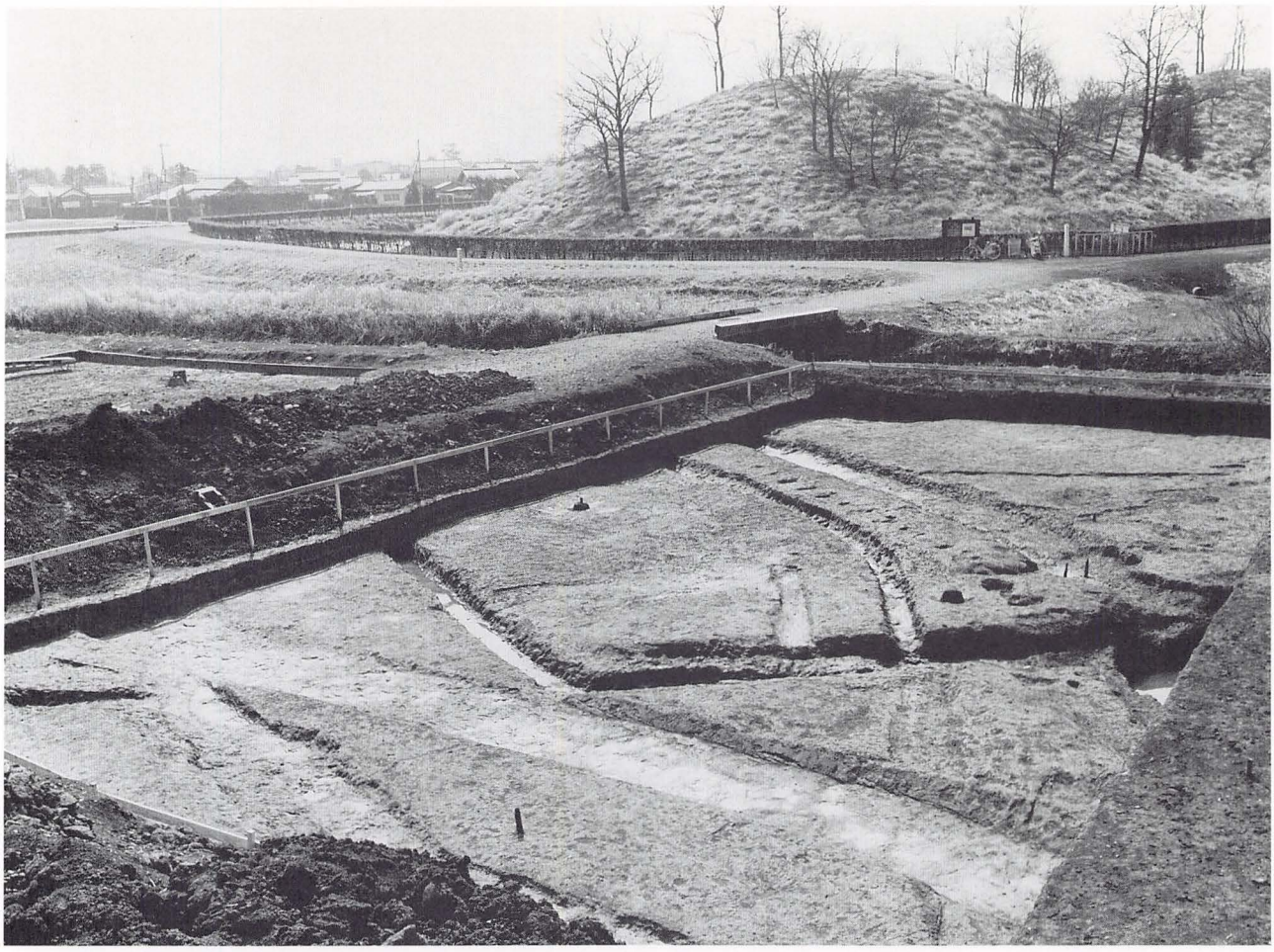
2　同　　上（南から）



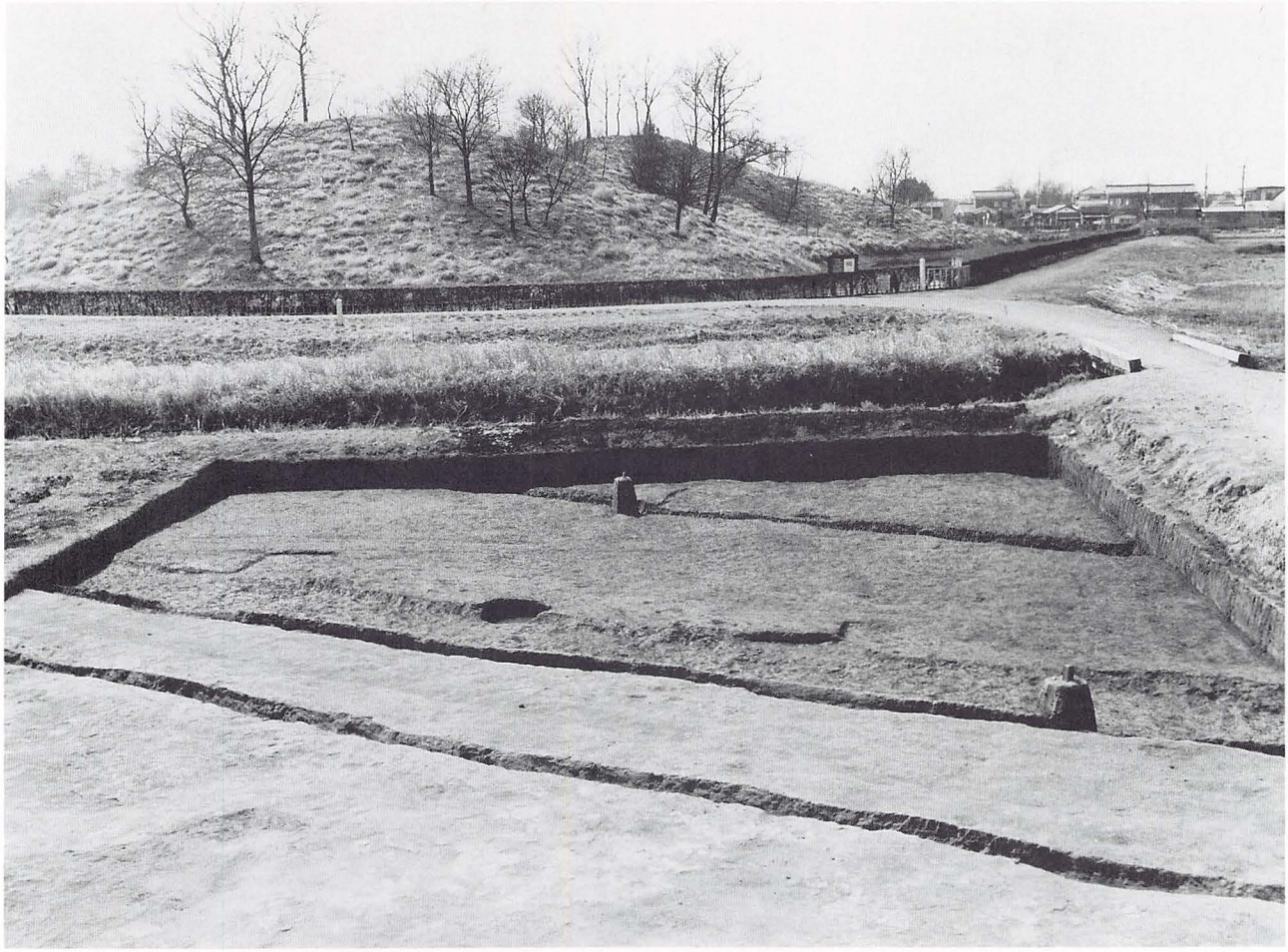
1　昭和55年度西A、B調査区近景（南から）



2　昭和55年度西B調査区全景（北から）

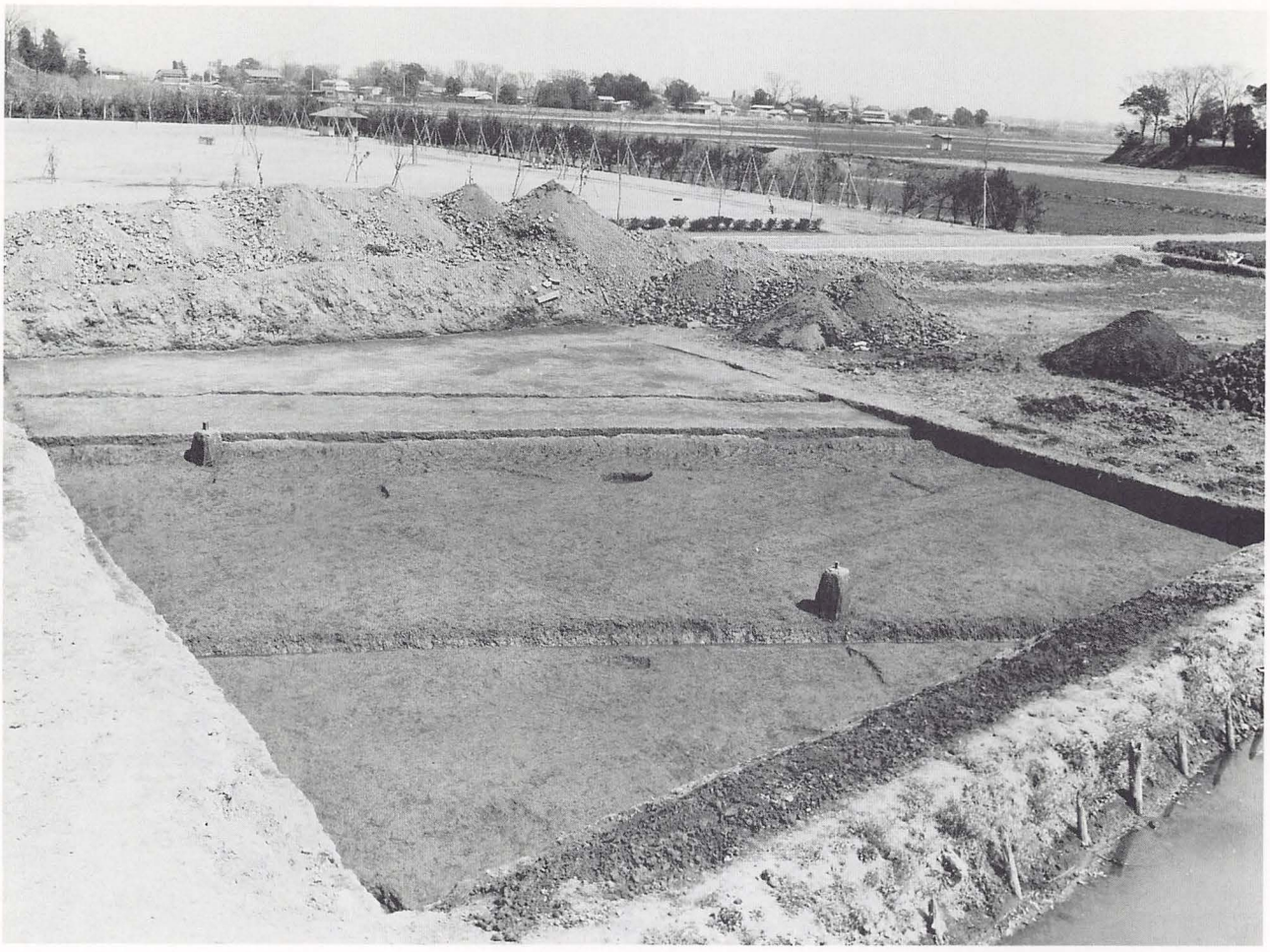


1　昭和55年度西A調査区全景（北から）



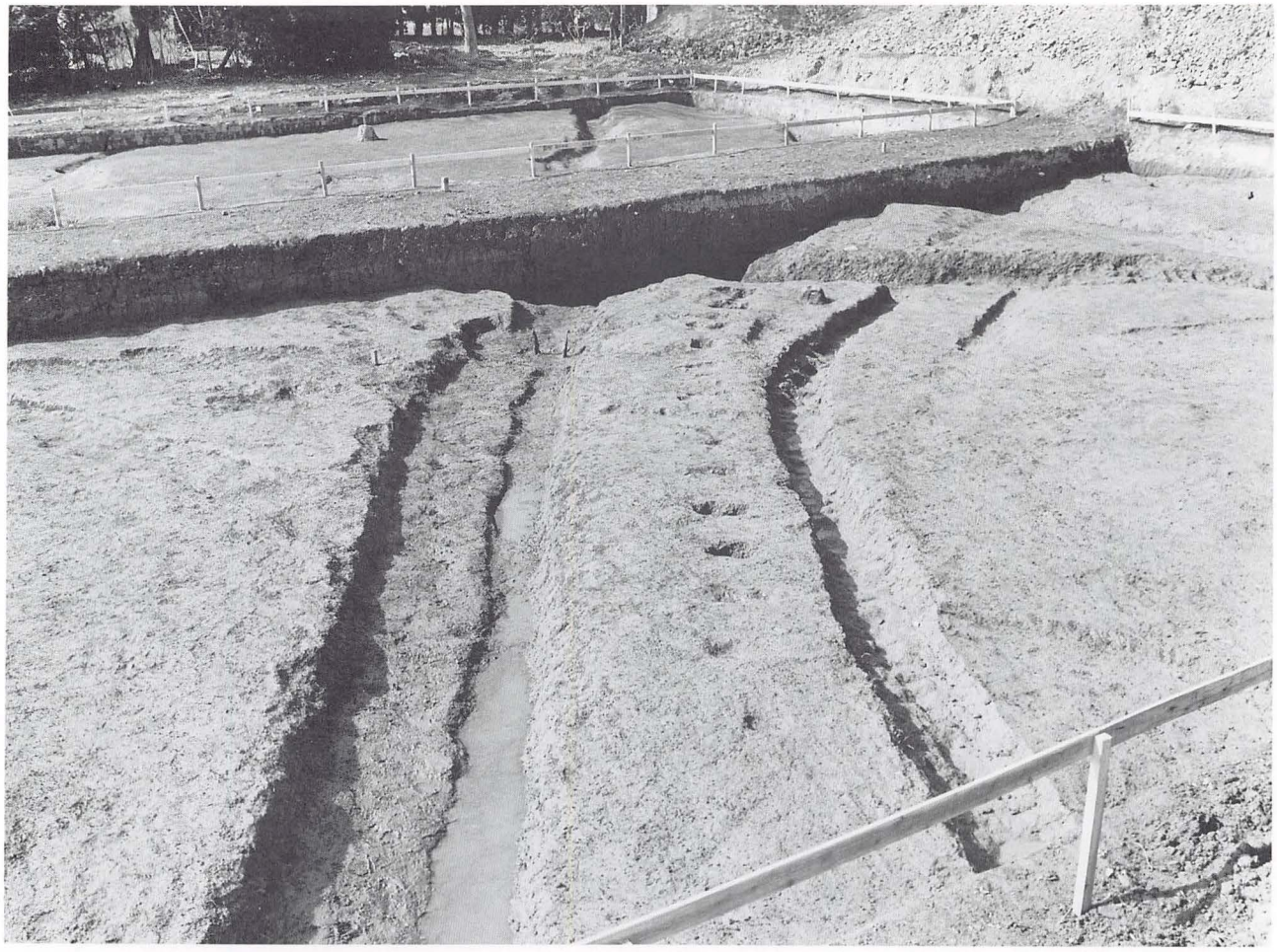
2　昭和55年度東調査区全景（北から）

図版九

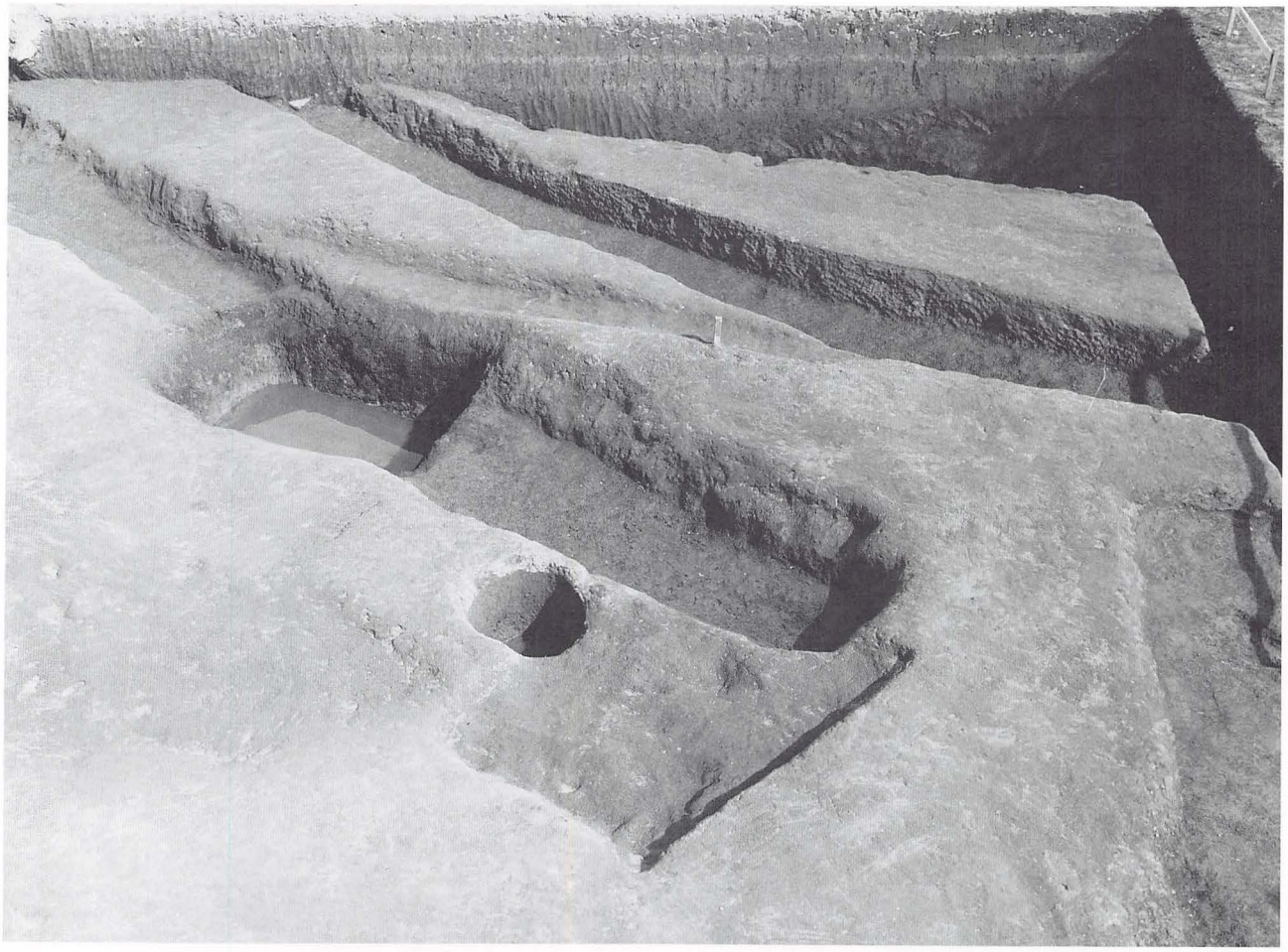


1　昭和55年度東調査区全景（西から）

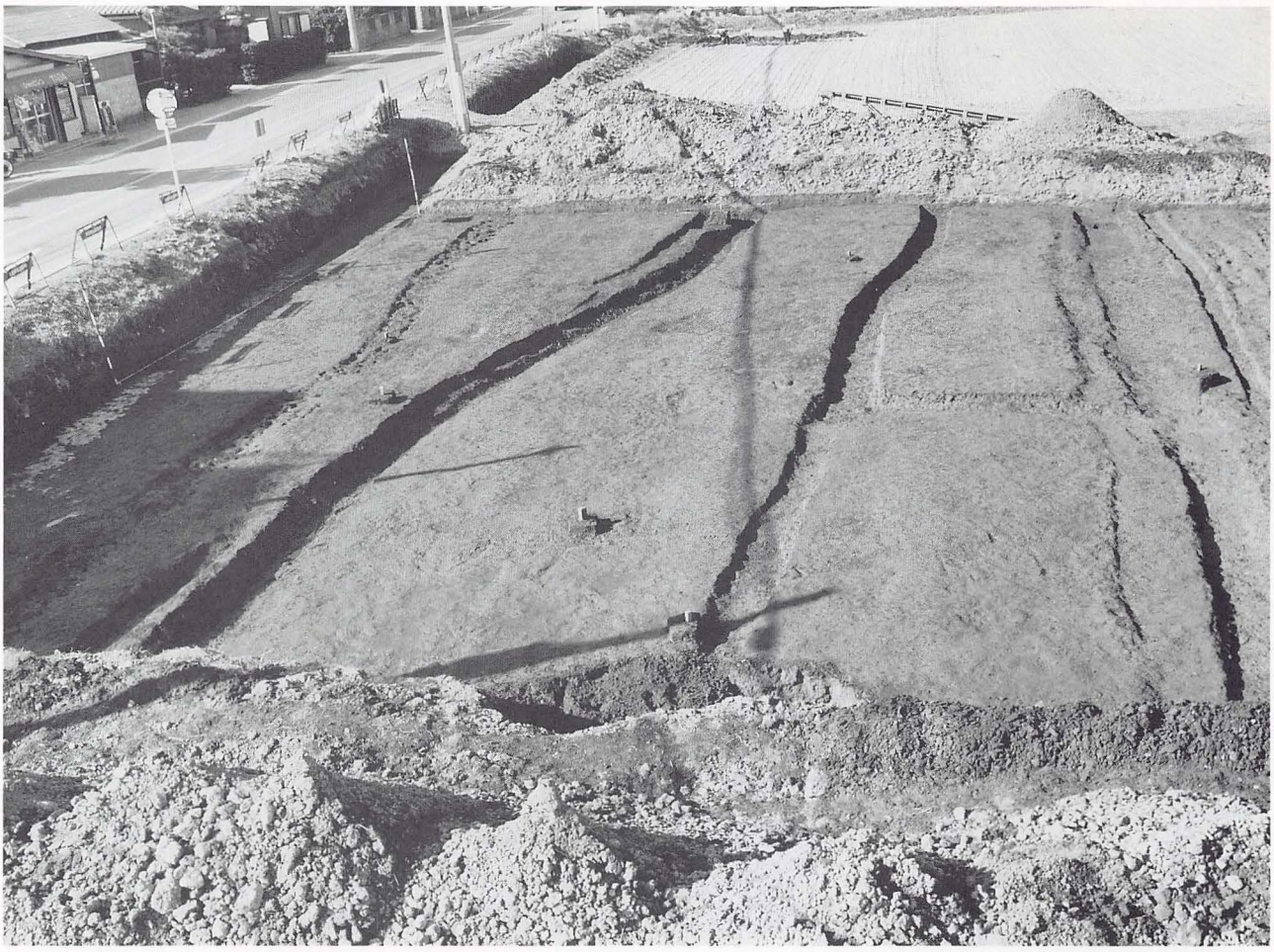
2　昭和55年度東調査区北半部分（南東から）



1　昭和55年度西A調査区溝（南から）



2　同上、西B調査区土壙及び溝（北西から）



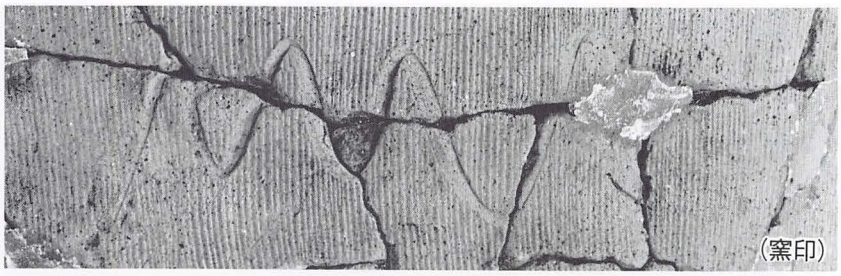
1　昭和59年度主調査区近景（南半）

2　同　　上（北半）

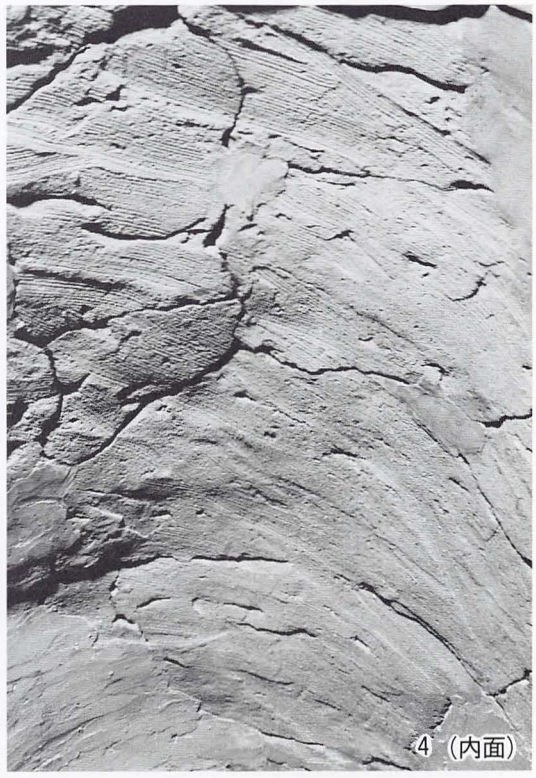
1　昭和59年度主調査区溝（南東から）

2　昭和59年度主調査区遺物出土状況（北西から）

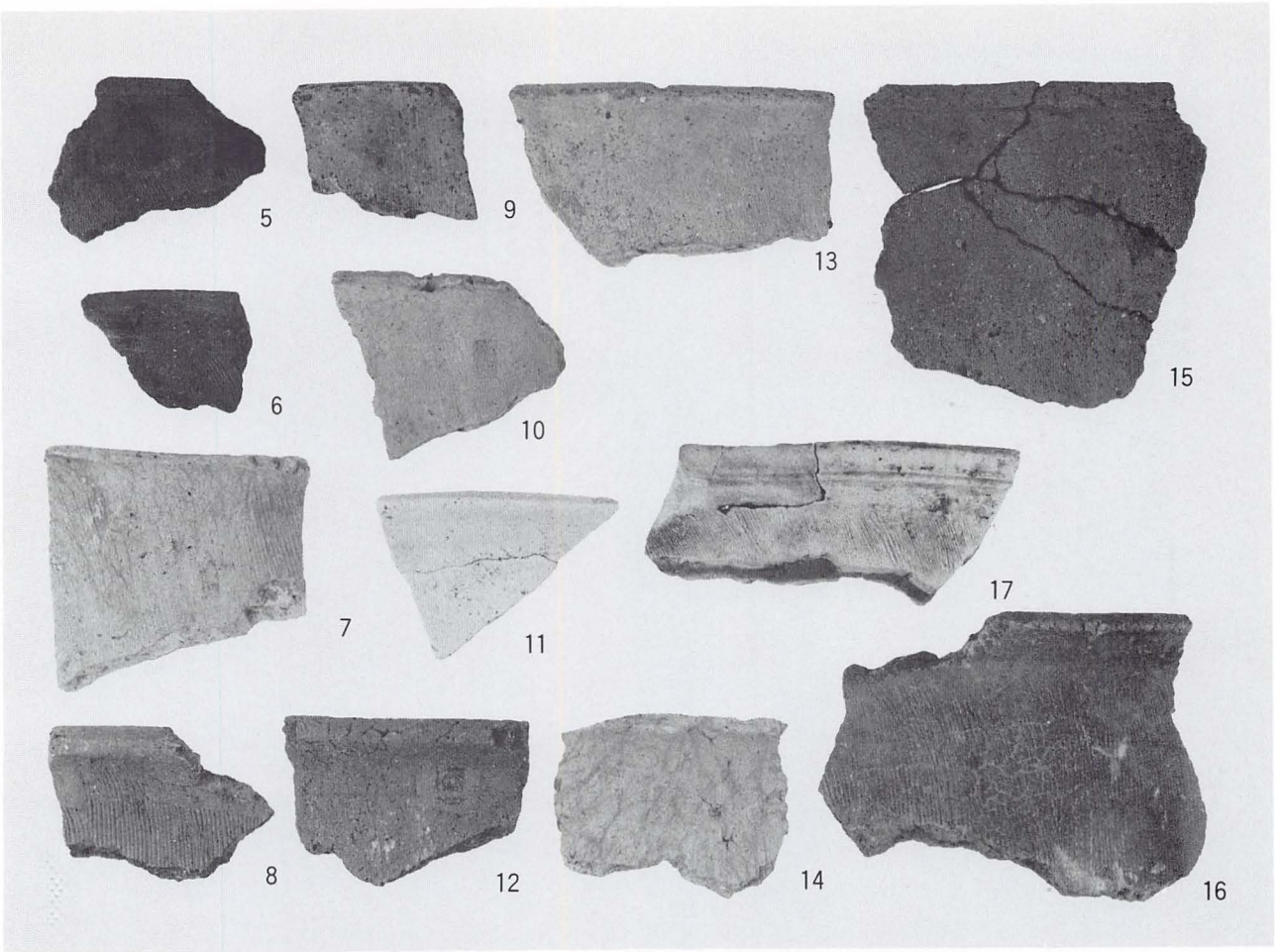
昭和42年度調査出土埴輪（1）



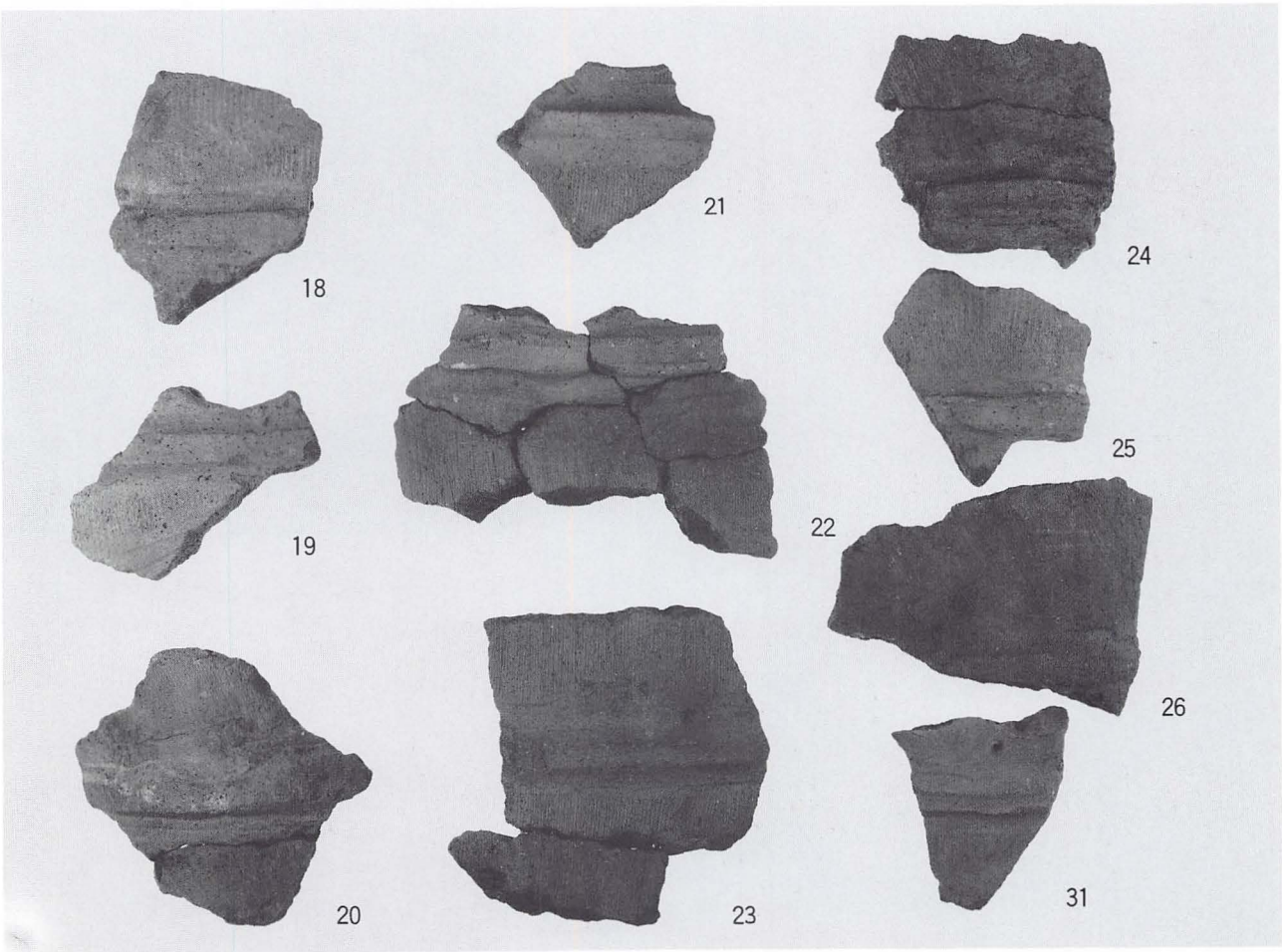
昭和42年度調査出土埴輪（2）



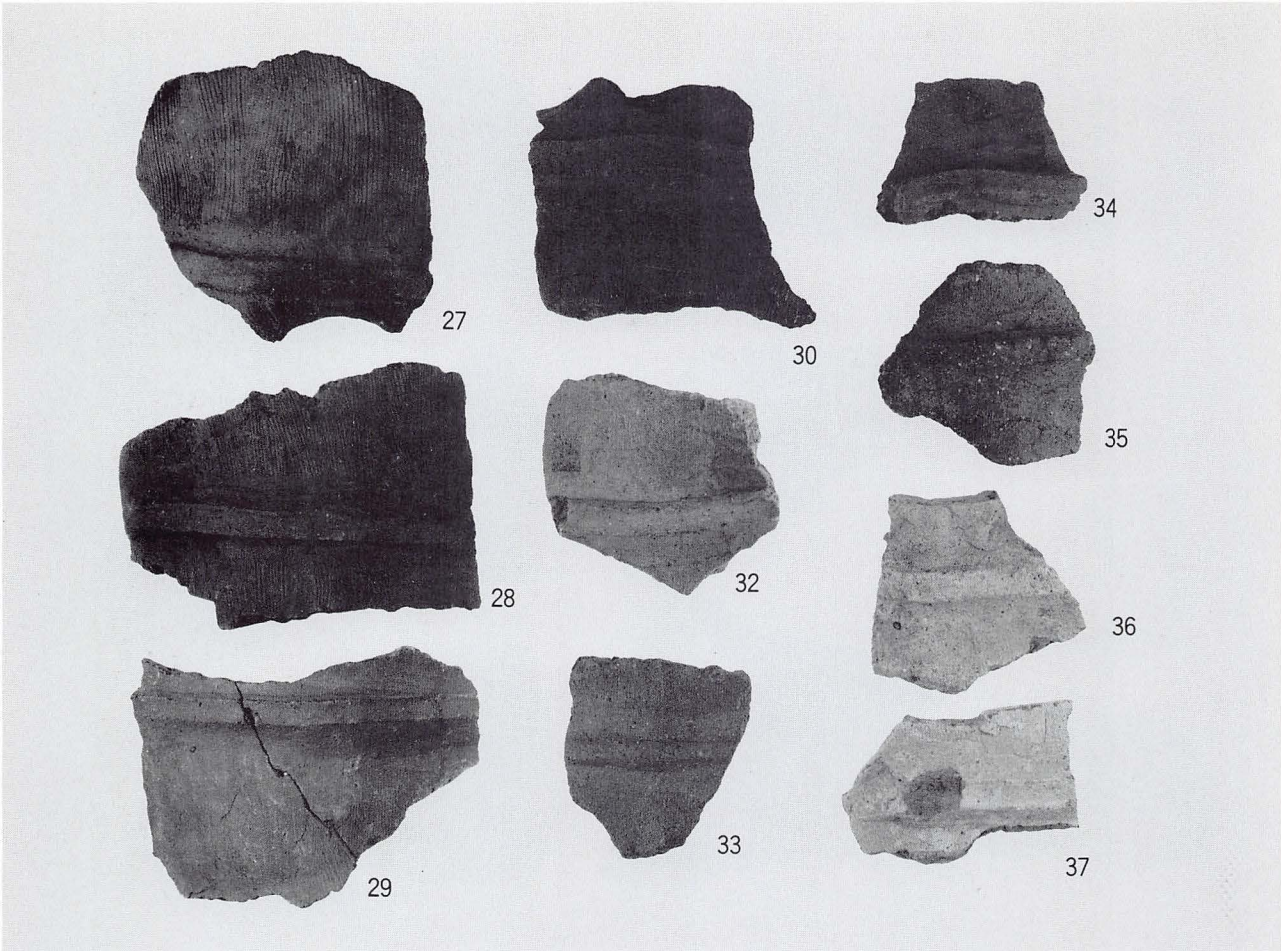
昭和42年度調査出土埴輪（3·4）



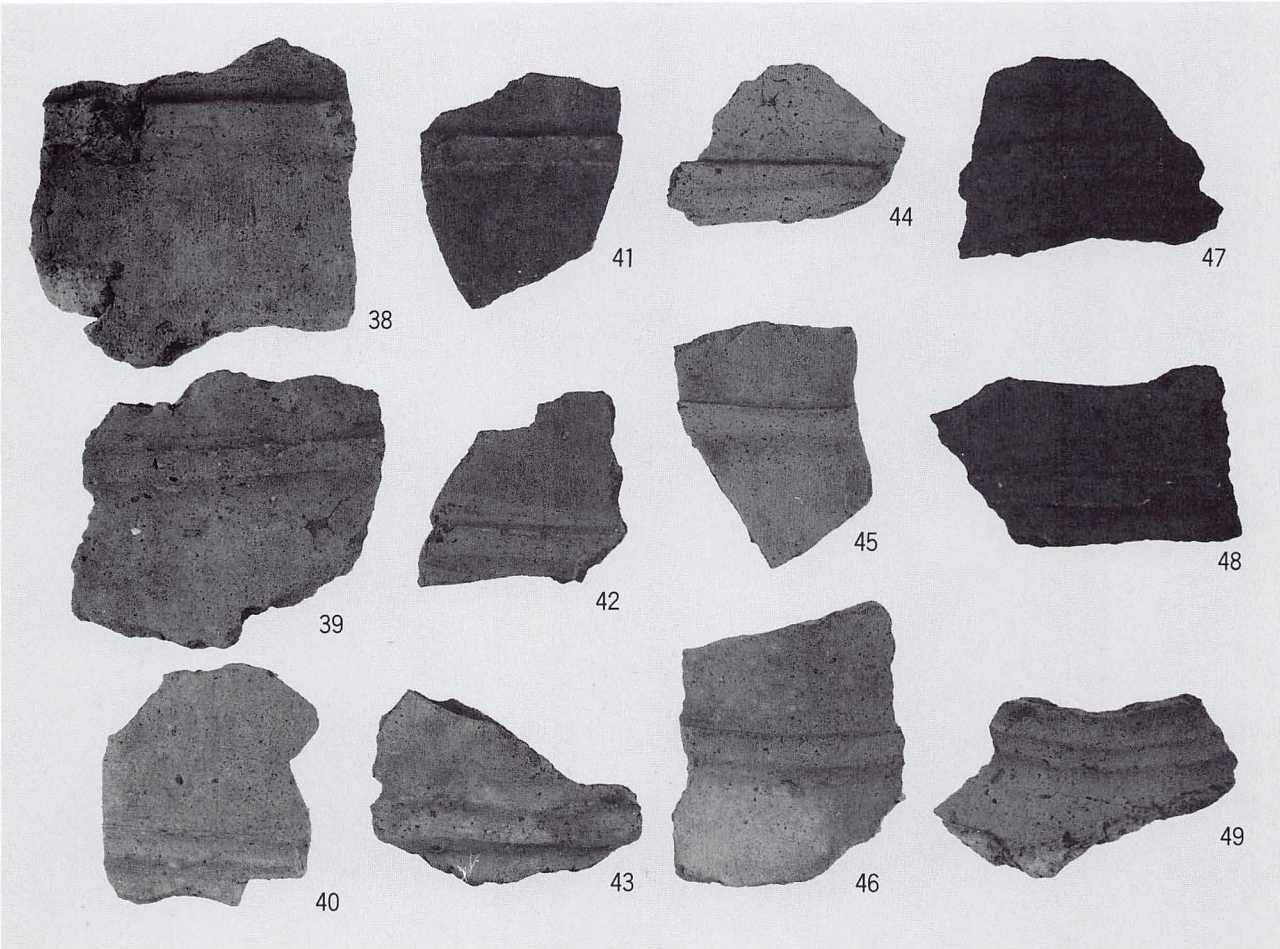
1　昭和42年度調査出土埴輪（5～17）



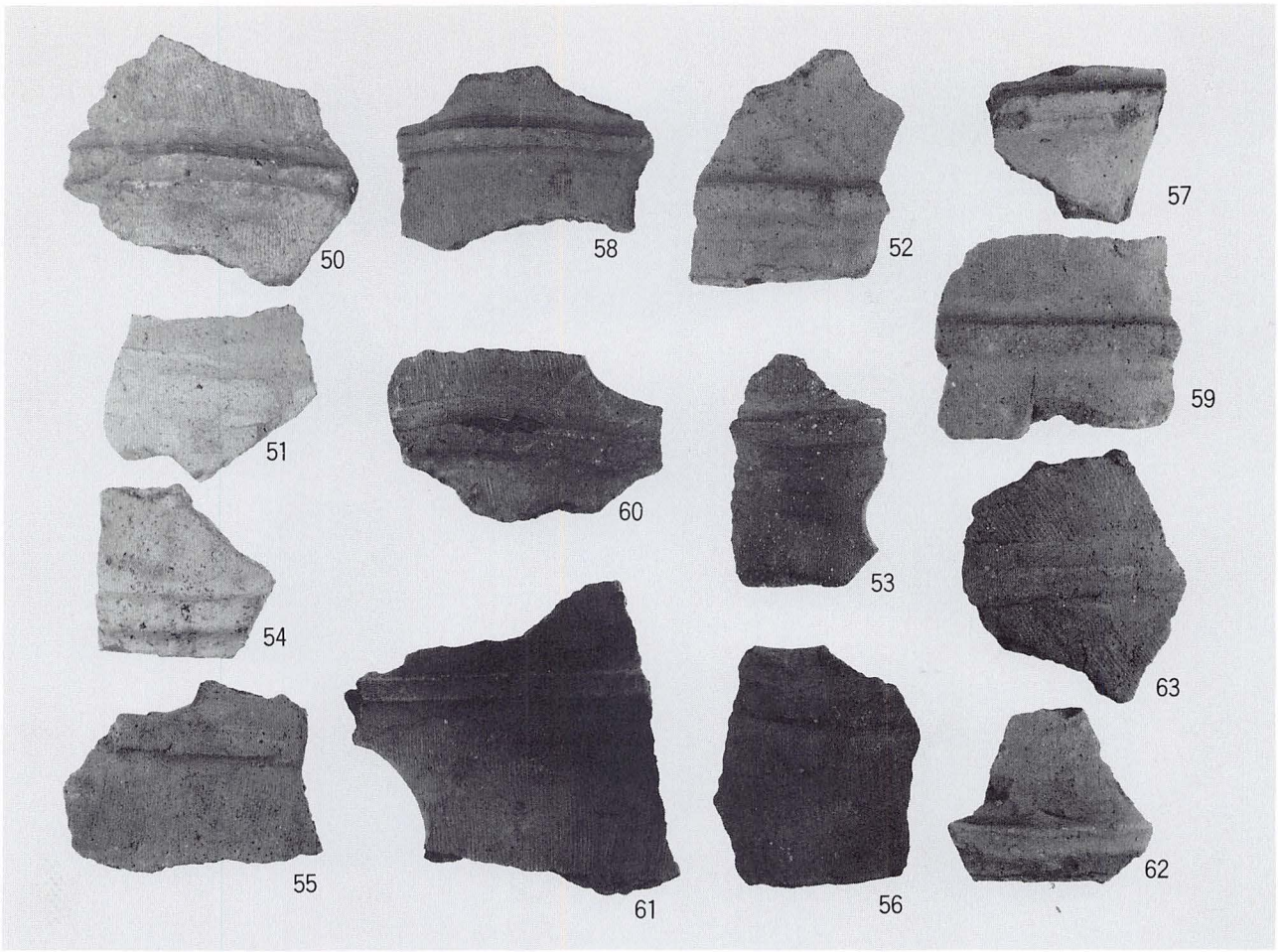
2　同　　上（18～26・31）



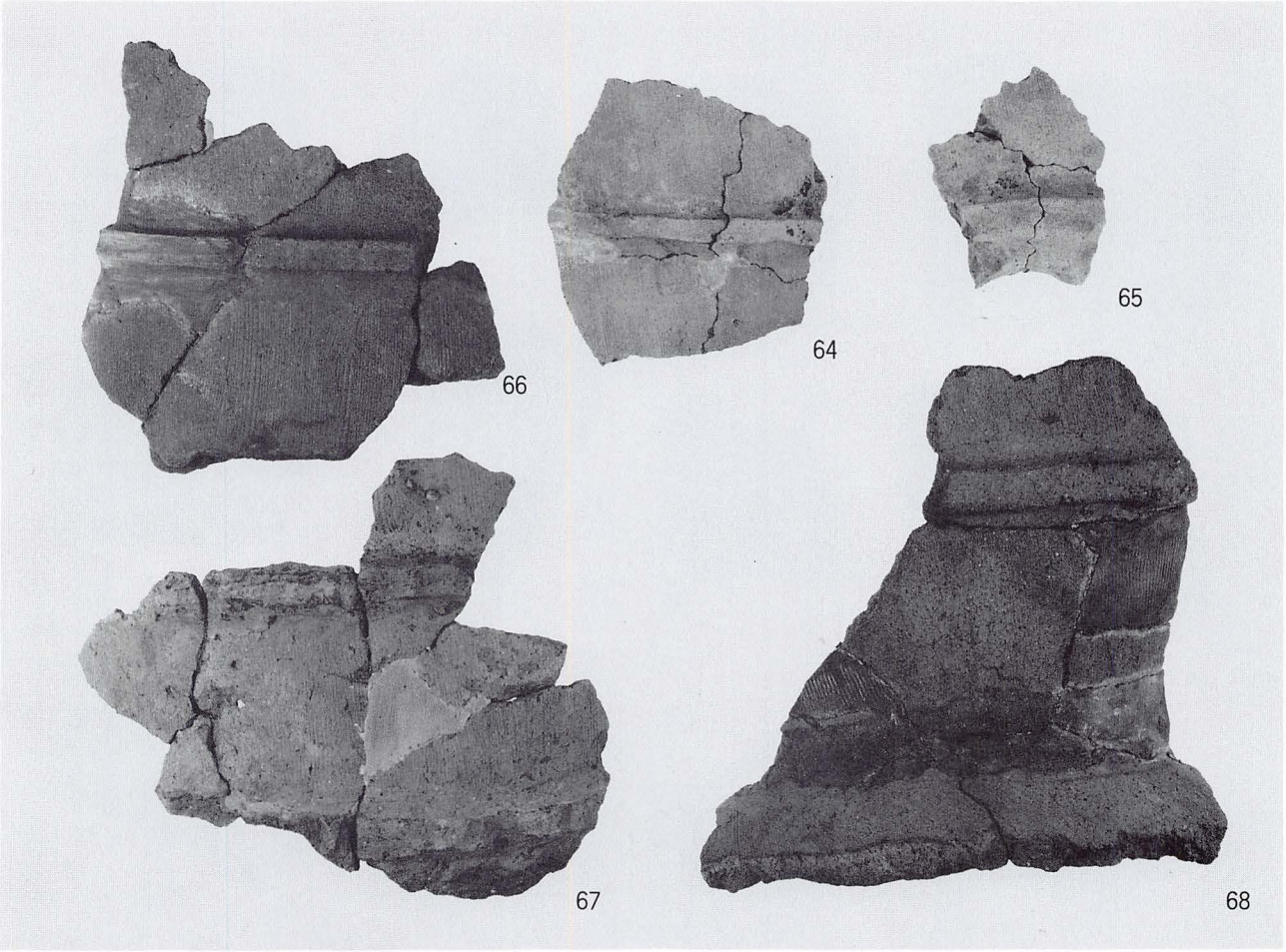
1　昭和42年度調査出土埴輪（27～30・32～37）



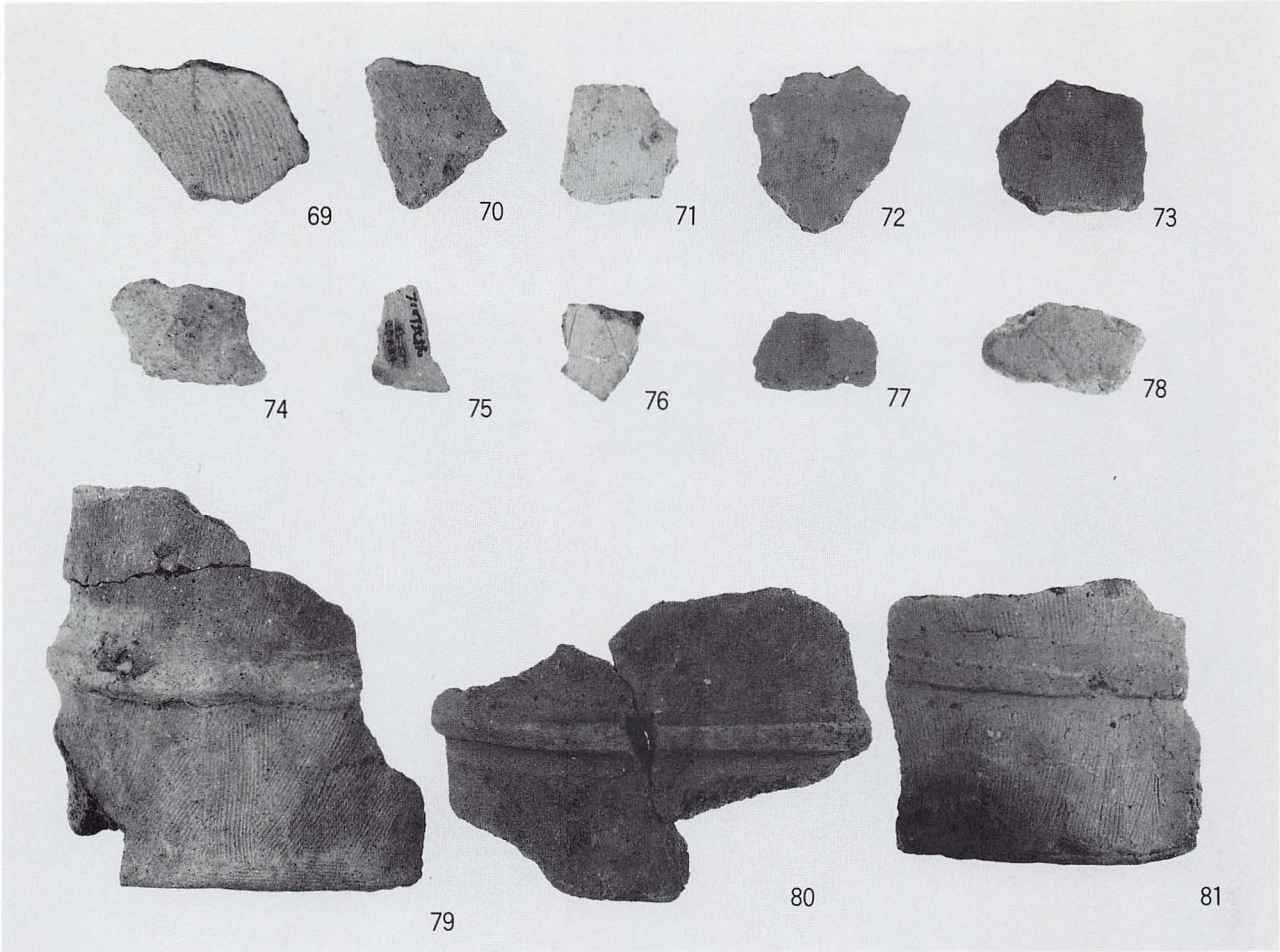
2　同　　上（38～49）



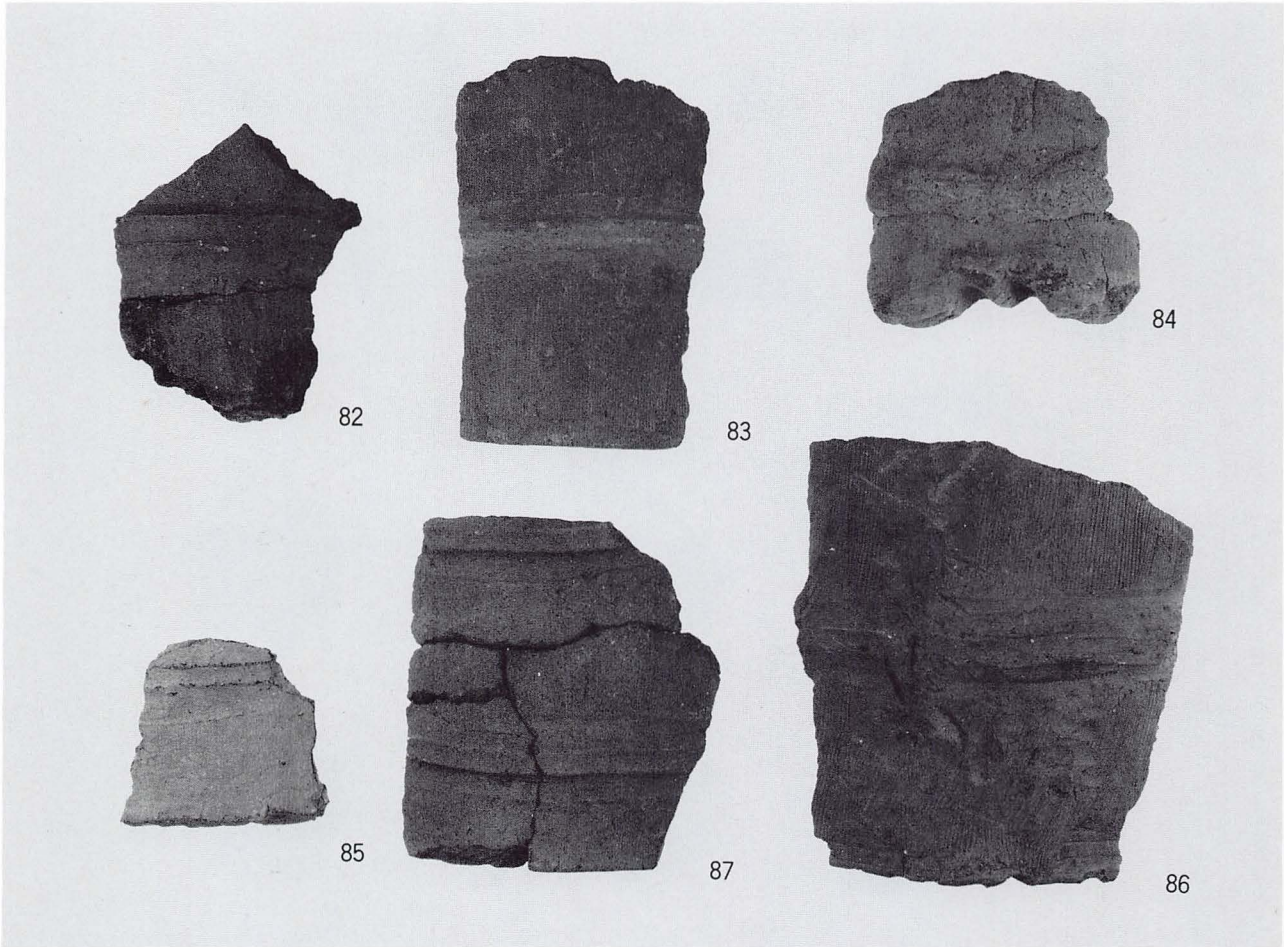
1　昭和42年度調査出土埴輪（**50～63**）



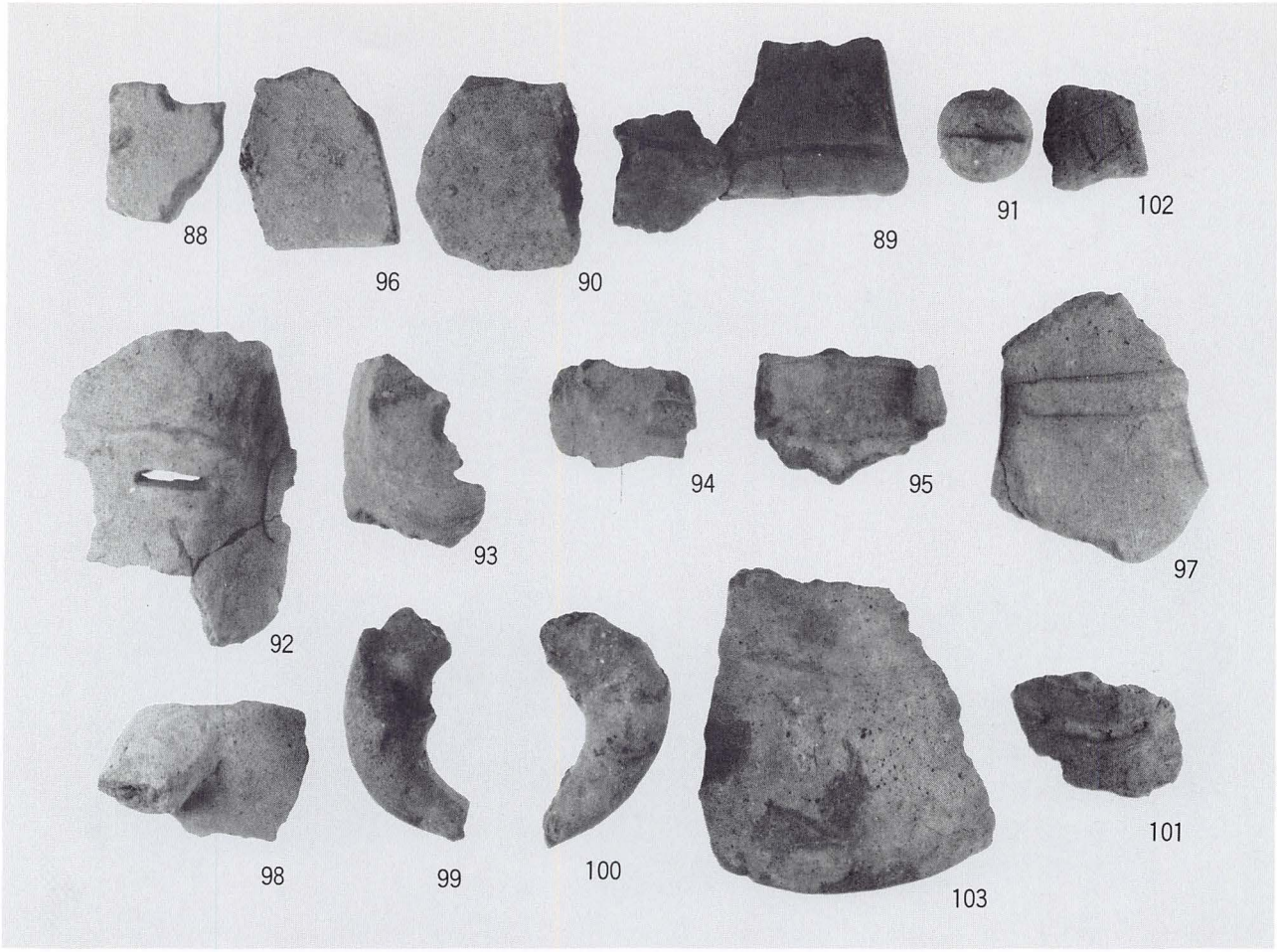
2　同　　上　（**64～68**）



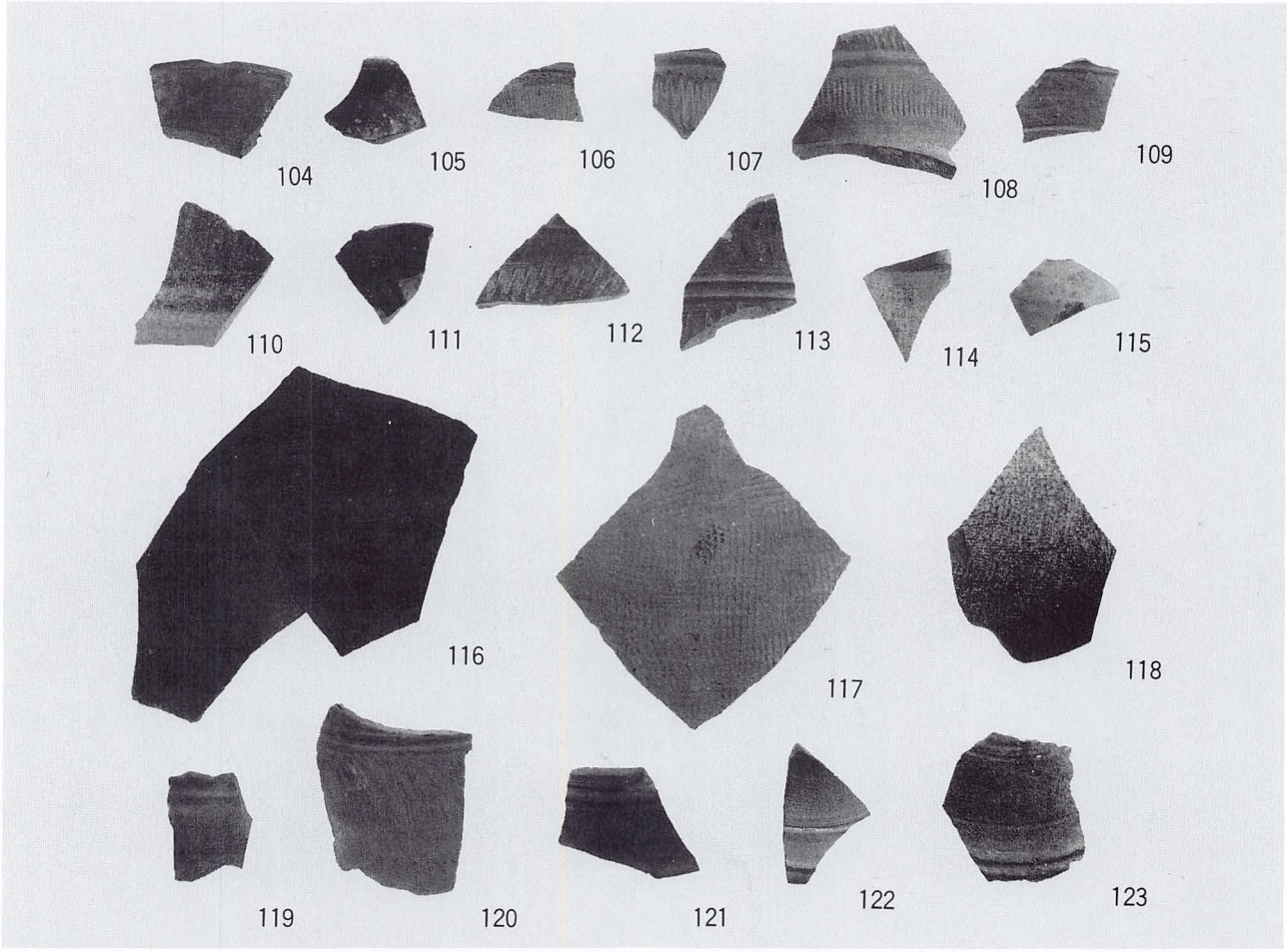
1　昭和42年度調査出土埴輪（**69～81**）



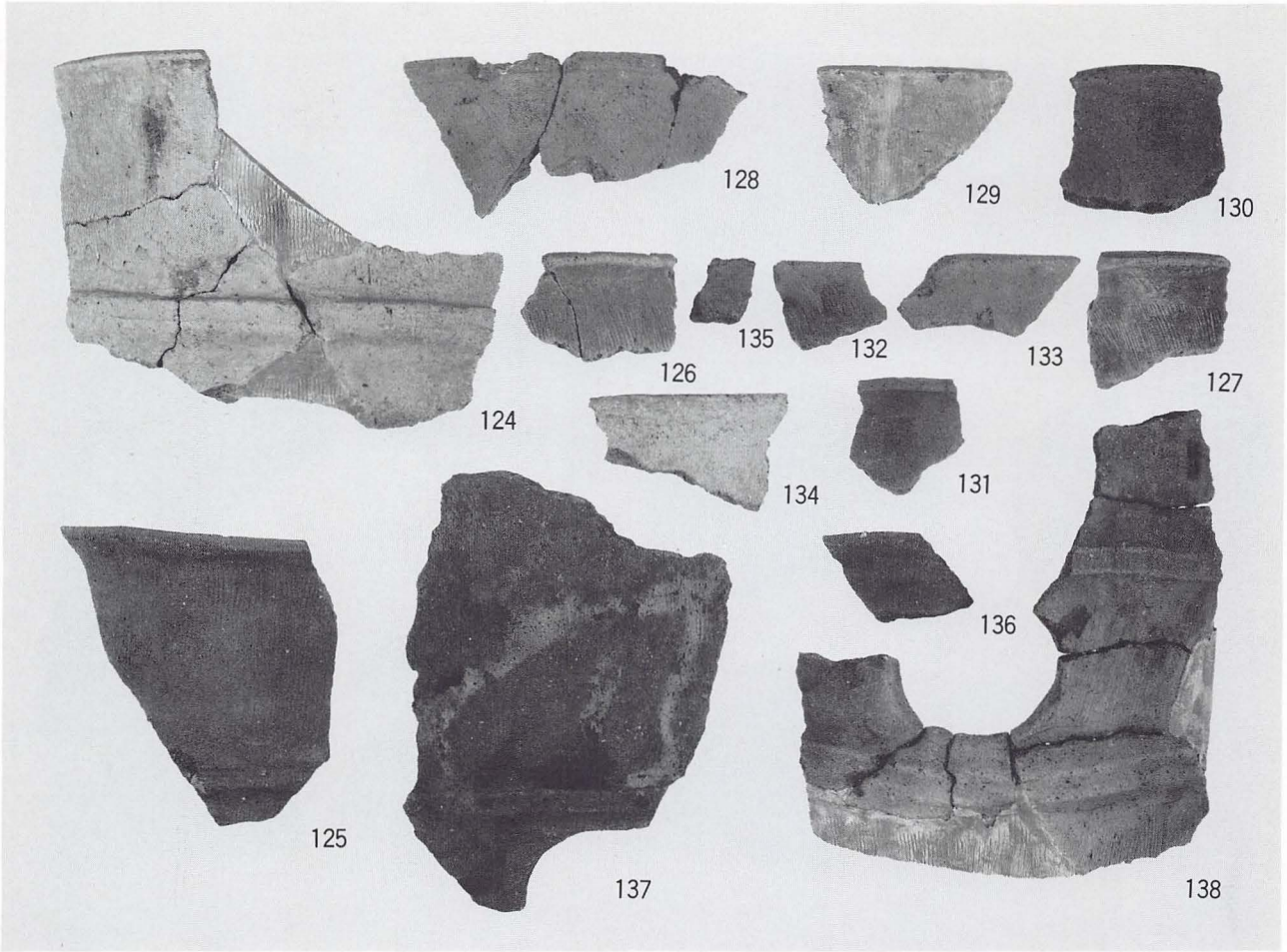
2　同　　上（**82～87**）



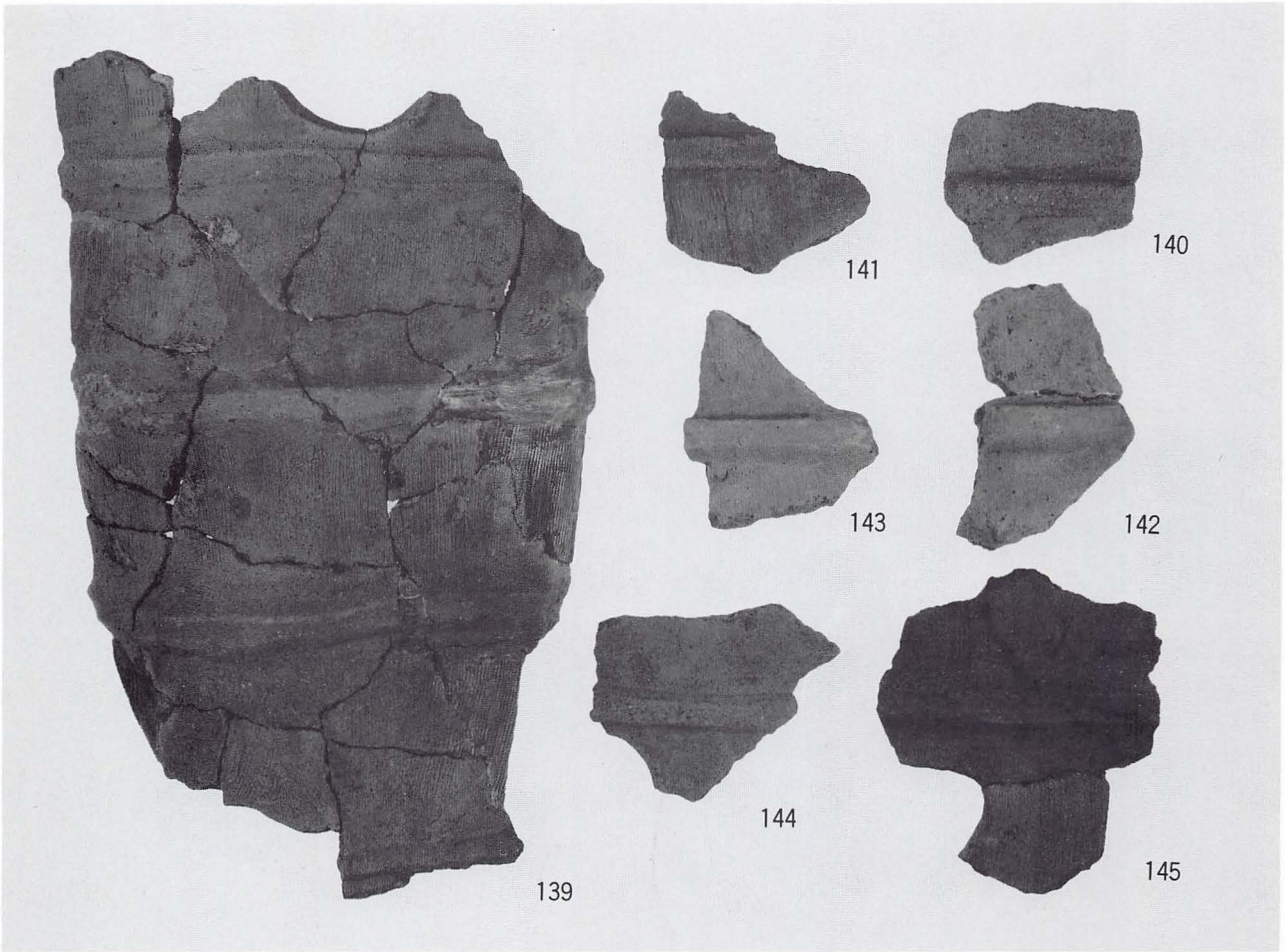
1　昭和42年度調査出土埴輪（**88～103**）



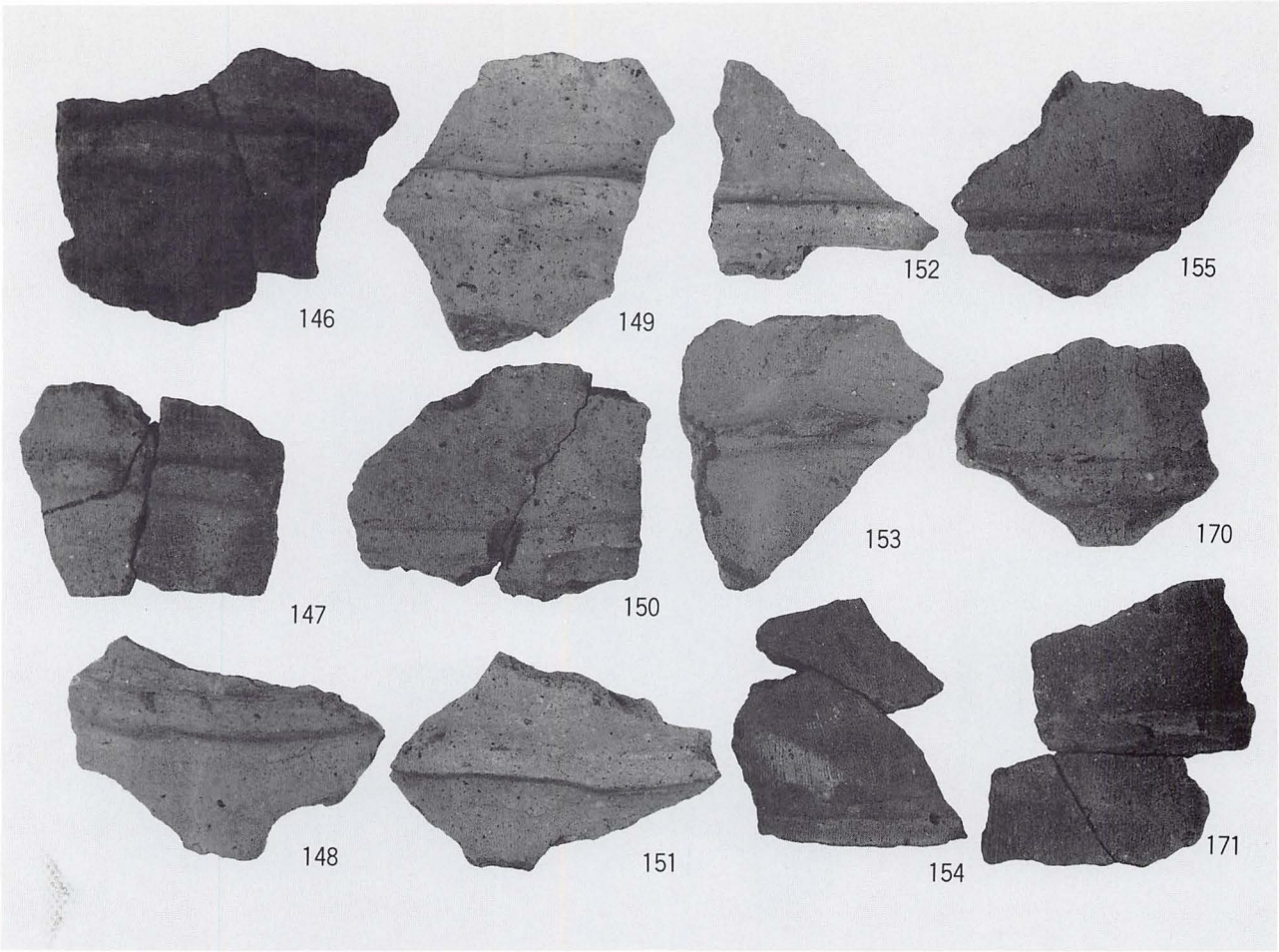
2　昭和42年度調査出土土師器及び須恵器（**104～123**）



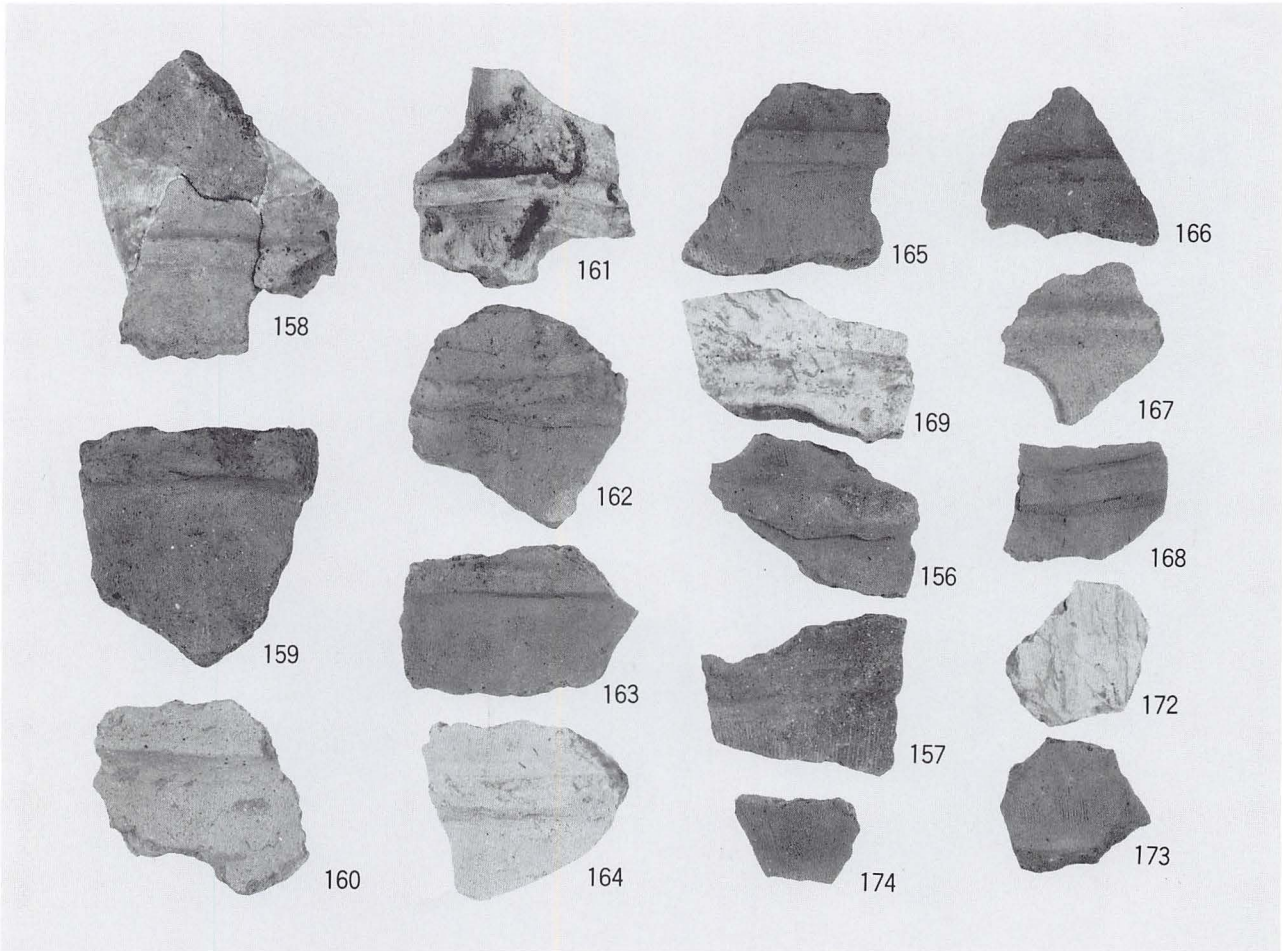
1　昭和49年度調査出土埴輪（**124～138**）



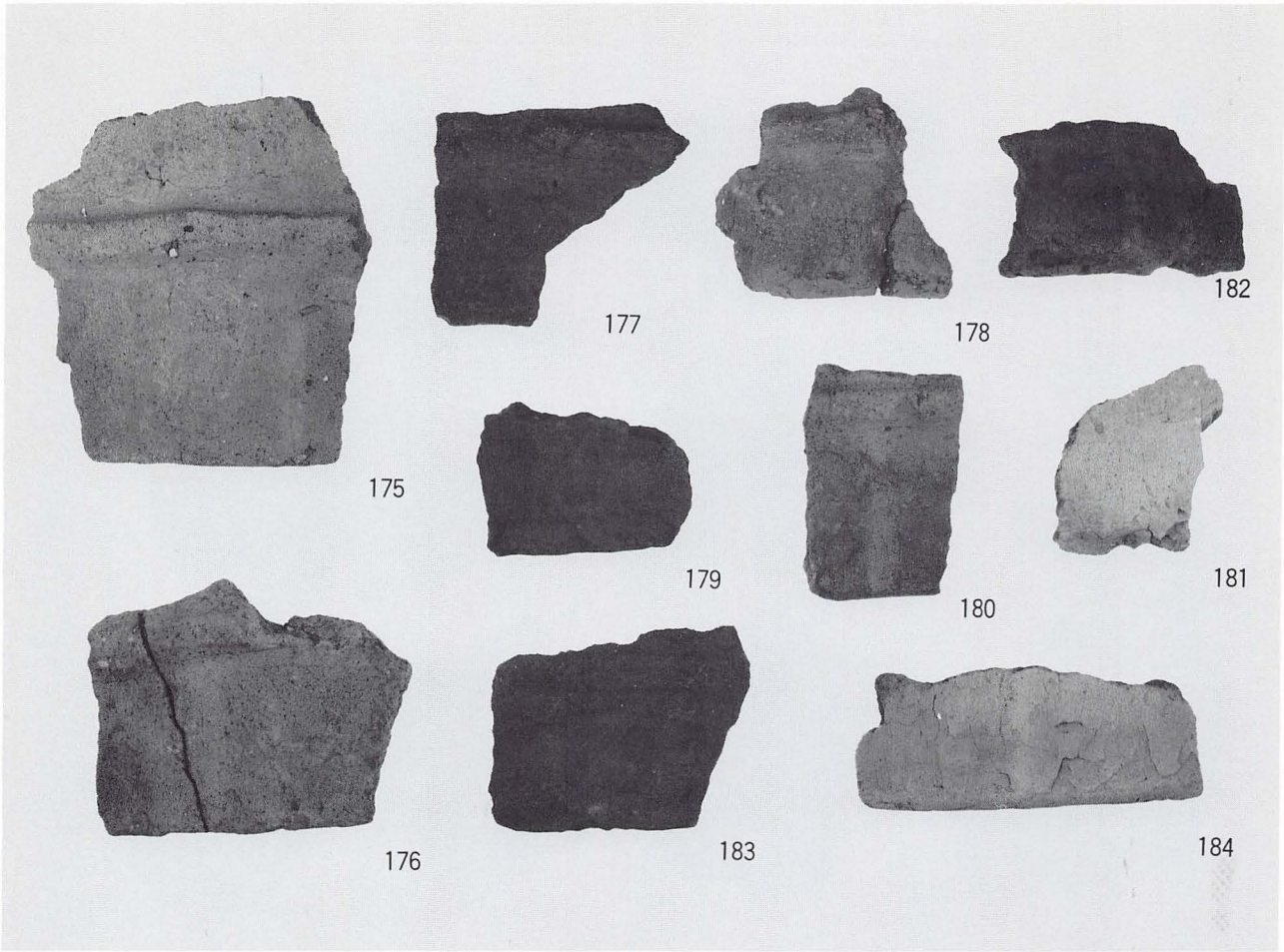
2　同　　上（**139～145**）



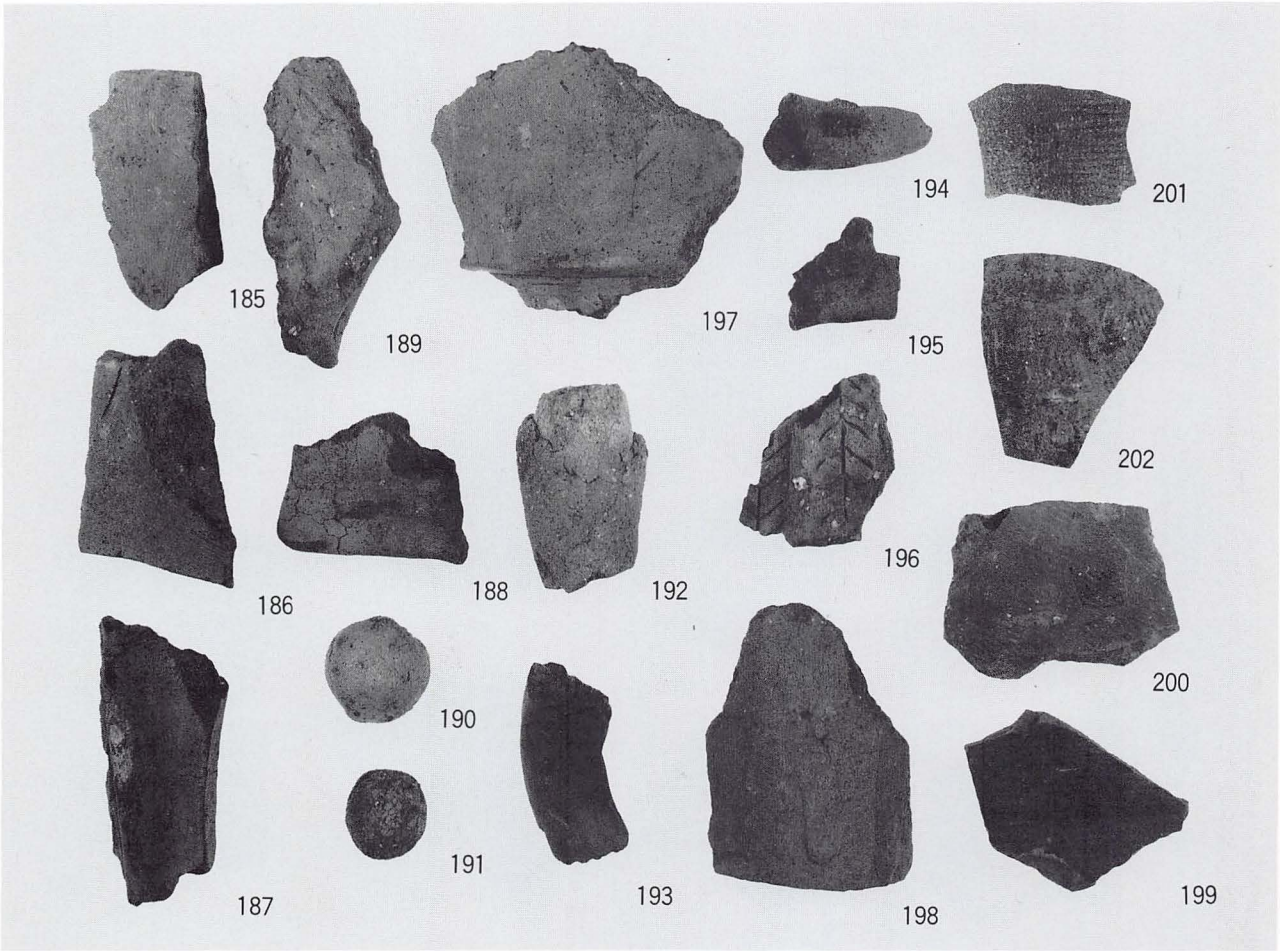
1　昭和49年度調査出土埴輪（146～155・170～171）



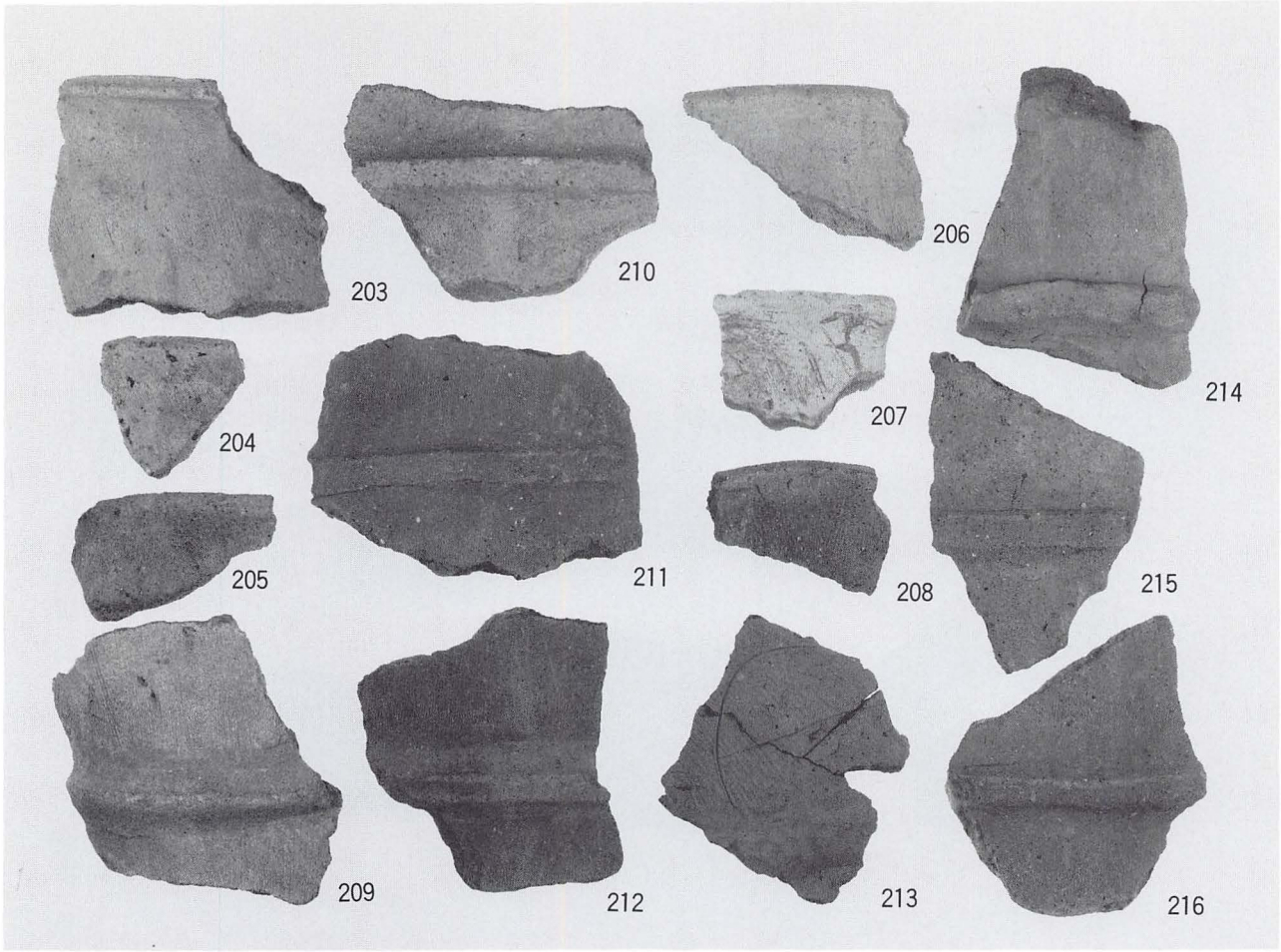
2　同　　上（156～169・172～174）



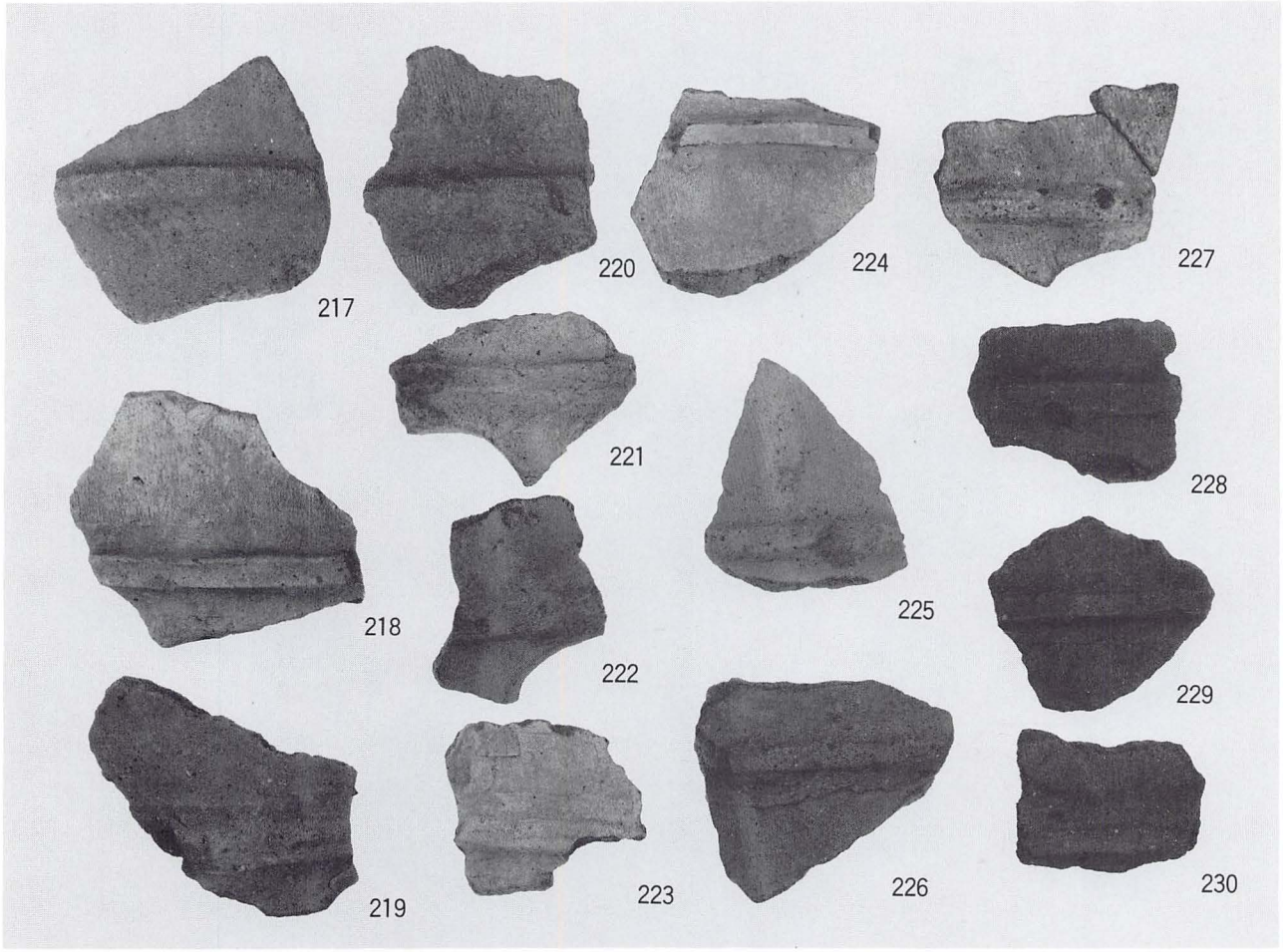
1　昭和49年度調査出土埴輪（**175～184**）



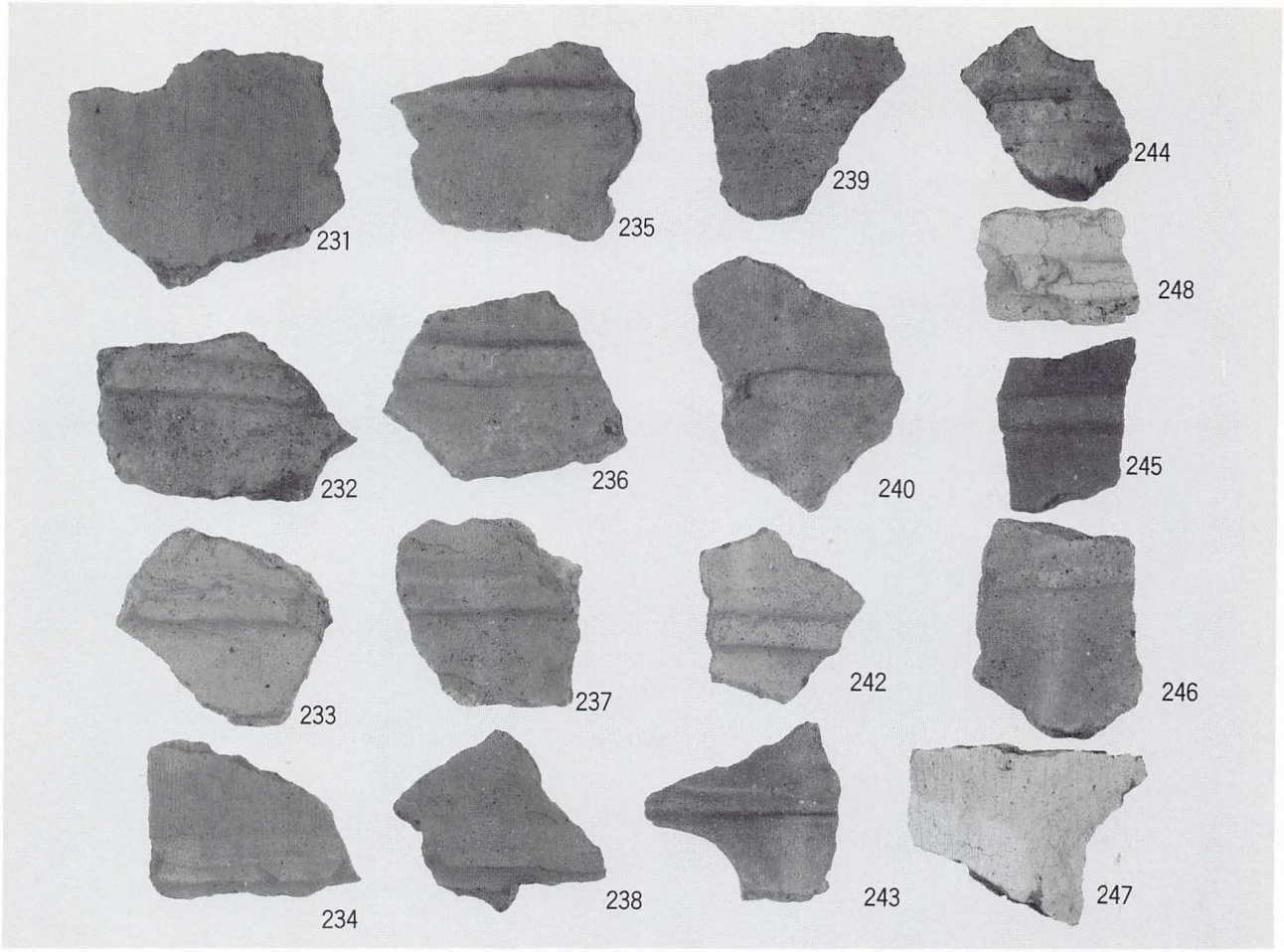
2　昭和49年度調査出土埴輪及び須恵器（**185～202**）



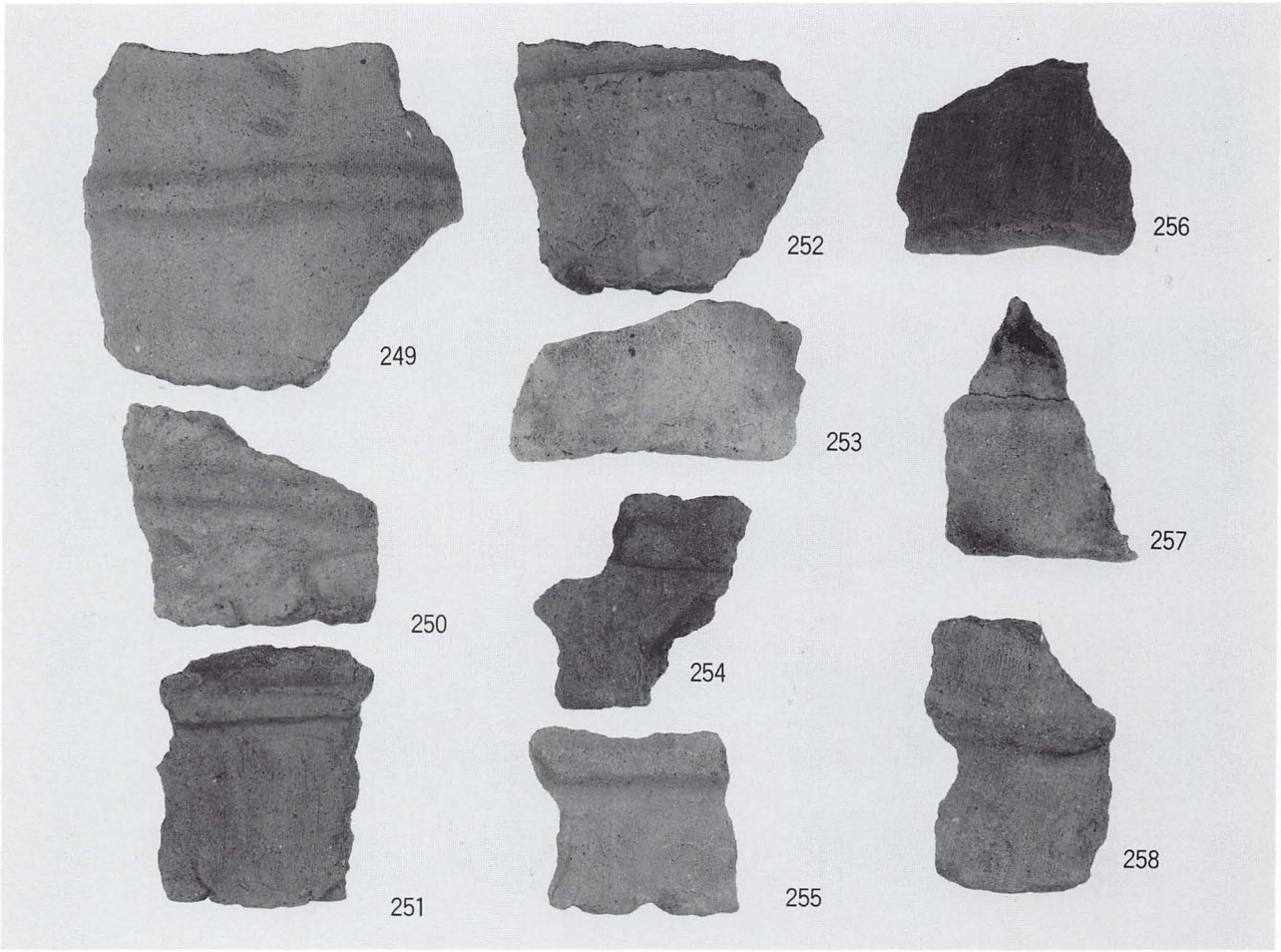
1　昭和55年度調査出土埴輪（**203～216**）



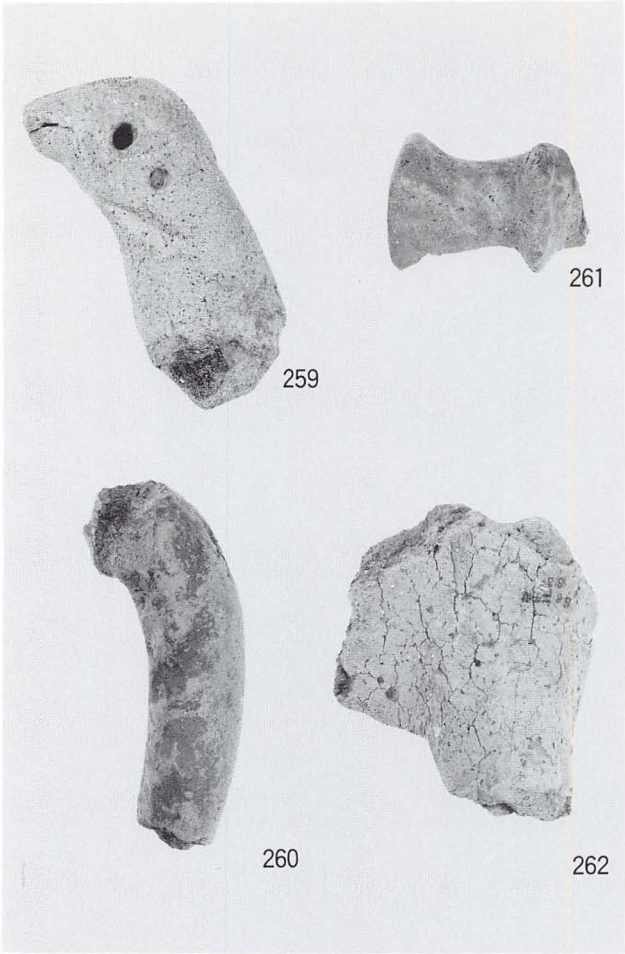
2　同　　上（**217～230**）



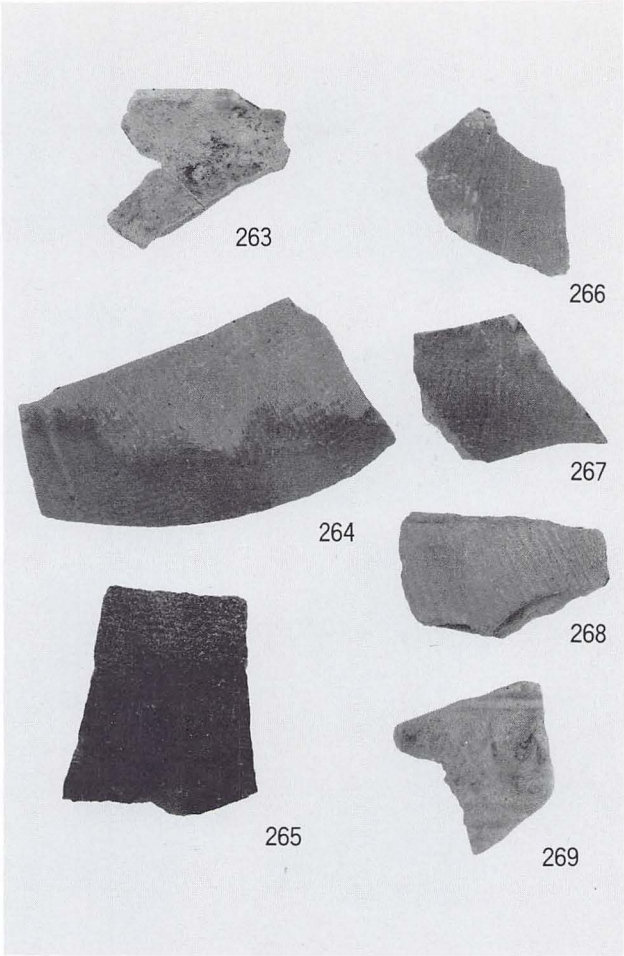
1　昭和55年度調査出土埴輪（**231～240・242～248**）



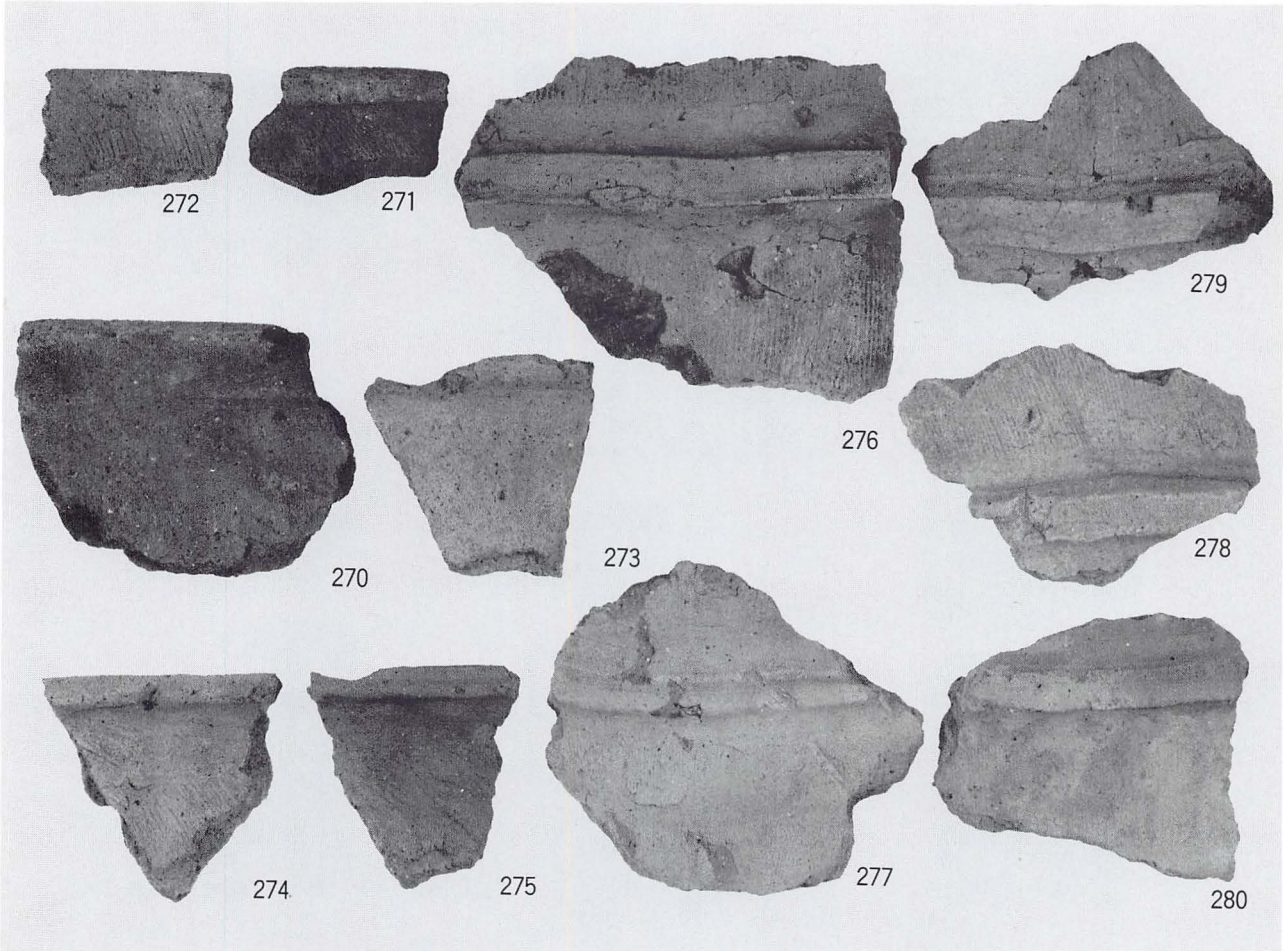
2　同　　上（**249～258**）



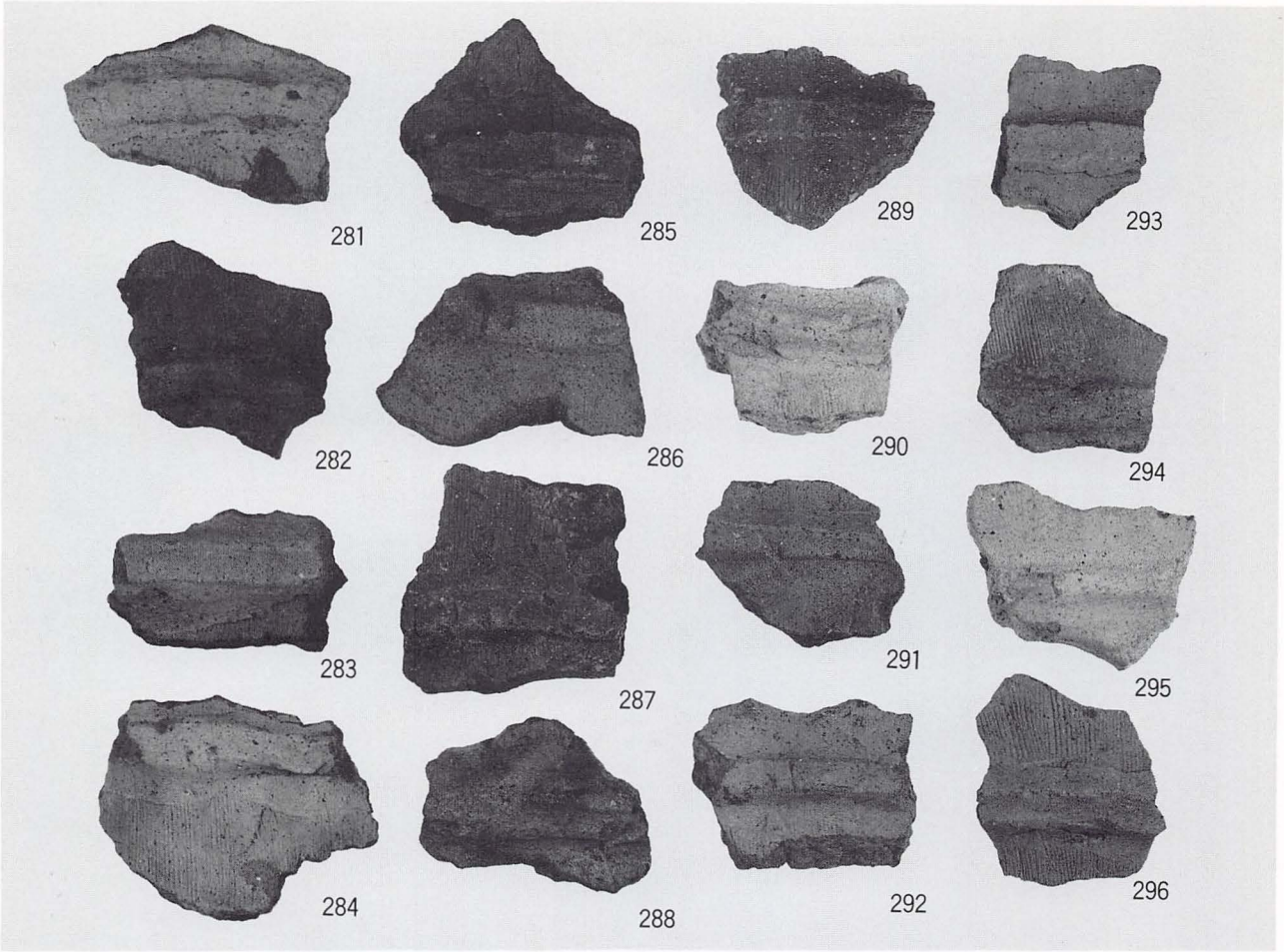
1　昭和55年度調査出土埴輪（**259～262**）



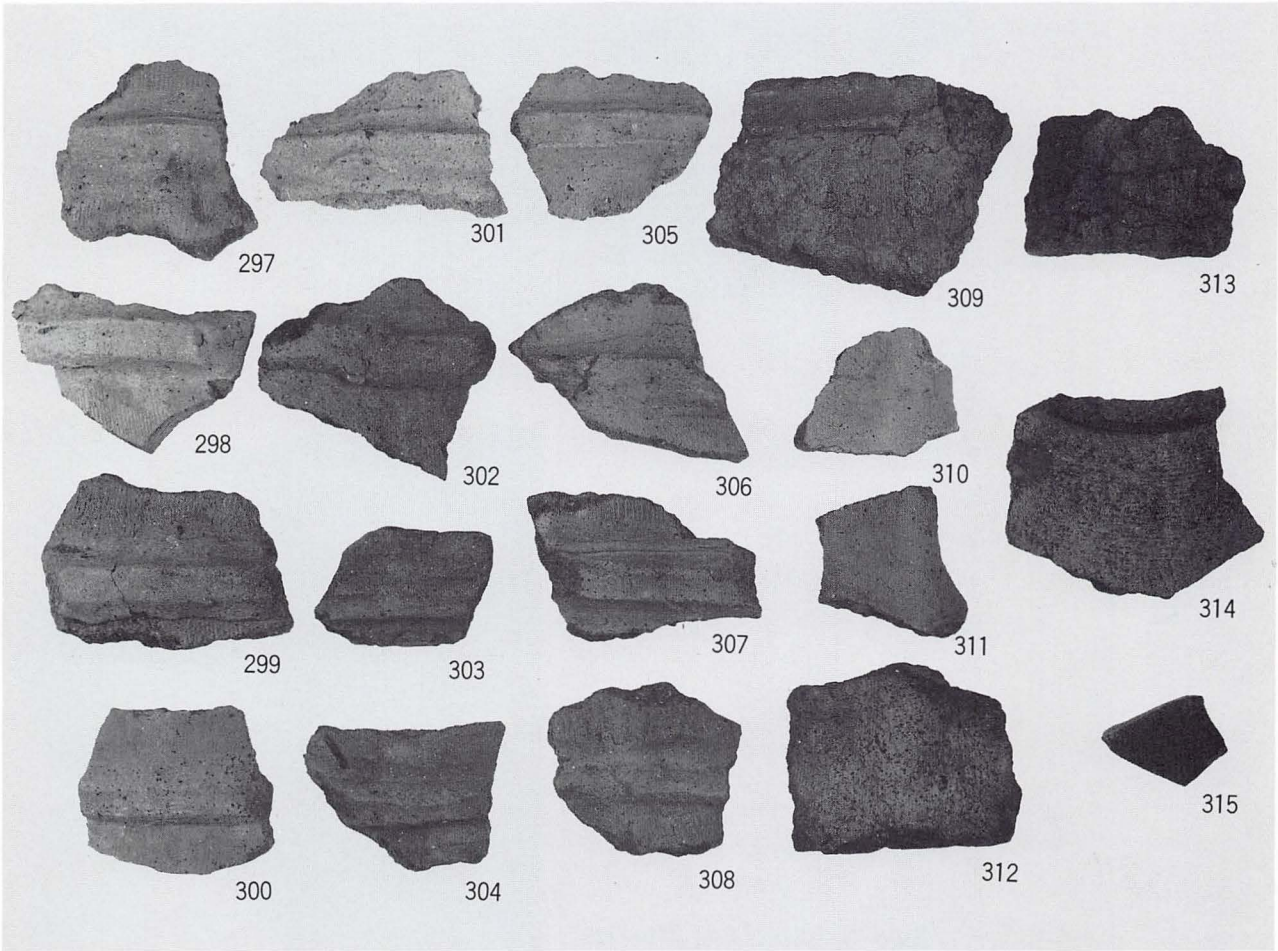
2　昭和55年度調査出土土師器及び須恵器（**263～269**）



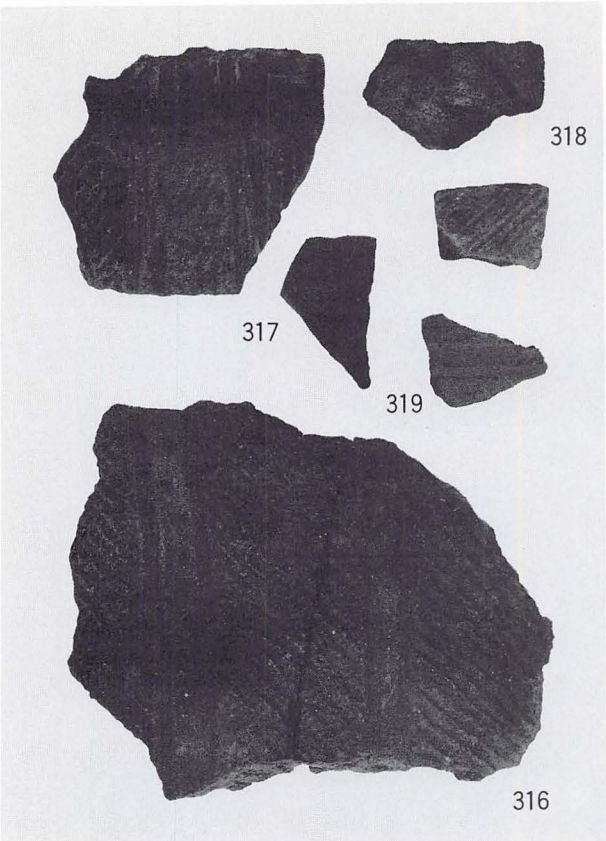
3　昭和59年度調査出土埴輪（**270～280**）

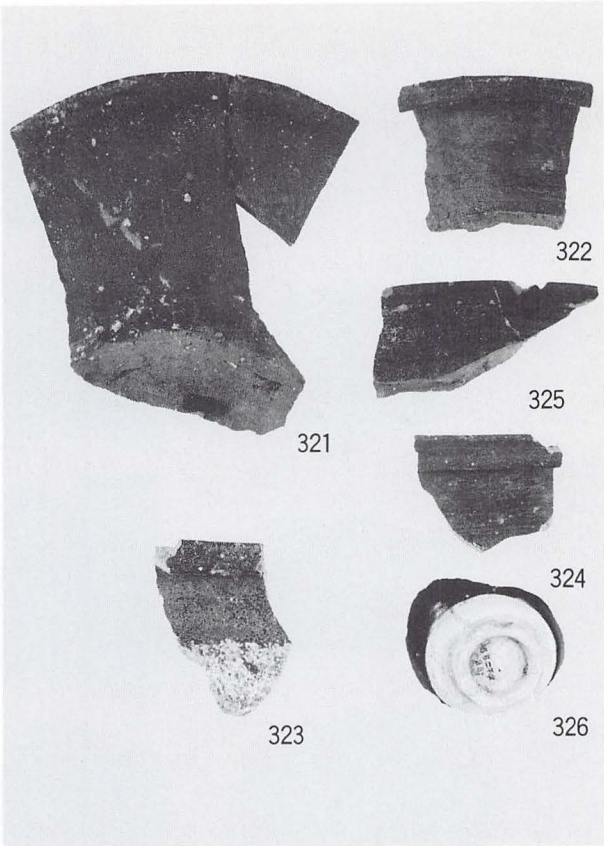


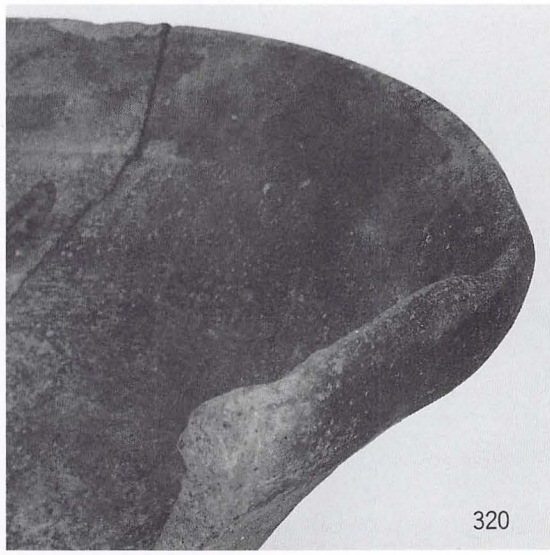
1　昭和59年度調査出土埴輪（**281～296**）



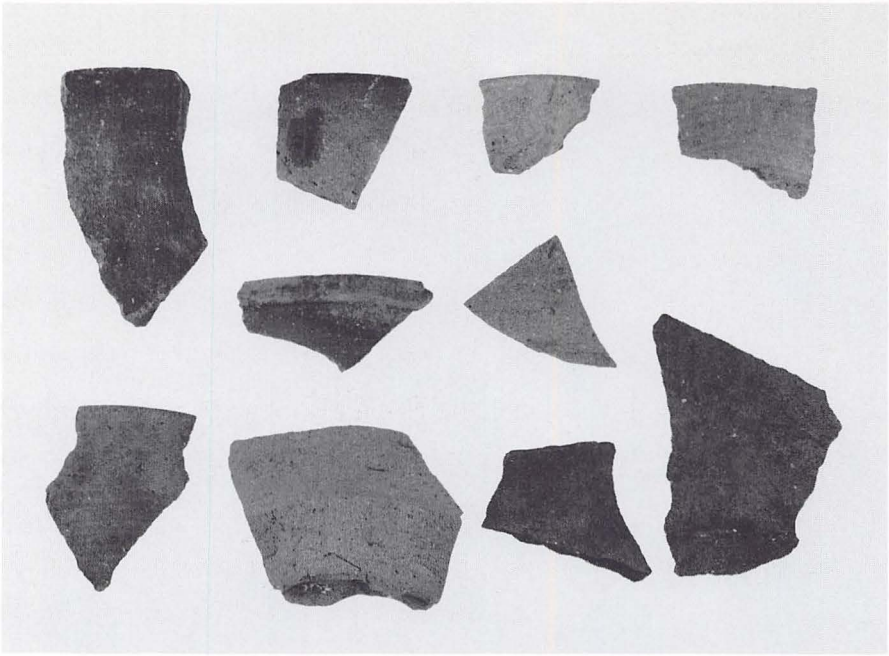
2　昭和59年度調査出土埴輪及び須恵器（**297～315**）



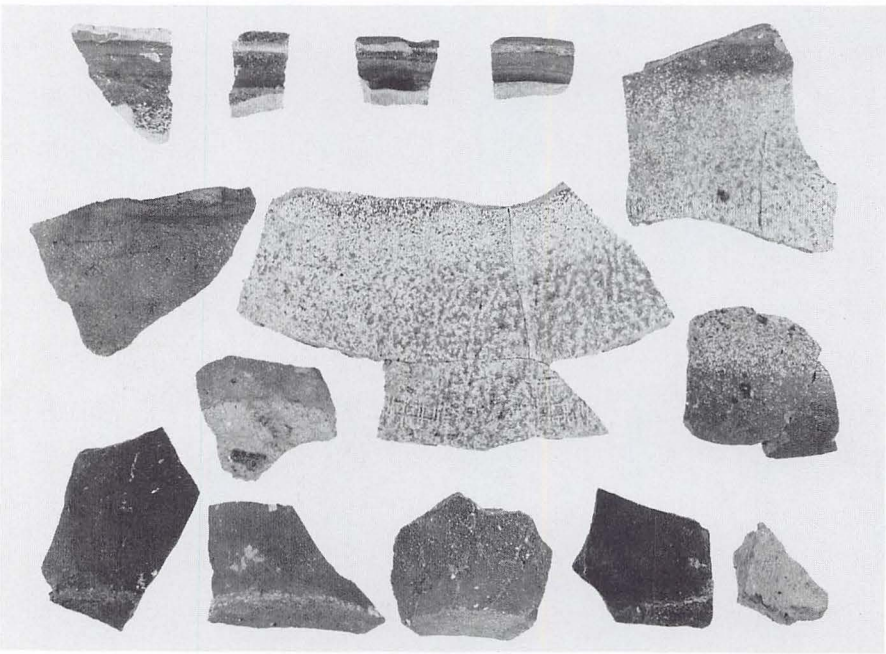




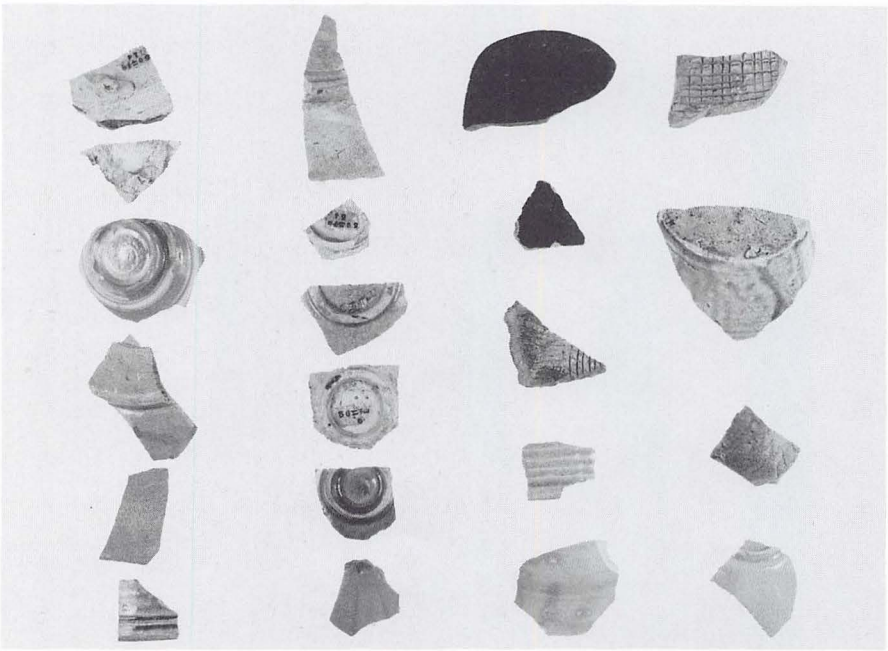
各年度調査、古墳関係以外の出土遺物（**316～326**）



常滑鉢、等



常滑甕、等



青磁、瀬戸碗、等

各年度調査古墳関係以外の出土遺物

さきたま史跡の博物館蔵書

埼玉古墳群発掘調査報告書　第五集

二子山古墳

昭和六十二年三月二〇日　印刷
昭和六十二年三月二五日　発行

編集　埼玉県立さきたま資料館
発行　埼玉県教育委員会
印刷　アサヒ印刷株式会社